『バーブル・ナーマ』の研究（Ⅱ）

「カーブル章」日本語訳

間　野　英　二

凡　　例

1．本稿は，15世紀の中央アジアにティムール朝の王子として生まれ，後，インドのムガル朝の創設者となったザヒールッ・ディーン・ムハンマド・バーブル Ẓahīr al-Dīn Muḥammad Bābur (1483—1530) がチャガタイ・トルコ語で著した回想録『バーブル・ナーマ』*Bābur-nāma*（別称『バーブルの出来事』*Waqi'at-i Bāburī*）の第2部「カーブル章」の全訳である。

2．『バーブル・ナーマ』は第1部「フェルガーナ章」，第2部「カーブル章」，第3部「ヒンドゥースターン章」の3部より成るが，ここに訳出する第2部は，ヒジュラ暦910年から913年までの4年間の出来事と914年の出来事の1部分，それに925年の出来事と926年の出来事の1部分を扱い，914年・926年の残りの部分と915年から924年に至る10年間の出来事を扱った部分は，現存するテキストでは欠如している。なお，この第2部は，分量的には現存するテキスト全体のおよそ$\frac{1}{3}$に相当する。

3．第1部「フェルガーナ章」の全訳は，「『バーブル・ナーマ』の研究（Ⅰ）「フェルガーナ章」日本語訳」（『京都大学文学部研究紀要』22，189-347頁，昭和58年3月）として先に発表した。

4．テキストは，現在知られている諸写本の内で最も価値の高いハイダラーバード写本の写真版 (Annette S. Beveridge, *The Bábar-náma, being the Autobiography of the Emperor Bábar, the Founder of the Moghul Dynasty in India, written in Chaghatáy Turkish; Now reproduced in Facsimile from a Manuscript belonging to the Late Sir Sálár Jang of Haydarábád, and edited with a Preface and Indexes*, "E. J. Gibb Memorial" Series, Vol. I, London, 1905, repr. 1971) を底本として用い，時にイルミンスキー

が出版した，不完全ながらなお無価値とはいい切れぬ活字本（N. Ilminski, *Baber-nameh Diagataice, Ad Fidem Codicis Petropolitani*, Cazani, 1857）をも参照した。

5．ハイダラーバード本の葉数は訳中文に122a，235b（a は表，b は裏）の如くに示した。またイルミンスキーのカザン本によって特に訳文を補ったり，固有名詞の異同を示した場合には，その部分を＜　＞内に収めて区別し，またカザン本の該当ページ数を付記した。

6．訳文中の（　）はテキストそのものに基づく注記であるのに対し，〔　〕はテキストには見えぬ訳者の補足・説明である。

7．訳文中のヒジュラ暦の西暦への換算は陳垣『中西回史日暦』（台北，民国61年）に基づいた。

8．固有名詞は原則として第1部をも含めて初出の場合にのみ原綴のローマ字転写を並記した。

9．テキストのアラビア文字の転写法は以下の如くである。

’（語頭省略），b, p, t, th, j, ch, ḥ, kh, d, dh, r, z, zh, s, sh, ṣ, ḍ, ṭ, ẓ, ‘, gh, f, q, k, l, m, n, ng, h, w, y.

長母音 ā, ī, ū. 二重母音 aw, ay. 短母音 a, ä, e, ı, i, o, ö, u, ü.

10．訳出に当っては，ハイダラーバード本に基づく以下の諸国語への訳本をも適宜参照した。しかし，いずれも一長一短があり，完璧な訳本はなお存在していない。

①英訳 Annette S. Beveridge, *The Bābur-nāma in English* (*Memoirs of Bābur*), London, 1922, repr. 1969.

②現代トルコ語訳 R. R. Arat, *Vekayi: Babur'un Hâtıratı*, 2 Cilt, Ankara, 1943.

③ロシヤ語訳 М. Салье, *Бабур-наме: Записки Бабура*, Ташкент, 1958.

④現代ウズベク語訳 П. Шамсиев, С. Мирзаев, *Бобирнома*, Тошкент, 1960.

⑤仏訳 J.-L. Bacqué-Grammont, *Le livre de Babur*, Paris, 1980.

他にウルドゥー語及びペルシア語への訳本があるが今回は利用できなかった。

11．訳文の末尾にアフガニスタンとヘラートの地図を付した。

12．『バーブル・ナーマ』の解題，第1部・第2部への註釈，また第3部の訳註，索引等は別の機会を得て発表したいと考えている。

〔ヒジュラ暦910年/西暦1504年6月14日—1505年6月3日/の出来事〕

ムハッラム月〔1504年6/7月〕，私はフェルガーナ地方からホラーサーンをめざし，ヒサール地方の夏営地の1つであるイレク・ヤイラク Iläk Yaylagh に至って下馬した。まさにこの宿営地（yurt）で，私は，23歳のはじめ，私の顔に〔はじめて〕剃刀を当てた。私に望みをつなぎ，故郷を離れて進んでいた大小の者たちは，200人以上300人以下であったであろう。ほとんどの者は徒歩で，手には杖を持ち，足には粗末な1枚皮の浅靴（charuq）を穿き，身にはぼろぼろのコート（chapān）をまとっていた。

私たちの間には，2つのテントしか無いという情けない状態であった。私のテントは，私の母のために張られていた。私のためには，各宿営地で，簡易テント（alachuq）が整えられ，私はその中でやすんだ。

私はホラーサーンをめざしてはいたが，まさにこのような状態であるため，この地方とホスロー・シャーの臣下たちにも期待するところがあった。数日すると，1人の男が来て，地方（wilāyat）や諸部族（il wä ulus）からの言葉を伝えたが，それらは希望をいだかせる内容のものであった。この頃，私がホスロー・シャーのところへ使者として派遣していたムッラー・バーバー・パシャーガリーが帰って来た。彼はホスロー・シャーのところからは，心を明るくするような言葉をもたらさなかった。しかし諸部族からはいろいろの言葉を
120b (120b) もたらした。

私はイレクから3～4宿して，ヒサール近郊のホージャ・イマード Khwāja ʿImād というところに着き下馬した。この宿営地に〔滞在中に〕，ムヒッブ・アリー・コルチがホスロー・シャーのもとから使者として到着した。ホスロー・シャーは，その気前のよさと物おしみせぬ事で有名であった。私たちは，2度，彼の領内を通過するという経験を持った〔81a 参照〕が，彼は，彼が〔私たちより〕低い身分の者たちにかけた親切をすら私たちには示そうとしなかった。

私たちは，諸部族やその地方〔の人々〕に期待する所があったため，各宿ご

とに滞在を長びかせた。当時の私の部下の中で最も有力（ulug）であったシーリーム・タガーイーはホラーサーン行きに我慢できず，私たちと別れる事を考えていた。私たちが〔1501年〕サリ・プルから〔ウズベクに〕敗北して〔サマルカンドに〕帰った際，彼は〔サマルカンドから〕家族を避難させ，ひとりで籠城に加わった。彼はかなり憶病な人物で，何度かこのような行動に走った。

私たちがカバーディーヤーン Qabādīyān に到着した時，ホスロー・シャーの弟のバーキー・チャガーニーヤーニーがカルシの説教師（khaṭīb）を派遣して来て，味方につく宣言を行ない，私たちに合流する事になった。チャガーニーヤーン，シャフリ・サファー，ティルミズがバーキーの領地であった。私たちがアームー川〔アム川〕をアウバージュの渡しで渡った時，バーキーが来て私の前に伺候した。私たちが，バーキーの求めに応じてティルミズの対岸の所に来ると，彼はその一族ひとり残らずにアームー川を〔アフガニスタン側へと〕渡らせた。彼らが私たちに加わると，私たちはカフマルド Kahmard，バーミーヤーン Bāmīyān 方面をめざした。当時，これらの地方（bu yerlär）は，ホスロー・シャーのおい〔姉妹の子〕で，バーキーの子のアフマド・カースィム Aḥmad Qāsim の所領であった（ta'alluq edi）。私たちは，カフマルドの
121a アージャル Ājar という名の谷城（darra qurghanı）に家族（öy il）を(121a)置き，もし好機が到来すればその機に乗じて行動するつもりであった。

私たちがアイバク Aybak に到着した時，かつては私に仕え，よく刀をふるったが，当時は私のもとを離れ，ホスロー・シャーのもとにいたヤール・アリー・ビラールが数人の若党（イギト）と共に〔ホスローのもとから〕逃亡して来た。彼は，ホスロー・シャーのもとにいるモグールたちが私に味方するような事を云っていると〔私に〕上奏した。私たちがズィンダーンの谷（darra-yi Zindān）に到達すると，サッラーフ〔屠殺人〕とも呼ばれているカンバル・アリー・ベグが逃げて来た。

私たちは，3～4宿の後，カフマルドに到着し，アージャル城に家族を置いた。私たちがアージャルに滞在中に，スルターン・マフムード・ミールザー〔25b 以下参照〕とハーンザーダ・ベギムの間に生まれた娘を〔バーブルの弟の〕ジャハーンギール・ミールザーに娶わせた。彼女は，さきに，ミールザーたち〔スルターン・マフムード・ミールザーとジャハーンギールの父ウマル・シャイフ・ミールザー〕の生存中に，ジャハーンギール・ミールザーの婚約者

として定められていたものである。

この間に，バーキー・ベグが，私に次のようにくり返し述べた:「1地方に2人の君主がいたり，1つの軍隊に2人の指揮官がいたりすると，不和・破滅が生じ，反目・離反が生ずる事は，

10人のダルヴィシュは1枚の敷物に共にやすむ事ができよう。
しかし2人の君主が1つの気候帯（iqlīm）に共存する事はできぬ。
神のしもべがパンの半片を食べれば，
残りの半片を貧しき者たち（darwishān）に与えるであろう。
しかし君主が1地帯の王権を握れば，
彼がめざすのは別の地帯の征服のみである。

〔サーディー『薔薇園』*Gulistān* 第1章第3話〕

と云われている如くです。今日か明日，ホスロー・シャーの全ての部下たちが来て，王様にお仕えする事が期待できます。その中にはアイユーブ〔ベグチク〕(121b) の息子たちのような多くの離間者たちがおり，またいつも私たちの王子たち（mīrzālar）の間に敵対と反目を引き起こそうとしている幾人かの者たちがおります。いままさにこの機会に，親切に，ジャハーンギールにホラーサーン方面への出発の許可を与えておけば，後日，彼が後悔や追悔の原因となる事は無いでありましょう」と。

121b

しかし，〔自分の〕兄弟や一族の者たちが，たとえ何らかの恥ずべき行動に走ったとしても，そのために私が彼らを苦しめるといったやり方は，もともと私のよしとせぬ所であった。たしかにこれまでに，ジャハーンギール・ミールザーと私との間には，王国と臣下の問題のために，しばしば不和・確執が生じていた。しかしこの時は，彼もあの地方〔フェルガーナ地方〕から私につき従って来ていた。彼は同族・臣下としての態度を持していた。当時，彼には気分を害するような行動は何一つ見られなかった。〔バーキーは〕何度もくり返し上奏して来させたが，私は〔その策を〕受入れなかった。しかし結局は，バーキー・ベグが述べた通りに，あの離間者たち，すなわちアイユーブの子ユースフ Yūsuf Ayyūb と同じくバフルール Bahlūl Ayyūb は〔やがて〕私のもとからジャハーンギール・ミールザーのもとへと逃走し，災厄と反乱の態度をあらわにする事になる。彼らはジャハーンギール・ミールザーを私から引離し，ホラーサーン方面へと連れて行ったのである。

まさにこの頃，〔ヘラートの〕スルターン・フサイン・ミールザーのもとから，バディーゥッ・ザマーン・ミールザー，私，ホスロー・シャー，それにズ
122a ーン・ヌーンのもとに同一の趣旨の，冗長な（122a）数通の書簡が届いた。それらの書簡は，現在も私の手元にある。その趣旨は以下の如くであった:「スルターン・アフマド・ミールザー，スルターン・マフムード・ミールザー，ウルグ・ベグ・ミールザーといった兄弟たちが〔先にサマルカンド方面から〕共同して進軍して来た時，私はムルガーブ Murghāb の岸を固めた。ミールザーたちは近くまでは来たが，何事も為しえず退却した。現在も，もしウズベクが進軍して来たら，私はムルガーブの岸を固めるつもりだ。バディーゥッ・ザマーン・ミールザーは，バルフ，シャブルガーン，アンドゥホードの諸城に守備の兵を置き，自らはグルズィヴァーン，ザングの谷 Darra-yi Zang，そしてかの地のクーヒスターン Kūhistān を固めよ」。私がこの一帯まで来ているという知らせが〔フサインのもとに〕届いていたので，私のもとにも書簡が来た:「そなたはカフマルド，アージャル，それにその山麓地帯（kuhpāya）を固めよ。ホスロー・シャーは，ヒサールとクンドゥズの諸城に信頼できる部下を置き，彼自身とその弟のワリーにはバダフシャーン，フッタラーンの山岳地帯を固めさせよ。ウズベクは何事も為しえず必ず退却するであろう」と。

スルターン・フサイン・ミールザーのこれらの書簡は希望を失わせるものであった。なぜなら，ティムール・ベグの領域（yurt）で，当時，年令・領地・軍勢の点で，彼を越える君主はいなかった。刮目して待たれていたのは，次々と使者やトゥワチらが懸命に急ぎ到着して，「ティルミズ，キリーフ，ケルキ
122b の渡しに（122b）船をこれだけ用意させよ」「橋の材料をこれだけ準備せよ」「上流のトクズ・オルム Toquz Olum の渡しをよく警戒せよ」といった内容の命令を伝達して来る事であったからである。それは，ここ数年間，ウズベクの災厄のために失望落胆していた人々の心を勇気づけ，その心に期待をいだかせるのに役立ったであろうに。スルターン・フサイン・ミールザーの如く，ティムール・ベグの位に坐している偉大なる君主が，敵に向って進撃する事を云わず，土地を固める事を云うのであれば，人びと（il wä ulus）の間にいかなる希望が残るであろうか。

私たちは，私たちと共に来た者たち，つまり私に属する飢えた家族や諸部民たち，そしてバーキー・チャガーニーヤーニーとその子ムハンマド・カースィ

ムに属した騎兵たちや諸部民らの家族や財産を全てアージャルに残し，兵を率いて出発した。ホスロー・シャー配下のモグールたちのもとから，引続き人びとが到着し始めた。彼らは，「私たちはターイハーン Ṭāykhān（通称ターリカーン Ṭāliqān）から，王様の御繁栄を願って，その地のモグール部族（Moghūl ulusı）を移動させて，イシュケミシュとフルールの方面にまいりました。王様は努めてよりはやく到達するようにして下さい。と申し上げるのは，ホスロー・シャーのほとんどの部下は混乱におち入り，彼らが王様の臣下となる事は必定だからであります」と述べた。

この時，シャイバク・ハーンがアンディジャーンを征服し，ヒサール，クンドゥズに向け出兵したという情報が到着した。ホスロー・シャーは，この知らせを聞くと，クンドゥズに留まりえず，属下の兵を移動させて，(123a) カーブルへと向った。ホスロー・シャーがクンドゥズから移動して出ると，ムッラー・ムハンマド・トゥルキスターニー Mullā Muḥammad Turkistānī という名のすぐれた，信用された古くからの部下が，ただちにクンドゥズをシャイバク・ハーンのために固めた。

123a

私たちがサムトゥー Samtū 道をとってクズル・スー Qızıl su〔赤い川〕の方面にくだった時，ホスロー・シャーの属下で，ヒサール，クンドゥズに居た3～4,000帳のモグール部族が家族と共に来て〔私たちに〕加わった。

何度も記した事のあるモグールのカンバル・アリーは支離滅裂の事を口にする（parīshān-gūy）人物であった。バーキー・ベグは，彼の性格を好まなかった。私は，バーキー・ベグの気持をおもんばかって，彼を去らせた。彼の息子のアブドゥッ・シャクール ʻAbd al-Shakūr は，それ以来，ジャハーンギール・ミールザーの臣下となった。

ホスロー・シャーは，モグール部族が私たちに合流した事を聞くとすこぶる動揺し，他にどうする事もできず，婿のヤークーブ・アイユーブを使者として派遣して来て，臣従と左袒の宣言を行なった。そして「もし誓約がなされるなら，私は必ず臣従致します」と懇請した。バーキー・チャガーニーヤーニーは有力者（ikhtiyār）であった。彼は私の側に立ってはいたが，自分の兄〔ホスロー・シャー〕の立場をも無視する事は無かった。その懇請が受入れられ，以下の如く誓約がなされた：彼の生命を保証し，その財産についても，彼が選ぶものはいか程であれ，その全てを取らせる。

私は，ヤークーブに退去の許可を与えた後，クズル・スーを下流へと移動
123b し，アンダラーブ川 Andarāb-suyı の合流点（qatlısh）近くに（123b）下馬した。

翌日，**ラビーゥル・アッヴァル月中旬**〔1504年8月下旬〕，私は軽装でアンダラーブ川を渡り，ドゥーシーの近郊で1本の巨大なすずかけの木の下に坐った。むこうからホスロー・シャーが威風堂々と多数の兵と共に到着した。慣例により，彼は遠くから下馬して徒歩で進んだ。会見の際，彼は3度膝まづき，もどる際もまた3度膝まづいた。さらに挨拶した際と贈物をさし出した際には，1度ずつ膝まづいた。彼はジャハーンギール・ミールザーとミールザー・ハーンに対しても，全くこれと同じ慣例に従って行動した。この老いて肥った小者は何年も自らの思い通りに暮らし，君主権の内で彼に欠けているものはといえば，ただフトゥバを自分の名で読めないでいたという1点のみであった。その彼が，25～26回も引続いて膝まづき，進み，かつ退いたのであった。彼は疲れはて，完全に倒れ落ちる寸前であった。彼が何年も行使したベグとしての権限（beglik）も君主権も，全て彼の眼前から消えうせた。会見を終り，彼が贈物をさし出した後，私は彼に坐るように命じた。1ガリー garī〔ガリーはインドの時間の単位。1昼夜の$\frac{1}{60}$。24分。289a 参照〕ないし2ガリーの間，坐ってあちらからこちらからと会話が交された。その男気の無さや不義理とは別に，彼はつまらぬ，まずい事を云う性格をも持ち合わせていたらしい。彼が信用し信頼していた家臣たちが，彼の眼の前で，1群1群とやって来て，私に臣従しているというまさにこのような時に，さらにまた，彼自身について云えば，王権を行使して暮らしていた者が，かくもみじめたらしくおちぶれ果てて，やむを得ずやって来て，何とも情けないやり方で会見せねばならないという状況に
124a まで追いつめられていたあのような時に，（124a）彼は2つの思いがけない言葉を発したのである。

1つは，彼の家臣たちが彼のもとを離れた事について同情されると，彼がそれに対して「この連中は〔これまで〕4度も同じように私を離れましたが，いつもまた私の所へもどって来ましたよ」と答えた事である。もう1つは，私が彼の弟のワリーについて「彼はいつ来るのだろう？。アームー川をどの渡しで渡るのだろう？」とたずねた時，彼は「もしうまく渡しを見付ければ，必ず急いで来るはずです。しかし渡しは増水すればすぐ場所がかわってしまいます。

“あの渡しを水が運んだ” (ān godhar-rā āb bord) という〔ペルシア語の〕諺があります」と述べた事である。彼の栄華と家臣らが失われた時に，神がこの言葉を彼の舌の上に置かれたのである。1～2ガリーの後，私は乗馬して宿営地 (ordu) に帰った。彼も下馬した場所へと去った。

この日以後，大小貴賤，ベグやベグの臣下たちは，群をなして家族・財産ともどもに彼のもとを離れ，私たちの所へ来はじめた。翌日の正午と午後の礼拝時までには，もはや誰1人として彼のもとに残っている者はいなかった。

> 誦えよ，「おおアッラーよ。王権の所有者よ。そなたは王権を，誰であれそれを望む者に授け給い，また王権を，誰であれそれを望む者から奪い給う。また誰であれ望む者を高め給い，誰であれ望む者を低め給う。一切の善き事はそなたの御許にあり，そなたは全ての事柄に対して全能であらせ給う」と。
>
> 〔『コーラン』第3章第25節〕

まことに驚くべき神の力である。この男は2～30,000人の家臣たちの主人であった。鉄門 (Darband-i Āhanīn) とも呼ばれているカフルガ Qahlugha からヒンドゥー・クシュ山脈まで，スルターン・マフムード・ミールザーに属した諸地方 (wilāyāt) は全て彼の掌握下に (124b) あった。<p. 152 彼は絶体的な支配権をふるっていたのである>。その1徴税人に過ぎぬハサン・バルラース Ḥasan Barlās という年とった小者ですら，イレクからアウバージュに至るまで，〔私たちに対し〕種々無礼な態度で苛斂誅求を行ない，私たちの進止を自由にしていた。ところが，それ程の人物が，わずか半日の内に，戦も無く争いも無いままに，私たちのような，あてもなくさまよう敗残の200～250人の前に，あのようにおちぶれ果てた，情けない，困り果てた態度をあらわにしたのであった。彼には，その家臣らに対しても，その財産に対しても，またさらにその生命に対しても，もはや用いるべき力が残っていなかった。 124b

私がホスロー・シャーに会ってもどったその夜，〔スルターン・マフムード・ミールザーの子の〕ミールザー・ハーンが私のもとに来て，自らの兄たちのために〔ホスロー・シャーに対する〕復讐を願い出た。私たちの間では，若干の人々も〔それに〕賛同した。事実，法と慣習 (shar‘ wä ‘urf) に照らしても，このような者たちは報いを受けるのが妥当であった。しかし誓約が為されていたので，私はホスロー・シャーのために助命を求め，彼が持ち去れるだけの物

を持ち去るようにと命じた。ホスロー・シャーは，3～4列のろばとらくだに，そこにあった宝石や金銀・財宝を積んで運び去った。私たちは，彼にシーリーム・タガーイーを随伴させて見送らせた。すなわちシーリームは，ホスロー・シャーをグーリー Ghūrī およびダハーナ Dahāna 経由でホラーサーン方面へ送り，彼自らはカフマルドへ行って，私たちのあとから家族をカーブル方面へ連れて来ることになった。

私たちは，カーブルをめざしてその宿営地を発ち，ホージャ・ザイド Khwāja Zayd に到着して下馬した。その同じ日，ウズベクの襲撃隊をハムザ・ビー・マンギト Ḥamza Bī Mangghit が率いて来て，ドゥーシー近辺を襲撃した。私は，サイイド・カースィム・イシク・アーガーとアフマド・カースィム・コ
125a フブルを（125a）若干の若党たちと共に派遣した。彼らは行って，敵をよく破り，何人かの首を切って持って来た。

この宿営地で，私はホスロー・シャーの甲冑庫（jība-khāna）にあった甲冑を分配した。7～800ほどの鎖かたびら（jūshan）と鞍（kūha）であった。ホスロー・シャーが残していった物の1つがこれであった。また陶器類も大量に入手した。それ以外では，特に見るべき物は無かった。

私たちは，ホージャ・ザイドから4～5宿してグールバンド Ghūrband に到着した。私たちがウシュトゥル・シャフル Ushtur-shahr に下馬すると，以下のような情報を得た：〔カーブルの支配者〕ムキーム Muqīm の配下で，最も大きな権限を所有するベグであったシーラク・アルグン Shīrak Arghūn が，私たちの事は知らぬままに，兵を率いて到着し，バーラーン Bārān の川岸に滞留している。それは，当時カーブルから逃亡して，タルカラーニー・アフガーン族 Tarkalānī Afghān の間，ラムガーン Lamghān に居た〔ウルグ・ベグ・ミールザーの子の〕アブドゥッ・ラッザーク・ミールザー ʻAbd al-Razzāq Mīrzā のもとへ，パンジュ・ヒール道（Panj-hīr yolı）を取って人びとが行くのを阻止するためであると。

私たちは，この情報を得ると，ただちに，2つの礼拝の間の時刻〔午後〕にそこを出発して，夜も休まず進み，明け方，フーブヤーン峠（Hūbyān kötäli）を越えた。峠を出るとすぐ，南の方角に低く輝く星が見えた。私は「カノプス星ではないだろうか？」と云った。皆が「カノプス星です」と答えた。バーキー・チャガーニーヤーニーがこの詩句を誦えた：

おお，カノプス星よ。お前はどの地まで輝き，またいつ登るのか。

誰であれお前が眼をそそげば，それはまさしく幸運のしるし。

太陽が槍の高さほど登った時刻に，私はスィンジドの谷 (Sinjid darra) の
125b 入口に到着して下馬した。私たちの前方に (125b) 進んでいた物見の若党たちや若干の若党たちは，カラ・バーグ Qara-Bāgh のふもとのイグリ・ヤール Igri-Yār 近郊で，シーラク〔アルグン〕の所に到達すると，ただちに手合せした。シーラクはほんの少しの戦の如きものをした。若党たちはまたたく間に敵を制圧した。彼らは，シーラクとさらに70～80ないし100人のすぐれた若党たちを落馬させ連行して来た。私はシーラクの命を許した。彼は臣下となった。

ホスロー・シャーが，〔先に〕クンドゥズから諸部民に眼もくれず，カーブルに向け出発した時，彼に属する諸部族 (il wä ulus) は5～6隊 (böläk) あった。バダフシャーンにいた者たちの内の1隊は，ルースター・ハザーラ Rūstā-hazāra に居たサイイディム・アリー・ダルバーン Sayyidim ʻAlī darbān に率いられ，パンジュヒールを渡って来て，まさにこの宿営地で私たちの前に伺候した。もう1つの1隊は，ユーフス・アイユーブとバフルール・アイユーブであったが，彼らもこの宿営地で臣従して来た。

別の1隊はフッタラーンからの，ホスローの弟のワリーであり，またもう1つの1隊はイランチク Yılanchıq，ニクダリー Nikdarī，カクシャール Qāqshāl，それにクンドゥズ地方に滞留していた (olturushluq) アイマク諸部族 (Aymaqlar) であった。これらの2隊は，共にアンダラーブ，サラーブ Sar-āb を経由して来て，パンジュヒールを渡る考えでいた。後者が先にサラーブに居た時に，おくれてワリーが到着した。アイマクは待ち伏せして，戦って〔ワリーを〕破った。ワリー自身は逃げてウズベクのもとへとおもむいた。シャイバク・ハーンはサマルカンドのチャール・スーイでその首を打たせた。そこに居たワリーの従者たちは，略奪され強奪された状態で，アイマク諸部と共にこの宿営地に来て〔私に〕臣従した。サイイド・ユースフ・オグラクチ
126a 〔22a 参照〕も (126a) アイマク諸部と共に来た。

私は，この宿営地を発って，カラ・バーグの傍らのアク・サラーイ牧地 (Aq-sarāy ulangı) に下馬した。旧ホスロー・シャー配下の諸部民がひどい行為を為し始めた。遂には，サイイディム・アリー・ダルバーンの1人のすぐれ

た部下がある者の油の壺を強奪したため，私は宮廷（ishik）に連れて来させて杖打させた。彼はこの杖打のさ中に絶命した。人びとはこの刑の執行の後は完全におとなしくなった。

この宿営地に滞在中に，私はカーブルにただちに向うべきか否かを相談した。サイイド・ユースフと幾人かの意見は，「冬が近い。ただちにラムガーンに行き，そこから，何らかのチャンスが訪れたなら，それに従って行動しよう」というものであった。バーキー・チャガーニーヤーニーと幾人かは，カーブルにおもむくという意見であった。私は，この意見を採り，その地を発ち，アバー・クルク Abā quruqı〔又は<p. 126 Ayā quruqı>〕に到着して下馬した。ここで，私の母のハーヌムとカフマルドに残っていた家族が非常な危険な目にあった末に到着して〔私に〕合流した。その詳細は以下の如くである。

私は先にシーリーム・タガーイーをホスロー・シャーにつけて派遣していた。それはホスロー・シャーをホラーサーンへと見送り，彼自身はもどって家族を連れて来るためであった。ところがダハーナに達した時，シーリームは〔ホスローを制御する〕力を失ってしまった。ホスロー・シャーは，シーリームと一緒にカフマルドにもどった。ホスローの姉妹の子のアフマド・カースィムがカ
126b フマルドにいた。ホスロー・シャーは（126b）アフマド・カースィムを取りこんで，私の家族に危害を加える立場をとった。

バーキー・チャガーニーヤーニーの多数のモグールの臣下たちが，私の家族と共に，カフマルドにいた。彼らは密かにシーリームと約定して，ホスロー・シャーとアフマド・カースィムを捕える計画をたてた。ホスロー・シャーとアフマド・カースィムはアージャルの谷側の道を通って逃亡し，ホラーサーンに向った。モグールが，この支援によって意図していた所のものは，彼ら自身があの者たちと袂（たもと）を分かつ事であったように思われる。私の家族と，そこにいた人びとが，ホスロー・シャーに対する不安から解放されて，アージャルを出てカフマルドに到達した時，イスカンチ部（Isıqanchı ili）が敵対し，道をはばんだ。彼らは，ほとんどの私の家族とバーキー・ベグ配下の諸部族とを略奪した。クル・バーヤズィード Qul Bāyazīd の息子ティーザク Tīzak は幼なかったが，そこで捕えられ，3～4年後にカーブルに来た。私の家族は略奪・強奪を受けた後，私たちが通ったキプチャク道によって峠を越え，アバー・クルクに来て私たちに合流した。

私は，そこを発って，途中で一宿した後，チャーラーク牧地 (Chālāk ulangı) で協議して，カーブル包囲の策を決定した。また出発して，私自らは，とにかくそこにいた中軍 (ghūl) の兵と共に，ハイダル・タク Ḥaydar Taqı の庭園とクル・バーヤズィード・ブカーウルの墓地の中間に下馬した。ジャハーンギール・ミールザーは右翼の人びとと共に現在の私たちの大庭園（チャール・バーグ）の所に下馬した。ナースィル・ミールザーは左翼の人びとと共にクトゥルク・カダム Qutlıq Qadam の墓地の後ろにある牧地に下馬した。

127a (127a) 私の部下がひき続き〔城内の〕ムキームの所へおもむいて，ムキームと協議していた。時には言訳がもたらされ，時には当りのやわらかな言葉が語られた。ムキームがこのような〔はっきりしない〕態度をとっていたのは，まず間違い無く，私たちがシーラクを捕えるとすぐ，彼が彼の父や兄の所へ使者を走らせていたためであった。彼はその父や兄に希望を託していたので，引延ばしを図っていたのであった。

ある日，「中軍，右翼，左翼は全て甲冑に身を固め，馬にも武装させて，〔カーブル城〕近くまで進み，〔敵に対して〕武器を誇示し，城内の者たちを怖れさせよ」という命令が出された。ジャハーンギール・ミールザーと右翼軍は，城の正面からクーチェ・バーグ Kūchä Bāgh を通ってより先へと進んだ。中軍の前方は川であったので，私は中軍の兵と共にクトゥルク・カダムの墓地の方面から来て，丘を経て前面の小山の上に出た。後衛の兵は，クトゥルク・カダムの橋の所を密集して進んだ。もっとも当時は，橋は無かった。若党らは，大胆にも，革なめし工門 (Charmgar darwāzası) にまでギャロップで進んだ。敵方の，門を出ていた少数の者たちは，戦うためにふみ止まろうとせず，逃げるとすぐに城内に入った。

要塞 (ark) の城壁 (khāk-rīz) の高みに，多数のカーブルの人びとが見物のために出ていたが，味方の者が逃げ帰ると，彼らもすぐ大勢が向きをかえて降りた。敵方は橋と門の間の高い丘の上の道の真中に，多数の壕を堀って

127b (127b) いばらで蔽っていた。スルターン・クリー・チュナクと若干の若党たちがギャロップで進んだ際に，一かたまりになって〔その壕に〕落ちた。右翼の方面からは，1～2名の若党が，〔城と〕クーチェ・バーグとの間で，出城した敵兵と1～2合刀を交えた。しかし戦闘の命令が出されていなかったので，彼らはこの程度で引返した。

城内の者たちは全く肝をつぶした。ムキームは，ベグたちを間に立てて，降伏とカーブルの委譲を申し出た。彼自身は，バーキー・ベグ・チャガーニーヤーニーを仲介者として来て，私の前に出頭した。私たちも恩愛と憐愍(れんびん)の立場に立って，彼の心から不安・危惧を取除いた。かくして，彼は翌日そこにいた従者・家臣，財産・持物と共に出城して，城を引き渡す事に取決められた。しかし旧ホスロー・シャー配下の者たちは，思慮の無い行動と略奪とをその習いとしていた。そこで私たちは，ムキームの一党を出城させるために，ジャハーンギール・ミールザー，ナースィル・ミールザー，大ベグたち (uluq beglär)，近習たちを任命した。つまり彼らが，ムキームを，彼の属下の人々や財産・持物ともども，〔無事に〕カーブルから出城できるようにさせるためであった。私たちは，ムキームのユルトとしてティパー Tīpā を定めた。

明け方，ミールザーたちとベグたちが〔城の〕諸門の所に行くと，民衆のすさまじい群衆的喧噪 (hujūm wä ghawghā) に直面した。そこで彼らは私の所へ人を遣わして来て，「あなたが来られない限り，この人びとを制止できません」と云った。結局，私自身が出かけた。私は4～5名を矢で射抜かせ，1～
128a 2名を切り (128a) きざませた。騒動は鎮まった。かくしてムキームは，その従者たちと共に無事・安全に進み，ティパーに下馬した。

ラビーゥル・アッヴァル月下旬〔1504年9月〕，至高の神の御愛顧と御慈悲とによって，私はカーブルとガズニー Ghaznī の王国と諸地方 (Kābul wä Gaznī mulk wä wilāyatı) を，戦う事も争う事も無く獲得・領有したのである。

〔カーブル地方について〕

カーブル地方 (Kābul wilāyatı) は第4気候帯に属する。居住地域 (ma'mūra) の中央に位置する。東はラムガーナート Lamghānāt，プルシャー〔ワル〕Pursha〔war〕，<p. 156 ハシュナガル Hashnaghar，そして若干のヒンドの諸地方 (Hind wilāyatı) である。西は山岳地帯 (Kūhistān)>で，その中にギゼーウ Gizīw とグールが含まれる。現在，ハザーラ族とニクダリー族 (Nikdarī qawmı) の隠れ家と居住地がこの山々である。北はクンドゥズとアンダラーブの諸地方である。ヒンドゥー・クシュ山脈が〔カーブルとこれらの地方の〕間にある。南はファルムル Farmul，ナガル Naghar，バヌー Bannū とアフガーニスターン Afghānistān である。

〔**カーブル**〕　カーブル地方は小さな地方である。細長い地方である。東から西へ向って，細長く延びている。周囲は全て山である。その城市（qal'a）は山に連接している。城市の<p. 157 西南の方角にやや小さな山がある。その山の>頂上に，カーブル王（Shāh-i Kābul）が建物を建てたために，人びとはこの山をシャーヒ・カーブルと呼んでいる。この山は，ディーヴリーン隘路（Dīwrīn tangīsi）にはじまり，デヒ・ヤークーブ隘路（Deh-i Ya'qūb tangīsi）でおわっている。その周囲は2シャルイーであろう。この山の麓は全て庭園である。私の父方のおじであるウルグ・ベグ・ミールザーの時代に，ミールザーの後見人（atäkä）であったヴァイス・アテケ Ways atäkä がこの山の麓に1本の水路（arıq）を引かせた。麓の庭園は全てこの水路で潤されている。水の行きつく先はギュルギネ Gülginä という名の居住区で，ひっそりとした一角である。多くの放蕩（lawandlıqlar）がそこでくり広げられた。人びとは時どき，冗談の（128b）ようにして，ホージャ・ハーフィズ Khwāja Ḥāfiẓ の詩の次の1行をもじって誦んでいた。

128b

ああ！何とすばらしい時であった事か。私はしばし我を忘れ，
さまざまの悪名と共に，ギュルギネに暮したものだ。

城市の南，シャーヒ・カーブルの東に1つの大きな池がある。周囲は1シャルイーに近い。シャーヒ・カーブル山から，カーブル方向に，3つのやや小さな泉が出ている。その内の2つはギュルギネの近くにある。1つの泉の所にホージャ・シャムー Khwāja Shamū という名の墓地がある。もう1つの所にはホージャ・ヒズル Khwāja Khiḍr の足跡地（qadam-gāhı）がある。この2つの場所は，カーブルの人々の散策の地である。さらにもう1つの泉がホージャ・アブドゥッ・サマド Khwāja 'Abd al-Ṣamad の正面にある。人びとはホージャ・ルーシュナーイー Khwāja Rūshnā'ī と呼んでいる。

シャーヒ・カーブル山から1つの突出部が分かれている。ウカーバイン 'Uqābayn と呼ばれている。ウカーバインの他，もう1つのちょっとした山がある。カーブル城の内城（ark）はこの山の上にある。大きな市街が内城の北側にある。この内城は，驚くほど高く，空気のよい所にある。内城は前述の大きな池と，シヤフ・サング Siyah Sang，ソング・クルガン Song Qurghan，チャーラークという3つの牧場を見おろしている。全てが足下にある。これらの牧場は，緑の季節にはまことに眼に美しい。

夏，カーブルは北風にこと欠かぬ。人びとはそれをパルワーン風 (Parwān yeli) と呼んでいる。内城では，北側の小窓付きの家々はすこぶる快適である。ムッラー・ムハンマド・ターリブ・ムアンマーイー Mullā Muḥammad Ṭālib
129a mu'ammā'ī がカーブルの内城を (129a) 讃えて，バディーゥッ・ザマーン・ミールザーの名で次の1句を編みうたっている。

カーブルの城で酒をくめ。やむ事なく盃(さかずき)をまわせ。

何故なら，カーブルは山であり海であり，町であり砂漠であるが故に。

〔**交易**〕 ヒンドゥスターン人 (Hindustānī) はヒンドゥスターン Hindustān 以外の地をホラーサーンと呼んでいる。アラブ人がアラブ以外をアジャム 'Ajam と呼んでいるのと同様である。ヒンドゥスターンとホラーサーンの間の陸路上に，2つの交易の中心地 (bandar) がある。すなわちカーブルとカンダハールである。フェルガーナ，トゥルキスターン，サマルカンド，ブハーラー，バルフ，ヒサール，バダフシャーンから隊商 (kārawān) がカーブルに来る。ホラーサーンから隊商がカンダハールに来る。ヒンドゥスターンとホラーサーンの中に立つのがこの〔カーブル〕地方である。まことにすばらしい交易地である。もし商人たちが中国 Khiṭāy とかルーム Rūm〔トルコ〕におもむけばこの地であげられるのと同程度の利益をあげる事ができる。毎年7～8,000ないし10,000頭の馬がカーブルにもたらされる。下(しも)のヒンドゥスターンから10,000～15,000ないし20,000家族 (öyluq) の隊商がカーブルへ来る。ヒンドゥスターン奴隷 (barda)，白い布地 (aq rakht)，砂糖菓子 (qand)，<p. 158 精糖 (nabāt)>，〔普通の〕砂糖 (shakar)，芳香根 ('aqāqīr) がもたらされる。多くの商人たちは，3～4倍程度の利益 (dah sī dah chil) では満足しない。カーブルでは，ホラーサーン，イラーク，ルーム，チーン Chīn〔南支那〕の商品が見られる。カーブルはまるでヒンドゥスターン自身の交易の中心地である。

〔**気候と産物**〕 温暖な地域と寒冷な地域が近接している。カーブルから，1日の内に，雪がまったく降らぬ土地へ行く事ができる。また2恒星時 (sā'at-i nujūmī)〔2時間弱〕の内に，雪が消え去る事の無い土地へ行く事もできる。
129b もっとも，時には雪がまったく残らぬような夏が来る事もあるが。(129b) 温暖地と寒冷地の果物が，カーブル一帯には豊富で，また手近にある。カーブルとその村々には，寒冷地の果物の内，ぶどう，ざくろ，あんず，りんご，まる

めろ (behī)，なし，もも，プラム，くるみ (yangaq) が豊富である。私はさくらんぼうの木 (ālū bālū) の若枝を持って来て植えさせた。すばらしいさくらんぼうの木になり，現在もなお成長している。

オレンジ，シトロン (turunj)，アムルーク (amlūk ?)，さとうきびのような温暖地の果物は，ラムガーナートから運ばれて来る。私はさとうきびを運ばせて植えさせた。樅(もみ)の木をニジュラーウ Nijrāw から運んで来ている。カーブル周辺の山地からは，蜜が大量にもたらされる。蜜蜂の巣が〔そこに〕ある。ただガズニー方面の山地からのみは，蜜がもたらされない。

カーブルのだいおう (riwāch) はすばらしい。まるめろとあんずも良い。うり (bād-rang) も良い。1種のぶどうがあり，「水ぶどう」(āb-angūr) と呼ばれている。まことに美味しいぶどうである。強いぶどう酒も生産される。ホージャ・ハーヴァンド・サーイード山麓地帯 (Khwāja Khāwand Sa'īd dāman-i kūhī) のぶどう酒は強い事で有名である。今は，<p. 159 それについて>，他の人が述べているのを借用して説明しておこう：「酒の楽しさは，酔うた者のみが知る。正気の者には分りはせぬ」。

穀物は良くない。<p. 159 うまくいった農業で〔1つの種子に対して〕4～5倍の収獲である。メロンも良くない>。しかしホラーサーンの種子を使った場合には，概してメロンは悪くない。

気候はまことに快適である。カーブルのような気候は世界中で他には知られていない。夏でも夜はコートなしでは眠られない。冬は雪がまず大量に降るが，
130a 極端な寒さは無い。サマルカンドとタブリーズも快適な気候で (130a) 名高いが，そこには厳寒がある。

〔**牧地**〕 周囲に4カ所の良い牧地がある。東北方は，ソング・クルガン牧地である。カーブルから2キョルフ〔キョルフは4,000歩の距離〕ほどの所である。すばらしい牧地である。草は馬に適し，蚊も少い。西北方は，チャーラーク牧地である。カーブルから1キョルフである。広い牧地である。夏には蚊が馬を悩ませる。西はディーヴリーン牧地<p. 130 である。もっとも，ここには2つの牧地，つまりテペ牧地と>クシュ・ナーディル牧地 (Qush Nādir ulangı) がある。この計算でゆくと，〔カーブル周辺には〕5つの牧地がある事になろう。両牧地とも，カーブルからそれぞれ1シャルイー程の所にある。共に小さな牧地である。しかしその草はきわめて馬によい。蚊もいない。カーブ

ルの諸牧地の中では，この2つの牧地が最高である。東はシヤフ・サング牧地である。革なめし工門とこの牧地の間にあるのが〔バーブルの部下であった〕クトゥルク・カダムの墓地である。夏には蚊が多いため，人びとはこの牧地をほとんど整備していない。この牧地に接してカマリー牧地 (Kamarī ulangı) もある。この牧地を考慮に入れるとカーブル周辺には6カ所の牧地がある事になろう。しかし4つの牧地が名高い。

〔**交通路**〕　カーブル地方は堅固な地方である。外敵がこの地方に侵入する事は困難である。バルフ，クンドゥズ，バダフシャーンとカーブルの間にはヒンドゥー・クシュ山脈がある。この山脈を7つの交通路が越えている。この内の3道はパンジュヒールにある。より上方にあるのがジャワーク Jawāk 峠〔Khawāk 峠〕である。それより下方にあるのがトゥール Ṭūl で，さらに下
130b 方にあるのがバーザーラク Bāzārak である。この3つの峠の内で (130b) 最もよいのがトゥールである。しかし道のりがややより遠い。おそらくこのために「トゥール」〔アラブ語・ペルシア語で「長い」の意〕と呼ばれる。最も直線的なのがバーザーラクである。トゥールとバーザーラクはサラーブにおりる。サラーブの人びとは，バーザーラク峠が，パーランディー Pārandī という村におりるので，それをパーランディー峠と呼んでいる。

もう1つはパルワーン道 (Parwān yolı) である。大峠 (uluq kötäli) とパルワーンの間にさらに7つの峠があるため，ハフト・バッチャ Haft-bachcha〔ペルシア語「7人の子供たち」の意〕と呼んでいる。アンダラーブ方面から2つの道が来て，大峠の所で合流し，ハフト・バッチャとパルワーンに向っている。まことに危険に満ちた道である。

さらに3道がグールバンドにある。パルワーン道により近い道がヤンギ・ヨル峠 (Yangı Yol kötäli)〔トルコ語「新道」の意〕である。ワリーヤーン Walīyān とヒンジャーン Khinjān におりる。別の1道がキプチャク峠 (Qıpchaq kötäli) である。アンダラーブ川とクズル・スーの合流点におりる。この道もよい道である。

別の1道がシバルトゥー峠 (Shibartū kötäli) である。夏，水量が増すと，人びとはシバルトゥー峠を越えて，バーミーヤーン，サイカーン Sayqān を経て進む。冬はアーブ・ダッラ Āb-darra を通って進む。冬の4～5カ月間は，全ての道が閉ざされる。ただシバルトゥー峠のみは例外である。人びとはこの

峠を越えて，アーブ・ダッラを通って進む。

夏，水が〔谷に〕入った時にも，この道々には冬の影響が及ぶ。何故なら，河床（tak-āb）の道々は，水が増すために通行不可能となるからである。河床を通らず，山道を進もうとすると，旅は困難である。そこで雪が少く，流れの
131a (131a) 少い秋の3～4カ月間が，これらの道々の通行期である。山々にも，谷々にも，追いはぎのカーフィル Kāfir〔「邪教徒」〕が<p. 160 少くない>。

ホラーサーン側から来る道は，カンダハールを経由している。この道は，全く平坦な道である。この道には峠が無い。

ヒンドゥスターン側からは4つの道が出ている。1道はラムガーナートを経由している。この道には，ハイバル Khaybar の山々に，やや小さな峠がある。他の1道はバンガシュを経由し，別の1道はナガルを経由し，さらに別の1道はファルムルを経由している。これらの道々にもやや小さな峠がある。

人びとは，スィンド川（Sind suyı）〔インダス川〕の3つの渡し場を渡った後，これらの道をとって〔カーブルに〕来る。ニーラーブ Nīl-āb の渡しを渡った人びとは，ラムガーナート経由で来る。人びとは，冬には，カーブル川とスィンド川の合流点より下方で，スィンド川とカーブル川を渡しを利用して渡っている。私は，ほとんどのインド遠征の場合，これらの渡しを使って渡河した。私が遠征して，〔パーニーパトの戦で〕スルターン・イブラーヒーム Sulṭān Ibrāhīm を打ち破って，ヒンドゥスターンを制圧した時には，ニーラーブの渡しを船で渡った。ここ以外では，スィンド河をどの地点であれ，船なしに渡る事は不可能である。ディーンコト Dīnkot の渡しで渡河した人びとは，バンガシュ経由で来る。チューパーラ Chūpāra の渡しで渡河した人びとは，ファルムル経由で来れば，ガズニーに着き，ダシュト Dasht 経由で進めば，カンダハールに行く。

〔**住民**〕　カーブル地方には様々な部族（aqwām）がいる。平原や平地には，トルコ人（Atrāk），アイマク族（Aymaq），アラブ人（A'rāb）がいる。
131b 都市や若干の村々には，サルト人がいる。また若干の (131b) 村々や諸地方には，パシャーイー Pashāī，パラーチー Parāchī，タージーク Tājīk，バラキー Barakī，アフガーン Afghān がいる。西の山々には，ハザーラ Hazāra とニクダリー Nikdarī がいる。ハザーラとニクダリーの間では，若干の者たちはモグール語（Moghūlī）で会話をしている。東北の山々は，カトゥール Katūr

とかガブラク Gabrak といったカーフィルたちの住地（Kāfiristān）である。南はアフガーン人の住地（Afghānistān）である。

〔**言語**〕　カーブル地方では，11～12種類の言語が話されている。アラブ語，ペルシア語，トルコ語，モグール語，ヒンディー語，アフガーン語（Afghānī），パシャーイー語，パラーチー語，ガブリー語（Gabrī），バラキー語，ラムガーニー語（Lamghānī）などである。他のどの地方でも，これほどに種々雑多な部族や言語の存在は知られていない。

〔**地区**〕　ここの諸地方（ヴイラーヤート）には，14の地区（tümän）がある。サマルカンド，ブハーラー及びこの近辺では，1つの大きな地方（uluq wilāyat）の治下にある小さな地方（wilāyatcha）の事を地区（tümän）と呼んでいる。アンディジャーン，カーシュガル及びその近辺ではこれをオルチン（örchin）と呼び，ヒンドゥスターンではペルゲネ（pergene）と呼んでいる。

以前は，バジャウル Bajawr，サワード Sawād〔現在のスワット Swat〕，プルシャーワル，ハシュナガルもカーブルの属地であったらしい。しかし現在は，アフガーン族（Afghān qawmı）が原因で，その内の若干は破滅し，若干はアフガーン族の支配下に入って，〔行政区劃としてカーブルの支配下に属する〕地方（wilāyatlıq）はもはや残っていない。

東は**ラムガーナート**である。この地方は，5地区と2区域（bölük）である。

ラムガーナートの諸地区の中で最大の地区は**ニングナハール** Ningnahār である。若干の史書には，ナガラハール Nagarahār と書かれている。ダロガの駐在地は，アーディーナプール Ādīnapūr である。カーブルの東方，13ユガチの道のりである。ニングナハール・カーブル間は，つらく困難な道である。
132a 3～4カ所にやや低い（132a）峠があり，2～3カ所に隘路がある。ヒリルジー Khiriljī その他の全ての山賊アフガーン人らがこの道をおさえていた。もともとはこの道の途中には人の住んでいる所は無かった。私は，クルク・サーイ Quruq Sāy の麓のクラトゥー Quratū に人を住まわせた。その結果，この道は安全になった。

温暖地方と寒冷地方の境になっているのがバーダーム・チェシュメ峠（Bādām-cheshmä kötäli）〔バーダーム・チェシュメは「アーモンドの泉」の意〕である。この峠のカーブル側では雪が降るが，クルク・サーイ，ラムガーナート側では雪が降らない。人びとは，この峠をくだると同時に，別の世界を眼前

にする。木々は異り，草々も異り，動物も異り，人びとの暮らし方や習慣(rāh wä resmi) も異っている。

ニングナハールには9つの川がある。米や穀物がよい。オレンジ，シトロン，ざくろが豊富で，また質もよい。

アーディーナプール城の前の南側の1つの丘の上に，私は，**914年**〔1508/1509年〕，1つの庭園 (chār-bāgh) を造った。バーギ・ワファー Bāgh-i wafā'〔「忠誠の園」〕の名で知られ，川を見おろす位置にある。川は城と庭園の間にある。オレンジ，シトロン，ざくろが豊富である。私が〔ローディー朝の〕パハール・ハーン Pahār Khān を破って，ラーホール Lāhūr，ディーバールプール Dībālpūr を征服した年〔1524年〕，私はバナナを運ばせて，ここに植えさせた。うまく育った。それより前の年，私はさとうきびをも植えたが，よいさとうきびになった。私はその内の若干をバダフシャーンとブハーラーに送った。

この庭園は高みにあり，流水も手近く，冬の気候もおだやかである。庭園の
132b 中央に1つのやや小さな (132b) 丘がある。1つの水車を動かせるほどの水量の小川が，庭園の中央をよこぎり，この丘の上を通ってたえず流れている。庭園の中央に位置する庭園池 (chār-chaman) はこの丘の上にある。庭園の西南の方角に10〔カル:「腕の長さ」〕四方 (dah dar dah) の貯水池がある。その近辺は全てオレンジの木々である。ざくろの木々もある。この貯水池の周囲は全て三つ葉のクローバーの密生地である。庭園内の最高の場所がまさにここである。オレンジが黄ばんだ時節には，まことにすばらしい眺めとなる。実に見事なものである。

クーヒ・サフィード〔「白山」の意〕がニングナハールの南にある。バンガシュとニングナハールの中間にあるのがこの山である。騎馬の者の通れる道は無い。9つの川が，この山から流れ出ている。この山から雪が消えることがない。このため，おそらく「白山」と呼ばれるのである。これより下方の低地では雪はまったく降らない。雪のある所と降らぬ所の間はその距離半日行程である。この山の麓には，よい気候の諸地域がある。水は冷く，氷を必要としない。

アーディーナプール城の南側は，スルフ・ルード Surkh-rūd〔「赤い川」の意〕である。城は高みに位置し，川の側は，40～50カルの切り立った絶壁の山

である。北側には1つの山が立っている。まことに堅固な城である。この山は，ニングナハールとラムガーナートの間にある。カーブルで雪が降る時は，常に
133a この山の頂上にも雪が降る。ラムガーナートの人びとは (133a)，カーブルの降雪をこれによって知る。

このラムガーナートへ来る道は，もしクルク・サーイを通って来ると，1道は，ディリー峠 (Dīrī kötäli) を越えて，進んでブーラーン Būlān 及びバーラーン川 (Bārān sūyı) を過ぎて，ラムガーナート方面に進む。他の1道は，クルク・サーイの麓のクラトゥーを過ぎ，<p. 163 ウルク・ヌール Uluq Nūr とバーラーン川を経て，バーディ・ピーチュ峠 (Bād-i pīch kötäli) を越えて>ラムガーナートへ行く。もしニジュラーウを通って来ると，バドラーウ Badrāw を過ぎ，カランググリク Qarangrıq を経て，バーディ・ピーチュ峠へと進む。

ラムガーンの5地区の内の1地区がニングナハールであるが，人びとは，ラムガーナートという名称をその3つの地区に適用している。

それらの3地区の1つが，**アリーシャング** 'Alī-shang 地区である。その北部には，ヒンドゥー・クシュ山脈に連なる，雪をいただく高峻な山々がある。この山々は，全てカーフィルの住地 (Kāfiristān) である。アリーシャングにやや近いカーフィリスターンはミール Mīl である。アリーシャング川はミールから出ている。預言者ヌーフ猊下 Ḥaḍrat-i Nūḥ Payghambar〔ノア〕の父のラーム王子 (Mihtar Lām) の墓はアリーシャング地区にある。若干の史書では，ラーム王子をラマク Lamak ないしラマカーン Lamakān と述べている。私はこの地方の人々が，時にカーフの代りにガインの発音をする〔カ行の発音をガ行でする〕のをしばしば目撃した。この地方を〔ラムカーンと云わずに〕ラムガーンと云うのは，おそらくこのためである。

もう1つの地区が**アリンガル** Alingar である。アリンガルにやや近いカーフィルの住地は，ガワール Gawār である。アリンガル川はガワールから出ている。この2つの川〔アリーシャング川とアリンガル川〕はアリーシャングとアリンガルを過ぎると，やがて合流し，もう1つの地区である**マンドラーワル**
133b Mandrāwar の (133b) 下方でバーラーン川に合流する。

ラムガーナートの2つの区域 (bölük) の1つが，**ダッライ・ヌール** Darra-yi Nūr である。筆舌に尽くしがたい土地 (ghayr-i mukarrar yeri) である。

谷の入口の，1つの〔山の〕突出部の上に城が置かれている。両側は川である。水田が多い。道以外の所は通れない。オレンジ，シトロン，それに温暖地帯の果物類がある。数少いなつめやしの木もある。城の両側の谷の岸辺は全て樹木である。その多くはアムルーク（amlūk）の木である。その果物を若干のトルコ人たちはカラ・イミシュ（qara-yimish）と呼んでいる。ダッライ・ヌールに大量に産する。他の地域ではこの果物を見なかった。ぶどうも産する。ぶどうは皆，木の上にある。ラムガーナートでは，ダッライ・ヌール産のぶどう酒が名高い。2種類のぶどう酒を産する。アラ・タシ（ara tashı）とスーハーン・タシ（sūhān tashı）と呼ばれている。アラ・タシは黄色っぽく，スーハーン・タシは見事な真紅になる。しかしアラ・タシの方がよく効く。もっとも両方共，その酔い心地はその評判ほどではない。

上流の各谷間には猿がいる。ここより下流のインド方面にも猿がいる。ここより上流にはいない。ここの人びとは，以前は豚を飼っていた。しかし私たちの時代にやめた。

次の地区は，**クナル** Kunar と**ヌール・ガル** Nūr-gal である。この地区は，ラムガーナートからやや離れて存在している。カーフィリスターンの内部にあり，〔カーブル〕地方のはずれにある。その広さは，ラムガーンの諸地区と同
134a じ位であるが，上記の理由で，その税（māl）は少く，(134a) 彼らは少しばかりしか支払わない。

チャガン・サラーイ川（Chaghān Sarāy suyı）が東北の方角からカーフィリスターンの内部を通って流れて来て，この地方の間をよぎり，カーマ区域（Kāma bölüki）でバーラーン川に合流し，東へ流れている。ヌール・ガルはこの川の西側にある。クナルは東側にある。

〔カシュミールのイスラム化を促進したスーフィー〕ミール・サイイド・アリー・ハマダーニー Mīr Sayyid ʻAlī Hamadānī〔1314-1385〕——アッラーのお恵みのあらん事を——が旅をして来て，クナルから1シャルイー上流の地点で逝去した。その弟子たちは〔遺体を〕ここからフッタラーンに移送した。逝去の地には，現在，墓廟（mazār）がある。925年〔1519年〕，私がチャガン・サラーイに来てこの地を征服した時，私も参拝した。

オレンジ，シトロン，米（kurinj）が豊富である。強いぶどう酒をもカーフィリスターンから運んで来ている。ここの人びとは，不思議な事を話してい

た。とても有りえない事に思われる。しかし，この話は何度も何度も耳にした。この地区には，ラマタ・カンディ Lamata Kandi と呼ばれる谷の入口（quy ayaghı）があった。そこから下(しも)は，ダッライ・ヌールとアタル Atar に属し，それより上(かみ)は，全てクナル，ヌール・ガル，サワード及びその周辺地域からなるクーヒスターン Kūhistān であった。このクーヒスターンで次の話が流布していた：女性が死ぬとその遺体を台座の上に置き，四方から支えてかつぎ上げる。もし彼女が悪い事をしていない場合は，この運搬者たちを，自然に，何もしないのに動かす。この場合，もし運搬者たちが頑張って進まないようにすると遺体が台座から落ちる。もし彼女が悪い事をしていた場合は，動かないと。

この話は，ただここの人びとから聞いただけではない。バジャウル，サワー
134b ドそれに全てのクーヒスターンの人びとは完全に一致して（134b）この話をしていた。ハイダル・アリー・バジャウリー Ḥaydar ʻAlī Bajawrī は，バジャウルのスルターンであったが，その地方をまことによく治めていた。その母が歿した時，彼は泣かず，慟哭も行なわず，黒衣も身に着けないで，「行け。台座に置け。もし〔遺体が人びとを〕動かせなかったら，私が焼く」と云った。人びとが台座に置いた。よく知られた動きが，その遺体によってもたらされた。スルターンは，これを聞くとただちに黒衣を身につけ，慟哭を行なった。

次の区域（bölük）が**チャガン・サラーイ**である。１つの村で，貧弱な土地で，カーフィリスターンの入口である。住民はカーフィルたちと交っているため，イスラム教徒であるのに，カーフィルたちの習慣に従っている。チャガン・サラーイ川の名で知られる大河が，チャガン・サラーイの東北，バジャウルの後方から流れて来ている。西側では，ピチュ Pīch という名のカーフィル人の住地からもう１つのやや小さな川が流れて来て，この川に合流している。

チャガン・サラーイには黄色の強いぶどう酒がある。しかしダッライ・ヌールのぶどう酒とは，何の関係も無い。当地産のぶどうも，またぶどう園も無い。それらを，川の上流のカーフィリスターンとかピチ・カーフィリスターン Pīch-i Kāfiristān から運んで来ている。私がチャガン・サラーイを征服した時，ピチュのカーフィルたちがここの人びとの援軍として来ていた。そこではぶどう酒がすこぶる流布している。各カーフィルは，その首に１つの皮袋を結び，ぶどう酒を水の代りに飲みながら進んでいるほどである。

カーマは，離れた土地ではなく，ニングナハールに属するが，人びとはこれをも区域（ブルク）といっている。

135a 次は（135a），**ニジュラーウ**地区（Nijrāw tümäni）である。カーブルの東北のクーヒスターンにある。背後の山々は，全てカーフィルの住地である。すばらしい一角である。ぶどうと果物が豊富で，ぶどう酒もふんだんにある。しかしぶどう酒を沸かして飲む。冬には，にわとりを大いに肥らせている。住民は，酒飲みで，礼拝を行なわず，平気で悪事を行ない，邪教徒的である。その山々には，松（nāzhū），もみ（chilghūza），かし（balūt），乳香樹（khanjak）が多い。松，もみ，かしの木は，ここより下流で生育する。ニジュラーウより上流ではまったく生育しない。これらはヒンドゥスターンの樹木に属する。ここクーヒスターンの人びとのランプは，全てもみの木を用いている。ろうそくのように燃える。まことに珍しい。

ニジュラーウの山々には，飛びりす（rūba-yi parān）がいる。飛びりすは動物の1種で，猫よりも大きく，両手と両脚の間に膜がある。こうもりの羽根の如くである。人びとは，〔この動物を〕いつも連れて来ている。それは木から木へ，下方に向ってガズ矢の1射程（bir gaz atımı）ほども飛ぶという。しかし私自身はそれが飛んだのを見た事がなかった。私たちはそれを木に置いた。あっという間に木によじ登って去った。皆がそのあとを追った。それは膜を広げて，飛んだように降り，苦もなく着地した。

この山々には，ルーチャ鳥（lūcha qushı）もいる。人びとはこの鳥を「カメレオン（カラムーン）」と呼んでいる。頭から尾まで，5～6種類の色をしている。鳩の首のようにキラキラしている。その大きさは，やまうずら（kabg-i darī）ほどである。おそらく，インドやまうずらであろう。そこの人びとは，珍しい事を話していた：この鳥は，冬になるとすぐに山麓地帯におりる。もし人びとがそ
135b れを飛び立たせると（135b），それはぶどう園を過ぎるともはや飛べなくなり，捕えられると。また1種のねずみがニジュラーウにいるという話である。それは，じゃ香ねずみ（mūsh-i mushkīn）と呼ばれている。その体からじゃ香の香りがただよっていたという。しかし私はその実物を見ていない。

次は**パンジュヒール**地区である。パンジュヒール道の道中にある。カーフィリスターンはこの地にきわめて近い。山賊カーフィルたちの通路がパンジュヒールを通っている。カーフィルたちに近いため，ここからも，カーフィルたち

は税（kesim）を取りたてている。私がこのたび〔1526年〕来て，ヒンドゥスターンを征服した時，カーフィルたちが来攻して，パンジュヒールの多くの人びとを殺し，多くの破壊を行なっていた。

次は**グールバンド**地区である。その地方では峠を「バンド」と呼ぶ。人びとは，グール方面へこの峠を通って行く。おそらくそのためにグールバンドと呼ばれるのである。谷々の入口をハザーラ人が占拠している。数村から成る，やや税収入の＜p. 167 少い＞土地である。グールバンドの山々には銀坑とラピス・ラズーリ坑があると云われている。

次は〔ヒンドゥー・クシュ〕**山麓の村々**（kūh-dāmana kentläri）である。その始まりはマタカジャ Matakaja とパルワーン Parwān で，終りはドゥル・ナーマ Dur-Nāma である。12～13の村々である。果物のある村々である。そこのぶどう酒は最も強い。この村々は全て山の斜面にあるため，彼らは税（māl）を支払ってはいるものの，その納入はスムーズでない（rā'ij emästur）。この村々より下方の山麓に，山とバーラーン川の間に2カ所の平原がある。1つをクッライ・タージーヤーン Kurra-yi Tājīyān と呼び，他の1つをダシュティ・シャイフ Dasht-i Shaykh と呼んでいる。夏には，チキン・タラ草
136a (chikintala otı) が (136a) まことにすばらしい。アイマク族とトルコ人たちは，夏，いつもここに来ている。

この山麓に，色とりどりの，あらゆる種類のチューリップがある。私は1度，その種類を数えさせた。32～33種の別々のチューリップが算出された。またかすかな紅ばらの香りをたちのぼらせる1種のチューリップがあった。私たちは「ばらの香りのチューリップ」と呼んでいた。このチューリップはダシュティ・シャイフの一角に産し，別の所では産しない。またこの同じ山麓の，パルワーンよりやや下（しも）で百葉チューリップを産する。これも，グールバンドの谷の出口の所のある一角に産する。

この2つのダシュト〔「野」〕の間に，1つのやや小さな山がある。山の頂上から麓までを，人びとはホージャ・リーギ・ラヴァーン Khwāja Rīg-i rawān〔「走る砂のホージャ」〕と呼んでいる。人びとは，夏にこの砂地から太鼓（naqqāra wä duhul）の音が聞こえてくると云っている。

次は**カーブルに属する村々**である。カーブルの西南に高い雪をいただく山がある。雪が残雪の上につもる。そうでない年は稀である。カーブルで氷貯蔵所

(yakhdānlar) の氷が尽きると，この山から氷を運んで来て，氷水にして飲む。カーブルから3シャルイーほどである。バーミーヤーン山とこの山は，険しい山々である。この山から，ヘルマンド Hermand，スィンド Sind，ドゥーガーバ Dūghāba，クンドゥズ Qunduz，バルフ・アーブ Balkhāb の諸河川が出ている。1日の内に，各4河川の水を全て飲めると云われている。

この村々は，ほとんどがこの山の麓にある。果樹園にはぶどうが多い。あらゆる種類の果物も豊富である。この村々の間では，イスターリーフ Istālīf とイスタルガチュ Istarghach に匹敵するほどの村々は他には無い。〔アブー・
136b サーイードの子〕ウルグ・ベグ・ミールザーはこの村々を (136b) ホラーサーン，サマルカンドと呼んでいたらしい。パムガーン Pamghān もこの村々に匹敵する。パムガーンのぶどうと果物はこの村々ほどではないが，その気候は比類なくすばらしい。雪をおびる山はパムガーン山である。

色々な土地でも，**イスターリーフ**に匹敵するほどの村は知られていない。大河が村の内部を流れている。川の両岸は果樹園である。緑美わしい快適な小果樹園がある。水は冷い。氷水を必要としない。ほとんどの水は澄んでいる。この村にバーギ・カラーン Bāgh-i kalān〔「大庭園」〕という名の，ウルグ・ベグ・ミールザーが不法に強奪した庭園があった。私は持主に代価を支払って取得した。庭園の外部にはすずかけの巨木が並び，その下には，緑におおわれた，蔭の多い，心地よい家屋がある。庭園の中央を，1基の水車を動かすほどの水量の流れが，絶え間なく流れている。この水路の岸辺には，すずかけやその他の木々がある。以前には，この水路は曲りくねっていて，整然としていなかった。私はこの水路を真すぐに，整然とさせるように命じた。まことにすばらしい場所になった。

この村々よりも下，平地 (dasht) から1～1.5キョルフほど上の山麓の，山の基底部に泉がある。ホージャ・セヤーラーン Khwāja Se-yārān〔「3人の友らのホージャ」〕と呼ばれている。この泉の所とその周囲に3種類の樹木がある。泉の中央には数多くのすずかけの木があり，心地よい木蔭を作っている。
137a 泉の両側，山の基底部の丘には多くのかしの木がある。この (137a) 2カ所のかしの木の生育地以外には，カーブル西方の山地には，かしの木はたえて見られない。平地(ダシュト)の側に当るこの泉の前に，ユダの木 (arghawān)〔西洋はなずおう〕が密生した場所がある。この地方では，ここ以外にはユダの木の密生地は

まったく存在しない。人びとは，この3種の樹木は，3人の聖者たちの奇蹟であると云っている。彼らは旅人たちにも，それらの名の起こりをこのように説明している。

私はこの泉の周囲を石囲いにさせ，泉をモルタル（gaj wä sārūj）で10カル四方に固めさせた。泉の東西南北の四辺が直線によって構成された方形の台座となった。それはユダの木の密生地全体を見おろしていた。ユダの花が咲き乱れる季節には，世界中でもこれほどにすばらしい場所を知らぬ。黄色のユダの花も多い。黄色と赤色のユダの花が足元で咲き乱れる。

この泉の西南の谷から，いつも1基の水車を動かすだけの水の半分程度の水量の水が流れている。私は水路を掘らせて，この水をセヤーラーンの西南にある丘の上に導かせた。私は丘の上に大きな円型の石のベンチを置かせた。ベンチの周囲には，全てしゅろの木を植えた。まことにすばらしい休息場所となった。このベンチの上方，丘の傍らに，私はぶどう園を造営した。私は，この水路の紀年銘として〔925年を示す〕「よき流れ」(jūy-i khosh) を考え出した。

次は**ラフーガル**地区 (Lahūgar tümäni) である。その大きな村はチャルフ Charkh である。〔ナクシュバンディー教団の〕ムッラー・ヤークーブ猊下 Khaḍrat-i Mullā Ya'qūb はこのチャルフの出身である。ムッラーザーダ・ムッラー・ウスマーン Mullāzāda Mullā 'Uthmān も (137b) チャルフ出身である。サジャーワンド Sajāwand もラフーガルの村々の1つである。ホージャ・アフマド Khwāja Aḥmad とホージャ・ユーヌス Khwāja Yūnus はこのサジャーワンドの出身である。チャルフには果樹園が多い。しかしラフーガルの他の村々には果樹園が無い。住民はアウガーン・シャール Awghān Shāl である。カーブルではこの呼称が行なわれている。おそらくアウガーン・シーアール Awghān Shi'ār〔「アフガーンの風習を持つ」の意〕が正しく，それをアウガーン・シャールと云っているのである。

137b

次は**ガズニー**地方 (Ghaznī wilāyatı) である。ある人たちは地区 (tümän) とも云っている。〔ガズニー朝の〕セビュク・ティギン Sebük-tigin とスルターン・マフムード Sulṭān Maḥmūd 及びその子孫たちの首都はガズニーであったという。若干の人びとはガズニーン Ghaznīn とも書いている。〔グール朝の〕スルターン・シハーブッ・ディーン・グーリー Sulṭān Shihāb al-Dīn Ghūrī の首都もここであったという。このスルターン・シハーブッ・ディー

ンの事を，『タバカーティ・ナースィリー』*Ṭabaqāt-i Nāṣirī* と若干のインド (Hind) の史書では，ムーイッズッ・ディーン Mu'izz al-Dīn と書いている。

第3気候帯に属する。ザーブル Zābul とも呼ばれる。ザーブリスターン Zābulistān は，この地方を指す呼称である。若干の人びとは，カンダハールをもザーブリスターン内部に数える。ガズニーは，カーブルの西，14ユガチの道のりである。この道をとって明け方にガズニーを出発すると，2つの礼拝の間，つまり午後の礼拝時にはカーブルに着く。カーブルから13ユガチのアーディーナプールは，悪路のため，とても1日では行けぬ。

貧弱な地方である。その川は5～6基の水車を動かす程度の水量である。ガズニーの町 (shahrı) とさらに4～5村がこの水で灌漑されている。さらに3～4の村はカーレーズ (kārēz)〔地下式灌漑水路〕で潤されている。カーブルぶどうよりガズニーぶどうの方が質がよい。そのメロンも，カーブル・メロン
138a より豊富である。りんごもよい。(138a) ヒンドゥスターンに運ばれる。その農地はまことにやっかいな代物である。どの程度の土地であれ，いったん植えると，その土地の表土には，毎年，全面的に新しい土を持って来なければならない。ただし，カーブルの農地の収穫より，ここの農地からの収穫の方がより多い。あかねを植えている。全てヒンドゥスターンに運ばれる。ここの住民の特産品があかねである。この地の遊牧民 (ṣahrā-nishīn) はハザーラとアフガーンである。カーブルに比べるとガズニーは常に物価が安い。その住民はハナフィー派に属する，正しい信仰を持つイスラム教徒である。3カ月間の断食をする (se-māha-dār) 人びとも多い。妻や子供たちは〔外部の者からは〕完全に保護され隔離されている。

ムッラー・アブドゥッ・ラフマーン Mullā 'Abd al-Raḥmān はガズニーの貴人 (akābir) の出身であった。学識豊かな人物で，いつも学問を教えていた。まことに敬虔で禁欲的な，節制心に富んだ人物であった。彼は，〔バーブルの弟で，ガズニーの太守〕ナースィル・ミールザーが死んだ年〔1515年〕にこの世を去った。

スルターン・マフムードの墓がガズニーの居住区 (maḥallāt) 内にある。その地は，スルターンの墓がそこにあるためにラウザ Rawḍa〔「園」〕と呼ばれている。ガズニーの良質のぶどうはラウザ産である。その子孫のスルターン・マスウード Sulṭān Mas'ūd とスルターン・イブラーヒーム Sulṭān Ibrāhīm

の墓もガズニーにある。

神聖な墓所（mazārāt）がガズニーには多い。私がカーブルとガズニーを征服した年，私はコハト Kohat，バヌー，ダシュト，アフガーニスターンを討ち，多くの人びとを殺し，ドゥキー Dukī を過ぎてアービ・イースターダ Āb-i Īstāda の湖岸を通ってガズニーに到着した〔145a-153b 参照〕。その時人びとが，ガズニーの村々に1つの墓所（mazār）があり，そこでは祈りを口にすると墓が動くと云っていた。私は行って見てみた。墓が動いたように
138b （138b）思われた。しかしやがて，それが寺男たち（mujāwirlär）のしくんだイカサマであるらしい事が判明した。寺男たちは，墓の上に1つの鉄環を設置し，いつも彼らがそれにふれると，鉄環が動き，それに伴って墓が動いたように感ぜられたのである。それは，船に乗っていない人が，船に乗ると，瞬間，岸が動いているように思われるのと同様である。私は寺男たちに鉄環から離れて立つように命じた。彼らがどれほど祈りを口にしても，墓はびくともしなかった。私は鉄環を破壊し，墓の上にドームを作るように命じた。そして寺男たちがこの動きをひき起こす事を厳重に禁止した。

ガズニーはまことに貧弱な土地である。私はいつも，ヒンドゥスターンとホラーサーンをその支配下に収めた君主たちが，ホラーサーナートがあるというのに，どうして，このように貧弱な土地を首都に選んだのかと，不思議に思っていた。スルターン〔マフムード〕の時代には3～4カ所のダム（band）があったらしい。1つのダムはこのガズニー川にあり，ガズニーの北，3ユガチ上流の所に，スルターンは1つの大きなダムを設置した。このダムの高さは40～50カルで，長さはおそらく300カルもあったであろう。水をそこに貯えて，必要に応じて放水していたらしい。アラーゥッ・ディーン・ジャハーンスーズ・グーリー 'Alā' al-Din Jahān-sūz Ghūrī〔jahān-sūz，「世界の放火者」の意〕がこの地方を征服した時〔1150/1151年〕，彼はこのダムを破壊し，スルターンの子孫たちの多くの墓廟を焼き，ガズニー市街を破壊し放火し，その住民を略
139a 奪し殺害した。いかなるものも殺戮・破壊を（139a）まぬがれる事はできなかった。それ以来，このダムは破壊されたままであった。

私がヒンドゥスターンを征服した年〔1526年〕，このダムを修復するためにホージャ・カラーンを通じて補助金を送った。私は，天の御加護により，このダムが復興される事を願っている。もう1つはサハン Sakhan ダムである。

ガズニーの東にあり，これもガズニーから２～３ユガチほどの所にある。これも，しばらく壊れたままになっている。しかし復旧の可能性も無い。もう１つはサリ・デフ Sar-i deh ダムで，このダムは今も利用されている。

諸書に，ガズニーには１つの泉があり，この泉にごみあくたの類を投ずるとただちに雪嵐や嵐，大雨・大風が起こると記されている。また１つの史書に，インド王（rāy-i Hind）がセビュク・ティギンをガズニーに包囲した時，セビュク・ティギンが，この泉にごみあくたを投ぜよと命じたところ，雪嵐や嵐，大雨・大風が起こり，セビュク・ティギンはこの策略によってその敵を撃退したと見えている。私がガズニーでどれほどよく調べさせても，この泉については誰もそれと指し示さなかった。

これらの諸地方では，ガズニーとホーラズムが寒さで名高い。あたかも両イラーク ʻIrāqayn とアーザルバイジャーン Ādharbayjān で，スルターニーヤ Sulṭānīya とタブリーズ Tabrīz が寒さで有名である如くである。

次は**ズルマト**地区（Zurmat tümäni）である。カーブルの南，ガズニーの東南にある。カーブルからは12～13ユガチ，ガズニーからは７～８ユガチの道のりである。８つの村がある。ダルガの駐留地はギャルディーズ Gardīz である。
139b ギャルディーズ城の城内の家屋は，ほとんどが３～４階建てで（139b）ある。ギャルディーズは強さに事欠かぬ。ナースィル・ミールザーに敵対し，ミールザーを大いに苦しめた。

ズルマトの住民はアウガーン・シャールである。彼らは穀物をまき，農業を行なっている。しかし木々や大小の果樹園は無い。この地区の南に山があり，バルキスターン山（Barkistān taghı）と呼ばれている。この山の麓の高みに泉がある。シャイフ・ムハンマド・ムサルマーン Shaykh Muḥammad Musalmān の墓がここにある。

次は**ファルムル**地区である。貧弱な土地である。リンゴは悪くない。ムルターンとヒンドゥスターンに運ばれる。ヒンドゥスターンで，アフガーン時代に愛顧されたシャイフ・ムハンマド・ムサルマーンの子孫に当るシャイフザーダ shaykhzāda たちは，ファルムルの出身である。

次は**バンガシュ**地区である。その周囲の住民は，全てフーギーアーニー Khūgīānī，ヒリルジー，トゥーリー Tūrī，ランダル Landar といった山賊アフガーンである。辺鄙な所にある。このため彼らは税（māl）を進んで払おう

としなかった。私にも，カンダハール，バルフ，バダフシャーン，ヒンドゥスターンの征服といった大仕事がもち上がっていた。このため，バンガシュの制圧の機会を見つけられなかった。しかし，神が正義をもたらされ，しかるべき機会が到来すれば，私はただちにバンガシュの山賊たちの制圧にのり出す決意である。

カーブルの諸区域（bölükāt）の1つが**アラ・サーイ** Ala-Sāy 区域である。ニジュラーウから2～3シャルイーの距離である。東方へと，ニジュラーウの側から〔道が〕まったく平坦に来ている。道がクーラ Kūra という所に達すると，アラ・サーイの方へやや小さな峠をくだる。この方面では，温暖地と寒冷地の境界がクーラ峠である。この峠の所を，早春に，鳥たちが越える。ニジュラーウの属地の1つであるピチュガーン Pichghān の人びとは，この峠で
140a 多くの（140a）鳥を捕える。彼らは，峠の出口の所であらゆる場所に石で隠れ場所を造っている。鳥を捕える人びとはこの隠れ場所に坐り，網の1端を5～6カル離れた所に固定し，網の下側を大地に石でおさえておく。網の上側の真中あたりに3～4カルの長さの木を結ぶ。木の1端を隠れ場所にひそむ人びとが手にしている。彼らは設置した隠れ場所の座に坐って眼をこらす。鳥たちが近づくと，網を持ち上げる。鳥たちは自ら網に入る。このようにして沢山の鳥を捕えているが，その数が多くて鳥ののどを切れぬほどである。＜p. 173 この地方ではアラ・サーイざくろが有名である。最高級のざくろではないが＞，この地方ではそれ以上のざくろは無い。ここのざくろは，全てヒンドゥスターンに運ばれる。ぶどうも悪くない。ニジュラーウ・ワインよりもアラ・サーイ・ワインの方が強く，色もよい。

次は**バドラーウ** Badrāw 区域である。アラ・サーイの隣りにある。ここでは果物はとれない。農民はカーフィルで，穀物を収穫している。

〔**遊牧民**〕　ホラーサーンとサマルカンドではトルコ族とアイマク族が遊牧民（ṣaḥrā-nishīn）であるように，この地方の遊牧民はハザーラ族とアフガーン族である。ハザーラ諸族の内で最も数の多い（kullī-raq）のはスルターン・マスウーディー・ハザーラ族である。アフガーン諸族の内で最も多数なのはマフマンド・ハザーラ Mahmand Hazāra 族である。

〔**税収入**〕　カーブルの税収入は，定住民（wilāyat）からの税，商税（tamgha），遊牧民からの税を合わせて，80万シャールヒー（sekiz lak shāhrukhī）

を徴収していた。

140b 〔**山々**〕 (140b) カーブル地方の東側にある山々は2種類である。西側の山々も2種類である。アンダラーブ，ハースト Khwāst，バダフシャーナートの山々は，全て松 (archa) が生え，多数の泉がわき，おだやかな丘を持った山々である。草は，山や丘や平地にまるで土のように〔一面に〕生え，その質もよい。ほとんどはビュテケ草 (bütäkä otı) である。この草は馬にまことによく適する。アンディジャーン地方でこの草をビュトケ草 (bütkä) と呼んでいた。どうしてそう呼ぶのかが分らなかった。しかしこの地方で分った。この草が次々と育って出てくる (bütä bütä chıqar) のでビュテケと云ったのであろう。

ヒサール，フッタラーン，サマルカンド，フェルガーナ，モグーリスターンの夏営地 (yaylaqlar) は全てここと同じような夏営地である。もっともその内でフェルガーナとモグーリスターンの夏営地は，ここの夏営地とは比較にならぬほどすばらしい。しかしいずれにしても似たような山々と夏営地である。

さらにニジュラーウ，ラムガーナート，バジャウル，サワードの山々には，多くの松 (nāzhū)，もみ，かし，オリーヴ，乳香樹が生育している。草は，前述の山々とは異なり，沢山また高く生えるが，無益の草で，馬や羊にも適さない。山々は前述の山々ほど高くはなく，見た眼には低く見えるが，実際は驚くほど厳しい山々である。非常に平らな丘に見えるが，全丘，全山が固い岩のある丘であり山である。どこも馬では進めない。この山々には，ヒンドゥスタ
141a ーン産の鳥や獣が (141a) 多い。おうむ，シャーラク (shārak)〔人語をまねる鳥〕，くじゃく，ルージャ (lūja)，猿，青牛 (nīla-gāw)，インド鹿 (kūtah-pāy) などである。と云うより，ヒンドゥスターンでは聞いた事も無いような，上記以外の種々の鳥獣がいる。

〔カーブルの〕西側の山々は，ダッライ・ズィンダーン Darra-yi Zindān，ダッライ・スーフ Darra-yi Ṣūf，グルズィワーン Gurziwān，ガルジスターン Garjistān の山々で，似たような山々である。草地は，ほとんどが平地 (julkā) にある。前述の山々のように，頂上から山麓まで，山や丘に草が生えている事は無い。またあれほど多くの木や松も無い。しかしその草は馬や羊に適している。これらの山々の頂上は，全て馬がギャロップで走れるほど平らである。農地も全てそこにある。この山々には鹿 (keyik) が多い。その谷 (tak-āb) は近寄り難い谷である。ほとんどの所は懸崖である。どこからも下りられない。

一般の山々の険所は高い所にあるのに，この山々の険所は低い所にある。不思議な事である。

グールやギゼーウやハザーラの山々も同様である。草地は平地にある。山々には木も少い。松の木も無い。その草は羊馬に適する。鹿が多い。前述の山々の険所は谷間の低地にあったが，この山々ではそうではない。

またホージャ・イスマーイール Khwāja Isma'īl，ダシュト，ドゥーキー，アフガーニスターンの山々も同じような山々である。非常に低く，草が少く，
141b 水も乏しく，木も無く，形の悪い，感心しない (141b) 山々である。もっとも，この山々は，その住民たちにはぴったりである。ちょうど，「対等とならない間は，互角でない (teng bolmaghuncha tush bolmas)」〔「似たもの同志」〕と云われている如くである。世界中で，これほど感心せぬ形の山々は稀であろう。

〔**薪**〕 カーブルには，冬，雪が沢山降るが，よい薪があり，しかも手近にある。1日で，行って取って来る事ができる。薪にするのは，乳香樹 (ハンジャク)，かし (バルート)，小アーモンド (バーダームチャ)，カルカンドである。これらの内で最もよいのは乳香樹である。輝かしく燃え，その薪はよい香りがする。燃えさしも沢山残る。湿っていても燃える。かしもよい薪である。暗く燃えるが，熱く燃える。燃えさしも沢山残る。かしの木には，さらにもう1つの特徴がある。その青葉のついた枝に火をつけると，不思議な音をたてて燃える。末端から先端まで，音をたてて一ぺんに燃える。この木を燃やす事はまことによい楽しみである〔245b 参照〕。小アーモンドは最も多く，最もよく使われている。<p. 175 燃えさしは残らない>。カルカンドは非常に丈が低く，とげがある。湿ったものも乾いたものも同様に燃える。これらは全て，ガズニーの人々の薪でもある。

〔**動物**〕 カーブル地方は山々の間にある。まるで境界地を高くもり上げたクローバー畑 (yorunchqa palları) のように，山々が横たわっている。その山々の間は<p. 175 平らで，平地になっている。ほとんどの村々や>居住地はこの山と山の間の平地 (aralıq) にある。鹿や猟獣はやや少い。秋と春の季節，アルカルガルチャ (arqarghalcha) と思われる赤鹿 (qızıl keyik) が，冬のすみかと夏のすみかに移る時に用いる一定の通路がある。猟鳥や猟犬を連れた若
142a 者たちが行って，通路を (142a) 看視し，鹿を捕らえさせている。フルド・カーブル Khurd Kābul とスルハーブ Surkh-āb 方面には野生ろば (qulan) も

いる。白鹿 (aq keyik) はまったくいない。ガズニーには，白鹿，野生ろばがいる。ガズニーの白鹿ほど肥えた白鹿は，他処ではほとんど見られない。

春夏，カーブルには射猟地が多い。ほとんどの鳥の通路は，バーラーン河ぞいにある。その理由は，バーラーン河の東は山であり，西側もまた山である。ここ，つまりバーラーン河畔の正面には，ただ1つ大ヒンドゥー・クシュ峠があるのみで，他には峠が無い。このため，全ての鳥がこの峠を越える。ただし，風があったり，ヒンドゥー・クシュ峠の上に少し雲があったりすると，鳥たちは峠を越えられない。そこで皆，バーラーン平地におりる。この時に，その附近の人びとは多数の鳥を捕獲する。

冬の末期，バーラーン河畔には鴨 (ördäk) が多数飛来する。非常によく肥えている。その後，つる (turna) とかぎんしらさぎ (qarqarā) といった大きな鳥たちが多数，無限に飛来する。バーラーン河畔では，つるにロープ (ṭanāb) を投げ，ロープで多数を捕えている。青さぎ (? uqar)，ぎんしらさぎ，水鶏 (qotan) もロープで多数捕えている。この種の巧みな捕獲法は他に例が無い。捕獲のやり方は次の如くである。ガズ矢の1射程ほどの長さの細いロープを巻く。このロープの一方の端にガズ矢を固定する。もう一方の端に角製の輪 (bildürgä) をつけ，それを固定する。さらに1本の手首の太さほどの木を用
142b いる。(142b) 木の長さは1カルシュ (bir qarısh)〔カルシュは「親指と小指を張った長さ」〕ほどである。ガズ矢をつけた側から，このロープをこの木に巻きおわるまで巻きつける。巻きおわると，角の輪を動かぬように固定する。その後，手首ほどの太さの木をロープの中心から抜き取る。ロープの巻いたものが木の部分がぽっかりと穴をあけた形でできあがる。輪を手に持って，飛来する鳥の前方に向け，ガズ矢を投ずる。それが鳥の羽や首にあたって巻きつくと鳥は落下する。全てのバーラーンの人びとは，このようにして多数の鳥を捕える。

しかしこの鳥の捕獲法はきわめて難しい。〔時期は〕雨の降る暗い夜でなければならぬ。鳥たちは，このような夜には，猛獣や野獣を避けて夜が明けるまで休まず，低空を飛び続ける。闇夜の鳥たちの通路は流れぞいである。流水が闇の中に白く光って見える。鳥たちは，恐怖心から，夜が明けるまで流れの上流・下流へと往来する。人びとは，この時，ロープを投げる。私も一度，夜にロープを投じた。ロープが延びてしまい，落とした鳥もどこに落ちたのかわか

らなかった。翌朝までに，鳥を，延びたロープと一緒に見付けて持って来てくれた。この方法で，バーラーンの人びとは沢山の青さぎを捕えている。青さぎの羽毛で羽根飾りが作られる。カーブルからイラークやホラーサーンに輸出されている商品の1つが羽根飾りである。

さらに一団の鳥猟奴隷（ṣayyād qullar）がいる。200～300家である。ティムール・ベグの子孫たちの1人が，この奴隷たちを〔インドの〕ムルターン
143a Multān 附近から（143a）連れて来たものである。彼らの公務は鳥を捕える事である。彼らは池を作り，多数のおとりの鳥を配置し，池の中央に網を張ってあらゆる種類の鳥を捕える。単に鳥猟者たちが鳥を捕えるだけでなく，バーラーン川沿いに居住する人びとは，ロープを投げ，わなを仕掛けるなど，あらゆる技術を用いて，多数の，全種類の鳥を捕獲している。

〔**漁獲**〕　この同じ季節，バーラーン川を魚が移動する。人びとは，網を用いたり，1種のふるい（chaj）を〔水中に〕設置したりして沢山の魚を取る。また「野生ろばの尾」（qulan qoyrughı）という名の草が芽を出し成熟し，花をつけ実を結ぶ秋の季節には，この「野生ろばの尾」を10～20かつぎ分（pushtwāra），さらにまた青シャイバク（kök shaybaq）を20～30かつぎ分，水際に運んで来て，軟らかくなるようにつぶして河水の中に入れる。人びとは，それを入れると同時に水に入って，気を失なった魚を取り始める。またより下流の適当な場所には，1種のふるいを水中に設置する。その方法は次のようである。柳のしなやかな小枝のうち，指ほどの太さの小枝を，むしろのように編む。この柳のむしろを，水が流れ出る場所に空のままで置き，その周囲に石を積む。水が，このむしろに勢いよく流れ落ち，流れ落ちると同時に流れ去る仕組である。水は下に流れ去るが，魚はむしろの上に残る。自失した魚を，上流の方から人が取りながらやって来る。彼らはこのふるいで沢山の魚を取っている。グル・バハール川（Gul-bahār suyı），パルワーン川，イスターリーフ川でもこの方法で魚を取っている。

143b　また冬には，ラムガーナートで珍しい方法で（143b）魚を取っている。水が流れ出る所に，家の広さほどの土地をやや堀り下げ，いろりの敷石のような石をこの穴に置き，その上に石を積む。この場所に，水中で，1つの入口を設置する。この1つの入口以外の場所では，魚が出入りできないような形に石を積む。この積まれた石の上を水が流れる。この場所は養魚所（māhī-khāna）の

役割を果たす。人びとは，冬期，いつであれ魚が必要になると，この穴の1つを開き，30～40尾の魚を1度に持って来る。彼らは次のようなやり方で穴を開くのである。その穴は，決められた印(しるし)のついている場所に作る。その穴の，唯一の入口の所を除き，穴の周囲に米つぼを置き，その上に石を置く。むしろのような物を織って，その両端を1カ所で合わせ，入口に結びつける。さらにこれの内部に，またもう1枚を，むしろのように織って入れて〔内部を〕強化する。その口は，先のむしろ〔の口〕と同じ所に来るようにする。

後から入れたむしろのようなものの長さは，先のむしろの半分ほどの長さにする。その奥の方の口を狭くする。この内側のむしろの奥の方の口を通って入った物は，大きなむしろの内部に入る。大きなむしろの下流の側の口は，魚が出られないように作ってある。内側のむしろの下流の側の奥の口は，上流の側
144a の口から魚が入り，奥（144a）の口を1尾ずつ通り過ぎるように作ってある。この奥の口の所の木々の先端が1つにせばまるようにしてある。魚はこの口を通って，大きなむしろの内部に入っても，出口が固められているため出られない。魚がひき返しても，この小さなむしろの奥の口にある針状のくし（shish）のために通過できない。そのため魚はこのむしろの中を，最初に設置した入口の方へ来る。しかしそこは固められている。人びとは養魚所の上部を開く。その周囲は米つぼで守られている。何であれそこに入った魚は，この穴の所で捕えられる。たとえ逃げても，入口はただ1つしかなく，全て前述のむしろの中に落ちる。そこで捕えられる。このような魚獲法は，他の土地では見た事が無い。

カーブル征服の数日後，ムキームがカンダハール方面への出発の許可を求めた。彼は，誓約と約定にもとづいて出城していたものであったため，私は彼がその一族郎党，諸装備諸物品ともども，安全無事に，その父兄の許へと去る事を許した。

ムキームに退去の許可を与えた後，私はカーブル地方を王子たち（mīrzālar）や客人のベグたち（mihmān beglär）に分与した。ガズニーをその属地・属領（tawābi‘ wä lawāḥiqi）と共にジャハーンギール・ミールザーに与えた。ニングナハール地区とマンドラーワル，ダッライ・ヌール，クナル，ヌール・ガル，チャガン・サラーイをナースィル・ミールザーに与えた。

私自身と放浪の時代を共に過ごして来たベグたちや若党たちには，その内
144b の幾人かに (144b) 村とトゥユールの如きもの (tuyūl-dek) を与えた。地方 (wilāyat) そのものは，まったく与えなかった。単にこの時ばかりでなく，いつであれ至高の神が幸運をお恵み下さった時には，私は客人ないし異国の (mihmān wä gharīb) ベグたちや若党たちを，古参の臣下たちやアンディジャーン人たちよりも，より重くよりよく処遇した。それにもかかわらず，人びとはいつも私が古参の者やアンディジャーン人以外には眼をかけぬと云って陰口をたたいていた。まことに困ったことであった。諺がある:「敵が云わぬ事は何も無い。夢に見ぬ事は何も無い」(dushman ne demäs, tüshkä ne kirmäs)，「城門は閉ざす事ができる。しかし敵対者の口を閉ざす事はできぬ」(darwāza-yi shahr-rā tawān bast, natawān dahan-i mukhālifān bast)。

サマルカンド，ヒサール，クンドゥズから多数の部民・部族 (il wä ulus) がカーブル地方に来ていたため，次のように方針が決定された:「カーブルは貧弱な土地である。武力で治めるべき土地であり，文治に適した土地ではない (sayfī dur, qalamī emäs)。全ての人びとに，現金 (yarmaq) を徴収して支給する事は不可能である。これらの部民・部族の家族には，それぞれ穀物を支給し，部民・部族らは遠征ないし攻略に出発する事とする」と。このように決定され，カーブルとガズニー地方およびその属地に対し3万ハルワール (khar-wār)〔ハルワールは 83.3～166.67 kg〕の穀物が課された。カーブルの収入と収穫 (dar-āmad wä ḥāṣil) がどの程度であるかを知らぬまま，これほどの多額を課したため，地方はすこぶる荒廃した。

まさにこの頃，私はバーブル文字 (Bāburī khaṭṭ) を発明した。

私はスルターン・マスウーディー・ハザーラ族に多数の羊馬を課し，徴収人 (taḥṣīl-dār) たちを派遣した。数日後，徴収人たちから，ハザーラらが税 (māl)
145a を支払わず (145a)，反乱の姿勢をとっているという情報がとどいた。これ以前にも，彼らは何度かギャルディーズ道とガズニー道を襲撃していた。これらの理由から，私はスルターン・マスウーディー・ハザーラを急襲するため出馬した。マイダーン道 (Maydān yolı) をとって進み，ニルフ Nirkh 峠を夜に越え，夜明けの礼拝の時刻にチャトゥー Chatū 附近でハザーラらを急襲した。しかし思っていたほどの成果は上がらなかった。その後，私はスーラーフ Sūrākh 道をとって引返し，ジャハーンギール・ミールザーにガズニーへの出

発の許可を与えた。

私がカーブルに帰着した時，ダルヤー・ハーン Daryā Khān〔225a 参照〕の子のヤール・フサイン Yār Ḥusayn がビフラ Bihra〔現在の Bhera〕方面から臣従のために到着した。

数日後，私は軍を召集し，土地の事情 (yer su) をよく知っている者たちを呼びよせ，周辺諸地域について検討した。ある者はダシュトへの進軍がよいと云い，ある者はバンガシュを適当だと云い，またある者はヒンドゥースターンをよしと見なした。相談の結果，ヒンドゥースターン遠征が決定された。

〔第1次ヒンドゥースターン遠征〕

シャーバーン月〔1505年1/2月〕，太陽が宝瓶宮にあった時，私はカーブルからヒンドゥースターンめざして出馬した。バーダーム・チェシュメとジャグダリク Jagdalik を経て，途中6宿して，アーディーナプールに到着した。私はそれまでに温暖地帯の諸地方やヒンドゥースターン一帯を見た事が無かった。ニングナハールに到達すると，ただちに眼前に別世界が広がった。草も木も獣
145b も魚も異なっていた。人びとの (145b) 習慣・風習も異なっていた。私たちは驚嘆した。まことに驚異の世界であった。

ナースィル・ミールザーは，先にその領地へ行っていたが，アーディーナプールで，私のもとに伺候した。その方面から到着した諸部族や諸軍団は，冬営地の選定のために全てが移動して，ラムガーナートに来ていた。それらの兵士らと，後に残った兵士らを1～2日間その附近にとどめた。ついで彼らは私たちに合流した。私たちは進んでジューイ・シャーヒー Jū-yi Shāhī を過ぎて，より下(しも)のクシュ・ゴンバド Qush Gonbad に下馬した。ナースィル・ミールザーは，「部下たちのために領地から物を取って来させ，2～3日ほど後にまいります」と云って，クシュ・ゴンバドで〔私からの〕別れの許しを得ると，後に残った。

私たちがクシュ・ゴンバドを発ってギャルム・チェシュメ Garm-cheshmä〔「温泉」〕に下馬した時，ガーギーヤーニー Gāgīyānī の有力者 (uluq) の1人で，おそらく隊商と一緒であったと思われるパヒー Pakhī が連れて来られた。道案内人が必要であったので，パヒーを同行させた。私は1～2宿を費しハイバル Khaybar 峠を越えてジャーム Jām に下馬した。

クーラ・カトリー Kūra-katrī については話を聞いた事があった。ヨーガ行者 (yogī) やヒンドゥーたちの聖地がこれであったと云われていた。彼らは遠方の地からやって来て，クーラ・カトリーで髪やひげをそると云われていた〔232b 参照〕。私はジャームに下馬すると，ただちにベグラーム Begrām を見物するために出発した。私は巨木を見物し，ベグラーム近辺を見てまわった。案内人はマリク・ブー・サーイード・カマリー Malik Bū Sa'īd Kamarī であった。私たちは何度もクーラ・カトリーについてたずねた。しかし彼は答えな
146a かった。もどって，宿営地<p. 180 近く>に (146a) 着くと，彼はホージャ・ムハンマド・アミーン Khwāja Muḥammad Amīn に「クーラ・カトリーはベグラームの近くにあった。せまい洞窟で危険な場所なので云わなかった」と述べた。ホージャはすぐにしかりつけ，彼が述べた事を伝えた。しかしもう夜になっており，道のりも遠かった。そのため私たちは行く事ができなかった。

この宿営地で，私はスィンド川 Sind suyı〔インダス川〕を渡るか否か，またどの方面に進むかを相談した。バーキー・チャガーニーヤーニーは，「川を渡らず，ここから途中1宿すればコハト Kohat という所へ行けるようです。そこの住民は多くの財貨と富を所有する人びとのようです」と述べた。彼は，自分の言葉に一致するような事を私に云わせるために，数人のカーブル人を連れて来た。私はこれらの土地については，これまでまったく聞いた事が無かった。しかし大きな権限を持つ〔バーキーのような〕人物がコハト方面へ進む事を良策と考え，自分の主張の正しさを証明するために証人までも連れて来たのであってみれば，川を渡りヒンドゥースターンをめざす考えを放棄せざるを得なかった。私はジャームを発って，バーラ Bāra 川を渡り，ムハンマド・ピフ Muḥammad Pikh 峠の近くに到着して下馬した。

その当時，ガーギーヤーニー・アフガーン族 (Gāgīyānī Afghānī) はプルシャーワルにいた。彼らは私たちの軍勢を怖れて，この山の麓に退いていた。ガーギーヤーニーの有力者 (uluq) の1人であるホスロー・ガーギーヤーニー Khusraw Gāgīyānī がこの宿営地に来て私の前に伺候した。彼をも，道案内
146b 人として (146b) 適当であったので，パヒーと一緒に私たちに同行させた。

私は夜半この宿営地を発ち，日の出にムハンマド・ピフを過ぎ，朝食時にコハトを急襲した。多数の牛・水牛が手に入った。アフガーン族も多くの者が私たちの捕虜となった。しかし私は捕虜を全員〔捕獲者から〕引き離して釈放し

た。家々には穀物が無制限にあった。急襲隊がスィンド河畔にまで急行し，途中で1宿して帰り，私たちに合流した。バーキー・チャガーニーヤーニーが云っていたような物は兵士らの手に入らなかった。バーキー・ベグはこれを主張した事についていささか恥入った。

コハトに2宿し，急襲隊を集めると，どの方面に進むのが良策であるかを協議した。結局，バンガシュ，バヌー方面にいるアフガーン族を討ち，ナガル道かファルムル道をとって帰還する事に決定された。

ダルヤー・ハーンの子で，カーブルに来て私に仕えていたヤール・フサインが「ディラザーク Dilazāk，ユースフ・ザイ Yūsufzay，ガーギーヤーニーの諸族に対し勅令（farmānlar）をお出し下されば，もし彼らが私の云う事に背かなければ，私はスィンド川の向う側で王様のために刀をおふるい致しましょうに」と懇請した。私は懇請通りに勅令を与え，コハトを去る許可を与えた。

私たちはコハトを発ち，上（かみ）のバンガシュに向けハングー Hangū 道をとって
147a 進んだ。コハトと（147a）ハングーの間には1つの谷がある。両側は山で，道はこの谷を通っている。私たちが移動してこの谷に入ったところ，コハトとその周辺地帯のアフガーン族が全員集合して，谷の両側の山の上に出て，ときの声をあげ妨害を為しはじめた。マリク・ブー・サーイード・カマリーはアフガーニスターン全域をよく知っていた。この遠征では彼が道案内役をつとめていた。彼は「もっと先の道の右側に孤立した山があります。もしこのアフガーン人たちがこの山からあの山へ移れば，別の山ですから，まきこんで捕える事ができます」と述べた。神が正義をもたらされた。このアフガーン人たちは分散して進み，かの孤立した山に向ってきた。私は，1隊の若党たちを派遣し，ただちに2つの山の間にある隘路を占領させた。他の兵士たちには，〔川の〕向う側とこちら側を両側に相対する形で＜p. 182 進み，このアフガーンらを懲らしめるよう命じた。相対する形で＞進むと，敵は戦う事すらもできなかった。味方は，一時（いっとき）の間に，100～150人のアフガーン人を攻撃して捕え，若干を生擒にし，ほとんどの者の首を取って帰って来た。

アフガーン人たちは，戦う事がもはや不可能となると，敵の前に草を嚙みながらやって来ると云われていた。つまり「私はあなたの牛です」という意味だ
147b という。私たちはこの風習をそこで（147b）見た。戦闘不可能となったアフガーン人たちが草を嚙みながらやって来た。私は，生けどりにされて連行されて

来た者の首を打たせ，野営地に首の塔（kalla minära）を建てた。

翌日，そこを発ってハングーに下馬した。この地の周辺のアフガーン人たちは1つの孤立した山を要塞化（サンガル）した（sangar qıldılar）。「サンガル」という言葉を，私はカーブルに来た時に聞いていた。この人びとは，山を固める事（taghnı berkätkän）を「サンガル」と云っているらしかった。＜p. 182 味方の兵士たちは，到達すると同時にアフガーン人たちのサンガル＞を破壊し，抵抗した100～200人のアフガーン人らの首を切って持って来た。ここでも，私は首の塔を建てた。

ハングーを発って，途中1泊して，上のバンガシュへの入口にあるティールTīl という土地に下馬した。ここでも兵士らは，その周辺諸地域のアフガーンたちを攻撃に出かけた。1つのサンガルから，〔我々の〕若干の急襲隊はむしろ獲物少く（yengilräk）帰還した。

ここを発ち，道無き道を進み，途中で1宿して，翌日まことに急な下り坂を下り，長く遠い隘路を過ぎてバヌーに下馬した。兵士やらくだや馬がこの下り坂と隘路ですこぶる難渋した。獲得していた戦利品の牛は，ほとんどそこに残さねばならなかった。公道は，私たちの右手1～2キョルフ〔körüh，4000歩の距離〕の所にあったようである。この道は騎馬の者が通る道ではなかったらしい。この道は，羊飼や牧夫が，時に家畜たちをこの道と隘路を通って（148a）下らせるために，「羊道」（gūsfand liyār）と呼ばれていたらしい。道の事をアフガーン語でリヤールと云う。先導役はマリク・ブー・サーイード・カマリーであった。ほとんどの兵士たちは，道が左の方にとられてしまったのは，マリク・ブー・サーイードのせいだと考えた。

148a

バンガシュおよびナガルの山々を過ぎるとすぐそこにバヌーの真平らな平地が横たわっている。北はバンガシュとナガルの山々である。バンガシュ川Bangash rūdı がバヌーに向け流れ出ている。バヌーはこの川で灌漑されている。南はチュパーラ Chūpāra とスィンド川である。東はディーンコト Dīnkot，西は，バーザール Bāzār とかターク Tāk とも呼ばれるダシュト Dasht である。アフガーン諸部族（Afghān qabā'ili）のうち，クーラーニー Kūrānī，キーヴィー Kīwī，スール Sūr，イーサー・ハイル 'Īsā-khayl，ニヤーズィー Niyāzī がこの地方を耕している。

バヌーに下馬すると，平地の諸部族が北の山々にたてこもって（sangarlap）

いるという情報が届いた。私は兵をジャハーンギールに率いさせて派遣した。キーヴィー族のサンガルであったと思われる。ジャハーンギールらは進んで，一時（いつとき）のうちに攻略し，皆殺しにし，多くの首を切って持って来た。多量の白い布（aq rakht）が兵士らの手に入った。私はバヌーでも首の塔を建てた。このサンガルを攻略した後，キーヴィー族の有力者（uluq）の1人であるシャーディー・ハーン Shādī Khān という者が臣従するために草を嚙みつつ来た。私たちは捕虜たちの命はゆるした。

先にコハトを攻略した際，バンガシュおよびバヌー方面のアフガーン人を急襲した後，ナガル道ないしファルムル道をとって〔カーブルに〕帰還する事が
148b 決定されていた。（148b）しかしバヌー攻略後，その土地（yer su）をよく知っている人びとが「ダシュトは近い。その住民もためこんでいる。道もよい」と述べたため，ファルムルに出る計画を，ダシュトを討った後にファルムル道を通って帰還する事に変更した。翌日，私はそこを発って，この同じ川〔バンガシュ川〕の岸辺のイーサー・ハイル族の村に下馬した。イーサー・ハイル族は，情報を得るとチューパーラの山々に退いてそこに留まった。私はイーサー・ハイルの村を発ち，チューパーラの山々の麓に下馬した。攻撃隊が山々に入り，イーサー・ハイルの1つのサンガルを破壊し，羊，家畜，布地（rakht）を取って帰った。この日の夜，イーサー・ハイル・アフガーン人らが夜襲をかけて来た。しかし私はその遠征では，警備をきわめて厳重にしていた。そのため彼らは何事も為し得なかった。

私は次に述べるほど，警戒を厳にしていた。すなわち，右翼・左翼・中軍・後衛は，いずれも戦陣そのままの位置に野営した。またいずれも，それぞれの野営場所で武装していた。歩兵は，宿営地の周囲に，テント群から矢の1射程距離ほど離れて配置についた。夜も，彼らはまさにこれと同じ位置にいた。毎夜，このように全ての兵士が配置されていた。近習たちの内の3～4人が，毎夜，たいまつを手に順番で見廻っていた。私も，毎夜，1度ずつ見廻ってい
149a た。私たちは，配置についていなかった者の（149a）鼻をそぎ，軍中を引き廻させた。

右翼は，ジャハーンギール・ミールザー，バーキー・チャガーニーヤーン，シーリーム・タガーイー，サイイド・フサイン・アクバルそれに若干のベグたちであった。左翼はミールザー・ハーン，アブドゥッ・ラッザーク・ミールザ

ー，カースィム・ベグと若干のベグたちであった。中軍には大ベグ（uluq beg）の階級の者は1人もおらず，全員が近習ベグ（ichki beg）たちであった。後衛にはサイイド・カースィム・イシク・アーガー，バーバー・オグル Bābā Oghlı，アッラー・クリー・ビーラン Allāh Qulī Bīran とそれに若干のベグたちがいた。全軍は6分団に分かたれ，各分団には，1昼夜ずつの後方警備（chaghdawul）が順次わり当てられた。

その山裾を発ち，西に向って進み，ダシュトとバヌーの間にある1つの水の無い，山の側面の岡（qol）に下馬した。兵士らは乾いた河床（say）を掘って，自分たちと動物たちのために水を得た。この河床から1～1.5カル〔qarı は「腕の長さ」〕掘り下げると水がわき出た。単にここの河床からこのように水がわき出るだけでなく，ヒンドゥースターンの全ての水の無い川（rūd）がこのような特徴をもっている。1カルないし1.5カル掘れば，必ず水が出る。大河（daryā）の他には流水の無いヒンドゥースターンで，その水の無い川が，実際にはこれほど水に近いというのは，まことに驚くべき神のお力である。

この乾いた河床を黎明に出発し，午後の礼拝時，ダシュトの村々に，軽装の騎兵らが到達した。襲撃隊がいくつかの村々を襲撃して，家畜，布（rakht），売買用の馬（sawdā at）を持って来た。この夜の明け方まで，また翌日の正午
149b まで，おくれていた駄獣やらくだ，軽歩兵（yayaq yalang）が（149b）続々と到着しつづけた。私がここに留まったこの日，襲撃隊がおもむいて，ダシュトの村々から多くの牛・羊を持って来た。彼らは，途上でアフガーン人の商人たちに会い，多くの白布，芳香根，砂糖菓子，精糖，俊馬，売買用の馬を取って来た。アフガーン人らの間で有名かつ有力な商人の1人であったホージャ・ヒズル・ヌーハーニー Khwāja Khiḍr Nūḥānī を，モグールのヒンディー Hindī が落馬させ，その首を切って持って来た。シーリーム・タガーイーは襲撃隊の後を進んでいた。1人の徒歩のアフガーン人がシーリーム・タガーイーと相対し，シーリーム・タガーイーの人さし指を切り落した。

私は，翌朝に出発して，ダシュトの村々の間にやや近く下馬した。そこを発って，ゴーマル川 Gūmal suyı の岸辺に下馬した。ダシュトからガズニー方面へは2つの道が出ているらしかった。1つはサング・スーラーフ道 Sang-sūrākh yolı で，この道はバルク Bark を経てファルムルに至る。もう1つは，ゴーマル川の岸づたいに進み，バルクには至らず，これまたファルムルに至る

ものである。若干の者たちはゴーマル道を好んだ。私がダシュトに滞在中に，2～3日ひき続いて雨が降った。ゴーマル川は非常に増水していた。私たちは苦労して渡れる所を見つけて渡ったほどであった。道をよく知っている者たちが，「ゴーマル道をとれば，この流れを何度も渡らねばなりません。川がこれほど増水していては困難です」と述べた。私はこの道についても，進むべきか逡巡した。方針がなお1つに定められていなかった。私は，翌日，出発の太鼓
150a を打たせた後，馬上で〔進みながら〕(150a) 相談し，どの道をとって行くべきかを決める考えでいた。その日は**断食月明けの祭日** (**'Īd-i fiṭr**) 〔1505年3月7日〕であった。私は祭日の沐浴を行なっていた。

ジャハーンギール・ミールザーとベグたちが議論していた。若干の者たちが次のように云っていた：「ダシュトの西方の山に，ミフタル・スライマーン山 **Kūh-i Mihtar Sulaymān** と呼ばれている山がある。この山はダシュトとドゥキー **Dukī** の間にある。その山の突出部をまわれば，道は平らである。1～2日はちがって来るだろうが」と。彼らは意見をこれに決定して，突出部を通る道に向った。私が決められた沐浴から解放される前に，兵士たちは全て突出部に向け平地を進み，その内の大部分の者はすでにゴーマル川をも渡っていた。その道は，見た事のある道ではなかったので，私たちは道の遠近をも知らず，ただ誤ったいいかげんなうわさにもとづいてこの道に入ったのであった。

私は祭日の礼拝をゴーマル川の河畔で行なった。新年の祭日 (**nawrūz**) が，この祭日から程遠からぬ所まで近づいていた。残るはわずか1～2日であった。それが真近かだという事で，私は次の〔冒頭句と結末句を含む〕ガザル (**ghazal**) 〔叙情詩〕をつくった。

祭の日々，人びとは新月と恋人の顔とを一度に見て悦び楽しむ。
しかし私にとって，そなたの麗わしいかんばせから引離される祭の月は，
ただ悲しみあるのみである。
〔空白〕
おお，バーブルよ！恋人のかんばせと新年とが同時に見られた祭日を神の贈物をみなせ。
何故なら，100たび新年の祭日がこようとも，これにまさる祭日は無いであろうから。

私たちはゴーマル川を渡り，南に向け山の麓を通って進んだ。1～2キョル

150b フ進んだ時，(150b) 残忍な若干のアフガーン人が山裾にある丘に出現した。私たちは全速力でその方面に馬を走らせた。ほとんどのアフガーン人は逃走した。しかし若干の者たちは，愚かにも，麓の小山や岩の所で足場を固めた。1人のアフガーン人が1つの孤立した山の上に立っていた。おそらくその向う側は絶壁であった。脱走できる所も無かった。スルターン・クリー・チュナクが鎧をつけたまま出撃し，大いに打って捕えた。私の面前で，彼が為した1つの〔褒むべき〕行動がまさにこれであった。この行動が彼の寵愛と昇進の因となった。

またもう1つの岩の所で，クトゥルク・カダムが1人のアフガーン人と猛烈に打ち合いつかみ合って，10～12カルの高さの所から共に落下した。クトゥルクは敵の首を取って持って来た。さらにもう1つの山の頂上でケペ Kepä が1人のアフガーン人と取っ組み合いになり，山の頂上から中腹までころがり落ちて来た。そのアフガーン人の首をも取って来た。このアフガーン人たちをまた多数捕虜にしたが，私は全員の命をゆるした。

私はダシュトを発ち，ミフタル・スライマーン山の麓を通って南に向って進み，途中3宿して，スィンド河畔の，ムルターンの属領の村々の1つであるビーラ Bīla という小さな町に到達した。その住民は舟に乗って河を渡った。若干の者たちは河にとびこんで渡った。この村の正面に1つの川中島があった。

151a (151a) おくれた者たちが川中島にいるのが見られた。私たちの側のほとんどの兵士は馬・甲冑ともども河にとびこんで渡った。幾人かは水にのまれた。私の臣下 (nökär) の内では，1人はクル・アルク Qul Aruq で，もう1人はミフタル・ファッラーシュ Mihtar Farrāsh であった。ジャハーンギール・ミールザーの臣下の中では，1人はカイマス・トゥルクメン Qaymas 〔又は <p. 186 Qaytmas>〕 Türkmän であった。この川中島で，若干の布地とか輜重の如き物が兵士らの手に入った。この近郊の人々は舟で皆スィンド河の向う岸へ渡った。

〔相手方の〕すでに渡河していた者たちの1団が，河の広さを頼りに，この川中島の対岸から，刀を手に取って，剣士の真似事をして雄山羊のように跳びはね始めた。〔私たちの側の〕川中島に渡っていた者たちの内から，クル・バーヤズィード・ブカーウル Qul Bāyazīd bukāwul がひとりで裸馬と共に，彼らに対面する所から河に身を投じた。川中島の向う側の川幅は，こちら側の川

幅の2～3倍ほどであった。彼は馬を泳がせて，向う側にいる者たちの正面，1射程距離の浅瀬に出た。水は馬の鞍翅の所まで達していた。彼は，ミルクがわきたつほどの間，立ちどまった。おそらく馬が重さに耐えていたのであろう。彼の後からは誰も助けに来なかった。また助けが来る可能性も無かった。彼はそこから敵に向けまっすぐに進んだ。敵は1～2本の矢を射たが，留まりえず，急いで逃げた。彼はたったひとりで，甲冑もつけぬ馬と共に，助ける者も無く，スィンド川のような大河を馬を泳がせて渡り，敵を逃走させ，土地を獲得したのである。まことに勇敢な行動であった。

151b 彼が敵を逃走させた後，(151b) 兵士らが渡って，布地や家畜などの戦利品を取って来た。これ以前にも，彼は何度かすぐれた奉仕をし，その勇敢さを示したので，私は彼を寵愛し眼をかけて，台所番 (baurchı) の階層から私個人のための毒見役 (khāṣṣa bukāwul) の階層へと昇進させていた。私は，このたびの行動ゆえに，彼を全面的に寵愛し特別扱いする事にした。そして事実そのようにした。後述する如く，彼は実際にこのような寵愛と優遇に値した。

私はさらに2宿，スィンド川ぞいに下流の方に向って移動した。襲撃隊は馬を走らせすぎて，馬をつぶしてしまった。しかしその分捕品も，急襲に値するものでなかった。全て牛であった。ダシュトでは羊が，また若干の場所では布地の如きものも兵士らの手に入った。ダシュトをすぎると，手に入るのはただ牛のみであった。スィンド川ぞいの宿営地では，1人の下僕 (qulluqchı) が300～400頭の牛を連れて来るほどであった。それだけ連れては来たが，何分にもあまりに多数のため，各宿営地でさらに同数程度が放棄された。

私たちはスィンド川にそって3宿の間進んだ。3宿の後，ピール・カーヌーの墓所 (マザール) (Pīr Kānū mazārı) の向いでスィンド川と別れ，ピール・カーヌーの墓所に到着して下馬した。兵士らの内の若干の者たちがマザールの関係者たちを苦しめたので，私はその内の1人を見せしめのために刀で処刑した。このマザールはヒンドゥースターンで (152a) 大いに尊崇されているマザールである。ミフタル・スライマーン山に連なる山脈の山麓にある。

私はこのマザールを発って峠の上に下馬した。そこを発って，ドゥキー地方に属する川の河床に下馬した。その宿営地を発った時，〔ズーン・ヌーン・アルグンの子〕シャー・ベグの家臣で，スィーヴィー Sīwī のダルガであったファーズィル・キュケルダシュ Fāḍil Kökäldash の配下で，物見のために来

た20人ほどの者が捕えられて連行されて来た。当時は〔シャー・ベグと〕悪い関係にはなかったので，私たちは馬・甲冑ともども彼らをただちに釋放した。

私たちは，途中1宿して，ドゥキーの村々の1つでチューターリー Chūtālī と呼ばれる村の近くに下馬した。スィンド川から少し離れた所でも，また河ぞいの地でも，休まずに絶えず略奪を行なっていたが，かいばや青い未熟のとうもろこしの実が豊富で，馬が後に残される事は無かった。しかしスィンド川からピール・カーヌー方面に向うと，青いとうもろこしの実はもはや見当たらなかった。時々，2～3宿に1度，わずかのとうもろこし畑が見つけられたが，かいばは皆無であった。これらの宿営地より先は，兵士らの馬がおくれ始めた。

チューターリーを発って下馬した宿営地では，駄獣がいないため，私の大テント（khargāh）すらも後に残された。この宿営地では，夜，大雨が降り，テント（chādur）の内部で水がひざの高さにまで達するほどであった。私は，敷物(gelim) を1箇所に集めて高くし，その上に坐った。この夜は，このように苦労する内に夜が明けた。

さらに2～3宿すると，ジャハーンギール・ミールザーが来て，私の耳に
152a (152a)「人ばらいしてお話したい事があります」とささやいた。私は人ばらいした。彼は「バーキー・チャガーニーヤーニーが私の所へ来て，≪王様〔バーブル〕を7～8人の者と共に去らせ，スィンド河を渡らせ，あなた〔ジャハーンギール〕を君主に推戴しましょう≫と云った」と告げた。私は「この謀議には，他に誰かいたか？」とたずねた。彼は「バーキー・ベグは私にほんの今し方話しただけです。他の者の事はわかりません」と答えた。私は「さらに他の者たちの事をも調べよ。たぶんサイイド・フサイン・アクバル，小姓のスルターン・アリー Sulṭān ʻAlī chuhra，また若干のホスロー・シャー系の大小のベグや軽装の若党たち（beg begāt yigit yılang）もいたはずだ」と告げた。実際，ジャハーンギール・ミールザーはこの時はまことによい行動に出たものである。彼は血族にふさわしい行動をとったのである。ジャハーンギール・ミールザーのこの行動は，先の私のカフマルドにおける行動〔121a-121b 参照〕と好対照をなすものであった。先のあの私の行動も，この不幸な星のもとに生まれた小者〔バーキー・ベグ〕の裏切り・堕落と無関係ではなかったのであった。

私はその宿営地を発って，また別の宿営地に下馬すると，兵士の内で馬を使える者たちをジャハーンギールに率いさせ，その近郊にいるアフガーン人らを攻撃するために派遣した。これらの宿営地で，兵士の馬が多数おくれ始めた。1日に200～300頭の馬がおくれる日もあった。まことにすぐれた人びとが徒歩で進んだ。私のすぐれた近習の1人であったシャー・マフムード・オグラクチ Shāh Maḥmūd Oghlaqchı もその馬がみなおくれて徒歩で来た。ガズニーに至るまで兵士らの馬はこのような状態であった。

153a 3～4宿の後，ジャハーンギール・ミールザーが1団の（153a）アフガーン人を討ち，1群の羊をもたらした。1～2宿の後，私たちはアービ・イースターダ Āb-i Īstāda に到達した。すばらしい大湖が眼前にあらわれた。向う岸の平地（dasht）は全く見えなかった。水は空に接するかに見えた。向う岸の山や丘は，蜃気楼の向う側の山や丘がそうであるように，大地と天空の間にぶらさがっているように見えた。ここに集められた水は，カッタワーズの谷（Kattawāz wādīsı）とズルマト平原とガズニー川のカラ・バーグ牧地の春雨の流れと，夏の増水の際の灌漑の余剰分の水と思われた。

私たちは，アービ・イースターダまで1キョルフの所に到達した時，めずらしいものを見た。ずっと，この水と空の間に，夕やけのようなものが真赤に見えては消えた。近づくまでこの状態であった。近くまで行くと，それがタグラン・カズ鳥（taghlan qaz）であるらしい事がわかった。1万羽，2万羽ではきかぬきわめて多数のタグラン・カズ鳥がいた。多数のタグラン・カズ鳥が飛翔して羽ばたくと，その赤い羽毛が見えたり見えなくなったりした。

単にこの鳥だけでなく，あらゆる種類の鳥が限り無くいた。この湖の岸辺に
153b は沢山の鳥の卵があった。この岸辺にこの鳥の（153b）卵を取りに来ていた2人のアフガーン人が私たちを見ると川にとびこんだ。数人が半キョルフほど追って連れて来た。要するに彼らが進んだ所は，水の深さが一定で，馬の腹の所までであった。平らな土地なので，ほとんど水が深みを作る事が無かった。

私たちはカッタワーズ平原の，アービ・イースターダに来ている川の岸辺に到着して下馬した。この川は水の無い川であった。いつもはこの川に水が流れている事が無い。何度か私たちはここを通り過ぎたが，常にこの川に流水を見る事ができなかった。しかしこの時は，夏が近いという理由から，この川にも渡河地点を見つけられないほどの水が流れて来ていた。それほど広くはなかっ

たが，非常に深かった。私は全ての馬とらくだを泳がせて渡った。若干の輜重の如きものは，紐に結んで，向う岸から引いて受取った。

私たちは，この川を渡って，コフナ・ナーニー Kohna Nānī〔「古ナーニー」〕とサリ・デフ・ダムを過ぎて，ガズニーに到着した。ジャハーンギール・ミールザーは，1～2日間私たちを接待し，食物を饗し，贈物を差し出した。

その年は，ほとんどの川が増水していた。デヒ・ヤークーブ川 (Deh-i Ya'qūb suyı) の渡河地点を見つけられぬほどであった。私は池でととのえさせた舟を運ばせ，カマリー Kamarī の向いでデヒ・ヤークーブ川に浮かべさせた。人びとは先に舟で渡った。このため私は，サジャーワンド峠 (Sajāwand kötäli) を越え，傍目も振らずに進み，カマリーから舟で川を渡り，**ズィール・ヒッジャ月**〔1505年5/6月〕，(154a) カーブルに帰還した。サイイド・ユースフ・ベグは，その数日前に，腹痛の病いによって神のみ許に召された。 154a

先にナースィル・ミールザーは，その部下たちのために，その領地から何がしかの物を取って来させ，2～3日ほど後にまいりますと云って，クシュ・ゴンバドで〔私からの〕別れの許しを得て，後に残っていた〔145b 参照〕。彼は私たちと別れると，ダッライ・ヌールの人びとがいささか反乱の姿勢を示したという理由で，軍をダッライ・ヌールに向け派遣した。ダッライ・ヌールの城の堅固さと，その地が水田地帯であるため〔山と水田との〕凸凹がはげしい事については前述した〔133b 参照〕。

この軍の指揮者のファズリー Faḍlī は，十分の注意を払わずに，このような1本道と山地において，兵を散開させて略奪におもむかせた。ダッライ・ヌールの人びとが出撃して，散開していた略奪者たちを追い払うと，他の者たちも支えきれずに逃走した。ダッライ・ヌールの住民たちは，1群の人びとを殺し，多くの馬と甲冑を奪取した。ファズリーのような者が指揮を取っている軍隊がそのような目にあうのは必定である。このためか，それともナースィル・ミールザーの心にねじれがあったためか，ミールザーは私たちの後を追わず，後に残った。

さらに，アイユーブの息子たちであるユースフとバフルールがいたが，これらの者たちほど悪質・不忠で，尊大・傲慢な者はいなかったであろう。私はユースフにアリンガルを，バフルールにアリーシャングを与えて (154b) いた。 154b

この者たちも，その領地から何がしかの物を取って来て，ナースィル・ミールザーと共に来る手はずになっていた。しかしナースィル・ミールザーが来なかったため，この者たちも来なかった。この**冬**，ナースィル・ミールザーと飲食を共にし，会話を共にした者がこの者たちであった。この冬，彼らは1度おもむいてタルカラーニー・アフガーン族を討った。**春**になると，ミールザーは，ニングナハールとラムガーナートに来ていた全てのアイマク諸部 (Aymaqāt)，諸外部族 (tashqı il wä ulus) の家族・財産を移動させ追いたてて，バーラーン河畔に到着した。

ナースィル・ミールザーがバーラーンとその近辺に滞在中に，バダフシャーン人たちがウズベク人らを殺し，ウズベクに対して一致団結したという情報がとどいた。その詳細は次の如くであった。シャイバーニー・ハーンはクンドゥズをカンバル・ビーに与え，彼自身はホーラズムにおもむいた。カンバルはバダフシャーンの人びとを懐柔するためにムハンマド・マフドゥーミー Muḥammad Makhdūmī のマフムード Maḥmūd という名の息子をバダフシャーンに派遣した。

その先祖らがバダフシャーン王(シャー)らのベグの地位を占めていたと云われるムバーラク・シャー Mubārak Shāh が頭をもたげ，マフドゥーミーの息子の首と，さらに数人のウズベク人の首を切った。彼は，以前にはシャーフ・タヌール Shāf Tanūr 〔<p. 192 Shāf Tīwar>〕 の名で知られていたカーライ・ザファル〔「勝利の城」〕を城として固めた。カーライ・ザファルの名は彼がつけたものである。

さらに，ホスロー・シャーの箭筒手(コルチ)の1人であったムハンマド・コルチ Muḥammad qorchı は，当時ハマランガーン Khamalangān を手中に置いていたが，ルースターク Rūstāq でシャイバーニー・ハーンのサドル ṣadr 〔「大
155a 法官」〕を，数人のウズベク共々に殺害し，ハマランガーンを固めた。(155a)
その先祖らが〔バダフシャーン〕王らのベグをつとめたと云われるズバイル・ラーギー Zubayr Rāghī もラーグ Rāgh で敵対した。ホスロー・シャーの弟ワリーの臣下であったジャハーンギール・トゥルクメン Jahāngīr Türkmän は，この〔ホスロー・シャーの権力の〕崩壊の際にその主君 (begi) と別れて後に残ったり逃亡したりしていた兵士らやアイマクを集め，堅固な所に身を置いた。

ナースィル・ミールザーはこれらの情報に接すると，バダフシャーン獲得を

熱望して，若干の愚かにして短慮の者たちの煽動・使嗾に動かされて，全ての〔アームー河の〕彼方の地から来ていた諸外部民（tashqı illär）の家族や財産を移動させ追いたてて，シバルトゥー〔峠〕とアーブ・ダッラ経由の道を通って，彼方の地に渡った。

ホスロー・シャーは，アフマド・カースィムと共にアージャルから逃亡して，ホラーサーンに向って進んでいた時〔126b 参照〕，途中で，バディーゥッ・ザマーン・ミールザーとズーン・ヌーン・ベグとに出くわした。全員は進んで，ヘラート Harī で，スルターン・フサイン・ミールザーの前に伺候した。これらの者たちは，何年もミールザーに敵対し，ミールザーに対して種々の無礼を働いてきた者たちであった。これらの者たちについて，ミールザーの心中に焼きついている物が無かったなどという事がありえようか。

これらの者たちは，皆，私が原因で，このような情無い憐れな姿でおもむいて，ミールザーに会見したのであった。もし私がホスロー・シャーをその臣下たちから引離し，このように無力な境遇に落とさなかったならば，またもし私がカーブルをズーン・ヌーンの子のムキームから奪わなかったならば，彼らがおもむいてミールザーに会う事は不可能であったであろう。バディーゥッ・ザ
155b マーン・ミールザー自身は，この者たちの（155b）手中の練り粉（khamīr）であった。彼はこの者たちの云う事に口をさしはさむ事はできなかった。スルターン・フサイン・ミールザーは全員に対してやさしい態度で接し，彼らの悪行には言及せず，寛大な贈物すらをも与えた。

しばらくして後，ホスロー・シャーは自らの領地へ帰る許しを求め，「もし私が行けば，かの諸地方を全て獲得するでありましょう」と述べた。しかし彼が，装備も無く資金も持たずに〔ヘラートに〕来ていたので，退去の許可を出す事を人びとはためらった。彼らがためらう毎に，彼は繰り返し許可を求めた。あまりにしばしば彼が云いつのるので，ムハンマド・ブルンドゥクがうまい答をした。彼は「貴公は，3万人の臣下を持っておられた時，貴公の手中にあった貴公の全領土をどうなされたのか？貴公は今，500人の部下を持つのみで，ウズベクの支配下にある諸地方に対しいったい何を為されるおつもりか？」と述べた。ヘラートの人びとはいくつかの忠告をし，また思慮に富んだ意見を述べた。しかし，〔神の定め給うた〕彼の死期がすでに到着していたために，そ

れらは何の役にも立たなかった。彼はますます何度も催促した。結局，許可が出された。彼は3〜400人の部下たちと共にまっすぐに進んで，ダハーナの境域に入った。

まさにその同じ時，ナースィル・ミールザーがその方面へと通り過ぎつつあった。ホスロー・シャーは来て，ナースィル・ミールザーにダハーナ近郊で会った。バダフシャーンの首長たち（sardārlar）はナースィル・ミールザーのみを求めており，ホスロー・シャーを求めてはいなかった。ナースィル・ミールザーがどれほど懸命にすすめても，ホスロー・シャーは理解を示してクーヒスターンに行く事に同意しなかった。ホスロー・シャーの意図は，ミールザーを
156a 主君（156a）のような形にして伴って進み，地方を手中にする事であった。結局，話し合いからはよい結果が出ず，イシュケミシュ近郊で，両者はお互いに兵を整列させ，甲冑を身につけ，ほとんど戦う寸前となった。しかし結局別れて，ナースィル・ミールザーはバダフシャーン方面に向った。ホスロー・シャーは部隊の跛者やごろつき（böläk lang wä lawand）を集め，貴賤合わせて1000人ほどの者たちと共に，クンドゥズを包囲する考えで来て，1〜2ユガチのホージャ・チャール・タークKhwāja Chār-ṭāqに下馬した。

ムハンマド・シャイバーニー・ハーンがアンディジャーンでスルターン・アフマド・タンバルを捕え，ヒサールに向け進撃した時，〔ヒサールの〕人びとは戦う事も争う事も無く，その領地を捨てて出奔した。シャイバーニー・ハーンがヒサールに到着した。ヒサールには，シーリーム・チュフラと1団のすぐれた若党たちがいた。そのベグたちが国を捨てて去ったにもかかわらず，この者たちはヒサール城を引渡さず，城を固めた。シャイバーニー・ハーンはヒサールの包囲をハムザ・スルターンとマフディー・スルターンに委ね，自らはクンドゥズに来て，弟のマフムード・スルターンにクンドゥズ地方を与え，自らは留まらずに，ホーラズムへ，チーン・スーフィーChīn Ṣūfīに向け進軍した。彼がなおサマルカンドに到達する前に，弟のマフムード・スルターンがクンドゥズで死亡した。彼はクンドゥズをカンバル・ビー・マルヴィーQanbar Bī Marwīに与えた。

ホスロー・シャーが来た時，クンドゥズにはカンバル・ビーがいた。カンバル・ビーは引き続きハムザ・スルターンとその他のスルターンたちの所へ人を

156b 走らせ (156b) 求援を求めた。ハムザ・スルターンはアームー河畔のサラーイ Sarāy に来て，軍をその息子たちとベグたちに率いさせて，クンドゥズへと派遣した。彼らが到着すると，彼ら〔ホスロー・シャーの側の者たち〕も出陣した。しかし戦を交える事すらもできなかった。肥った小者〔ホスロー・シャー〕は逃げる事すらもできなかった。まさにその時，ハムザ・スルターンの部下たちが〔彼を〕落馬させた。彼らはホスロー・シャーのおいのアフマド・カースィムと，シーリーム・チュフラと，さらに幾人かのすぐれた若党たちを殺した。彼らはホスロー・シャーをクンドゥズに連行し，その首を切り，その首級をホーラズムのシャイバーニー・ハーンのもとへと送った。

ホスロー・シャーがかつて私に述べた如く〔124a 参照〕，彼がクンドゥズ近郊に来ると，私のもとにいた彼の臣下たちの態度がかなり変った。大部分の者は出発して，ホージャ・リーヴァージュ Khwāja Rīwāj とその周辺に移動した。私のもとにいた者たちの大部分は彼の臣下であった。しかしモグールらはよい行動に出た。彼らは私の側につくという立場をとった。この〔ホスロー・シャーの死の〕知らせが届くと，彼らは火に水を注いだ如くおとなしくなっていった。

〔911年/1505年6月4日—1506年5月23日/の出来事〕

ムハッラム月〔1505年6/7月〕，私の母のクトゥルク・ニガール・ハーヌムが熱病にかかった。放血が行なわれたが効果が無かった。1人のホラーサーン人の医師がいた。サイイド先生 Sayyid Ṭabīb と呼ばれていた。彼はホラーサーンのやり方に従ってすいかを与えた。しかし神の定め給うた死期がすでに来
157a ていたのであろう。6日後の土曜日（157a）神の御許に召された。ウルグ・ベグ・ミールザーが山の麓に庭園を造っていた。「新年の園」(Bāgh-i Nawrūzī) という名であった。ウルグ・ベグの相続人たちの許可を得て，日曜日，私とカースィム・キュケルダシュがそこに亡き母を埋葬した。

この葬儀の際，人びとは私に，私のおじの小ハーン（アラチャ・ハーン）と私の祖母のイセン・ドウラト・ベギムの死去を知らせた。ハーヌムの四十日が近づくと，ホラーサーンからハーンらの生母であるシャー・ベギム，私の母方のおば〔故ハーヌムの姉〕で，スルターン・アフマド・ミールザーの妃であったミフル・ニガール・ハーヌム，〔故ハーヌムの義弟〕ムハンマド・フサイン・キュレゲン・ドゥグラトが到着した。慟哭がまた新たとなり，別離の悲しみは無限であった。

葬儀（'azā resmi〔慟哭の儀〕）がとり行なわれた後，食物・食糧が貧者・窮士らにふるまわれた。物故者たちの霊魂のためにコーランが完誦され祈りがささげられた。皆はそれで満足して，黒の喪服をぬいだ。

私たちは，この重要事から解放された後，バーキー・チャガーニーヤーニーの挑唆によって，カンダハールに向け出兵した。旅して来て，私がクシュ・ナーディル牧地 (Qush Nādir ulangı) に下馬した時，私は発熱した。不思議な病気であった。皆が私をいくら起こそうとしても，またすぐに私の眼は眠りにおちいった。4～5日して，ようやくやや回復した。

この間に，地震があり，城の城壁や果樹園の壁がほとんど崩壊し，町や村々
157b で多くの家屋がつぶれ，家屋や壁の下敷になって死んだ者が多数に（157b）のぼった。パムガーン村の家屋は全て倒壊した。70～80人のすぐれた家長たち

(kad-khudālar) が壁の下敷になって死んだ。パムガーンとベグトゥート Begtūt の間に，広さがおよそ投石機の1射程距離ほど (birginä tash atımı) もある1つのまとまった農地 (bir parcha yer) があったが，消えうせて，矢の1射程距離ほども陥没した。消えうせた農地の所から，いくつかの泉が現われた。イスタルガチュからメイダーンまではおよそ6～7ユガチの道程である。地割れで，ある方面は土地が象の高さほども高くなり，またある方面では象の高さほども低くなったほどであった。地割れした土地に，いくつかの地点では人がはまっていた。地震が起こった時，全ての山々の頂上から土粒がまき上った。

ヌールッラー・タンブールチ Nūr Allāh ṭanbūrchı〔タンブールチ，「タンバリン奏者」〕は私の前で1つの楽器を演奏していた。さらにもう1つ楽器があった。あの地震の時，彼は2つの楽器を両方共手にしていた。その2つの楽器が相互にどんと突き当ってしまったほど，彼は自分自身を制御する事ができなかった。

ジャハーンギール・ミールザーはティパーの，ウルグ・ベグ・ミールザーが建てた建物の1つの上階 (bālā-khāna) のテラスにいた。地震が起こると，彼はすぐに脱出した。傷つかずにすんだ。ジャハーンギール・ミールザーの近しい者たちの内の1人がこの同じ上階にいたという。上階の壁が彼の上に倒れた。しかし神の御加護により，どこも傷つかなかった。ティパーの諸家屋は，ほとんど完全に倒壊した。

その日，33回大地が震動した。<pp. 195—196 1カ月近くの間，毎日2～3回ずつ，大地が揺れた>。ベグたちや兵士たちに，〔カーブルの〕城の塔や
158a 城壁の損傷箇所を修理・修築するよう命じた。(158a) 20日から1カ月の間，奮励努力して，城の損傷箇所が修復・復興された。

先のカンダハール遠征の計画は，病気と地震のために延び延びになっていた。病気が治り，城が修復されて，先の計画を実行する決心をした。しかし私たちはまだカンダハールに向かうか，それとも略奪を目的に山地や平地を踏査するかは決定していなかった。シール Shīr〔又は<p. 196 Shnīz>〕の麓に下馬した時，私はジャハーンギール・ミールザーとベグたちを集めて協議した。カラート Qalāt に向かう事が決定された。ジャハーンギール・ミールザーとバーキー・チャガーニーヤーニーがこの遠征を特に主張した。

ヤーリー Yārī〔又は<p. 196 Tāzī>〕に到達した時，シール・アリー・チュフラ Shīr 'Alī chuhra，キチク・バーキー・ディーワーナ Kichik Bāqī dīwāna とその他の若干の者たちが逃亡する考えを持っているという知らせが入った。私はこれらの者たちを捕えさせ，シール・アリー・チュフラを処刑した。この人物は，私の所にいた時も，またそうでない時も，さらにあの地方にいた時もこの地方にいた時も，ところ場所を問わず常に種々の反逆と悪行を重ねていたのである。その他の者たちは，馬と装備を置かせて釈放した。

私たちはカラートに到着すると，甲冑もつけず諸攻撃用具も用いず，ただちに全面から攻撃を仕かけた。はげしい戦となった。ホージャ・カラーンの兄のキチク・ベグはまことに勇敢な若党であった。この史書の中で述べられている
158b ように，彼は何度も私の面前で刀をふるった。彼がカラートの（158b）西南の塔にとり付いて，ほとんど登りきろうとした時，その眼を槍で突き抜かれた。1～2日の後，カラート征服後に，彼はこの傷で死んだ。シール・アリーと逃亡を企てた時に捕えられたキチク・バーキーは，かの恥ずべき行為が予知させていたように，城門の所で城壁の基部に入った時，石に当って死んだ。さらに1～2名も死んだ。

午後の礼拝時までこのようにして戦が続いた。若党たちが戦い，攻め込み，疲れきった時，城内の者たちが命乞いをして，城を明け渡した。ズーン・ヌーン・アルグルはカラートをムキームに与えていた。ムキームの臣下たちの内，ファッルフ・アルグン Farrukh Arghun とカラ・ブルト Qara Bulut がカラートにいた。彼らはその箙（えびら）・刀を首につるして来た。私たちは彼らの罪を赦した。この一族（ṭabaqa）を悩ませる事を私は意図していなかった。何故なら，ウズベクの如き敵が私たちの傍らにいる時に，内輪でこのような事をしていては，それについて遠近で聞いたり見たりした者たちに何と云われるか想像できたからである。この遠征はジャハーンギール・ミールザーとバーキー・ベグの主張によって行なわれたものであった。それで私たちはカラートの警備をミールザーに委ねようとした。しかし彼は受諾しなかった。バーキーもこの件についてはよい返事を為しえなかった。私たちがカラートを，このように戦い攻め取った事は結局無益となった。私たちはカラート南方のサワー・サング Sawā
159a Sang，アラ・タグ Ala Tagh,（159a）およびその周辺地帯にいるア.フガーン人らを討ってカーブルに帰着した。

カーブルに下馬した夜，私は城内におもむいた。私のテントと馬小屋はチャール・バーグにあった。ヒリルジー族の盗賊が来て，私の1頭の武具つきの鹿毛色の馬と私の個人用の乗用馬をチャール・バーグから連れ出し持ち去った。

バーキー・チャガーニーヤーニーがアームー河畔で来て私たちに加わって以来，彼以上に尊重され権限を与えられていた者は他にはいなかった。云う事為す事，全て彼の思いのままに云われかつ為された。それにもかかわらず彼が為すべきはずの奉仕や，彼が示すべきはずの人間性は，彼によってまったくあらわにされていなかった。というより彼は種々の無礼と悪行をあらわにしていた。彼はけちで粗雑で，しっと深く，心のけがれた，ねたみをいだくすね者であった。彼のけちくささがどの程度であったかと云えば，彼がティルミズを捨てて家族・財産共々に私たちに加わった時，彼自身の個人的に所有する羊は3万頭ないし4万頭にのぼっていたであろう。各宿営地で，多数の羊が私たちの面前を通り過ぎた。私たちの何も持たぬ若党たちは飢えに苦しんでいた。しかし彼は1頭すらも与えなかった。やっとカフマルドに着いた時，彼は50頭の羊を与えたのみである。

彼は私を君主に戴いていたにもかかわらず，自分の幕庭 (ishik) で太鼓を打ち鳴らさせていた。彼は誰に対しても誠実でなく，また誰をも尊重する事ができなかった。カーブルの当時の全収入 (ḥāṣil) は商税 (tamgha) によっていた。
159b 彼は商税の徴収権を握っていた(dar bast)。またカーブルのダルダ職，(159b) パンジュヒール，キディー・ハザーラ Kidī Hazāra，クーシュカク Kūshkak 〔又は<p. 198 Kūshlak>〕，および宮廷長としての権限 (ishik ikhtiyārı) が全て彼の手中にあった。これほどまでに優遇されても，彼は全く満足し感謝する事が無かった。私たちは，彼がどんなよこしまな考えを持ち出しても，前述した如く〔121a-121b; 152a 参照〕，けっしてそれに同調せず，また彼を非難する事もしなかった。

彼は常に，遠まわしに，立ち去る許可を求めていた。私たちは，その遠まわしな云い方にへこたれず，言訳を云って断っていた。彼は1～2日間は意気消沈したが，それがおわるとまた退去の許可を求めた。彼の遠まわしな云い方と退去の求めは限度を越えた。私たちも彼の言動によって，我慢の限界にまで達していた。私たちは立ち去る許可を与えた。彼は許可を求めた後で後悔した。いろいろと策動し始めたが効果が無かった。彼は私の所に人を遣して「私が

9つの罪を犯すまでは私の罪を問わぬという約束になっていたではありませんか」と云わせた。私は，彼の11箇の罪を1つ1つ数えあげ，ムッラー・バーバーを派遣してそれを彼に告げさせた。彼は従わざるを得なかった。私は彼に，家族・財産共々，ヒンドゥスターン方面への退去の許可を与えた。彼の数人の臣下が，彼をハイバルで越えさせた後，カーブルへ帰還した。彼はバーキー・ガーギーヤーニー Bāqī Gāgīyānī の隊商に加わってニーラーブを越えた。

当時，ダルヤー・ハーンの子のヤール・フサイン〔146b 参照〕はカチャコト Kachakot にいた。彼は，彼が〔先に〕コハトから持って行った〔私の〕数通の勅書（farmānlar）を根拠にして，ディラザークとユースフ・ザイに属する若干のアフガーン人たちと，さらに若干のジャト Jat，グジュル Gujur を自分の仲間ないし臣下にしていた。しかし彼の務めは人びとを略奪し，道路を通行する者たちを襲撃する事であった。彼はバーキーについての情報を聞くと，
160a (160a) 道を閉鎖し，バーキーと同行した者たちを全員捕え，バーキーを殺し，その妻を奪った。私たちはバーキーに対し何も危害を加えずに許したのに，彼自身の悪行がその前に立ちあらわれて，彼はその自らの行為の捕われ人となったのである。

おお汝！汝の悪行を時の流れに寄託せよ。
時の流れは汝にあだを報ずる召使なるが故に。

この**冬**，私たちは1～2度雪が降るまでチャール・バーグに滞在していた。私たちがカーブルに来て以来，トゥルクメン・ハザーラ族が種々のけしからぬ行為を働き，追いはぎ的行為を重ねていた。私たちは彼らを討つ考えで，城内のウルグ・ベグ・ミールザーのブスターン・サラーイ Bustān Sarāy という名の建物に入って，**シャーバーン月**〔1505年12月/1506年1月〕，トゥルクメン・ハザーラを討つために出馬した。〔グールバンド川にそそぐ〕ダッライ・フーシュ Darra-yi Khūsh〔「フーシュの谷」〕の入口のジャングリク Janglik で私たちは攻撃にうつった。少数のハザーラ人を討った。

ダッライ・フーシュに近い1つの洞窟に1かたまりのハザーラ人が隠れていたらしい。私のほとんどの放浪時代に<p. 199 私と>共におり，コル・ベギ（qor begi）〔箭筒（ユルル）などを管理するベグ〕の地位を占め，強弓を引き，矢を巧みに射たシャイフ・ダルヴィシュ・キュケルダシュがこの洞窟の入口に警戒せず

に間近に入って行った。内部から1人のハザーラ人が彼の胸を射抜いた。彼はまさにその日死んだ。

トゥルクメン・ハザーラの多くがダッライ・フーシュで越冬しているらしかった。私たちはそれらをめざして進んだ。ダッライ・フーシュは見事な谷である。およそ半キョルフほどの間，谷の入口の所が隘路になっている。道は山の
160b (160b) 中腹にある。道から下は50～60カルの絶壁で，道の上方も絶壁がせまっており，騎馬の者が1人ずつしか通れなかった。私たちはこの隘路を通過し，その日は午後の礼拝時まで進み続けたが人に会わず，ある場所で露営した。人びとがハザーラ人の1頭の肥えたらくだを見つけて連れて来た。私たちはそれを殺し，その肉の1部をケバーブ〔串焼き〕にした。他の1部をつぼ (āftāba) の中で焼いて食べた。私はあれ程うまいらくだ肉をそれまで食べた事が無かった。幾人かは羊の肉と区別できなかった。

翌日私たちをそこを発って，ハザーラ人たちの越冬地に向け進んだ。朝の初更 (bir pahr)〔パフルは昼夜をそれぞれ4等分した1部分の時間帯〕，前方から人が来て，「1つの隘路の所でハザーラ人たちが川の浅瀬を木の枝で固め，味方の者たちの前進をはばみ，相戦っている」と述べた。これを聞くと私たちは大急ぎで進んだ。私たちは1本道を進んだ。ハザーラ人たちが前進をはばんで，私たちの側の者たちと戦い合っている場所に着いた。その冬は雪が大量に降った。道の無い所を進む難しさがあった。流れで凸凹になった川の岸辺は，全て結氷していた。氷と雪のため，この川を道の無い所で渡る事は不可能であった。ハザーラ人たちはこの川からのあがり口の所に，沢山の木の枝を切って置いていた。彼ら自身は，流れで凸凹になった所や岸辺の所で，騎馬の者
161a や (161a) 徒歩の者が矢を射かけて戦っていた。

私が最近目をかけてベグの位につけた者たちの内の1人であった (mening yangı ri'āyat qılghan beglärimdin edi) ムハンマド・アリー・ムバッシル・ベグはまことに勇敢な，眼をかけるに値するすぐれた若党であった。彼は甲冑もつけず，前方へと，枝の置かれた道へと進んだ。敵は彼の臀部に矢をあびせた。即座に絶命した。私たちは急いで来たために，ほとんどの者が甲冑を持っていなかった。1～2本ずつ矢が飛んで来ては落ちた。アフマド・ユースフ・ベグが心配して，そのたびに「あなたは甲冑もつけずに，こんなに進入しすぎておられます。あなたの頭を2～3本の矢がかすめて通るのを見ました」と云

っていた。私は「男らしくせよ！私の頭をこんな物はいくらでもかすめていったわ」と告げた。

まさにこういう状況の時，右手から，カースィム・ベグが甲冑をつけて(öp-chini bilä)，この川の浅瀬を見つけて渡り，敵に馬をしかけた。同時に，ハザーラ人たちは支えきれず，ただちに逃走した。彼らは戦を交えていた者たちを次々と落馬させ，敵の後を追った。私は，この行動の故に，カースィム・ベグにバンガシュを賜与した (jüldü berildi)。ハーティム・コルチ Ḥātim qorchı もこの戦で悪くない働きをした。このため，シャイフ・ダルヴィシュ・キュケルダシュが占めていたコル・ベギの地位〔160a 参照〕をハーティムに授けた('ināyat boldı)。ケペク・クリー・バーバー Kepek Qulī Bābā もこの戦でよく働いたため１つの村を授けた。スルターン・クリー・チュナクはこれらの者たちの後を追った。しかし雪が深いため雪道に足をとられて追いつけなかった。私もこの若党たちと共に進んだ。

161b (161b) 私たちはハザーラ人たちの冬営地の近くの羊や家畜の置いてある場所に到達した。私自身は400～500頭の羊と25頭の馬を集めた。スルターン・クリーとさらに２～３人が近くにいた。私たちは平等に分けた (chiy bolduk)。私自身は２度襲撃に加わった事がある。１度がこれで，もう１度もこの同じトゥルクメン・ハザーラ族に対し，〔1507年〕ホラーサーンからの帰途，襲撃におもむき，多くの羊や馬を分捕って来た〔195b—197a 参照〕。

ハザーラ人たちの女や子供たちが徒歩で雪を帯びた岡に登って立っていた。私たちはやや疲れていた。夜にもなっていた。私たちは引返して，ハザーラ人たちの家に下馬した。この冬は雪がまことに大量に降った。この場所でも，道の外は雪がちょうど馬の鞍翅の所まであった。夜，後方警戒におもむいた者たちは，雪が深いため，夜が明けるまで馬上にいた。

翌朝，私たちは帰途につき，ダッライ・フーシュの谷の内部にあるハザーラ人たちの冬営地で１泊し，そこを発ってジャングリクに下馬した。ヤーラク・タガーイーと若干の者たちがややおくれて来ていた。私は彼らに，「行ってシャイフ・ダルヴィシュを射たハザーラ人たちを捕えよ」と命じた。復讐さるべき不幸者たちは洞窟内にいたらしい。これらの者たちは行って，煙を流して70～80人のハザーラ人を捕え，そのほとんどを刀で殺した。

私たちはハザーラ遠征から帰還する途中，ニジュラーウから税 (māl) を取

るために，バーラーン川の入口のアイ・トグディ Ay-toghdı 近郊に到着した。
162a ガズニーからジャハーンギール・ミールザーが (162a)，私がトグディにいる時に，私の前に伺候した。この間，**ラマザーン月13日**〔1506年2月7日〕，私は烈しい座骨神経痛に襲われた。痛みがあまりに烈しいため，以後40日間，私は寝返りをうつにも人の助けをかりなければならなかった。

ニジュラーウの谷々の1つであるピジュガーンの谷 (Pijghān darrası)，特にこの谷のガイン村 (Ghayn kenti) の長であるフサイン・ガイニー Ḥusayn Ghaynī は，その兄弟と共に，その高慢と不遜で知られていた。私は兵をジャハーンギール・ミールザーに率いさせて派遣した。カースィム・ベグも同行した。兵は進んで眺望のよい所に出て，敵が要塞(サンガル)化していた場所 (sangarlaghan yeri) を攻撃して占領し，一群の者たちを処刑した。

私の座骨神経痛のため，人びとはかごのような物を作り，私をバーラーン川沿いにカーブル市街までかついで運び，ブスターン・サラーイまで連れて来た。その冬，私は数日間ブスターン・サラーイに滞在した。この病気がなおよくなっていない内に，私の顔の右側に癤(せつ)〔腫れ物〕が出た。ランセットが用いられた。私は，この病いのため，下剤も飲んだ。回復すると，私はチャール・バーグにおもむいた。

ジャハーンギール・ミールザーが来て私の前に伺候した。アイユーブの息子たちのユーフフとバフルールはミールザーの傍らに仕えて以来，〔私に対する〕反乱と動乱の扇動者としての立場をとっていた。この時，私にはジャハーンギール・ミールザーが以前とは違って見えた。数日後，彼はティパーを発って，甲冑をつけて急ぎガズニーへおもむいた。彼はナーニー城を制圧し，数人を殺し，その住民を全て略奪した。そして彼のまわりに居た全ての人びとを
162b (162b) 移動させて，ハザーラ人の間を通ってバーミーヤーン方面に向った。私にせよ私の部下たちにせよ，彼からこのような怒りや憎しみをかうような言動をした事が全く無い事は神が御存知である。

私が後に聞いた所では，彼は次のような事をその出奔の理由にしていたという。すなわち，ジャハーンギール・ミールザーがガズニーから来る途中，カースィム・ベグやその他のベグたちが会いに出かけた。ミールザーが鶉(うずら)に鷹を放った。鷹が追いついて爪をたてようとした時，鶉が自分で地に落ちた。皆が「取ったか？取ったか？」と叫び合った。カースィム・ベグは「敵がこんなに

弱くなっていれば，放てば，いつでも取れる」と云った。この言葉が彼らの気分を害したというのである。彼らの出奔の1つの理由がこれであったが，彼らはさらに，1～2のこれよりもより愚かしい，より薄弱な事を出奔の根拠にしていた。

さて彼らはガズニーをあのような情況にして，ハザーラ人の間を通ってアイマク族の方へと向った。当時，アイマク族の者たちはナースィル・ミールザーとは別れていた。しかし，ウズベクには投じないでいた。彼らはバーイ Bāy，アスタラーブ Astarāb およびその周辺の夏営地にいた。

まさにこの頃，スルターン・フサイン・ミールザーはムハンマド・シャイバーニー・ハーンの撃退を注意して，その全ての王子らを召集した。私をも，彼はサイイド・スルターン・アリー・ハーブビーン Sayyid Sulṭān ʻAlī Khwābbīn の子サイイド・アフザル Sayyid Afḍal を派遣して呼び求めた。私たちにとってホラーサーン方面に向かう事が，いくつかの理由から必要になっていた。1つは，〔かつて〕ティムール・ベグの占めた〔ティムール朝最高君主としての〕地位に坐しているスルターン・フサイン・ミールザーの如き（163a）偉大なる君主が全軍を召集し，諸方面から王子たちやベグたちを呼んでこさせ，シャイバーニー・ハーンの如き敵に対決する決意をした時には，人びとが徒歩で行く時は，私たちは逆立ちしてでも行かねばならぬ。また人びとが棍棒を手に馳せ参ずる時は，私たちは石を手にしてでも馳せ参ぜねばならぬ。

163a

また，ジャハーンギール・ミールザーがあのような敵意と悪行と共に〔その領地を〕立ち去ったので，私たちには，彼の敵意をとり除くか，彼のもたらす害を抑制する必要があった。

この同じ年，シャイバーニー・ハーンはチーン・スーフィーをホーラズムに10カ月間包囲した末，〔ホーラズムを〕征服した。この包囲の際，多くの戦闘が行なわれた。ホーラズムの若党たちはまことに勇敢に戦った。その義務の遂行に欠ける所が無かった。彼らは猛烈に矢をあびせかけ，矢が楯，甲冑のみならず，時には2重の甲冑をも貫き通したほどであった。籠城は10カ月に及んだ。どこからも援軍の望みは無かった。若干の軽装の若党たちが勇気を失ない，ウズベクとしめし合わせてウズベクを城内に<p. 203 入れようとした。チーン・スーフィー〔原文はフサイン・スーフィー〕がそれを知って，自ら来て，城内

に＞入ろうとした者たちを打ち落としていた時，矢が雨のように彼に降りそそぎ，彼自身の小姓が彼を背後から矢で射た。彼は死んだ。もはや戦う者が残っていなかった。城が征服された。神のお恵みがチーン・スーフィーに与えられ
163b ん事を。彼はその勇敢さをもって1刻といえども (163b) 命を捧げぬ時は無かった。シャイバーニー・ハーンはホーラズムをキョペク・ビーに与えて，自らはサマルカンドに帰った。

〔スルターン・フサイン・ミールザーについて〕

この年の末，**ズィール・ヒッジャ月**〔1506年4/5月〕，スルターン・フサイン・ミールザーはシャイバーニー・ハーンに向けて軍を率い，バーバー・イラーヒー Bābā Ilāhī に到達した時に，神の御許へ召された。

誕生と系譜 842年〔1438/39年〕，ヘラートでシャールフ・ミールザーの時代に生まれた。〔その系譜は〕Sulṭān Ḥusayn Mīrzā b. Manṣūr b. Bāyqarā b. ʻUmar Shaykh b. Amīr Tīmūr〔である〕。マンスール・ミールザーとバーイカラー・ミールザーは君主の位に即かなかった。

その母はフィールーザ・ベギム Fīrūza Begim であった。彼女は〔父方では〕ティムール・ベグの孫スルターン・フサイン・ミールザー Sulṭān Ḥusayn Mīrzā の娘で，〔母方を通じては〕ミーラーン・シャー・ミールザー Mīrān-shāh Mīrzā の孫娘であった。

スルターン・フサイン・ミールザーは父母共に君主の血統に属する (karīm al-ṭarafayn)，高貴な生まれの君主であった。彼と同腹の2人の男子と2人の娘がいた。バーイカラー・ミールザー Bāyqarā Mīrzā，スルターン・フサイン・ミールザー，アーカー・ベギム Ākā Begim，それにアフマド・ハーンがめとったバドケ・ベギム Badkä Begim という娘である。

バーイカラー・ミールザーはスルターン・フサイン・ミールザーより年長であったが，その臣下 (nökär) であった。ただし彼は宮廷会議 (dīwān) には列席しなかった。ディーワーン以外の所では，1つのマットレスに一緒に坐っていた。弟のフサインが彼にバルフ地方を与えていた。数年間，彼はバルフで支配した。彼には，スルターン・ムハンマド・ミールザー Sulṭān Muḥammad Mīrzā，スルターン・ヴァイス・ミールザー Sulṭān Ways Mīrzā，スルターン・イスカンダル・ミールザー Sulṭān Iskandar Mīrzā という3人の息子が

いた。

164a アーカー・ベギムは (164a) ミールザーの姉であった。ミーラーン・シャー・ミールザーの孫のスルターン・アフマド・ミールザー Sulṭān Aḥmad Mīrzā がめとっていた。1人息子がいた。キチク・ミールザー Kichik Mīrzā という名で，以前にはおじに仕えていたが，後には軍事から身をひいて学問 (mutāla'a) に専念した。学者になったと云われている。詩才もあったようである。この四行詩は彼の作品である。

私はこれまで自らを健全なるものとして讃えてまいりました。
自らを禁欲的な生活態度を持するものとして内外に示してまいりました。
しかし恋におちいった時，どれが禁欲で何が健全であるのかが分らなくなりました。
アッラーのおかげで，私は自らの本性を知る事ができました。

この四行詩はムッラー Mullā の四行詩とよく似ている。彼は晩年にはメッカのカーバの周回も行なった。

バドケ・ベギムもミールザーの姉であった。ミールザーはその空位時代に彼女をアフマド・ハーン・ハージー・タルハーン Aḥmad Khān Ḥājjī Tarkhān 〔「アストラハンのアフマド・ハーン」〕に与えた。1人の息子が生まれた。彼はヘラートに来て，まことに長期間，ミールザーに仕えた。

姿形と習慣 彼はやぶにらみ (qıyıq közlük) で，ライオンのような〔胸が厚く，腰が細い〕体形をした人物であった。腰から下が細かった。高齢で，ひげも白くなっていたが，すばらしい色彩の赤や緑の絹を身につけていた。黒い小羊の毛皮でできた帽子 (qara qozı börk) か，カルパク帽 (qalpaq) をかぶっていた。時々，宗教的な祭日には，小さな3つ巻きのターバンを非常に広くゆったりと巻いて，さぎの羽を挿し，礼拝におもむいていた。

品行と生活態度 最初に王権を獲得した時には，12イマーム派のイマームた
164b ちの名をフトバの中で読ませる考えを持っていたようである。(164b) しかしアリー・シール・ベグと数人のベグたちがそれを阻止した。その後は，彼の全ての諸公務は，スンナ (sunnat) とスンニー派の定め (jamā'at madhhabı) に一致していた。

関節の痛みのため，礼拝を行なう事ができなかった。断食も行なわなかった。よくしゃべる，気嫌のよい男であった。気性はいくぶん勝り過ぎであった。言

葉も気性と同じであった。いくつかの事柄の処置に当ってはシャリーアをきわめてよく尊重していた。1度，自分の1人の息子がある人物を殺害したため，この息子を被害者の一族に引渡し，法廷（dār al-qaḍā'）に送った。

最初，王権を獲得した時には，6～7年間禁欲していた。しかしその後は飲酒に溺れた。ホラーサーンで君主位にあったおよそ40年間で，正午の礼拝時の後，飲まぬ日は無かった。もっともさすがに朝から飲む事は無かったが。その王子たちや，全ての軍人たち・市民たちも同様であった。彼らは度を越して歓楽を追い，不道徳な生活を送っていた。

彼は勇敢な男らしい人物であった。いつも彼自ら刀をふるった。というよりあらゆる戦場でいつも彼は刀をふるった。ティムール・ベグの一族の内では，彼ほどに刀をふるった人物は他には知られていない。

詩才があった。詩集（dīwān）もまとめていた。トルコ語（türkī）で詩作していた。ペンネームはフサイニー Ḥusaynī であった。いくつかの詩は悪くなかった。しかしミールザーのディーワーンは全て1つの韻律で通されていた。

165a 年令の点でも，治世の長さの点でも偉大なる君主であったが，子供たち（165a）のように雄羊を飼い，鳩を楽しんでいた。鶏をも戦わせていた。

戦争　空位時代に，1度ゴルガーン川（Gorgān suyı）を泳いで渡り，1団のウズベク人をよく破った。

さらにいま1度は，スルターン・アブー・サーイード・ミールザーがムハンマド・アリー・バフシー Muḥammad ʻAlī Bakhshī に率いられた3,000人を強行軍で派遣した時，スルターン・フサイン・ミールザーは60名の若党と共に奮戦してこれを打ち破った。スルターン・フサイン・ミールザーの1つのすばらしく，かつめざましい戦績がこれであった。

さらに1度は，アスタラーバードでスルターン・マフムード・ミールザーと戦って勝利した。

さらにもう1度は，同様にアスタラーバードで，フサイン・トゥルクメンの子のサードルク・サード Saʻdlıq Saʻd を戦いの末破った。

また王権獲得の後，チナーラーン Chinārān で，ヤードガール・ムハンマド・ミールザー Yādgār Muḥammad Mīrzā と戦って勝利した。

さらにムルガーブ河畔のサリ・プル Sar-i Pul から強行軍で到着し，〔ヘラートの〕「からすの園」Bāgh-i Zāghān で，飲んで寝ていたヤードガール・ム

ハンマド・ミールザーを捕えた。まさにこの捕捉によって，彼はホラーサーンを掌握したのである。

またアンドゥホードとシャブルガーン近郊のチェクメンでスルターン・マフムード・ミールザーと戦って勝利した。

また，アバー・バクル・ミールザーが，イラークから来た黒羊朝トゥルクメンに加って来攻し，ウルグ・ベグ・ミールザーをタカーナ Takāna とヒマール Khimār で破り，カーブルを征服した。しかしアバー・バクルはイラークの混乱と共にカーブルを棄てて，ハイバル峠を越え，フーシャーブ Khūsh-āb とムルターン附近を過ぎてスィーヴィーに出，そこから進んでキルマーンを取
165b った。しかしそこを保ち得ず，(165b) ホラーサーン地方に入った。この時，スルターン・フサイン・ミールザーは強行軍でおもむき，彼を捕えた。

またベルチェラーグで息子のバディーゥッ・ザマーン・ミールザーを破った。

またハルワーの泉 (Ḥalwā cheshmä) で2人の子供たち，つまりアブル・ムフスィン・ミールザーとケペク・ミールザーを破った。

さらに1度は，軍を率いて来てクンドゥズを包囲したが征服できずに帰還した。

さらにまた1度は，ヒサールを包囲しながら征服できずに引返した。

さらに1度は，ズーン・ヌーンの領地に進んだ。ブストのダルガがブストを与えた。他に何事も為さず，ブストを放棄して引返した。

スルターン・フサイン・ミールザーの如く勇敢で偉大な君主が，今のべた2～3の戦では，君主にふさわしい決定を遂行せず，何事も為しおおせずに引返したのである。

またニシーン牧地 (Nishīn ulangı) で，ズーン・ヌーンの子のシャー・ベグと共に来ていた自らの息子のバディーゥッ・ザマーン・ミールザーを，戦って破った〔57b—58a 参照〕。この際，不思議な偶然の一致が起こった。スルターン・フサイン・ミールザーと共に〔ニシーン牧地に〕いた兵は少なかったらしい。兵の大部分をアスタラーバード近郊へ派遣していたらしい。まさにその戦の日，アスタラーバードに行っていた兵が帰って来て合流した。一方，こちら側からは，ヒサールをバイスングル・ミールザーに奪われて，スルターン・フサイン・ミールザーの所へ向っていたスルターン・マスウード・ミールザー

も，丁度この日到着した。スィーザール Sīzār〔又は<p. 206 Sabzār>〕に，バディーゥッ・ザマーンに対決するため急行していたハイダル・ミールザー Ḥaydar Mīrzā もこの同じ日に帰還した。

領地 ホラーサーン地方であった。東はバルフ，西はビスターム Bisṭām
166a (166a) とダームガーン Dāmghān，北はホーラズム，南はカンダハールとシースターンであった。彼はヘラートの如き都を手中にすると，夜となく昼となく，ただ歓楽と快楽の追求にのみ明け暮れた。単に彼のみではなかった——その部下・従者たちの内で歓楽・快楽を追求せぬ者はいなかった。彼は世界征服とか出兵の苦労・骨折りをしようとしなかった。その結果，必然的に，彼の死亡時，もはや従者も領地も，ただ減少しこそすれ，増える事はなかった。

子供たち 14男11女が残っていた。長男は**バディーゥッ・ザマーン・ミールザー**で，その母はサンジャル・ミールザーイ・マルヴィー Sanjar Mīrzā-yi Marwī の娘であった。

次は**シャー・ガリーブ・ミールザー** Shāh Gharīb Mīrzā で，せむし (bükri) であった。悪い体つきであったが，よい性格を持っていた。体力は無かったが，文筆にすぐれていた。ガリービー Gharībī をペンネームにしていた。詩集(ディーワーン)をもまとめていた。トルコ語とペルシア語の詩を作っていた。次の詩の1行は彼の作である。

通りすがりに天女の如き女(ひと)を見て，私の心は燃え狂うた。
名を何と云い，いずこに住む女なのか——私はその家のありかをすら知らぬのだ。

スルターン・フサイン・ミールザーはしばらくヘラートのハーキム職 (ḥukūmat) をシャー・ガリーブ・ミールザーに与えていた。父の在世中にこの世を去った。子女を残さなかった。

次は**ムザッファル・ミールザー**で，スルターン・フサイン・ミールザーの寵児がこの子であった。しかし，それにもかかわらず，さほど寵愛に値するような性格も持たず，また行動もしていなかった。他の息子たちはこれを全く度が過ぎると見なしたため，そのほとんどの者が〔父君に〕敵対した。両名〔シャー・ガリーブとムザッファル〕の母は，スルターン・アブー・サーイード・ミールザーの側女(グンチヤチ)であったハディージャ・ベギム Khadīja Begim であった。
166b (166b)〔アブー・サーイード〕ミールザーとの間にアク・ベギム Aq Begim

という名の１人の娘もいた。

次は**アブル・ムフスィン・ミールザー**と，ムハンマド・ムフスィン Muḥammad Muḥsin とも呼ばれる**ケペク・ミールザー**であった。この２人の母はラティーフ・スルターン・アーガーチャ Laṭīf Sulṭān Āghācha であった。

次は**アブー・トゥラーブ・ミールザー** Abū Turāb Mīrzā であった。以前には彼についてのまことによい評判を聞いていた。しかし彼は，父の病いが昂じると，種々のうわさを耳にして，弟のムハンマド・フサイン・ミールザー Muḥammad Ḥusayn Mīrzā と共に逃亡してイラークに行った。イラークで軍事を捨てて，ダルヴィシュの道を選んだ。それ以上，彼のうわさは聞いていない。１男があり，ソフラーブ・ミールザー Sohrāb Mīrzā という名であった。私がハムザ・スルターンとマフディー・スルターンに率いられたスルターンたちを破ってヒサールを奪取した時，彼は私の許にいた。１眼がつぶれていた。まことに見ばえしなかった。性格も体つきと同様であった。彼はある不適切な行為をして，留まる事ができなくなり去った。アスタラーバード附近で，ある不適当な行為のために〔サファヴィー朝の有力者の〕ナジュム・サーニー Najm Thānī が責め殺した。

次は**ムハンマド・フサイン・ミールザー**であった。イラークで，人びとがこの人物とシャー・イスマーイールとを１カ所に幽閉したという。その時，彼はイスマーイールに師事したという。後には彼は熱狂的な信者となった。その父も兄弟も全てスンニー派であったのに，この人物はこのような異端となったのである。彼はアスタラーバードで，まさにこの同じ外道と虚しい信仰をいだいたまま死んだ。人びとは彼を男らしく勇敢な人物だと云っていた。しかしそれについて書くに値するような事柄は何も無い。詩才はあったらしい。この詩の１行は彼の作である。

そなたは泥まみれ。いったいどんな獲物を追ってさまよわれたのか。

そなたは汗まみれ。いったいどんな熱い心もて過ぎ行かれたのか。

167a 次は（167a）**ファリードゥーン・フサイン・ミールザー**であった。強弓を引き，矢を巧みに射ていた。彼の用いたゴルーハ弓（kamān-i gorūha）は40バトマン（batman）であったと云われていた。彼自身は非常に勇敢であったが，勝運には恵まれず，戦う毎に敗北を喫した。ファリードゥーン・フサイン・ミールザーと弟のイブン・フサイン・ミールザー Ibn Ḥusayn Mīrzā は，ラ

バーティ・ドゥーダル Rabāṭ-i Dūdar で，ティムール・スルターン Tīmūr Sulṭān，ウバイド・スルターン ʻUbayd Sulṭān の率いるシャーイバク・ハーン Shāybaq Khān〔シャイバーニー・ハーンの異称〕の急襲隊と戦い，敗北した。その際，ファリードゥーン・フサイン・ミールザーはきわめてよい働きをした。ファリードゥーン・フサイン・ミールザーと〔バディーゥッ・ザマーン・ミールザーの子〕ムハンマド・ザマーン・ミールザー Muḥammad Zamān Mīrzā は，ダームガーンで，シャイバーニー・ハーンに捕えられた。シャイバーニー・ハーンは2人共に殺さず，すぐ釈放した。後，シャー・ムハンマド・ディーワーナー Shāh Muḥammad Dīwāna がカラート Qalāt を固めた時，彼はそこに行っていた。ウズベクがカラートを攻略した時，捕えられて殺された。

これら3名〔アブー・トゥラーブ，ムハンマド・フサイン，ファリードゥーン〕は，ミングリ・ビー・アーガーチャ Mingli Bī Āghācha という名の，ミールザーのウズベク人の側女から生まれた。

次は**ハイダル・ミールザー**で，その母はパーヤンダ・スルターン・ベギム Pāyanda Sulṭān Begim であった。彼女はスルターン・アブー・サーイード・ミールザーの娘であった。ハイダル・ミールザーは父の在世中にマシュハドとバルフで数年間ハーキムの地位にあった。スルターン・フサイン・ミールザーがヒサールを包囲した時，人びとはスルターン・マフムード・ミールザーのハーンザーダ・ベギムから生まれた娘をハイダル・ミールザーのために取ってめあわせ，ヒサールから出発した。1人の小さな娘が残された。シャード・ベギム Shād Begim という名で，彼女は後にカーブルに来た。私はアーディル・スルターン ʻĀdil Sulṭān に与えた。ハイダル・ミールザーはその父の在世中
167b に (167b) この世を去った。

次は**ムハンマド・マースーム・ミールザー**であった。カンダハールを彼に与えていた。この関係から〔父のスルターン・フサイン・ミールザーは〕ウルグ・ベグ・ミールザーの1女をこの息子のために求めた。彼女をヘラートに連れて来た時には大宴会を催し，すばらしいテント (chār-ṭāq) を建てた。〔父君が彼に〕カンダハールを与えていたが，黒白を問わず何事もシャー・ベグ・アルグンが行なっていた。このミールザーには権限も尊厳も無かった。このため彼はカンダハールに留まらず，ホラーサーンへ行った。父の在世中に死去した。

次は**ファッルフ・フサイン・ミールザー** Farrukh Ḥusayn Mīrzā <p. 208

であった。彼自身は長生きせず，弟のイブラーヒーム・フサイン・ミールザー Ibrāhīm Ḥusayn Mīrzā＞ よりはやくこの世を去った。

次は**イブラーヒーム・フサイン・ミールザー**であった。性格は悪くなかったと云われる。ヘラート・ワインを度を過ごして飲みに飲み，父の在世中に死んだ。

次は**イブン・フサイン・ミールザー** Ibn Ḥusayn Mīrzā と**ムハンマド・カースィム・ミールザー** Muḥammad Qāsim Mīrzā であった。彼らについては後に述べる予定である。

以上の5人のミールザーたちの母はパーパー・アーガーチャ Pāpā Āghācha であった。側女であった。

長女は**スルターヌム・ベギム** Sulṭānım Begim であった。独りっ子であった。母はチョリ・ベギム Chöli Begim という名で，アザーク Adhāq のベグ一族の娘であった。彼女はまことによく言葉を知っており，その言葉に欠点は見られなかった。〔スルターン・フサインは自分の〕兄のバーイカラー・ミールザーの真中の子のスルターン・ヴァイス・ミールザーの所に嫁に出した。1女1男が生まれた。娘をシャイバーン家のスルターンの1人であるユル・バルス・スルターン Yılı Bars Sulṭān の弟のイセン・クリー・スルターン Isän Qulī Sulṭān の所に嫁に出した。その息子が，現在私がカナウジュ Qanawj 地方を与えているムハンマド・スルターン・ミールザー Muḥammad Sulṭān
168a Mīrzā である。スルターヌム・ベギムは，まさに現時点で，(168a) 孫を連れてカーブルからヒンドゥースターンに向かう途中，ニーラーブで神に召された。人びとが彼女の遺骨を取ってもどった。孫も帰って来た。

次はパーヤンダ・スルターン・ベギム＜p. 209 から生まれた4人の娘である。最も年長なのが**アク・ベギム** Aq Begim＞であった。バーブル・ミールザーの妹ビケ・ベギム Bikä Begim の孫のムハンマド・カースィーム・アルラート Muḥammad Qāsim Arlāt の所に嫁に出していた。1人だけ娘が生まれた。カラ・キョズ・ベギム Qara Köz Begim という名で，ナースィル・ミールザーがめとっていた。

2番目の娘が**キチク・ベギム** Kichik Begim であった。スルターン・マスウード・ミールザーが非常に恋していた。彼がいかに頼んでも，パーヤンダ・スルターン・ベギムはその短所を見てとって与えなかった。後にサイイド・ア

タの血をひくムッラー・ホージャ Mullā Khwāja の所に嫁に出した。

3番目の娘の**ビケ・ベギム** Bikä Begim と4番目の娘の**アーガー・ベギム** Āghā Begim を，妹のラービア・スルターン・ベギム Rābi'a Sulṭān Begim の息子たちであるバーブル・ミールザー Bābur Mīrzā とスルターン・ムラード・ミールザー Sulṭān Murād Mīrzā に与えていた。

ミングリ・ビー・アーガーチャからは2女が生まれた。年長の娘の名は**バイラム・スルターン** Bayram Sulṭān であった。アンドゥホードのサイイド一族のサイイド・アブドゥッラー・ミールザー Sayyid 'Abd Allāh Mīrzā に与えていた。この人物は，バーイカラー・ミールザーの，娘が生んだ孫〔外孫〕に当る。1男があり，サイイド・バラカ Sayyid Baraka という名であった。彼は私がサマルカンドを征服した時，私に仕えた。後にはウルガンジュ Urganj 方面に下馬し王権をねらった。アスタラーバードでクズル・バシュ Qızıl-bash に殺された。

もう1人の娘の名は**ファーティマ・スルターン** Fāṭima Sulṭān であった。ティムール・ベグの血をひくヤードガール・ミールザー Yādgār Mīrzā に与えられていた。

パーパー・アーガーチャから3女が生まれた。年長が**スルターン・ニジャード・ベギム** Sulṭān Nizhād Begim であった。スルターン・フサイン・ミールザーはその兄の末子のイスカンダル・ミールザーの所に嫁に出していた。

2番目が**ベギム・スルターン** Begim Sulṭān であった。スルターン・マス
168b ウード・ミールザーに，ミールザーの眼が (168b) 不自由になった後に与えていた。1女1男が生まれた。娘はスルターン・フサイン・ミールザーの妃のアーパーク・ベギム Āpāq Begim に養育されていた。彼女はヘラートからカーブルに来た。私は彼女をサイイド・ミールザー・アーパークに与えた。ベギム・スルターンは，ウズベクがスルターン・マスウード・ミールザーを殺害した後，息子を連れてカーバ方面へおもむいた。現時点で，彼女自身と息子はメッカに居り，息子はかなり大きくなっているという情報が入っている。

3番目の娘は，サイイド・ミールザー Sayyid Mīrzā というアンドゥホードのサイイド一族の1人に与えられていた。サイイド一族の多くの者がサイイド・ミールザーという名で知られていた。

さらにもう1人の側女から1女が生まれた。**アーイシャ・スルターン** 'Āy-

sha Sulṭān という名で，その母はズバイダ・アーガー Zubayda Āghā で，ハサン・シャイフ・ティムール Ḥasan Shaykh Tīmūr の孫娘であった。シャイバーン家のスルターンの1人であるカースィム・スルターン Qāsim Sulṭān に与えられた。1男が生まれた。カースィム・フサイン・スルターン Qāsim Ḥusayn Sulṭān という名で，ヒンドゥースターンで私の前に伺候した。ラーナー・サンガ Rānā Sangā との戦〔1527年3月カーンワの戦〕にも参加した。私は彼にバダーウーン Badā'ūn を与えた〔329a 参照〕。カースィム・スルターンの後には，その一族のブラン・スルターン Būrān Sulṭān という者が彼女をめとった。1男が生まれ，アブドゥッラー・スルターン 'Abd Allāh Sulṭān という名で，現在は私に仕えている。年は若いが，その奉仕ぶりは悪くない。

妻妾たち　最初にめとったハトゥンは**ビケ・スルターン・ベギム**であった。サンジャル・ミールザーイ・マルヴィーの娘であった。バディーウッ・ザマーン・ミールザーはこの人から生まれた。まことに性根の曲がった女で，スルターン・フサイン・ミールザーを大いに悩ませた。ミールザーは，その曲がった根性にすっかり嫌気がさしていた。結局ミールザーは離縁して，やっと解放さ
169a れた。(169a) 彼に他にどうしようがあったであろう？正義はミールザーの側にあった。

悪女，善人の屋敷に居れば，
そはまさにこの世での地獄。

〔サーディー『薔薇園』第2章第31話〕

神がムスリムたちにこの不幸を与えられざらん事を！悪しき習いの性悪女が，おお神よ，この世に残らざらん事を！

次は**チョリ・ベギム**であった。アザークのベグ一族の娘であった。スルターヌム・ベギムが彼女から生まれた。

次は**シャフル・バーヌー・ベギム**であった。スルターン・アブー・サーイード・ミールザーの娘であった。〔スルターン・フサインは〕王位獲得後にめとった。〔スルターン・マフムード・ミールザーとの〕チェクメンの戦〔26a 参照〕で，〔スルターン・フサイン〕ミールザーの全ての妻たちが輿から降りて馬に乗った時，彼女は自分の弟〔スルターン・マフムード〕を頼りにして輿から降りず馬にも乗らなかった。人びとがこの事をミールザーに伝えた。このためミールザーはシャフル・バーヌーを離縁し，その妹の**パーヤンダ・スルター**

ン・ベギムをめとった。ウズベクがホラーサーンを征服した後，パーヤンダ・スルターン・ベギムはイラークへ行き，イラークで異邦人の境遇の内にこの世を去った。

次は**ハディージャ・ベギム**であった。スルターン・アブー・サーイード・ミールザーの側女であった。〔アブー・サーイード〕ミールザーとの間に1女があった。アク・ベギムという名である。ハディージャ・ベギムは，スルターン・アブー・サーイード・ミールザーがイラークで敗北した後ヘラートに来た。彼女をヘラートでスルターン・フサイン・ミールザーがめとった。寵愛した。側女(グンチヤチ)の階級 (ghunchachılıq martabası) から，妃(ベギム)の階級 (begimlik martabası) に昇進させた。後には彼女は大きな権勢をふるい，人びとは〔バディーゥッ・ザマーン・ミールザーの子〕ムハンマド・ムーミン・ミールザーを彼女の主張に従って殺害した。スルターン・フサイン・ミールザーの子供たちが〔父君に〕敵対した理由の大半がこれであった。彼女は自分を賢いと考えていた。しかし知性に欠けたおしゃべり女であった。異端でもあったらしい。彼女からシャー・ガリーブ・ミールザーとムザッファル・フサイン・ミールザーが
169b (169b) 生まれた。

次は**アーパーク・ベギム**であった。息子も娘も生まれなかった。彼女と同じほど寵愛されていたパーパー・アーガーチャは彼女の乳姉妹 (kökäldash) であった。彼女に子が無かったために，彼女はパーパー・アーガーチャの息子たちを自分の子供のように可愛がっていた。ミールザーの病臥中はきわめてよくつくした。妻たちの内で誰も彼女と同じほどにはつくす事ができなかった。彼女は，私がヒンドゥースターンに来た年にヘラートから来た。私も私に出来うる限りの丁重な扱いをした。〔1528年〕私がチャンディーリー Chandīrī を包囲していた時，彼女がカーブルで死去したという知らせが届いた。

側女 (ghūma) の1人が，**ラティーフ・スルターン・アーガーチャ**で，チャールシャンバヒー Chārshanbahī〔チャールシャンバ人〕の出身であった。アブル・ムフスィン・ミールザーとケペク・ミールザーは彼女から生まれた。

次は**ミングリ・ビー・アーガーチャ**で，ウズベク人であった。シャフル・バーヌー・ベギムの配下 (kishi qarasıdın) の出で，アブー・トゥラーブ・ミールザーとムハンマド・フサイン・ミールザーとファリードゥーン・フサイン・ミールザーの母であった。他に2人の娘もいた。

次は**パーパー・アーガーチャ**で，アーパーク・ベギムの乳姉妹であった。ミールザーが一目ぼれしてめとった。前述した，5男4女の母であった。

次は**ベギ・スルターン・アーガーチャ** Begi Sulṭān Āghācha であった。息子も娘も生まれなかった。

他に貴賤さまざまの側女たち（ghūmā ghunchachı）が多数いた。上述したのは，ハトゥンたちや側女たちの内で有力であった者たちである。

驚くべき事に，ヘラートの如きイスラーム都市（Islām shahrı）に君臨した，スルターン・フサイン・ミールザーの如き偉大なる君主の14人の息子たちの内，私生児（walad al-zinā'）でなかった者は僅か3人にしかすぎなかった。
170a ミールザー自身と（170a）その息子たち，さらに諸部族諸部民の間では不道・無道がごく当り前の事とされていた。その後7～8年の間に，わずかにムハンマド・ザマーン・ミールザーを除き，この偉大なる一族の足跡を示すべき者が誰一人として〔この世に〕残っていないという事実は，まさにこれらの者たちが生まれながらに背おった不幸の結末であった。

アミールたち　ムハンマド・ブルンドゥク・バルラースがいた。チャークー・バルラース Chākū Barlās の一族の出身であった。その系譜は，Muḥammad Burunduq b. ʻAlī b. Burunduq b. Jahānshāh b. Chākū Barlās である。バーブル・ミールザー〔Abū al-Qāsim Bābur〕の許でベグであった。その後，アブー・サーイード・ミールザーも寵愛し，この人物にジャハーンギール・バルラース Jahāngīr Barlās と一緒にカーブルを与えて，〔息子の〕ウルグ・ベグ・ミールザーの後見人（atäkä）としていた。スルターン・アブー・サーイードの死後，ウルグ・ベグ・ミールザーが〔この2人の〕バルラース人の命をねらう情況となった。彼らはそれを察知して，ミールザーを捕え，部民を連れてクンドゥーズ方面に移動した。〔しかし〕ヒンドゥークシュの上から，ミールザーを丁重にカーブルにもどしてやり，彼ら自らはホラーサーンのスルターン・フサイン・ミールザーの所へ行った。ミールザーも，まことに丁重に扱った。

ムハンマド・ブルンドゥクはきわめて知的な人物で，かつまことに指導者的な人物であった。鷹狩りをことのほか好んだ。1羽の鷹が死んだりいなくなったりすると，息子たちの名を口にして，あれが死んだ方がまだましだとか，あの子の首が折れても何でもないなどと云っていた程である。

次は**ムザッファル・バルラース** Muẓaffar Barlās であった。ミールザーの空位時代に共にいた。彼のどのようなよい働きがミールザーに気にいられたのかを私は知らぬが，ミールザーは彼に絶大の愛顧を与えていた。その重用の程は以下の如くであった。すなわちスルターン・フサイン・ミールザーはその空位時代に，彼と，どの地方であれもしそれを支配下に置いたならば，その$\frac{2}{3}$は
170b ミールザーのものとし，(170b) $\frac{1}{3}$は彼のものとするといった約束をしていたという。これは奇妙な約束である。臣下の者 (qarachu kishi) を君主が自分のパートナーとするなどという事が正当とみなされる事はありえない。弟や息子とすらもこのような約束は不可能である。ベグ階級の者とどうして可能でありえよう。王位獲得後，ミールザーはこの約束を後悔した。しかし後悔は何の役にも立たなかった。この暗愚の小人はまたこのような寵愛を受けると，ミールザーに対しますます増長した振舞に及んだ。ミールザーは冷静に行動できなかった。最後には彼は毒殺されたと云われていた。アッラーのみがその真実を知り給う！

次は**アリー・シール・ベグ・ナヴァーイー**であった。彼はミールザーのベグというより，むしろその友人であった。幼少の頃に寺小屋での同級生 (ham-maktab) であったという。その友情は絶大なものがあったらしい。スルターン・アブー・サーイード・ミールザーが，どういう咎(とが)で彼をヘラートから追放したのかは，私は知らぬ。彼はサマルカンドへ行った。彼がサマルカンドにいた数年間は，アフマド・ハージー・ベグが彼の保護者であり援助者であった。

アリー・シール・ベグの物腰は上品な事で有名である。人びとはその上品さを，彼の富がもたらす幻覚であると推測していた。しかしそうではなかったらしい。この上品さは，彼にとっては生まれつきのものであったらしい。彼は〔富も無く〕サマルカンドに滞在していた時もまったく同じように上品な物腰をしていたようである。

アリー・シール・ベグに比肩しうる者は存在しない。トルコ語での詩作という限りでは，誰も彼ほどに多くまた見事に詩作した者はいない。彼は6篇のマスナヴィー体の詩書を著している。その内の5篇は〔先人の〕『五部作』*Khamṣa* に対応し，残りの1篇は『鳥の言葉』*Manṭiq al-Ṭayr* の韻律による『鳥の弁舌』*Lisān al-Ṭayr* という作品である。4種の叙情詩集 (ghazalīyat dīwānı) を編んでいる。『少年時代の物珍しさ』*Gharāyb al-Ṣighar*, 『青年時

代の驚き』*Nawādir al-Shabāb*,『中年時代の珍しき事』*Badā'i' al-Wasaṭ*,『老年時代の収穫』*Fawā'id al-Kibar* と名づけられている。すぐれた『四行詩集』*Rubā'iyāt* もある。

171a さらに，ここに述べた諸作品に（171a）比べるとやや程度のおちる諸作品がある。その中には，自分の書簡類をマウラーナー・アブドゥル・ラフマーン・ジャーミー Mawlānā 'Abd al-Rahmān Jāmī にならって集めたものがある。すなわち彼はあらゆる人にあてた，あらゆる事のための，彼の手になるあらゆる手紙を集めていた。さらに『諸韻律の天秤』*Mīzān al-Awzān* という韻律学の書を著していた。非常に誤りが多い。24の四行詩の韻律の内，4つの韻律において誤りを犯している。若干の短長に関する（buḥūr-nıng）韻律にも誤りが見られる。韻律学に通じた者にはすぐに分るはずである。ペルシア語の詩集（ディーワーン）もまとめていた。ペルシア語の詩ではファーニー Fānī をペンネームにしていた。若干の詩は悪くないが，そのほとんどは弱々しく質が落ちる。また音楽でもよい作品を作曲していた。よい歌曲（naqsh）とすぐれた前奏曲（pīshraw）がある。

学者や芸術家たちに対して，アリー・シール・ベグに匹敵するような保護者・援助者は，いまだかつて他には知られていないであろう。弦楽器（sāz）において完璧の境地にあるウスタード・クル・ムハンマド Ustād Qul Muḥammad〔ウスタードは「先生」「師匠」〕，シャイヒー・ナーイー Shaykhī Nāyī〔ナーイーは「ナーイ奏者」〕，フサイン・ウーディー Ḥusayn 'Ūdī〔ウーディーは「ウード奏者」〕はいずれもベグの援助と保護とによってかくも上達し，名声を博したのであった。

ウスタード・ビフザード Ustād Bihzād とシャー・ムザッファル Shāh Muẓaffar はベグの努力と愛顧とによって，絵画の分野で有名・高名になったのであった。彼はこのように，人びとの将来の卓越のための基礎固めに尽したのであるが，そのためにこれ程までに力を用いた人は稀であろう。

彼は息子も娘も妻も家族も持たなかった。この世を唯独りで過ごした。最初は印璽官（muhrdār）であった。中年でベグとなり，しばらくアスタラーバードでハーキムを務めた。晩年は軍事から退いた。ミールザーからは何1つ取らなかった。というより毎年ミールザーに全額（kullī mablagh）を献上していた。（171b）彼はスルターン・フサイン・ミールザーがアスタラーバード遠征

171b

から帰還した際，出迎えに出た。ミールザーと会って立上ろうとした時，何事かが起こり，立上れなかった。かついで運ばれた。医師たちは全く病名を診断できなかった。翌日，神の御許に召された。詩の次の1行が状況によく合致している。

私はこの苦しみで死ぬ——病いが外にあらわれぬままに。

医師たちはこの災禍をどういやしてくれるのであろうか？

次は**アフマド・テヴェッキュル・バルラース** Aḥmad Tewäkkül Barlās であった。以前しばらく，カンダハールのハーキム職はこの人物の手中にあった。

次は**ワリー・ベグ** Walī Beg であった。ハージー・サイフッ・ディーン・ベグ Ḥājjī Sayf al-Dīn Beg の一族の出身であった。ヌクーズ Nukūz〔部族名〕である。ミールザーの大ベグ (uluq beg) であった。スルターン・フサイン・ミールザーの王位獲得後は長くは生きず，すぐに死んだ。真摯なイスラーム教徒で礼拝を行ない，素朴で誠実な人物であった。

次は**ハサン・シャイフ・ティムール** Ḥasan Shaykh Tīmūr であった。この人物をバーブル・ミールザーが可愛がり，ベグの階級に到達させていた。

次は**ノヤン・ベグ** Noyan Beg であった。その父はティルミズのサイイド一族の出身であった。母方でも，スルターン・アブー・サーイード・ミールザーとスルターン・フサイン・ミールザー両方の親族であった。スルターン・アブー・サーイード・ミールザーも寵愛した。スルターン・アフマド・ミールザーの許で有力なベグであった。スルターン・フサイン・ミールザーの許へもおもむいて，寵愛された。みだらな，束縛されぬ，酒好きの，遊び人であった。ハサン・ヤークーブ Ḥasan Ya'qūb は彼に仕えていたために，ハサニ・ノヤン Ḥasan-i Noyan〔「ノヤンの所のハサン」〕とも呼ばれていた。

次は**ジャハーンギール・バルラース**であった。カーブルで，しばらくの間，
172a ムハンマド・ブルンドゥクと共同でハーキムを務めた。(172a) ついでスルターン・フサイン・ミールザーの許におもむき寵愛された。立ち居ふるまいは上品で優雅であった。社交的な人物であった。狩や鷹狩のやり方をよく知っていたため，スルターン・フサイン・ミールザーはこれらに関する事柄をほとんど全て彼に任せていた。バディーゥッ・ザマーン・ミールザーの友達であった。ミールザーとの友情を想い出してはそれを讃美していた。

次は**ミールザー・アフマド・アリー・ファールスィー・バルラース** Mīrzā

Aḥmad ʻAlī Fārsī Barlās であった。詩を作ってはいなかったが，詩の才のある，詩をよく知った，優雅な，かなりユニークな人物であった。

次は**アブドゥル・ハーリク・ベグ** ʻAbd al-Khāliq Beg であった。シャー・ルフ・ミールザーが大変可愛がったベグであるフィールーズ・シャー・ベグ Fīrūz Shāh Beg はこの人物の祖父である。このためアブドゥル・ハーリク・フィールーズ・シャーとも呼ばれていた。しばしホーラズムがこの人物の手中にあった。

次は**イブラーヒーム・ドウラダイ** Ibrāhīm Dawladay であった。財務と行政に通暁していた。ムハンマド・ブルンドゥクと〔その面での〕双璧であった。

次は**ズーン・ヌーン・アルグン**であった。勇敢な人物であった。スルターン・アブー・サーイード・ミールザーの面前で，有力者たちの見ている前で (ikäliklärida)，よく刀をふるった。その後も，どこであれ，人におくれを取る事が無かった。その勇敢さについては疑問の余地が無かった。しかしいくぶん愚かな人物であった。彼は私たちのミールザーたちの許を離れて，スルターン・フサイン・ミールザーの許へ去った。スルターンはグールとニクダリーを与えた。彼は70～80人と共にその近辺でよく刀をふるった。ごく少数の兵で
172b (172b) きわめて多数のハザーラ人とニクダリー族をよく破った。ハザーラとニクダリーをあの程度の人数でおさえた者は他にはいない。しばらくして，彼にはザミーン・ダーワルも与えられた。

その子のシャー・シュジャー・アルグンも父と共に幼い頃から進軍して刀をふるった。スルターン・フサイン・ミールザーは，父親の意見に従って〔シャー・シュジャーを〕可愛がり，カンダハールを父親と共同統治という事で与えた。後，この父子は，あの父子〔スルターン・フサインとその子供たち〕の間に反目を生じさせ，反乱を起こした。最後には，私がホスロー・シャーを捕え，その従者・従士たちから引離し，カーブルをズーン・ヌーン＜p. 216 の末子のムキームから奪った年，ズーン・ヌーン＞とホスロー・シャーは，私の故に如何ともなし難くなり，スルターン・フサイン・ミールザーの許におもむいて彼に会った〔155a 参照〕。

スルターン・フサイン・ミールザーの死後，ズーン・ヌーンはきわめて有力となった。ヘラートの，オーバ Ūba，チャフチャラーン Chakhcharān といった山麓地方がこの人物に与えられた。バディーゥッ・ザマーン・ミールザーと

ムザッファル・ミールザーが共同統治を行なう事になった時，バディーゥッ・ザマーン・ミールザーの宮廷長（sāḥib-i ikhtiyār）がこの人物であった。ムザッファル・ミールザーの宮廷では，ムハンマド・ブルンドゥク・バルラースが宮廷長であった。

彼は勇敢さを持ちあわせていたが，いささかにぶい，やや愚かな（göl）人物であった。もしも愚鈍でなかったなら，以下に述べるようなおべっかを本気にして，自分自身の名をけがすような事がありえようか？話はこうである：彼がヘラートでかくも有力となり，かくも大きな権力を握った時，数人のシャイフやムッラーたちが彼の所へ来て，「天極が私どもと交わっております。貴方は“アッラーの獅子”（Hizābr Allāh）と呼ばれています。貴方は必ずウズベクを征服されるでしょう」と述べた。彼はこのおべっかを信じて，その首に〔ライオンのたてがみのように〕ナプキンをつけて，何度も礼を云った。

173a （173a）シャイバーニー・ハーンが，バードギース Bādghīs で，ミールザーたちの所に来攻して，ミールザーたちがそれぞれに合流するのを許さず打ち破った時，ズーン・ヌーンは100～150人ほどの兵と共にカラ・ラバート Qara Rabāṭ でシャイバーニー・ハーンと相対した。彼は先の言葉を信じて留まっていた。敵の多数がそこに到達すると，〔ズーン・ヌーンらを〕またたく内に制圧し粉砕した。彼らはズーン・ヌーンを捕えて殺した。

正統派の信仰を持っていた。礼拝をおこたらなかった。〔1日5回以上の〕格外の礼拝もしばしば行なっていた。チェス（shaṭranj）に熱中していた。人が1本の手で指せば，彼は両手で指していた。好きなだけ指していた。その性格には貪欲と卑しさがまさっていた。

次は**ダルヴィシュ・アリー・ベグ** Darwish ʻAlī Beg であった。アリー・シール・ベグの同腹の弟であった。しばらくバルフのハーキム職がこの人物の手中にあった。バルフでよいベグとしての仕事（begliklär）を行なった。愚鈍で，あまりよい所の無い人物であった。スルターン・フサイン・ミールザーが最初にクンドゥズ，ヒサールに来攻した時，人びとは愚鈍さのゆえに彼を捕らえさせた。バルフのハーキム職から更迭された。**916年**〔1510/11年〕に私がクンドゥズに来た時，彼は私の許に伺候した。おかしくなって，頭がぼんやりしていた。ベグに適わしい能力からも，近習としての値打からも程遠かった。おそらくアリー・シール・ベグのおかげであれ程に目をかけられたのである。

次は**モグール・ベグ** Moghūl Beg であった。しばらくヘラートのハーキム職がその手中にあった。後に，アスタラーバードを与えられた。アスタラーバードからイラークへ，〔白羊朝の〕ヤークーブ・ベグ Ya'qūb Beg の許へと逃亡して去った。かなりユニークな（yatīmcha）人物であった。いつもサイコロ遊びをしていた。

次は**サイイド・バドル** Sayyid Badr であった。まことに逞(たくま)しく，きわめて
173b 身のこなしの美しい人物（173b）であった。驚くほどに音感を持った（ṣāhib-i uṣūl）人物であった。不思議なほどうまく踊り，くりかえし踊っていた。おそらくその踊りは彼が創作したものであった。常にミールザーのお側に仕えていた。いつも酒や話しの相手をしていた。

次は**イスリーム・バルラース** Islīm Barlās であった。素朴な（türk）人物であった。鷹狩りの事をよく知っていた。いくつかの事柄を巧みに行なっていた。30～40バトマンの弓を射て的を貫いていた。ひょうたんの的を置いた射場（qabaq maydānı）で，射場の端からギャロップで駆けつつ矢を放ち，また矢をつがえて射てひょうたんの的に命中していた。さらに〔射手の用いる骨製の〕指サック（zihgīr）を，1～1.5カル〔qarı は「腕の長さ」〕の長さの綱の先に結び，綱のもう1方の端を1本の木に結んで回していた。〔指サックが木のまわりを〕なお回っている間に，彼が矢を射ると矢は指サック〔の穴〕を通過していた。このような驚くべき事が彼には多かった。いつも〔ミールザーの〕お側にはべり，あらゆる席に出席していた。

次は**スルターン・ジュナイド・バルラース** Sulṭān Junayd Barlās であった。後にはスルターン・アフマド・ミールザーの許に来ていた。この人物は，現在ジューナプール Jūnapūr のハーキム職を共同で勤めているスルターン・ジュナイド・バルラースの父親である。

次は**シャイフ・アブー・サーイード・ハーン・ダルミヤーン** Shaykh Abū Sa'īd Khān darmiyān〔ダルミヤーンは「間に」〕であった。彼がある戦の最中にミールザーの所へ馬を連れていったのか，それともミールザーの命をねらった〔敵とミールザーの間に入って〕敵を撃退したのかは私は知らぬ。しかしそういった理由で，彼はこのあだ名をつけられていた。

次は**ビフブード・ベグ** Bihbūd Beg であった。以前には小姓団にあって仕
170a えていた。ミールザーの空位時代における（174a）彼の奉仕を嘉して，ミール

ザーは，ビフブード・ベグに，その印章（tamgha）と貨幣に彼の名を付するという栄誉を与えていた。

次は**シャイフム・ベグ** Shaykhım Beg であった。スハイリー Sukhaylī をペンネームにしていたので，シャイフム・スハイリーと呼ばれていた。1篇のすぐれた詩を作っていた。恐ろしい言葉や意味をおりこんでいた。次の1行は彼の作品の1部である。

嘆きの夜，わがため息の施風は天球をくつがえし
わが涙の洪水なす龍はこの世界を咽み下したり。

1度，彼がこの1行をマウラーナー・アブドゥル・ラフマーン・ジャーミー Mawlānā ‘Abd al-Rahmān Jāmī の前でよんだ時，マウラーナーが「ミールザーよ。あなたは詩をよんでおられるのか，それとも人をこわがらせようとしておられるのか？」と云われたという話が有名である。詩集（ディーワーン）をまとめていた。マスナヴィー体の詩もあった。

次は**ムハンマド・ワリー・ベグ** Muḥammad Walī Beg であった。前述した〔171b 参照〕ワリー・ベグの息子であった。後にはミールザーの許で大ベグ（uluq beg）になっていた。大ベグであったにもかかわらず，奉仕をおこたらなかった。夜も昼も宮廷につめ，食事や宴会も常に宮廷内でとり行なっていた程であった。このように奉仕する人物があのような寵愛を受けるのは必定である。今日（こんにち），ベグと呼ばれるような人物の後ろには5～6人のはげやめくらがつき従い，ベグを宮廷に連れて来るには大変な苦労が必要であるというのは，まことに情けない事である。あのような奉仕は今やいったい何処に存在するのであろうか？彼ら自身の不幸というべきであろう。

ムハンマド・ワリー・ベグの食事や宴会はすばらしかった。一様に家臣たち
174b の面倒をみていた。貧窮者たちには（174b）自らの手で多くの施しを与えていた。口ぎたなく，口さがない人物であった。**917年**〔1511/12年〕，私がサマルカンドを征服した時，ムハンマド・ワリー・ベグとダルヴィシュ・アリー・キターブダール〔kitāb-dār は「司書」〕が私の許にいた。彼は，その時，中風になっていた。その言葉も，またその人物そのものも味に欠けていた。あれ程に寵愛される程の値打ちは無かった。おそらくその奉仕が彼をあの地位にまで到達させたのであろう。

次は**バーバー・アリー・イシクアーガー** Bābā ‘Alī ishik-āghā であった。

はじめはアリー・シール・ベグが目をかけていた。後にはその勇敢さの故にミールザーが取りたててイシク・アーガーとし，ベグの身分に到達させた。現在私のもとでベグであり寵臣（muqarrab）であり近習（ichki）であるユーヌス・アリー Yūnus ʻAlī ——彼については何度も述べる予定である——はこの人物の息子である。

次は**バドルッ・ディーン** Badr al-Dīn であった。以前にはスルターン・アブー・サーイード・ミールザーのサドル（ṣadr）〔大法官〕であったミーラク・アブドゥル・ラヒーム Mīrak ʻAbd al-Rahīm の許にいた。非常に敏捷であったらしい。7頭の馬を跳び越えたと云われている。彼とバーバー・アリーは友達であった。

次は**ハサン・アリー・ジャラーイル** Ḥasan ʻAlī Jalāyr であった。もともとの名はフサイン・ジャラーイル Ḥusayn Jalāyr であったが，ハサン・アリーの名で知られている。その父のアリー・ジャラーイル ʻAlī Jalāyr をバーブル・ミールザーが寵愛してベグにした。ついでヤードガール・ムハンマド・ミールザーがヘラートを取った時，アリー・ジャラーイルより有力な者はいなかった。ハサン・アリー・ジャラーイルはスルターン・フサイン・ミールザーの許でクシュ・ベギ（qush begi）であった。詩人であった。トゥファイリー Ṭufaylī をペンネームにしていた。カスィーダ（qusīda）〔頌詩〕をまことに見事に作っていた。当時のカスィーダの達人であった。私がサマルカンドを征服した**917年**〔1511/12年〕に私の許に来た。5～6年，私の許にいた。私の名
175a で見事なカスィーダをよんだ。大胆な浪費家（175a）であった。稚児を可愛がっていた。常に西洋スゴロク（nard）を楽しんでいた。サイコロ遊びをしていた。

次は**ホージャ・アブドゥッラー・マルワーリー** Khwāja ʻAbd Allāh Marwārī であった。以前はサドルであった。後に近習，寵臣，ベグとなった。美点の多い人物であった。カーヌーン（qānūn）〔弦楽器の1種〕を誰も彼ほどには演奏できなかった。カーヌーンにおけるギリフト（girift）の技法〔震音を出すために指で弦を振動させたりする技法〕はこの人物が考案したものであった。書をよくし，ターリーク体の文字をかなり巧みに書いた。文書作成も巧みであった。弁の立つ人物であった。詩をつくり，バヤーニー Bayānī をペンネームにしていた。その詩は，彼のその他の長所に比べると，はるかに劣っていた。

しかし詩をよく知っていた。好色で憚るところが無かった。放蕩の報いで天然痘（ābila）に犯され，手足の自由を失い，数年の間あらゆる種類の苦しみを味い，まさにこの状態のままこの世を去った。

次は**ムハンマド・サイイド・ウルース** Muḥammad Sayyid Urūs であった。スルターン・アブー・サーイード・ミールザーの王位獲得時に有力な権勢あるベグであったウルース・アルグン Urūs Arghun はこの人物の父親である。当時は矢を巧みに射る若党たちがいたが，この人物もそのような達人たちの１人であった。その弓は強く，矢は長かった。肝のすわった，すぐれた射手であったらしい。アンドゥホードのハーキム職がしばらくその手中にあった。

次は**ミール・アリー・ミーラーフール** Mīr ʻAlī mīr-ākhūr であった。スルターン・フサイン・ミールザーの許に人を遣し，ミールザーをしてヤードガール・ムハンマド・ミールザーの不意を襲わせたのがこの人物である。

次は**サイイド・ハサン・オグラクチ** Sayyid Ḥasan oghlaqchı であった。サイイド・オグラクチの息子で，サイイド・ユースフ・ベグの弟であった。彼にはミールザー・ファッルフ Mīrzā Farrukh という名の評判の高い有能な息子
175b が（175b）いた。**917年**〔1511/12年〕私がサマルカンドを征服した時，彼は私の許に来ていた。詩は少ししか作らなかったが，巧みに作っていた。アストロラーベ（asṭurlāb）〔天文観測儀〕と天文学を熟知していた。一緒にいると楽しく，社交も巧みであった。いくぶん酒ぐせは悪かった。〔1512年の〕グジュドゥワーン Ghujduwān の戦で死んだ。

次は**テングリ・ベルディ・サーマーンチ**であった。素朴で，勇敢で，刀の腕のよい（qılıchlıq）ベグであった。前述した如く〔57a—57b 参照〕，バルフの城門で，ナザル・バハードゥルという名のホスロー・シャーの偉大な従士をよくうち取った。

次は数人の**トゥルクメン人のベグたち**で，彼らはミールザーの許に来て目をかけられていた。先に来た者の１人は**アリー・ハーン・バユンドゥル** ʻAlī Khān Bayındır であった。次は**アサド・ベグ** Asad Beg と**タハムタン・ベグ** Tahamtan Beg であった。この２人は兄弟であった。タハムタン・ベグの娘をバディーゥッ・ザマーン・ミールザーがめとっていた。彼女からムハンマド・ザマーン・ミールザーが生まれた。次は**イブラーヒーム・チャガターイ** Ibrāhīm Chaghatāy であった。次は**アミール・ウマル・ベグ** Amīr ʻUmar

Beg で，後にはバディーゥッ・ザマーン・ミールザーの許にいた。勇敢で素朴なすぐれた人物であった。アブル・ファトフ Abū al-Fatḥ という名の1子がイラークから私の許に来た。現在もいる。まことに弱々しく勇気に欠けしっかりしていなかった。あのような父親からこのような子が生まれる事があるとは！

後に来た者たちは，シャー・イスマーイールがイラークとアーザルバイジャーンを支配下においた時に，そこからホラーサーンに来た者たちである。その内の1人は**アブドゥル・バーキー・ミールザー** 'Abd al-Bāqī Mīrzā であった。ティムール・ベグの一族の出身である。ミーラーン・シャー家に属する。以前
176a から，これらの一族はかの地方におもむき，王権をとる希望を（176a）捨て去って，かの地の諸君主に仕え，目をかけられて来ていた。このアブドゥル・バーキー・ミールザーの父方のおじティムール・ウスマーン Tīmūr 'Uthmān は〔白羊朝の〕ヤークーブ・ベグの許で，有力な身分の高いベグであったらしい。彼は，1度は，ホラーサーンに向け大軍を集めて派遣する考えをも持った。アブドゥル・バーキー・ミールザーが到着すると，スルターン・フサイン・ミールザーはよく目をかけ，女婿にして，ムハンマド・スルターン・ミールザーの母であるスルターヌム・ベギムを与えた。さらに，後に来た者たちの1人が**ムラード・ベグ・バユンドゥル** Murād Beg Bayındır であった。

サドル〔大法官〕たち　まず**ミール・サル・バラフナ** Mīr Sar Barahna〔サル・バラフナは「はげ頭」〕がいた。アンディジャーンの村々の出身（kentläridin）である。おそらく，自称サイイド（mutasayyid）である。まことに一緒にいると楽しく，気だてのよい，上品な物言いの人物であった。ホラーサーンの学者や詩人たちの間では彼の考え方や意見が尊敬され信頼されていた。『アミール・ハムザ物語』*Amīr Ḥamza qiṣṣası* にならった作品を書く事にその生涯を無駄使いし，冗長な嘘物語をまとめ上げた。この事は自然さや良識に反する事である。

次は**カマールッ・ディーン・フサイン・ガーズルガヒー** Kamāl al-Dīn Ḥusayn Gāzurgahī であった。スーフィー（ṣūfī）〔イスラーム神秘主義者〕ではなかったが，スーフィーであると自称していた（mutaṣawwif edi）。アリー・シール・ベグの許に，このような自称スーフィーたちが集められて，忘我の境地を味わったり，音曲に聴きいって恍惚境に入ったりしていたようである

(wajd wä samā‘ qılurlar ekändur)。ほとんどの者たちより，この人物の血統がよりすぐれていたらしく，おそらくそれが寵愛の理由であった。彼には，他に語るべき程の長所は無かった。

彼には『恋人たちの集い』*Majlis al-'Ushshāq* という名の１つの作品があり彼はスルターン・フサイン・ミールザーの名でそれをまとめ著していた。まことに弱々しい作品で，ほとんどの話がつくり事，それも下品なつくり事で，
176b (176b) 粗野な言葉を書き連ねていた。あまりにひどいので，若干の人びとに彼が邪教徒ではないかと疑われたほどである。例えば，彼は多くの使徒——彼らに平安のあらん事を——や聖者たちを実際には存在しない恋愛事に関係させ，それぞれの方がたに恋人とか愛人をあてがっている。また彼が序文の中でスルターン・フサイン・ミールザー自身の作品であると書いておきながら，本文中にもりこんだカマールッ・ディーン・フサインの〔作品である事を誰でも知っている〕詩やガザルの冒頭に，全て「著者〔スルターン・フサイン・ミールザー〕の作」と書いているのは，まことに馬鹿げた事である。まさにこのカマールッ・ディーン・フサインのおべっかによって，ズーン・ヌーン・ベグが≪アッラーの獅子≫と呼ばれたのである〔172b 参照〕。

ワズィールたち　１人は**マジュドゥッ・ディーン・ムハンマド** Majd al-Dīn Muḥammad であった。シャー・ルフ・ミールザーの不動のディーワーン〔・ベグ〕〔財務長官〕であった (Shāh-rukh Mīrzānıng yak-qalama dīwānı) ホージャ・ピール・アフマド・ハーニー Khwāja Pīr Aḥmad Khānī の息子であった。以前には，スルターン・フサイン・ミールザーのディーワーン〔財務庁〕には望ましい秩序や規律が存在しなかった。浪費や無駄な出費が多かった。民も栄えず，兵もよろこばなかった。

当時，マジュドゥッ・ディーンは勅書起草官 (parwānachı) であった。ミーラク〔小ミール〕と呼ばれていた。ミールザーにかなり少額の金銭 (yarmaq) が必要になって，ミールザーがディーワーンの役人 (dīwānī) たちに要求すると，彼らは「ありません。御用だてできません」と答えた。マジュドゥッ・ディーン・ムハンマドがそこにいたという。彼は微笑した。ミールザーがわけを聞くと，人払いして，「ミールザーが私の権限を増して，私の云う事を無視し
177a ないと約束して下さるならば，私は短期間で，国が (177a) 栄え，民がよろこび，国庫が充満し，兵が多数となるように致しましょう」とその心の内にある

所のものを申し上げた。ミールザーも，彼が望んだ通りにすると約束し，ホラーサーン全域において彼を権限の所有者とし，あらゆる重要事を彼の裁量に任せた。

彼も最大限の努力を重ね，短期間の内に軍民を満足させた。国庫にも多額の金銭を納め，諸地方を繁栄させた。しかし彼は，アリー・シール・ベグをはじめとする全てのベグたちや高官たち (ahl-i manṣab) とは敵同志のようにして暮していた。このため全員が彼の敵となった。彼らはいろいろと主張したり示唆したりしてマジュドゥッ・ディーン・ムハンマドを捕えさせ，免職させた。

彼の代りに，**ニザームル・ムルク** Niẓām al-Mulk がディーワーンとなった。彼らは，しばらくすると，ニザームル・ムルクをも捕えさせて処刑し，**ホージャ・アフザル** Khwāja Afḍal をイラークから連れて来てディーワーンにした。私がカーブルに来た時には，彼らはホージャ・アフザルをベグにしていた。彼はディーワーンでも印章を押していた。

次は**ホージャ・アター** Khwāja Aṭā であった。上述の人びとの如く高官でもディーワーンでもなかったのに，全ホラーサーンにおいてホージャ・アターの意見抜きでは，1つとして重要事が決定される事は無かった。敬虔な，礼拝をおこたらぬ，信仰の厚い人物であった。仕事熱心さも持ち合わせていたようである。

以上がスルターン・フサイン・ミールザーの家臣・従者たちであった。

177b スルターン・フサイン・ (177b) ミールザーの時代は驚くべき時代であった。ホラーサーン，なかんずくヘラートの町はすぐれた者たちや比類無き人びとで満ちあふれていた。ある1つの仕事に専心している人びとは，皆が皆，その仕事を完璧の域にまで高めたいという望みをいだいていた。

このような人びとの内の1人が，**マウラーナー・アブドゥル・ラフマーン・ジャーミー**であった。顕学においても秘密道〔イスラーム神秘主義〕(ẓāhir wä bāṭin ulūmı) においても，彼に匹敵する者はいなかった。彼の詩は，いうまでもなくよく知られている。ムッラーの卓越さは，記述を必要とする域をはるかに越えている。要するに，私が縁起をかつぎ幸運をひきこむために，この小さな書物の中にかのお方のお名前を記し，そのほんの1部の徳性を記述しておこうとふと考えたものにしかすぎぬ。

次は**シャイフル・イスラーム・サイフッ・ディーン・アフマド** Shaykh al-Islām Sayf al-Dīn Aḥmad であった。マウラーナー・サードゥッ・ディーン・タフターザーニー Mawlānā Sa'd al-Dīn Taftāzānī の一族の出身であった。サードゥッ・ディーン以来，ホラーサーンの国々では，シャイフル・イスラームの地位をこの一族の人びとが占め続けている。まことに学識の深い人物であった。アラブの諸学問と伝承学をよく知っていた。きわめて敬虔な信仰深い人物であった。彼はシャーフィイー学派に属したが，他の諸学派をも尊重していた。彼は70歳近くまで集団礼拝に欠席する事は無かったと云われている。シャー・イスマーイールがヘラートを占領した時に彼を殉教者とした〔殺した〕。この一族に属する者は誰も生き残らなかった。

次は**マウラーナー・シャイフ・フサイン** Mawlānā Shaykh Ḥusayn であった。ムッラー・シャイフ・フサインの登場と昇進はスルターン・アブー・サーイード・ミールザーの時代に属するようではあるが，彼はスルターン・フサイ
178a ン・ミールザーの時代にも活躍していたので（178a）ここに記述する事にした。哲学，論理学，修辞学をよく知っていた。少い言葉の中に多くの意味を見出して，的確に会話を交す事は彼が考え出した事柄であった。スルターン・アブー・サーイードの時代には，ミールザーのごく近しい側近で権力者であった。全ての王国の重要事には彼の介入が見られた。ムフタスィブの職務（iḥtisāb）では，誰も彼よりうまくできなかった。彼がスルターン・アブー・サーイードの寵臣であったという理由で，スルターン・フサイン・ミールザーの時代には，人びとはこのような無比の人物に対して軽蔑のまなざしを向けていた。

次は**ムッラーザーダ・ムッラー・ウスマーン**であった。カーブルの諸地区（tümänlär）の1つであるラフーガル地区のチャルフという村の出身である。ウルグ・ベグ・ミールザーの時代に14歳で講義をしたために，ムッラー・マーダルザード Mullā Mādarzād〔「生まれながらのムッラー」〕と呼ばれていたという。彼がサマルカンドより出発して〔メッカの〕カーバをめぐり，ヘラートに来た時，スルターン・フサイン・ミールザーがひきとめてめんどうを見た。まことに学識の深い人物であった。当時，彼ほどの碩学は他にはいなかった。イジュティハード ijtihād〔神の言葉に対する創造的解釈〕を行ないうる境地に達していたが，イジュティハードは行なっていなかった。彼は「他の人は聞いた事をどうして忘れるのだろうか？」と云っていたと伝えられている。抜群

の記憶力を持っていたのであろう。

次は**ミール・ムルターズ** Mīr Murtāḍ〔ムルターズは「苦行者」〕であった。
178b 彼は哲学と純粋哲学（ma'qūlāt）をよく知っていた。彼がしばしば（178b）断食を行なっていたというのでこの名で呼ばれていた。チェスをことのほか愛好していたという。彼がたまたま2人のチェス仲間に出くわすと，その1人とチェスを指し，もう1人が立ち去らぬようにと，その〔衣服の〕端をつかんで坐っていた程であった。

次は**ムッラー・マスウード・シールワーニー** Mullā Mas'ūd Shīrwānī であった。

次は**ムッラー・アブドゥル・ガフール・ラール** Mullā 'Abd al-Ghafūr Lār で，マウラーナー・アブドゥル・ラフマーン・ジャーミーの〔イスラーム神秘主義に関する〕弟子でもあり，また〔一般の学問に関する〕生徒でもあった。ムッラー〔ジャーミー〕のほとんどの作品をムッラーの前で読誦していた。『ナファハート』*Nafaḥat* に対する註解の如きものを書いていた。顕学の素養が豊かであった。顕学の素養にもかかわらず，秘密道についても多くのものを会得していた。不思議なほど無頓着な，型にとらわれぬ人物であった。人びとに先生（ムッラー）と呼ばれているほどの者たちでも，彼の前にコーランの章を〔説明してもらうために〕持って行く事に，恥かしいと思う必要は何も無かった。また，どこであれダルヴィシュが姿を現わしたと聞くと，〔教えを乞うために〕そのダルヴィシュの所に行きつくまでは，彼の心は安まらなかった。

〔1506年〕私がホラーサーンにおもむいた時，ムッラー・アブドゥル・ガフールは病床にあった。私は，ムッラー〔ジャーミー〕の墓に参拝した時，ムッラー・アブドゥル・ガフールの見舞いにおもむいた。彼はムッラーのマドラサ〔イスラーム学院〕にいた。彼は数日後，この病いによってこの世を去った。

次は**ミール・ジャマールッ・ディーン・ムハッディス** Mīr Jamāl al-Dīn muḥaddith〔ムハッディスは「ハディース語り」〕であった。ハディース学〔伝承学〕をホラーサーンで彼ほどによく知っている者は他にはいなかった。非常な高齢であった。現在もなお生存している。

次は**ミール・アターゥッラー・マシュハディー** Mīr 'Aṭā Allāh Mashhadī であった。アラブの諸学問をよく知っていた。韻律学に関する1冊のペルシア語の論文（risāla）を著していた。その論文の欠点は，例文に全て自作の詩を

179a (179a) 引用している事と，各詩の前に「この私めの詩にあるように」という言葉が必要であると考えている点である。若干の彼の論敵たちは，この韻律学の論文について，正しいコメントを行なっている。彼はまた，詩の技法に関する『諸技法の不思議』*Badā'i' al-Ṣanā'i'* という論文を書いている。まことによく書かれている。宗派という点では，背く点があったようである。

次は**カーズィー・イフティヤール** Qāḍī Ikhtiyār であった。カーズィー〔法官〕の仕事をよく行なった。法学に関する1冊のペルシア語の論文を書いていた。すぐれた論文である。また1つのテーマによって引用できるようにするために，コーランの同内容の詩句を集めていた。私がムルガーブでミールザーたちに会った時〔185b 参照〕，ミールザーたちはカーズィー・イフティヤールとムハンマド・ミール・ユースフ Muḥammad Mīr Yūsuf と共に来て私に会った。バーブリー文字について話が出た。彼は1字1字についての詳しい説明を求めた。私はそれを書いた。その会合で，彼はその説明を読み，原則を書きこみ，さらに何事かを書きこんだ。

次は**ミール・ムハンマド・ユースフ**であった。シャイフル・イスラームの弟子であった。後にシャイフル・イスラームは自分の地位に彼をすえた。若干の会合では，シャイフル・イスラームがカーズィー・イフティヤールより上席を占め，また別の若干の会合では後者が上席を占めた。彼は後には軍事と指揮官としての仕事にあまりにも熱狂し，この2つに関する事柄以外は，彼の話す事から何の新知見も得られなかったし，また彼の書く事から何の知恵も得られなかったほどであった。もっともこの2つから彼が得たものは皆無であった。結局，この2つの野望のために，彼はその財産も生命もまた家・屋敷をも失った。シーア派教徒であったらしい。

179b **詩人たち** あらゆる詩人たちの中で最大の巨匠が (179b) **マウラーナー・アブドゥル・ラフマーン・ジャーミー**であった。

次は，**シャイフム・スハイリー**と**フサイン・アリー・トゥファイリー**であるが，彼らの名と特徴については，すでにスルターン・フサイン・ミールザーのベグや側近たちのグループについて述べた所でふれた〔174a，174b 参照〕。

次は**アーサフィー** Āṣafī であった。ワズィールの息子であったために，〔ワズィールに多いアーサフという名をとって〕アーサフィーをペンネームにしていた。その詩は色彩と情感に欠ける所は無かったが，熱情や恍惚感 (ḥāl) の面

では不十分であった。彼自身は「私はいまだかつて私のガザル〔叙情詩〕を詩集にまとめようと思った事などありません」と云いはっていた。しかしそれは多分表向きの云いぐさであった。彼のガザルを彼の弟か関係者が集めていた。ガザル以外の種類の詩は少ししか作っていなかった。私がホラーサーンへ行った時，彼は私の前に伺候した。

次は**ビナーイー**〔又はバンナーイー Bannā'ī〕であった。ヘラート生まれで，その父親のウスタード・ムハンマド・サル・バンナー Ustād Muḥammad sar-bannā〔サル・バンナーは「れんが師頭(がしら)」〕の故に，このようなペンネームにしていた。そのガザルには色彩と恍惚感があった。詩集(ディーワーン)をまとめていた。マスナヴィー体の詩もあった。1つのマスナヴィーでは，果物を主題に，ムタカーリブ mutaqārib の韻律〔⏑--/⏑--/⏑--/⏑-〕を用いてとりとめもない事をうたっている。これは丹精して作られたものではない。またもう1篇の短いマスナヴィーがあり，ハフィーフ khafīf の韻律〔-⏑--/--⏑-/-⏑--/--⏑-〕を用いている。さらにもう1篇の長いマスナヴィーがあり，それもハフィーフの韻律で書かれている。彼はこのマスナヴィーをその晩年に完成した。

以前には，彼は音楽に通じていなかったようである。このためにアリー・シール・ベグが彼を批判していたという。ある年，〔スルターン・フサイン〕ミールザーがマルヴへ越冬のためおもむいた時，アリー・シール・ベグも随伴した。ビナーイーはヘラートに残った。その冬，彼は音楽を勉強した。春まで
180a には作曲するほどにまでなった。春にミールザーがヘラートに帰ると，(180a) 彼は〔皆の前で〕サウト ṣawt〔ライト・モティーフにかわって演奏されるメロディー〕とナクシュ naqsh〔歌曲〕を歌った。アリー・シール・ベグは驚嘆して賞め讃えた。彼は音楽でよい作品を作っていた。この内には1つのナクシュが含まれる。『九つの音色』*Nuh rang* と名づけられており，九つの音色の終結部 (tükänish) とナクシュのカデンツァ (maylā) はラースト rāst 音階で作曲されている。

彼はアリー・シール・ベグの非常なライヴァルであったようである。このため非常に苦しい立場に立たされた。最後には〔ヘラートに〕留まりえず，イラークとアーザルバーイジャーンへヤークーブ・ベグの許におもむいた。ヤークーブ・ベグのもとでは悪くない待遇をうけ，宮廷会議にも列席していた。ヤークーブ・ベグの死後，その地方に留まりえず，ヘラートに帰った。相変らず

揶揄したり，言葉を返したりしていた。例えば，ある日，チェスの集りでアリー・シール・ベグがその足を延ばすとビナーイーの尻にふれた。アリー・シール・ベグが冗談に「まったくひどい災難じゃのう！このヘラートじゃ足を延ばすと詩人の尻に当るのじゃから」と〔ペルシア語で〕云った。するとビナーイーは「足をもとに戻してごらんなされ。また詩人の尻に当りますがな」と〔ペルシア語で〕答えた。結局，こういった揶揄のため，彼は再びヘラートからサマルカンドに去った〔38a 参照〕。

アリー・シール・ベグは多くの物を考え出していた。しかもよい物を考え出していた。誰もが何事であれ何かを考え出した時には，その宣伝と世間受けのためにそれを≪アリー・シール風≫（'Alī-shīrī）と呼んでいた。ある人びとがからかいの気持でその事をアリー・シール・ベグの耳に入れた。例えば，アリー・シール・ベグが耳の病いにかかった時，彼が〔耳に〕ハンカチを結んでいたため，女性たちは青いハンカチを三角に結んだものを≪アリー・シール風エレガンス≫（nāz-i 'Alī-shīrī）と名づけていた。また別の話に，ビナーイーが
180b ヘラートを離れる時，(180b) 彼はそのろばのために荷鞍職人に特別の荷鞍を作らせた。そしてその名を≪アリー・シール風≫と名づけ，それが有名になったという。

次は**サイフィー・ブハーリー** Sayfī Bukhārī であった。ムッラーとしてのかなりの素質をそなえていた。読んだ本のリストを人びとに示して，自分がいかにムッラー的であるかを誇示していた。詩集をまとめていた。また，あらゆる商人のために書いた1巻の詩集もあった。諺を沢山書いていた。次のキトア qiṭ'a〔断片詩〕が示しているように，彼はマスナヴィーは書いていなかった。

マスナヴィーが詩の正統ではあるが，
私はガザルを私に課された義務と考える。
心楽しませるガザルの5行は，
両種の『マスナヴィー体五書』*Khamsatayn* にも勝ると考える。

1冊の韻律学の書を著している。まことに舌たらずである。またあらゆる規準からすればまことに繁雑である。舌たらずというのは，必要な事を書いていないという事である。繁雑であるというのは，分りきった当り前の事を細かい点や母音符号までも書いているという事である。葡萄酒をやたらに飲み，酒ぐせが悪かったようである。腕力が強かったらしい。

次は**アブドゥッラー・マスナヴィー・グーイー** ʻAbd Allāh mathnawī-gūī〔マスナヴィー・グーイーは「マスナヴィーよみ」〕であった。ジャーム Jām の出身であった。ムッラー〔ジャーミー〕のおい〔姉妹の子〕で，ペンネームはハーティフィー Hātifī であった。『五書』*Khamsa* に対応してマスナヴィーを書いていた。『7つの像』*Haft Paykar* に対応してうたったマスナヴィーに『7つのかんばせ』*Haft Manẓar* という名をつけていた。『スカンダルの書』*Skandar-nāma* に対応するマスナヴィーでは『ティムールの書』*Tīmūr-nāma* と名づけていた。これらのマスナヴィー体詩の中では『ライラーとマジュヌーン』*Laylā wä Majnūn* が最もよく知られている。しかし，評判ほどにはすぐれた点は見られなかった。

次は**ミール・フサイン・ムアンマーイー** Mīr Ḥusayn muʻammā'ī〔ムアンマーイーは「なぞなぞ作り」〕であった。おそらく誰もなぞなぞ (muʻammā) を彼ほどには作れなかった。いつもなぞなぞの事を考え続けていたようである。驚くほどつつましやかな，わびしい，無害の人物であったようである。

181a (181a) 次は**ムッラー・ムハンマド・バダフシー** Mullā Muḥammad Badakhshī であった。イシュケミシュの出身であった。イシュケミシュはバグフシャーンの内部には属さない。バダフシーをペンネームにしているのは不思議である。その詩は，ここで述べた詩人たちの詩に匹敵するようなものは無かった。なぞなぞについて論文を書いていた。そのなぞなぞもたいしてよくなかった。共にいると楽しい人物であった。サマルカンドで私に仕えていた。

次は**ユースフ・バディーイー** Yūsuf Badīʻī であった。フェルガーナ地方の出身である。下手なカスィーダを作っていたようである。

次は**アーヒー** Āhī であった。ガザルをたくみに作っていた。後にはイブン・フサイン・ミールザーの許にいた。詩集の著者であった。

次は**ムハンマド・サーリフ**であった。味わい深いガザルの作者であった。ただしその流麗さは，味わい深さほどではなかった。トルコ語の詩もあった。悪くなかった。後にシャイバーニー・ハーンの許に来ていた。ハーンは全面的に寵愛していた。ムハンマド・サーリフはハーンの名で1篇のトルコ語のマスナヴィーを書いていた。〔ジャーミーの〕『数珠』*Subḥa*〔*Subḥat al-Abrār*〕に使用された韻律であるラマリ・ムサッダスィ・マフブーン (ramal-i musaddas-i makhbūn)〔-⏑--/⏑⏑--/⏑⏑-〕の韻律で書かれている。まことに弱々しく

低級である。この作品を読んだ者はムハンマド・サーリフの詩について信用しなくなる。彼のすぐれた詩の1行は次の如きものである。

フェルガーナがタンバル Tanbal の国となった。

彼はフェルガーナをふとっちょのすみか (tanbal-khāna) とした。

人びとはアンディジャーン地方をタンバル・ハーナ〔「肥沃の館」〕とも呼んでいた。彼のマスナヴィーの中にこのような1行が含まれているのかどうかを私は知らない。邪悪な，圧政者的な，慈悲の心に欠ける人物であった。

次は**シャー・フサイン・カーミー** Shāh Ḥusayn Kāmī であった。この人物の詩も悪くなかった。ガザルよみであった。たぶん詩集も持っていた。

次は**ヒラーリー** Hilālī であった。現在も生存している。彼のガザルは流麗で色彩に富むが，人に与える印象がうすい。詩集を持っている。1篇のマスナ
181b ヴィーもある。ハフィーフの韻律で書かれている。(181b)『シャーとダルヴィシュ』*Shāh wä Darwīsh* と名づけられている。その中の若干の詩句はすぐれているが，その内容と骨組はまことに空虚でくずれている。昔の詩人たちは，恋とか恋人をテーマにマスナヴィーを書く時には，恋する者の役割を男に，恋される者の役割を女に演じさせていた。ヒラーリーはダルヴィシュを恋する者に当て，シャーを恋される者にしていた。シャーの言動について記している詩句は，簡単にいえば，シャーを売春婦・売笑婦のようにしてしまっている。彼が自分のマスナヴィーによかれと考えて，1人の青年を，しかも王である青年をまるで売春婦か売笑婦のように説明しているのはまことに凌辱的である。彼はまことによい記憶力を持っていたという。3～4万句を暗記していたという。両種の『五書』*Khamsatayn* の大部分を暗記していると云われていた。韻律，押韻，詩学に造詣が深かった。

次は**アーフリー** Āhlī であった。平民 (ʿāmmī) であった。詩は悪くなかった。詩集もあった。

書家たち　多くの書家たちがいたが，その中での巨匠はナスフ・ターリーク体の書に関する**スルターン・アリー・マシュハディー** Sulṭān ʿAlī Mashhadī であった。ミールザーやアリー・シール・ベグのために多くの揮毫を行なった。彼は毎日，詩の30行をミールザーのために，20行をアリー・シール・ベグのために書いていた。

画家たち　その1人は**ビフザード**であった。画家としての仕事をまことに精

微に行なっていた。しかしひげの無い人物の顔を描くのは下手であった。二重あごをまことに大きく書いていた。ひげのある人物は巧みに描写していた。

182a 次は**シャー・ムザッファル**であった。絵画をまことに精妙に（182a）描いていた。髪の毛を，我を忘れるほど微妙に描いていた。あまり長生きせず，その人生の昇り調子の時にこの世を去った。

演奏家たち 彼らの内で，カーヌーン qānūn を**ホーャジ・アブドゥッラー・マルワーリード**ほど巧みに演奏する者がいなかった事についてはすでに述べた〔175a 参照〕。

次は**クル・ムハンマド・ウーディー**であった。ギッジャク ghijjak〔弦楽器の1種〕をも巧みに演奏していた。この人物がギッジャクに3本の馬の尾毛をつけた。楽師や演奏家たちの中で，彼ほど多くのすぐれた前奏曲（pīshraw）を作曲した者はいない。しかし前奏曲以外の作品ではこれほどではなかった。

次は**シャイヒー・ナーイー**であった。ウード ʻūd〔弦楽器の1種〕とギッジャクをもうまく演奏していたという。12・13歳の頃からネイ ney〔葦笛〕を巧みに演奏していたという。ある時，バディーゥッ・ザマーン・ミールザーの会合で，彼が1つの曲をネイで巧みに吹いた。クル・ムハンマドはギッジャクでその曲を演奏できなかった。そこで彼は「ギッジャクは不完全な楽器だ」と云った。するとシャイヒーはただちにクル・ムハンマドの手からギッジャクを受取り，その曲をギッジャクで巧みにきっちりと演奏した。

シャイヒーについてはさらに次のような話も伝えられていた。すなわち彼は音楽に通暁していたので，どの曲であれ彼がそれを聴くと，誰々の何々のメロディーがこれとよく合うと云っていたという事である。しかし彼はあまり多くの曲を作らなかった。1～2曲の歌曲（naqsh）が彼の作品だと云われていた。

次は**シャー・クリー・ギッジャキー** Shāh Qulī ghijjakī であった。イラークの出身で，ホラーサーンに来て楽器を勉強し上達した。多くの歌曲と前奏曲を作曲していた。

次は**フサイン・ウーディー**であった。ウードを味わい深く＜p. 229 演奏し，味わい深い＞事を話していた。ウードの弦を1本にして演奏していた。彼の

182b 欠点は，非常にもったいぶった風に演奏する点であった。（182b）シャイバーニー・ハーンがある時演奏するように命ずると，彼はもったいぶってわざと下

手に演奏し，また自分の楽器を持ってこないで，悪い楽器を持参した。シャイバーニー・ハーンは悟って，まさにその席でさんざんにその首を杖で打つよう命じた。シャイバーニー・ハーンのこの世における唯一の称えるべき行為がこれであった。たしかによくやった。このようなきざな小者たちには，これ以上の罰が必要だ。

作曲家たち　その中に**グラーム・シャーディー** Ghulām Shādī がいた。シャーディー・ハーナンダ Shādī khwānanda〔ハーナンダは「うたい手」〕の息子であった。楽器を演奏したが，前述の演奏者たちの仲間に入って演奏する事は無かった。すぐれたサウト〔180a 参照〕と歌曲を作曲した。当時，彼ほどにサウトや歌曲を作曲できる者はいなかった。最後には，シャイバーニー・ハーンが彼をカザーン・ハーン Qazān Khān のムハンマド・アミーン・ハーン Muḥammad Amīn Khān のもとへおくった。その後，彼についての情報に接していない。

次は**ミール・アズー** Mīr ʻAzū であった。楽器は演奏しなかった。作曲家であった。作品は少なかったが，味い深い作品であった。

ビナーイーも作曲家であった。すぐれたサウトや歌曲があった。

次に比類なき人びとの１人が力士（pahlaw）の**ムハンマド・ブー・サーイード** Muḥammad Bū Saʻīd であった。力士たちの間で傑出していた。詩も作っていた。サウトと歌曲をも作曲していた。チャール・ガーフ調で書かれた１つのすぐれた歌曲を持っていた。同席すると楽しい人物であった。力士たる事とこのような美点とが一体になっているという事は驚くべき事である。

スルターン・フサイン・ミールザーがこの世を去った時，ミールザーたちの内でバディーゥッ・ザマーン・ミールザーとムザッファル・フサイン・ミールザーが手近かにいた。父君の寵愛を受けた王子はムザッファル・フサイン・ミールザーであった。またムハンマド・ブルンドゥク・バルラースが最高の権力を持つベグであり，彼はムザッファルの後見人であった。さらにムザッファル
183a の母はハディージャ・ベギムで，(183a) 彼女はミールザーの最もあがめられたハトゥンであった。ミールザーの配下の人びともムザッファル・ミールザーに大きな魅力を感じていた。これらの理由のため，バディーゥッ・ザマーン・ミールザーは不安を感じ，〔本陣に〕行かぬつもりでいた。そこでムザッ

ファル・ミールザーとムハンマド・ベグは自ら馬でおもむき，その不安をバディーゥッ・ザマーン・ミールザーの心から取除き，2人でミールザーを連れて来た。

人びとはスルターン・フサイン・ミールザーの遺体をヘラートに運び，君主にふさわしい慣例・制度に従って移送し，スルターン・フサインのマドラサに埋葬した。この際，ズーン・ヌーン・ベグもそこにいた。ムハンマド・ブルンドゥク・ベグ，ズーン・ヌーン・ベグ，さらにスルターン・フサイン・ミールザーの後に残ったベグたち，それにこの2人のミールザーたちと共にいたベグたちが集って協議一致して，バディーゥッ・ザマーン・ミールザーとムザッファル・フサイン・ミールザーをヘラートの王位に共同で即位させた。

バディーゥッ・ザマーン・ミールザーの宮廷での最高の権限の所有者がズーン・ヌーン・ベグで，ムザッファル・ミールザーの宮廷における最高の権限の所有者がムハンマド・ブルンドゥク・ベグであった。バディーゥッ・ザマーン・ミールザーの側の〔ヘラートの〕町のダルガはシャイフ・アリー・タガーイーで，ムザッファル・ミールザーの側ではユースフ・アリー・キュケルタシュ Yūsuf ʻAlī Kökältash であった。

これは驚くべき事である。王権の共有などいまだかつて聞いた事が無い。シャイフ・サーディー Shaykh Saʻdī の詩の意味する所と反対の事が起こったのである。サーディーは『薔薇園』〔第1章第3話〕の中でこう云っている：

10人のダルヴィシュは1枚の敷物に共にやすむ事ができよう。
しかし2人の君主が1つの気候帯に共存する事はできぬ。

〔912年/1506年5月24日—1507年5月12日/の出来事〕

183b **ムハッラム月**〔1506年5/6月〕，私はウズベクを撃退するために（183b）ホラーサーンをめざして出発した。私たちはグールバンド，シバルトゥー経由の道をとって進んだ。ジャハーンギール・ミールザーが気分を害してその領地から出奔していた〔162a—162b 参照〕ため，「もし彼がアイマク諸族をその支配下に加えるならば，若干の腹黒い者たちや煽動者たちがまた何を煽るかわからない」と考え，私たちはウシュトゥル・シャフルで家族と別れ，家族たちの所にワリー・ハーズィン Walī khāzin〔ハーズィンは「宝庫番」〕とドウラト・カダム・カラーウル Dawlat-qadam qarāwul〔カラーウルは「先鋒」〕を残し，「アイマク諸族をより早く手中に収めよう」と云って軽装備で急ぎ進んだ。

その日，私たちはザッハーク城（Ḍaḥḥāq qal'ası）に到達した。そこからグンバザク峠（Gunbadhak kötäli）を越え，サイカーンを通過し，ダンダーン・シカン峠（Dandān Shikan kötäli）を越えてカフマルド牧地に下馬した。私はサイイド・アフザル・ハーブビーンにスルターン・ムハンマド・ドウラダイ Sulṭān Muḥammad Dawladay を付け，私たちのカーブルからの出発に関する諸情況を報告するために，スルターン・フサイン・ミールザーの許へと派遣した。

ジャハーンギール・ミールザーはかなりおくれていたようであった。私たちがバーミーヤーンの正面に到達した時，彼は2・30人と共にバーミーヤーンの入口の所に来ていたらしい。彼はバーミーヤーン近くに到着した時，私たちが後方に残した家族のテントを発見し，私たちがいると感違いして大急ぎで引返し，その野営地にもどると，とるものもとりあえずすぐに出発した。彼は後ろを見ずに，ヤカ・ウラング Yaka Ulang 附近へとつき進んだ。

シャイバーニー・ハーンはバルフを包囲していた。バルフにはスルターン・クリーチャク Sulṭān Qulīchaq がいた。シャイバーニー・ハーンは2・3名のスルターンたちを3～4,000の兵と共にバダフシャーンを攻撃するために派遣した。当時，〔バダフシャーンの〕ムバーラク・シャーとズバイル〔154b—

155a 参照〕は，以前に存在した敵対関係にもかかわらず，再びナースィル・
184a ミールザーのもとに来て合流して（184a）いた。彼らはキシム Kishim の下手，キシム川の東のシャーフダーン Shākhdān に出兵して留っていた。その時，先のウズベク人らが，夜明け方，不意打ちをかけようと，キシム川を渡ってナースィル・ミールザーに向って進んだ。

ナースィル・ミールザーはただちに高みに登り，高みから人びとを集めさせ，ラッパを吹かせて進撃し，ウズベク人らを捕え壊滅させた。キシム川は増水していた。敵はこの川を渡って来ていた。敵の多くの者が矢や刀で死に，また多くの者が捕虜にされた。川の所でも多くの者が溺死した。ムバーラク・シャーとズバイルは，ミールザーより上手のキシム側にいた。彼らの方に向ったウズベクの1団が，彼らを岡の方へと逃走させた。ナースィル・ミールザーは，自分の敵を敗走させた時，この知らせを受け，その1団に向って進撃した。上手から，クーヒスターンのベグたちも騎兵・歩兵を集めて進撃したところ，敵は留まりえず敗走した。この1団のウズベクの者たちも，その多くの者が捕虜にされ，多くの者が矢や刀で死に，また川で溺死した。おそらく1,000～1,500人のウズベク人が死亡したと思われる。ナースィル・ミールザーの1つのすばらしい勝利がこれであった。

私たちがカフマルドの谷に滞在中に，この知らせをナースィル・ミールザーの配下の者がもたらした。この近郊に滞在中に，私たちの兵がおもむいて，グ
184b ーリー，ダハナから穀物を取って来た。（184b）この同じ近辺で，ホラーサーンに派遣していたサイイド・アフザルとスルターン・ムハンマド・ドウラダイから書簡が到着した。それはスルターン・フサイン・ミールザーの訃報であった。この訃報にもかかわらず，私たちはこの王朝の栄誉を考え，ホラーサーン方面へと進んだ。もっともこの進軍には別の理由〔ジャハーンギールの問題〕もあったのである。

私はアージャルの谷の内を通って〔西に〕進み，トープ Tūp とマンダガーン Mandaghān を経てバルフ・アーブ Balkh-āb にくだり，〔北行して〕サーフ山（Kūh-i Ṣāf）に出た。私たちはウズベクがサーン Sān とチャハール・ヤク Chahār-yak を攻撃したという情報に接し，カースィム・ベグを兵と共に敵の攻撃隊に向け派遣した。彼らはおもむいて，敵と出合い，大いに破り，

多くの首を切って持って来た。私たちはジャハーンギール・ミールザーとアイマク諸部に向け人を派遣した。私たちは彼らについての情報が得られるまで，数日間，サーフ山の夏営地に滞留した。この附近には鹿（keyik）がきわめて多かった。私たちは1度狩りをした。

1～2日後，全てのアイマク諸部族が到着して私に臣従した。アイマク諸部のもとへは，ジャハーンギール・ミールザーが何度も人を遣していた。1度は，彼はイマードゥッ・ディーン・マスウード ʻImād al-Dīn Masʻūd を派遣した。しかし諸部は〔ジャハーンギールのもとへ〕行かなかった。彼らは私の許に来た。結局，ミールザーは他にどうしようもなくなって，私がサーフ山を出てバーイの谷（darra-yi Bāy）に下馬した時，来て私に会った。しかしホラーサーンの事が気にかかっていたので，私たちはミールザーには目をかけず，アイマク諸部にも配慮を与えず，〔西の〕グルズィワーン Gurziwān，アルマール Almār，カイサール Qayṣār，チェチェクトゥー Chechektū を経て進み，ファフルッ・ディーン・オルミ Fakhr al-Dīn Olumı で渡河して，バードギースの属地の1つであるバームの谷（darra-yi Bām）という所に到着した。

185a （185a）世界は分裂しきっており，誰もが手を延ばして諸地方・諸部民から何物かを取りたてていたために，私たちも一方でその周辺にいたアイマク諸部やトルコ人たちに課税して物を取りたて始めた。この1～2カ月の間に，私はおそらく300万ケペキー（kepäkī）を取得したと思われる。

私たち〔の到着〕より数日前に，ウズベクの攻撃隊を，ホラーサーンの急襲隊とズーン・ヌーン・ベグの部下たちがパンド・デフ Pand-deh とマルーチャク Marūchaq でよく破り，多数のウズベク人を殺した。バディーゥッ・ザマーン・ミールザー，ムザッファル・ミールザー，ブルンドゥク・ムハンマド・バルラース，ズーン・ヌーン・アルグン，そしてその子のシャー・ベグは，バルフでスルターン・クリーチャクを包囲していたシャイバーニー・ハーンに向け出兵する事を決定し，スルターン・フサイン・ミールザーの全ての王子たちの許に人を遣し，参集する事を求めた。彼らもまたこの目的でヘラートを出発した。

彼らがバードギースに到達した時，チヒル・ドフタラーン Chihil-dukhtarān で，アブル・ムフスィン・ミールザーがマルヴから来て合流した。イブン・フサイン・ミールザーも，彼よりおくれて，トゥーン Tūn とガーイン Qā'in か

ら来た。

ケペク・ミールザーはマシュハドにいた。彼の許に何人もの使者が派遣されたが，彼は理由にもならぬ事を云って女々しくも来なかった。彼はムザッファル・ミールザーに対して敵対心を持っており，「奴が君主になっている時に，俺がどうして奴の面前に出頭する事があろうか」と云って，全ての兄弟が1カ
185b 所に集結し，(185b) 心を一にしてシャイバーニー・ハーンの如き敵に向かう決意をして進んでいる時に，このような吐き気を催すような敵対を為して来なかった。彼はこの不参加の理由をその敵愾心の故と今はしている。しかし将来，若干の人びとは必ずその理由を彼の男気の無さに求めるであろう。結局，人の行なったあのような行為の悪評は，その者の死後も，なおこの世に生きつづけるものなのである。もし人がほんの少しでも知恵を分け与えられているのであれば，どうして死後に人に悪く云われるような行動にでるのであろうか。またもし人に理性が少しでも影響を及ぼすのであるのなら，なぜ行なった後に人にすばらしいと云われるような事のために努力しないのであろうか。「賢者たちは死後にその名が人の口の端にのぼる事を第2の人生と呼んでいる (dhikr-i nāmī-rā ḥakīmān ‘umr-i thānī gufta and)」。

私の許にも，何人もの使者が到着した。後にはムハンマド・ブルンドゥク・バルラースも来た。この私がどうして行かぬ事があろうか。私は100～200ユガチの道程を，この目的のために旅して来たのである。私はムハンマド・ベグと共に出発した。

その時，ミールザーたちはムルガーブに来ていた。**ジュマーダーゥル・アーヒル月8日月曜日**〔1506年10月26日〕，私はミールザーたちと会見した。アブル・ムフスィン・ミールザーが半キョルフほど出迎えて来ていた。私たちはお互いに近づいた。私はこちら側で，馬を下り，アブル・ムフスィン・ミールザーはあちら側で馬から下りた。私は進んで，挨拶を交し，再び馬に乗った。かなり進むと，宿営(オルドウ)地の近くにムザッファル・ミールザーとイブン・フサイン・ミールザーが〔出迎えに〕来た。この2人はアブル・ムフスィン・ミールザーよりも年令では若かった。彼らはもっとはやく出迎えに来るべきであった。お
186a そらくこの遅れは酒の酔いの (186a) せいで，傲慢のせいではなかったであろう。またこの失敗は楽しみ事のせいで，侮辱するつもりは無かったであろう。ムザッファル・ミールザーはこの点を強調した。私たちは馬上で挨拶を交した。

イブン・フサイン・ミールザーとも同様に挨拶を交した。

私たちは進んで，バディーゥッ・ザマーン・ミールザーの宮廷の前に下馬した。大変な群衆であった。度を越えた群衆で，その中に巻きこまれた幾人かの者は，3～4歩の間，足が地にふれず，また公務のためにもどろうと考えている幾人かも，4～5歩も後方へと，どうしようもなく押しもどされる有様であった。

私たちは，バディーゥッ・ザマーン・ミールザーの謁見用のテント (dīwān-khāna öyi) に到達した。私がテントに入るとすぐに膝まづき，バディーゥッ・ザマーン・ミールザーが立ち上り高座の端まで来て，そこで挨拶を交す事に取り決められていた。そこで私はテントに入るとすぐに1度膝まづいた。ついで私は間をおかずに前に進んだ。バディーゥッ・ザマーン・ミールザーはややゆっくりと立ち上り，かなりゆっくりと進んだ。カースィム・ベグは私の味方で，私の評判は彼自身の評判であると考えていたので，私の腰帯を1度引いた。私は気づいた。私はゆっくりと進んで，決められていた場所で挨拶を交した。

この巨大な白いテントには4つのマットレス (töshäk) が置かれていた。バディーゥッ・ザマーン・ミールザーの白色の諸テントは，必ず一方が門のようになっていた。ミールザーは常にこの門の傍らに座をしめた。1つのマットレスがこの門の傍らに置かれていた。バディーゥッ・ザマーン・ミールザーと
186b (186b) ムザッファル・ミールザーがこのマットレスに坐った。さらにもう1つのマットレスが右手に置かれていた。アブル・ムフスィン・ミールザーと私がそれに坐った。

バディーゥッ・ザマーン・ミールザーのマットレスの下手(しも)，左側にも別のマットレスが置かれていた。シャイバーン家のスルターンの1人で，〔スルターン・フサイン〕ミールザーの女婿であり，カースィム・フサイン・スルターンの父に当たるカースィム・スルターン・ウズベク〔168b 参照〕とイブン・フサイン・ミールザーがこれに坐った。私のために置かれたマットレスの下手，右側にも別のマットレスが置かれていた。ジャハーンギール・ミールザーとアブドゥッ・ラッザーク・ミールザーがそれに坐った。

ムハンマド・ブルンドゥク・ベグ，ズーン・ヌーン・ベグ，カースィム・ベグは右側に，カースィム・スルターンとイブン・フサイン・ミールザーよりず

っと下手に坐った。

食物が運ばれた。宴会は無かったにもかかわらず，食物を運んだ場所に脚付きの台（shīra）が置かれ，その上に金銀のゴブレットが並べられた。以前には，私たちの祖先ら（ata agha）はチンギーズ・ハーンの定めた慣習法（Chingīz töräsi）を不思議なほど尊重していた。王侯の会議や宮廷会議でも，祝宴や食事の際も，坐る時も立つ時も，この掟に反する事はしなかった。しかしチンギーズ・ハーンの慣習法も，人が必ずそれにのっとって行動せねばならぬ金科玉条ではない。誰によってであれ，すぐれた規定が〔死後に〕残されたなら，それに従って行動すべきである。しかしもし先祖がまちがった事をしたのであれば，正しい事とおきかえる事が必要である。食事の後，私は馬に乗り，先に下馬した場所へと帰った。

187a 私たちの宿営と（187a）ミールザーたちの宿営の間は1シャルイーほどであった。2度目に私が訪れた時には，バディーゥッ・ザマーン・ミールザーは以前の如くには敬意を表わさなかった。私はムハンマド・ブルンドゥク・ベグとズーン・ヌーン・ベグに「私は年は若いが，私の占める位は高い。私は2度にわたって力を用いてサマルカンドを取り，その父祖の占めた王位に坐した者である。私はこの王朝のために，外敵とこのように戦いかつ競ってきたのだ。その私に対して速やかに敬意を表わそうとしないのは不都合な事だ」と告げた。以上の如く告げると，もっともな内容であったので，彼らは誤りを表明し，敬意をよろこんで表した。

さらにもう1度，私がバディーゥッ・ザマーン・ミールザーの許におもむいた時，正午の礼拝の後，葡萄酒の宴会になった。当時私は酒を飲まなかった。準備のゆきとどいた宴会であった。テーブルにはあらゆる種類の酒のための珍味が並べられた。鶏や鵞鳥のケバーブ〔焼き肉〕，それにあらゆる種類の食物が運ばれた。バディーゥッ・ザマーン・ミールザーの宴席は人びとのきわめて高い評価を得ていた。確かに，うわべを飾る事のない（bī-ghill-o-ghishsh），必安まる宴席であった。

ムルガーブ河畔に滞在中に，私は2～3度ミールザーの酒宴に出席した。皆は私が飲まぬ事を知っていたので，無理強いしなかった。私はムザッファル・ミールザーの宴席にも1度おもむいた。フサイン・アリー・ジャラーイルとミール・バドル〔173a—173b 参照〕がムザッファル・ミールザーのお側に

187b (187b) いた。彼らはその宴席にも出席していた。酔うと，ミール・バドルが舞いを舞った。美事に踊った。おそらくその種の舞いはミール・バドルの創作であった。

ミールザーたちがヘラートを発ち，意見を統一し，軍を集結してムルガーブに到着するまでに**3～4カ月**が経過した。この間に，スルターン・クリーチャクは耐え兼ねて，バルフ城をウズベクに引渡した。ウズベクはバルフ征服の後，この私たちの集結についての知らせを得るとサマルカンドに帰還した。

これらのミールザーたちは，おしゃべりとか宴会，交際とか社交においてはすばらしかった。しかし彼らは，戦士としてのかけひきや策略からほど遠く，男性的な戦闘や戦争とは縁が薄かった。ムルガーブに滞在中にも，ハック・ナザル・チャパーン Ḥaqq Naẓar Chapān が4・500人と共に来てチェチェクトゥー近辺を攻撃したという知らせが入った。全てのミールザーたちがそこに居ながら，何やかやと云って，この攻撃隊に向け急襲隊を差し向ける事ができなかった。ムルガーブとチェチェクトゥーの間は10ユガチの道のりであった。私はこの仕事を私にさせてくれるよう頼んだ。しかし彼らは体面を考えて，私にも出発の許可を与えなかった。

シャイバーク・ハーンは帰還し，年もまた暮れようとしていた。そのため，この冬，ミールザーたちはそれぞれ都合のよい所で越冬し，次の春 (yaz)，再び集結して敵を撃破するため進軍する事が決定された。彼らは私にもホラーサーンで冬を越すよう提案した。しかしカーブルとガズニーは反乱の起こり易い不安な要素に満ち満ちた土地であった。トルコ，モグール，アイマク，アフシ
188a ャーム，アフガーン，ハザーラなど種々の部民・部族が (188a) そこに集まっていた。さらにホラーサーン・カーブル間は，近道である山道をとって，たとえ雪その他の障害が無い場合でも1カ月ほどの道のりであった。平地を行けば，40～50日の道程であった。〔カーブル〕地方もなお思うままには制圧しきれていなかった。私に好意を寄せる者たちの誰ひとりとして，私たちがそこで越冬する事を適当と考えなかった。

私たちはミールザーたちに出発の許しを求めた。しかし彼らは承知しなかった。彼らは何度も越冬を勧めた。私たちがどんなに許しを求めても，彼らはますます際限なく勧めた。最後にはバディーゥッ・ザマーン・ミールザー，アブル・ムフスィン・ミールザー，ムザッファル・ミールザーが馬で私のテントに

来て越冬を勧めた。私たちは，ミールザーたちの顔をつぶすような事は何も云えなかった。なにしろ，あのような君主たちが自らやって来て滞留を勧めたのであるから。

それに加えて私は，この世に並ぶものが無く，またスルターン・フサイン・ミールザーの治世に，ミールザーの管理と苦心のもとで，その美麗優雅さに10倍，否20倍ものものを加えていたヘラートの町を1度見たいという望みを強くいだいていた。これらの理由から，私たちは滞留を受諾した。

アブル・ムフスィン・ミールザーは領地のマルヴに向った。イブン・フサイン・ミールザーもトゥーンとガーインに向った。バディーゥッ・ザマーン・ミールザーとムザッファル・ミールザーはヘラートに向った。2～3日の後，私もチール・ドフタラーン，タシュ・ラバート Tash Rabāt 経由でヘラートに向った。

全てのベギム〔妃〕たち，すなわち私のおばのパーヤンダ・スルターン・ベギム，ハディージャ・ベギム，<p. 237 アーファーク〔アーパーク〕・ベギム>，それにスルターン・アブー・サーイードの娘たちや，その他の私のおばに当るベギムたちが皆〔ヘラートの〕スルターン・フサイン・ミールザーのマ
188b ドラサに集まっていた。(188b) 私が行って挨拶した時には，これらの全てのベギムたちはミールザーの墓の所にいた。

最初，私はパーヤンダ・スルターン・ベギムと膝まづいて挨拶を交した。ついでアーファーク・ベギムと膝まづかずに挨拶を交した。次にハディージャ・ベギムと膝まづいて挨拶を交した。私たちはしばらくそこに居て，ハーフィズたち〔ḥāfiẓ,「コーランの暗誦者」〕がコーランを読誦した後，ハディージャ・ベギムの住まいが設営されているジャヌービー・マドラサ Janūbī Madrasa〔「南学院」〕におもむいた。ハディージャ・ベギムによるもてなしの食事が出された。食事が出された後，私はパーヤンダ・スルターン・ベギムの住まいにおもむき，その夜をそこで過ごした。

はじめ私には「新庭園」Bāgh-i naw に宿営地(ユルト)が割当てられていた。そこで私は翌朝行って新庭園に下馬した。新庭園に1泊した。しかしそこは適当と思われなかったので，あらためてアリー・シール・ベグの諸邸宅が割当てられた。以後，ヘラートを離れるまで私はそこに滞在した。2～3日に1度ずつ，私は

「世界装飾の園」Bāgh-i Jahān-ārā におもむき，バディーゥッ・ザマーン・ミールザーに会っていた。

〔ヘラート到着の〕数日後，ムザッファル・ミールザーが私をその住まいに招待した。ムザッファル・ミールザーは「白の園」Bāgh-i Safīd にいた。〔その母の〕ハディージャ・ベギムもそこにいた。ジャハーンギール・ミールザーが私に同行した。ハディージャ・ベギムの前で食事が出された後，ムザッファル・ミールザーは私たちをバーブル・ミールザーが建てた「歓楽の館」Ṭarab-khāna と呼ばれる建物に案内した。そこで酒宴（chaghır majlisi）となった。

「歓楽の館」は小庭園の中央に位置していた。やや小さな2階建の建物であったが，かなり美事な建物であった。2階に非常に凝っていた。その4隅に4つの小部屋（ḥujra）があった。さらにこの4つの小部屋の内側と，小部屋と
189a 小部屋との間にある部分は，全て同じ室内であった。(189a) つまり4つの小部屋と小部屋の間が，4つのバルコニーのようになっている部屋であった。この部屋の四面には壁画が描かれていた。この建物はバーブル・ミールザーによって建てられたものであるが，これらの壁画はスルターン・アブー・サーイードの命によるもので，その会戦や戦争の場面が描かれていた。

部屋の北の端のバルコニーの所に2つのマットレス（töshäk）が向かい合う形で置かれていた。これらのマットレスの端は部屋の北の端に接していた。1つのマットレスにムザッファル・ミールザーと私が坐り，もう1つのマットレスにスルターン・マスウード・ミールザーとジャハーンギール・ミールザーが坐った。ムザッファル・ミールザーの館では私たちが客であったので，ムザッファル・ミールザーは私を自分より上手に坐らせた。

よろこびの盃を満たし，酌人たちが進み，宴席の人びとに運び始めた。澄んだ葡萄酒を人びとは家畜が水を飲むが如くに飲み始めた。宴は酣となった。酒が頭にのぼった。人びとは私にも飲ませよう，私をもその仲間に入らせようと考えた。私はその齢になるまで，〔イスラーム法に定められた〕飲酒の禁を犯した事が無く，酔いのもたらす陶酔境を適切に知らないでいた。しかし酒を飲んでみたいという欲望は持っていた。そして私の心は，この谷を越える事を誘なっていた。少年時代には飲みたいとは思わなかった。酒の陶酔境を知らず，
189b 私の父が時どき酒を勧めた時にも言訳を云って (189b) 飲酒の禁を犯さなかった。父の死後は，〔ナクシュバンディー教団のシャイフ〕ホージャ・カーズィ

ーの幸運な影響の故に，私は節制し禁欲した。〔コーランに禁じられた〕疑わしい食物をも避けていた。私が飲酒の禁を犯す余地などあるはずも無かった。

後に，青年の〔一般的に〕持つ強い欲望と私の個人的な欲求から酒を飲みたいという気持が強くなった時も，誰一人として勧めてくれる者がいなかった。というより，私の持つ酒に対する欲望を知っている者がいなかった。私の心は酒を飲みたがっていたが，このような従来してこなかった事を，自分自身で始める事は難しかった。

ふとこう考えた。皆がこれほど勧めている。それにあらゆる歓楽と快楽の手だてが完備し，全ての奢侈と享楽の諸物・諸手段が整えられているヘラートのような洗錬された都に私たちは来ているのだ。今飲まなかったら，私はいつ飲む事になるのだろう。こう考えて，飲む事に決意した。そしてこの谷を越える事を心に定めた。

しかしふとまた考えた。バディーゥッ・ザマーン・ミールザーが兄である。彼の手から，また彼の屋敷で飲まずに，その弟の手から，その弟の屋敷で私が飲んだら，彼はどう思うであろう。私は私のこの心のまよいを〔皆に〕述べた。彼らはこの考えをもっともだと云って，この席ではもう酒を勧めなかった。バディーゥッ・ザマーン・ミールザーとムザッファル・ミールザーが同席している時に，両ミールザーの勧めによって飲む事に決まった。

190a 宴席には，演奏家たちの内（190a）ハーフィズ・ハーッジー Ḥāfiẓ Ḥājjī がいた。ジャラールッ・ディーン・マフムード・ナーイー Jalāl al-Dīn Maḥmūd nāyī がいた。グラーム・シャーディーの弟のシャーディー・バチャ Shādī bacha〔バチャは「子供」〕がいた。彼はチャング chang〔48弦を2本のスティックで打って演奏する楽器〕を演奏していた。ハーフィズ・ハーッジーは巧みに歌っていた。ヘラートの人びとは静かで，繊細で，なめらかな歌い方をしていた。ジャハーンギール・ミールザーは1人の歌手をかかえていた。ミール・ジャーン Mīr Jān という名のサマルカンド人であった。彼は大声で，荒々しく，不均等な歌い方で歌っていた。ジャハーンギール・ミールザーは酔って，彼に歌えと命じた。彼は驚くほど大声で，荒々しく，味気無く歌った。ホラーサーンの人びとは上品に暮らしている人びとであった。彼らはこの男のこの歌声に耳をふさいだかも知れぬし，また顔をしかめたかも知れぬが，〔ジャハーンギール〕ミールザーの面目を考えて誰ひとりやめさせる事ができなかっ

た。

夕べの礼拝の後，私たちは歓楽の館から，ムザッファル・ミールザーが新しく建てた越冬用の館に移った。この館に来た時，最後には酔いのさ中にユースフ・アリー・キュケルダシュが立ち上って舞いを舞った。彼は音感に恵まれた人物（ṣāḥib-i uṣūl）であった。巧みに舞った。この館に来た時には，宴はきわめて盛りあがった。ムザッファル・ミールザーは短剣，小羊の外套，あし毛の俊馬を私にくれた。この館では，ジャーナク〔「小ジャーン」「ジャーン奴」〕がトルコ語を話した。ムザッファル・ミールザーは「大月」Katta-māh「小月」Kichik-māh という名の奴隷（qul）を所有していた。彼らは酔って，悪趣味の道化を演じた。盛りあがった宴は夜半まで続き，やがて散会となった。私はこの夜はこの館に泊った。

カースィム・ベグは，皆が私に酒を勧めているという知らせを聞くと，ズーン・ヌーン・ベグのもとに人を遣した。ズーン・ヌーン・ベグがミールザーたちに対し忠告の如きものを非常に強くした結果，彼らは酒を勧める事を完全にやめた。

190b　(190b) バディーゥッ・ザマーン・ミールザーはムザッファル・ミールザーの招待の事を耳にすると，世界装飾の園（バーギ・ジャハーン・アーラー）の「慰労の館」Muqawwī-khāna に席を設けて私を招待した。私の方の幾人かの近習たちや若党たちも招かれた。もともと私の身近にいる者たちは，私の故に，飲む事ができなかった。彼らは，たとえ飲んだとしても，せいぜいひと月か40日に1度，門の把手を固めて，びくびくしながら飲んでいたにすぎなかった。このような者たちが招待されたのである。この席は私の父や兄のような人びとの席であったので，私は出席した者たちに不礼講の許しのようなものを与えていた。それにもかかわらず，彼らは行った時，この席でも，あるいは私に気づかれぬようにしたり，〔盃を〕その手の陰に隠したりして四苦八苦して飲んでいた。

しだれ柳が運んでこられた。本来の枝（shākh）なのか人工的な枝なのか私には分らない。枝と枝の間に，鞣した羊皮に金を貼ったもの（kimsan）を，枝の長さにごく細く切って付けていた。よい見ものであった。

この席で私の前に鵞鳥のケバーブが置かれた。私は鳥をさばいて細かく食べ易くした経験が無かったので手を付けなかった。バディーゥッ・ザマーンが「何か気にいらないのですか」とたずねた。私は「細かくできないのです」と

答えた。するとバディーゥッ・ザマーン・ミールザーは即座に私の前にある鵞
191a 鳥をさばいて細かくして私の前に置いた。このような（191a）事では，バディーゥッ・ザマーン・ミールザーは並ぶ者のいない人物であった。宴会の最後に，彼は私に宝石をちりばめた腰帯付きの短剣，金の刺繍入りのコート，俊馬をくれた。

私がヘラートに滞在した20日間，私は毎日，まだ見ていなかった場所を馬で見物してまわった。この見物に私たちのお伴を勤めたのは〔ヘラートのダルガの〕ユースフ・アリー・キュケルタシュ〔183a 参照〕であった。どこであれ名所で下馬すると，ユースフ・アリー・キュケルタシュが何かの食物を〔私に〕供した。この20日間で，名所の内，ただスルターン・フサイン・ミールザーのハーンカーフ khānqāh〔「スースィーの道場・宿泊施設」〕をのぞき，ほとんど全ての名所を見つくしたと思われる。〔アンサーリー Anṣārī の墓所である〕ガーズルガーフ Gāzurgāh，アリー・シール・ベグの小庭園，紙すき用の大臼〔風車？〕(juwāz-i kāghaz)，タフティ・アースターナ Takht-i Āstāna，プリガーフ Puli-gāh，カフディスターン Kahdistān，ナザルガーフ庭園 Bāgh-i Naẓar-gāh，ニーマターバード Ni'mat-ābād，ガーズルガーフの大道，スルターン・アフマド・ミールザーの囲い (ḥaẓīra)，タフティ・サファル Takht-i Safar，タフティ・ナヴァーイー Takht-i Nawā'ī，タフティ・バルガル Takht-i Bargar，タフティ・ハーッジー・ベグ Takht-i Ḥājjī Beg，それにシャイフ・バハーゥッ・ディーン・ウマル Shaykh Bahā' al-Dīn 'Umar，シャイフ・ザイヌッ・ディーン Shaykh Zayn al-Dīn，マウラーナー・アブドゥル・ラフマーン・ジャーミーの霊廟や墓地，ナマーズガーヒ・ムフタール Namāzgāh-i Mukhtār，魚池 Ḥawḍ-i Māhīyān，サーキ・サルマーン Sāq-i Salmān，もともとの名はアブル・ワリード Abū al-Walīd であったと思われるビッルーリー Billūrī，イマーム・ファフル Imām Fakhr，大道の園 Bāgh-i Khiyābān，ミールザーの諸マドラサと諸霊廟，ゴウハル・シャド・ベギム Gawhar Shad Begim の諸マドラサと諸霊廟，マスジッディ・ジャーミー Masjid-i jām'ī，からすの園 Bāgh-i zāghān，新庭園 Bāgh-i naw，ズバイダの園 Bāgh-i Zubayda，スルターン・アブー・サーイードが建てたイラーク門の外の白の宮殿 Aq sarāy，
191b （191b）プーラーン Pūrān，射手たちのテラス Ṣubba-yi tīr-andāzān，チャルガラング Chalghalang，アミール・ワーヒド Amīr Wāḥid，マーラーン橋

Pul-i Mālān, ホージャ・タークKhwāja Ṭāq, 白の園 Bāgh-i safīd, 歓楽の館 Ṭarab-khāna, 世界装飾の園 Bāgh-i jahān-ārā, キオスク Köshk, 慰労の館 Muqawwī-khāna, 野ゆりの館 Sawsasnī-khāna, 十二塔 Dawāzdah burj, 世界装飾の園の北側にある大きな池，その四方にある4つの建物，都城（qal'a）の5つの城門，すなわち王の門 Darwāza-yi Malik, イラーク門，ピールーザーバード門，フーシュ門 Darwāza-yi Khūsh, キプチャク門，さらに王のバーザール Bāzār-i Malik，チャール・スー Chār-sū，シャイフル・イスラームのマドラサ，諸王のマスジッディ・ジャーミー，町の園 Bāgh-i shahr，バディーゥッ・ザマーン・ミールザーのインジール水路の傍らにあるマドラサ，アリー・シール・ベグが居住した，ウンスィーヤ Unsīya と呼ばれている諸邸宅，その墓，クドゥスィーヤ Qudsīya と呼ばれているそのマスジッディ・ジャーミー，ハラースィーヤ Khalāṣīya 及びイフラースィーヤ Ikhlāsīya と呼ばれているそのハーンカーフとマドラサ，サファーイーヤ Ṣafā'īya 及びシャファーイーヤ Shafā'īya と呼ばれているその病院とハンマーム〔公共浴場〕，以上の全てを，その期間に私は見物した。

これより以前に，スルターン・アフマド・ミールザーの下の娘のマースーマ・スルターン・ベギム Ma'sūma Sulṭān Begim をその母のハビーバ・スルターン・ベギムがホラーサーンに連れて来ていたようであった。ある日，私が私の姉さん（aka）に会いに行った際，マースーマはその母と共に来て私に会った。彼女を見るや否や，私は好きでたまらなくなった。内々の使者が派遣され，私の姉さん，おばさん（yengä）——私はパーヤンダ・スルターン・ベギムを
192a （192a）「姉さん」と呼び，ハビーバ・スルターン・ベギムを「おばさん」と呼んでいた——と相談して，私の後から，私のもとに娘を連れてカーブルに来る事に決められた。

ムハンマド・ブルンドゥク・ベグとズーン・ヌーン・ベグが私に越冬するようにと何度も何度も強制していた。ところが彼らは越冬の場所や，越冬するための諸用具を万全に整えてはくれなかった。冬がすでに来ていた。〔カーブルに至る〕途中の山々に雪が降った。カーブル方面についての心配がなお増大した。ここの者たちは，越冬に適わしい土地に手を入れようともせず，また諸設備のそろった場所を冬営地として提供しようともしなかった。もはやどうしようもなくなった。私たちが助けを求める事は不可能であった。

私たちは越冬の場所へ移動するという口実で，**シャーバーン月7日**〔1506年12月23日〕，ヘラートをあとにし，バードギース近辺では各宿営地に1日ずつ，2日ずつと滞留しながら〔ゆっくりと〕移動した。それは諸地方へ徴発や公務のためにおもむいていた者たちが帰って来て合流するようにするためであった。私たちはきわめてゆっくりと進んでいたため，ランガリ・ミール・ギヤース Langar-i Mīr Ghiyāth を過ぎて2～3泊後に**ラマザーンの月**〔1507年1月15日〕を見た。諸地方へ公務のためにおもむいていた軽装の若党たちのうち若干の者が来て加わった。若干の者は20日からひと月後にカーブルに到達した。また若干の者は〔ヘラートに〕残ってミールザーたちに仕えた。

それらのうちの1人はサイイディム・アリー・ダルバーンであった。彼は残ってバディーゥッ・ザマーン・ミールザーに仕えた。ホスロー・シャーの家臣らのうちで，私が彼ほどに眼をかけた者は他にはいなかった。ジャハーンギール・ミールザーがガズニーを出奔した時，私はガズニーをサイイディムに与
192b えた。彼は自分の義弟のドースト・(192b) アングー・シャイフ Dūst Angū Shaykh をガズニーに置いて，彼自身は進軍に参加した。ホスロー・シャーの家臣らの内では，サイイディム・アリー・ダルバーンとムヒッブ・アリー・コルチの両名に勝る者はいなかった。サイイディムはよい品行と生活態度の人物であった。刀をふるう事において勇敢な人物であった。彼の家では会合も宴会も行なわれなかった。まことに気前がよく，驚くほど多くの長所と美点を備えた人物であった。その機智・冗談も多彩であった。その会話や話は楽しく，気立てのよい，よくしゃべる道化者であった。その欠点はあまりに放埒で好色な点であった。宗派のおきてをふみはずしていたようである。いささか偽善者的な習性を持つ人物であった。若干の人びとは彼の偽善をふざけているのだといって非難していた。しかしこの非難は根拠の無い非難ではなかったようである。バディーゥッ・ザマーン・ミールザーがシャーイバクにヘラートを奪われてシャー・ベグのもとに行った時，彼がミールザーとシャー・ベグの間に不和をひき起こすような事を述べたために，ミールザーが彼を殺してヘルマンド川 Hermand suyı に捨てた。ムヒッブ・アリーについては諸事件の記述の中で述べる予定である。

私はランガリ・ミール・ギヤースを過ぎ，ガルジスターン Gharjistān のはしの村々を踏破し，チャフチャラーン Chakhcharān に到達した。ランガルを

過ぎてガルジスターン附近に到達すると一面の雪であった。進むにつれ，雪はより多くなった。チャフチャラーン＜p. 243 附近では，雪が馬のひざより上まであった。チャフチャラーンは＞ズーン・ヌーン・ベグに属していた。ミーラク・ジャーン・イルディ Mīrak Jān Irdı という名の彼の部下がそこにいた。私たちはズーン・ヌーン・ベグの糧食を全て代価を支払って取得した。

チャフチャラーンの後，２～３泊過ぎると雪はまことに深くなり，あぶみの
193a 上にまで（193a）達した。というより，ほとんどの所で馬の脚は土にとどかなかった。雪はなおも降り続けていた。チェラーグダーン Cherāghdān を過ぎるとまた雪はますます深くなった。道も分らなくなった。

ランガリ・ミール・ギヤース附近で，私たちはカーブルへどの道をとって進むかを相談した。私とほとんどの者たちは，「冬で，山道には多くの不安や心配がある。カンダハール道は少し遠いが，心配や不安も無く進める」という意見で一致していた。しかしカースィム・ベグはその道の事を「遠い。この道で行こう」とさかんに力説した。その結果，私たちはこの道をとる事になったのであった。

ピール・スルターン Pīr Sulṭān という名のパシャーイー族の者が道案内人であった。彼は齢のせいか，急いだためか，それとも雪が深いためか，道を見失って先導する事ができなかった。私たちはカースィム・ベグが力説した結果この道をとったのであったため，カースィム・ベグはその責任を全うするため馬を下り，彼自身と彼の息子たちが雪をけちらして道を見つけては前進していた。

ある日，また雪が大変深くなった。道も分らなくなった。私たちはいろいろと努力してみたが，進む事ができなかった。やむなく引返し，ある１つの薪のある場所に下馬した。私はそこで，70～80人のすぐれた若党たちを，私たちの足跡をたどって引返し，谷の低地に越冬しているハザーラ人の中から人を見つけ，道案内をさせるため連れて来るようにと任命した。私たちは，この出発した者たちがもどるまで，３～４日間，この宿営地から動かなかった。しかし彼
193b らもよい道案内人を連れて来る事ができなかった。私は，（193b）全てを神に委ね，スルターン・パシャーイーを先頭にたてて，先に道を見つけられずに引返したあの同じ道へと足を踏み入れた。その数日間，私は大変な苦しみと不安を体験した。それは生涯でほとんどなめた事が無い程の苦しみであった。次の

マトラー maṭla‘〔カスィーダの冒頭の句〕をこの時私はうたった。

私がまだ見た事の無い運命の圧制・圧迫がなお残っていたのであろうか？
疲れはてた私の心が堪えられぬ苦悩・不幸がまだ残っていたのであろうか？

1週間近く，雪を踏みかためつつ，1日に1～1.5シャルイー以上は進む事ができなかった。雪をかきわけたのは私であった。10～15人の者たちも行動を共にした。カースィム・ベグも加わった。彼のテングリ・ベルディ Tengri-berdi, カンバル・アリー Qanbar ‘Alī という2人の息子と，さらに2～3人の彼の従士もそれに加わった。これらの者たちは徒歩で進んで雪をかきわけた。各人は7・8～10カル〔カルは「腕の長さ」〕前進しては雪をかきわけた。毎歩，足を踏みおろすごとに腰や胸の所にまで雪中に何度も沈み雪をかきわけた。数歩進むと，先頭を行く者は力つきて立ちどまった。別の者が先頭にたった。

この10～15ないし20人の者たちは，空荷の馬を引けるようにするために，徒歩で雪をかきわけていた。空馬が引かれたが，この空馬も，あぶみや鞍翅(qabtal)〔鞍の居木先〕の所まで何度も何度も沈み，10～15歩ほども進むと疲れはてた。この馬を脇の方に引いて，別の空馬を先頭にした。このように私た
194a ち10～15ないし20人（194a）の者のみが雪をかきわけた。この10～15ないし20人の者の馬のみが先頭にたてられた。しかしその他の全ての大変すぐれた若党たちや，ベグと呼ばれている者たちは，自分の馬からおりず，雪かきと踏み固めをおわった道に入って，その頭をたれながら進んだ。人に仕事を強制したり強要すべき時ではなかった。誰であれ，その気と勇気さえあれば，このような作業を自ら求めてするものなのだ。

このように雪をかきわけ，道を作りつつ，うめき苦しんだ場所の3～4日後，私たちはザッリーン峠 Zarrīn Kötäli の麓のハワーリ・クーティー Khawāl-i Qūtī という名のハワール〔洞窟〕に到達した。この日は驚くほど烈しい風と共に雪が降った。皆が死ぬのではないかと考えたほどであった。その土地の人びとは山中の洞窟やほら穴の事を「ハワール」と呼んでいた。このハワールに到達した時，風雪が限りなく烈しくなった。私はこのハワールの傍らに下馬した。

深い雪とひとりしか通れぬ道であった。雪をかきわけ，踏み固めた道ですら，

馬はやっとの事で進めたにすぎなかった。日が最も短かい時期であった。先頭の者たちは，まだ日がある内にハワールの前に着いた。夕刻の礼拝時，就寝の礼拝時にまで人びとが到着し続けた。それより以後は，人びとはそれぞれその到達していた地点に下馬した。多くの者たちが馬上であけぼのを迎えた。

ハワールはやや狭く思われた。私はハワールの入口の所でシャベルを使って雪を取除き1つの休息用の場所をこしらえた。私は私の胸の深さまで掘った。
194b それでもなお (194b) 土まで達しなかった。少しは風をさけられた。私はこのようにして坐っていた。皆がどんなにハワールの中へ入るようにと云っても，私は入らなかった。ふと次のように思われたからである：全ての人びとが雪と強風の中に居る時に，私が温い室内でくつろぐ事，また全ての部民が不安にさいなまれている時に，私が眠りを貪って休息する事は，人間的なものからはほど遠く，また友誼からもかけ離れた事である。どんな不安や困難があろうとも，私はそれに立ち向おう。何であれ人びとが耐える事は，私もまたそれに耐えよう。1つのペルシア語の諺がある。「友と共にする死は婚礼である (marg be-yārān sūr ast)」。

私は，まさにあのような強風のさ中に，掘り整えた穴の中に坐っていた。就寝時の礼拝の時刻まで，雪はますます激しく降りそそぎ，私は身をかがめて (engäship) 坐っていた。私の背や頭や耳の上には手4つ分の雪が積もった。就寝時の礼拝の時刻に，洞窟をよく調べた者が「ハワールの中は非常に広い。皆に十分な広さがある」とさけびあった。私はこれを聴くと，私の上に積もった積雪をふり除いてハワールに入った。私はハワールの附近にいた若党たちをも呼んだ。そこには40～50人のための安らかな場所があった。糧食，冷凍肉，乾し米，それに何であれまた誰のものであれそこにあった全ての物が持ちよられた。私たちは，このような寒気と雪と強風のさ中に，不思議なほど温く，平安でゆったりとした場所に入る事ができたのである。

翌朝までに雪と強風はやんだ。私たちは早朝に出発して，同様に雪をかきわ
195a け道を整えつつ，(195a) 峠の上に出た。道そのものは蛇行しつつ上の方に向かっているらしかった。人びとはザッリーン峠と呼んでいた。私たちは上方へ向かわず，渓谷の低地をめざしてくだった。峠から麓に到達するまでに夜となった。私たちは渓谷の入口に宿営した。その夜は寒さがきわめて厳しかった。私たちは，まことにつらい困難な状態でその夜を過ごした。多くの者たちの手

足が凍傷にかかった。ケペの足とセヴュンドゥク・トゥルクメン Sewündük Türkmän の手，それにアヒー Aḥī の足が，その夜，凍傷にかかった。

翌朝，私たちは谷の低地に向け進んだ。正しい道がこれではない事を察知してはいたが，私は神を信じ，谷底の低地を進んだ。足場の悪い険所・難所を通過しつつくだった。夕べの礼拝の時刻，私たちはようやく，谷の出口に出た。どのような古老たちも，従来このような深い雪がある時に，この峠を人が越えたという事を記憶していなかったようである。というより，この時節に，この峠を越える事など，誰も思いもよらぬ事であったらしい。私たちは大雪のために数日間まことに辛苦をなめたが，結局はこの大雪が幸して私たちは自らの目的地に到達する事ができたのであった。というのは，もしあのような大雪でなかったならば，いったい誰があのような道無き険所・難所を通過できたであろ
195b うか？ (195b) というより，もし大雪でなかったならば，第一に，険所の所で皆の馬やらくだは全て立往生したはずであった。

起こり来たる全てのよき事も悪しき事も
よくよく見れば，全てよし。

私たちがヤカ・ウラング Yaka Ulang に到着して下馬したのは就寝前の礼拝の時刻であった。ヤカ・ウラングの人びとは私たちが到着して下馬するとすぐにそれを知った。そこには温かい家々と肥えた羊たち，馬のためのかいばと乾し草が無限にあった。火を起こすための薪と燃料として用いる動物の糞も限りなくあった。あのような寒気と雪から脱出してこのような人里と温かな家々を見出す事，またあのような艱難・辛苦から解放されてこのような大量のパン (nān) と肥えた羊を見出す事，それはこのような辛苦を体験した者のみが知る安らぎであり，このような艱難を経験した者のみが知る安寧であった。私たちは，心安らかに，１日，ヤカ・ウラングに滞留した。

ヤカ・ウラングを発って，２ユガチ進んだ後，私は下馬した。その翌日は**ラマザーンあけの祭日** (ramaḍān ʿīdi) 〔1507年２月14日〕であった。私はバーミーヤーン経由で進みシバルトゥー峠を越え，ジャングリクに着く前に下馬した。

トゥルクメン・ハザーラ族がその家族・財産ともどもに，私たちの進む交通路上に冬営している事が分った。彼らは私たちの事は全く気付いていなかった。翌日，私たちは出発して，その地に到達すると，進んで彼らの羊囲い (aghıl) やテントの間に下馬した。彼らの内の２～３グループの者たちは，羊を略奪・

強奪するために出かけていた。その他の者たちは，テントと財産を残して，子
196a 供たちや幼い者たちを（196a）連れて山にひきこもった。前方から，若干のハザーラ人たちがわれわれの兵士の前にたちはだかり，矢を射かけ，何人(なんぴと)も通過させないようにしているとの知らせが入った。この知らせが入ると，私は大急ぎで進んだ。そこに着いて私が眺めてみると，そこは隘路でもなかった。若干のハザーラ人が１つの山の突出部の所から矢を射かけていた。彼らは輜重をそこに集めて立っていた。彼らはまことにすぐれた若党たちの如く思われた。

かの者たちは敵の強さを見てとりぬ。
驚き動天して立ちつくしぬ。
われ至りて，急ぎかの方へと進みたり。
「進め！進め！」とて前方へと進みたり。
わが望みは皆の者を急がせる事なりき。
敵と戦わせる事なりき。
皆に「急げ」と云いつつわれは進めり。
されど何人もわが言葉に従う者無かりけり。
われによろいも馬甲も武具も無かりき。
わが手元にありしは矢と矢筒のみなりき。
われ進めども，皆は全て留まりぬ。
あたかも敵のこの者たちを殺したるが如し。
汝は下臣，汝は主君のため何を為さんとするぞや？
主君の武具が別のある場所にあるという時に，汝は主君の命のために何を為さんとするぞや？
下臣が留まり，そのベグが進む事などあるべからざる事なり。
下臣が安逸をむさぼり，そのベグがくちはてる事などあるべからざる事なり。
かくの如き下臣は無益のもの。
いかなる仕事にも適せずいかなる食物にも適合せぬ。
遂にわれ，馬を駆りて前進せり。
馬を駆りつつ，山に向け上方へと進めり。
196b （196b）われを見て，皆も進めり。
皆の背後に，憶病者たちは残れり。

われらは到達し，急ぎ山によじ登りぬ。
矢に眼もくれず，進み越えぬ。
時には下馬し，時には乗馬せり。
勇をふるいて前へと進みたり。
敵も山より矢を射かけたり。
わが力を見るや，戦(いくさ)をやめ，すぐさま逃走せり。
われらはハザーラを撃退して山上に出でたり。
山頂や山の側面の丘なる鹿の如くハザーラを狩れり。
出くわせし者どもを鹿の如くに射ちらしたり。
略奪し，財貨，羊をせしめたり。
トゥルクメン・ハザーラを殺しぬ。
その民を捕えぬ。
男やそのいいなづけを捕えぬ。
妻や子らを捕えぬ。

ハザーラ人の財貨の内から，私もかなりの数の羊を集めた。それらをヤーラク・タガーイーに委ね，私自身は先へ進んだ。いくつかの山頂やいくつかの山の側面の丘を通って進み，ハザーラ人の馬や羊を駆りつつティムール・ベグ・ランガリ Tīmūr Beg Langarı まで連れて行って，そこで私たちは下馬した。トゥルクメン・ハザーラ人の14～15人の悪党・追はぎの主だった者たちを捕えてあった。私は，彼らをその下馬した宿営地で種々責めさいなんだ末に殺すつもりでいた。それは全ての追はぎ・悪党の見せしめにするためであった。しかし途中でカースィム・ベグに (197a) 出くわすと，彼は，時ならぬ時に，彼らを憐れんで釈放した。

197a

黒き大地はヒヤシンスを生みはせぬ。
黒き大地の内にて行為の種子を腐らせる事なかれ。
悪しき者どもに善を為す事は，あたかも
善き人びとに悪を為すが如し。

私は捕虜たちをも憐れんで釈放した。

このトゥルクメン・ハザーラを襲撃中に，私は，ムハンマド・フサイン・ミールザー・ドゥグラト，それにスルターン・サンジャル・バルラースがカーブルに残っている全てのモグールらを自らの側に引きつけて，ミールザー・ハー

ンを君主にして，カーブルを包囲しているという情報に接した。彼らは人びとの間に，バディーゥッ・ザマーン・ミールザーとムザッファル・ミールザーが王様〔バーブル〕を捕え，現在アラ・クルガン Ala qurghan の名で知られている〔ヘラート城内の〕イフティヤールッ・ディーン要塞 Qal'a-yi Ikhtiyār al-Dīn に送ったという情報を流していた。

カーブル城には，ムッラー・バーバーイ・パシャーガリー，ハリーファ，ムヒッブ・アリー・コルチ，アフマド・ユースフ，アフマド・カースィムらをはじめとする者たちが残っていた。彼らはよい働きをした。彼らは城を固めて保持した。

私たちは，ティムール・ベグ・ランガリからムハンマド・アンディジャーニー Muḥammad Andijānī という名のカースィム・ベグの家臣——トゥクバイ Tūqbāy の出身——を派遣して，カーブルにいるベグたちに，私たちがこの地まで来ている事を書面で知らせる事になった。書面の内容は「私たちは，グールバンド隘路を出て，彼らに向け急行する。私たちは，ミナール山 Minār Taghı を過ぎるとすぐ火をともす。それを合図として，貴公らも内城の古い
197b 東屋——現在の宝物庫——の上に大きな火をかかげられよ。(197b) 私たちの到着を貴公らが知ったという事を私たちが知らんがためである。私たちがこちら側から到達すると同時に，貴公らも城内から出撃して手ぬかりの無からん事を」と決定された。私はこれらの言葉を書かせて，ムハンマド・アンディジャーニーを派遣した。

私たちはそこを早朝に馬で出発し，昼近くにグールバンド隘路を出てキョプリュク・バシ Köprük-bashı に下馬した。水を与え馬を休ませて，正午の礼拝時，キュプリュク・バシを発った。トゥトカーウル Tutqāwul までは雪は無かった。トゥトカーウルを過ぎると進めば進むほど雪がより深くなった。ザンマ・ヤフシ Dhamma Yakhshı とミナールの間は，私が生涯に稀にしか体験した事の無いほどの寒さであった。

私は「私たちは約束通りに来た。その事を知られよ。勇気をふるわれよ」と，アフマド・ヤサーウルとカラ・アフマド・ユルトチをカーブルにいるベグたちに向け派遣した。私たちはミナール山を過ぎてその麓に下馬した時，寒さに耐えきれず火を燃やして暖をとった。火を燃やすべき時ではなかったにもかかわらずあまりの寒気の厳しさに耐えきれず火を燃やしたのである。

夜明け近くに私たちはミナール山の麓を出発した。ミナールとカーブルの間

は雪が馬の膝にまで達した。雪は固くなっていた。道をはずれた者たちは苦労して進まねばならなかった。この間，私たちはずっと一列縦隊で進んだ。その
198a ため，私たちは予定時に，カーブルに（198a）気づかれずに到着した。私たちがビービー・マーフ・ルーイー Bībī Māh-rūī に到達するより前に，内城から大きな火がかかげられた。城内の者たちが私たちに気づいた事が判明した。

私はサイイド・カースィム橋に到達するとシーリーム・タガーイーと右翼の兵らをムッラー・バーバー橋の方面へと派遣した。私たち左翼と中軍はバーバー・ルーリー道（Bābā Lūlī yolı）をとった。その当時は，〔現在の〕ハリーファ庭園の所に1つのやや小さな庭園があった。ウルグ・ベグ・ミールザーが造ったもので，救済院（langar）のようなものであった。樹木は残っていなかったが，囲いはあった。ミールザー・ハーンはそこに滞留していた。ムハンマド・フサイン・ミールザーはウルグ・ベグ・ミールザーが造った「楽園」Bāgh-i bihisht にいた。

私がムッラー・バーバー庭園の小路側にある墓地の所に至った時，敵は，急いで前進した〔わが方の〕者たちを撃退して我々のいる所へと押し込んだ。〔わが方の〕前進して，ミールザー・ハーンの滞留しているあたりに進入したのは4名であった。1人はサイイド・カースィム・イシク・アーガーであった。もう1人はカースィム・ベグの子のカンバル・アリーであった。別の1人はモグールのシール・クリー・カラーウル Shīr Qulī qarāwul Moghūl であった。さらにもう1人はモグールのスルターン・アフマド Sulṭān Aḥmad Moghūl であった。彼はシール・クリーの部隊に属していた。この4人はそこに着くとすぐ，控える事無く，ミールザー・ハーンの滞留しているあたりに進入した。騒ぎとなった。ミールザー・ハーンは1頭の馬に乗って脱出した。アブル・ハサン・コルベギ Abū al-Ḥasan qor-begi の弟のムハンマド・フサインもミー
198b ルザー・ハーンの（198b）家臣となっていた。彼はこの4人の内のシール・クリーをうち倒した。首を切ろうとした時にシール・クリーはのがれた。この4人は刀で切られ矢をあびせられ傷だらけになって前述の場所で私たちの所へ押しこめられて到着した。

狭い小路に騎馬の者たちが押しこめられた。彼らは立ちどまっていた。前に進む事も後ろに退く事もできないままでいた。私は近くにいた若党たちに「馬をおりて突撃せよ」といった。ドースト・ナースィル，ホージャ・ムハン

マド・アリー・キターブダール，バーバー・シールザード，シャー・マフムード，それに若干の若党たちが馬をおりて進み矢を射かけた。敵はただちに逃走した。

私たちは城内にいる者たちの方に眼をこらした。彼らは事に間にあうように到着する事ができなかった。彼らは，私たちが敵を一掃した後に，1人ずつ2人ずつと敵と戦いながら到着し始めた。私たちがなおミールザー・ハーンがいたチャール・バーグに入らないでいた時に，城内の者たちの内，サイイド・ユースフの子のアフマド・ユースフが到着した。彼は私に同道して，ミールザー・ハーンがいた庭園に入った。私は探したが，ミールザー・ハーンはいなかった。彼はすでに脱出していた。私は急いで引返した。アフマド・ユースフは私の後に従った。

チャール・バーグの門から，歩兵のドースト・サリプリー Dūst Sar-i-pulī が甲冑もつけず，刀を手に入って来た。彼はカーブルで，その勇敢さの故に，私が眼をかけ，指揮官（kotwāl）の位を与え，カーブルに置いておいた人物であった。彼は私の方へと真っすぐに向って来た。私はよろいは身につけていた
199a が，それに鎖かたびらの板（gharbichi）を結んで（199a）いなかった。私はヘルメットもかぶっていなかった。「おいドースト！おいドースト！」と私が何度か叫んだ。アフマド・ユースフも叫んだ。私の人相が寒気と雪のために変ってしまっていたためか，あるいは戦でうろたえていたためか，彼は私だと分らなかった。躊躇する事無く，彼は私のむき出しの腕に刀をあびせた。しかし神の恩寵のおかげで，かすかの傷すらも受けなかった。

たとえ刀が世界をその場所から揺り動かしたとて，
神が望まれぬ限り，その岩脈を切れはせぬ。

私は次の〔アラブ語の〕祈りを口ずさんでいた。至高の神がこの危害をしりぞけられ，またこのふりかかった災難をおしのけて下さったのは，この祈りのおかげであった。その祈りは次の如きものであった。

慈悲深く慈愛遍きアッラーの御名において。アッラーよ！あなたはわが主。あなたの他に神は無い。あなたを信じ奉る。あなたは強大なる玉座の主。アッラーがお望みになる事が起こり，お望みにならぬ事は起こりはせぬ。至高至大のお方のもと以外，いかなる力も存在しはしない。知れ！げにアッラーは全ての事柄に対して全能であらせられる。アッラーは全ゆる事を

完璧に知り給い，全ゆる事を完全に計算し給う。アッラーよ！私自身にかかわる災厄も，それ以外の者たちにかかわる災厄も，また全ての災厄持ちの災厄も，全ての動物たちの災厄も，あなたにお返し奉る。それらの前髪をつかんでお受取り下さらん事を。あなたはまこと強大なる玉座の主。

私はそこを出て，ムハンマド・フサイン・ミールザーのいる楽園（バーギ・ベヒシュト）に到着した。ムハンマド・フサイン・ミールザーは逃走して身を隠していた。彼がいた小庭園の塀の裂け目の所に7～8人の弓矢を持った者たちが立っていた。私
199b はこの者たちに向って，馬に拍車を（199b）当てて進んだ。彼らはそこを守る事ができず，ただちに逃走をはかった。私は追い着くとその内の1人に刀をあびせた。彼は私がその首がとんだと推定したほどにころがっていったので，私は通り過ぎた。私が刀をあびせた男はミールザー・ハーンの乳兄弟のトレク・キュケルダシュ Töläk Kökäldash であったらしい。刀は肩に当たったようである。

ムハンマド・フサイン・ミールザーがいた家屋の門の所まで行くと，屋根の上から1人のモグールが門のポーチほどの近距離から私の顔めがけて弓をひきしぼった。彼は私の家来で，私は彼の顔を知っていた。あちらこちらから「おいおい，王様だ」と声があがった。彼は矢をひっこめ，投げ捨てて逃げた。もはや矢を射るべき時機を過ぎていた。そのミールザーも指揮官たちも，逃走したり捕えられたりしていた。彼がいったい誰のために矢を射る事があろうか。

この同じ場所で，人びとはスルターン・サンジャル・バルラースを捕え，その首に縄をかけて連行して来た。この男は，私が眼をかけニングナハール地区を賜与していた人物であったが，この反乱の際，反乱者たちに加担していたものである。彼は混乱して，「おい，俺がどんな罪を犯したというのだ」と叫んでいた。「この連中と心を1つに，考えを1つにした者たちの中でお前は首魁の1人だ。これ以上の罪があろうか」と私は答えた。しかし彼が私のおじのハーンの母シャー・ベギムのおい〔姉妹の子〕であったため，私は「彼をこのような不名誉な姿で歩かせるな。死は無い」と命じた。ここを発つ際，私は城内
200a にいたベグの1人であるアフマド・カースィム・コフブルに命じて（200a）1団の若党らと共にミールザー・ハーンのあとを追わせた。

この同じ楽園の傍らにシャー・ベギムと〔ミフル・ニガール〕ハーヌムがテントを設置して滞留していた。私はこの園を出ると，シャー・ベギムとハーヌ

ムに会うためにおもむいた。

町の人びとやごろつきたち（qara tayaq）が暴動を起こし，町の端々や片隅で人を捕えたり，金品の略奪に着手していた。私は人びとを派遣してその若干の者たちを打って追い払わせた。

シャー・ベギムとハーヌムは1つのテントにいた。私はいつもの場所で馬を下り，以前と同様に礼を失しないようにして進んでお会いした。シャー・ベギムとハーヌムは極度に，考えられないほど落つきを失い，混乱し，ろうばいし，恥じいっていた。彼女たちは適当な言訳も云えず，丁重に挨拶を述べる事すらもできなかった。私はこの人びとがあのような態度に出る事を期待していなかった。〔反乱を起こした〕あの連中がその時いかに神に見はなされていたにせよ，彼らがベギムやハーヌムの言葉に耳をかさぬというほどの事はなかったであろう。ミールザー・ハーンはシャー・ベギムの血をひく孫であり，日夜その傍らにいた。あの連中がたとえいう事をきかなかったにしても，少くともミールザー・ハーンを行かせず，彼女たちの傍らに置いておく事はできたはずである。

私は何度か，時々の浮き沈みとままならぬ定めの故に，王位・王国・従者・
200b 従士たちと引き離され，彼ら〔モグール・ハーンの一族〕の許に（200b）身をよせた事があった。私の母も共に行かれた。しかし彼らは何もしてくれなかった。私の弟〔正しくは「いとこ」〕のミールザー・ハーンとその母のスルターン・ニガール・ハーヌムは最高の富み栄えた諸地方を所有していた。私と私の母は地方の事はともかくとしても，1つの村，若干の牛耕地をすら所有していなかった。私の母はユーヌス・ハーンの娘であり，私はハーンの孫ではなかったのか？

あの一族〔モグール・ハーンの一族〕の誰であれ，私のよき時代に，彼らが私の許に舞いこんだ時には，私は可能な限り一族としての務めをはたし，できる限りの親切をつくしたものである。例えばシャー・ベギムが来られた時には，私はカーブルの最高の地域の1つであるパムガーンを与えた。さらに私は子のように，また下僕のようにお仕えする事におこたる事がなかったつもりである。

またカーシュルガルのハーンであるスルターン・サーイード・ハーンが5～6人の徒歩の甲冑も持たぬ者たちと来た時にも，私は血を分けた弟たちのよう

に見なし，ラムガーン諸地区の内のマンドラーワル地区を与えた。さらにシャー・イスマーイール Shāh Isma'īl がシャイバーニー・ハーンをマルヴで捕えた時，私はクンドゥズに行っていた。アンディジャーン地方の人びとが私の方に眼を向け，若干の〔ウズベクの〕ダルガらを追い出し，若干の土地を固めて私の所に人を派遣して来た。私はスルターン・サーイード・ハーンに私の全ての家来たちを委ね，援軍を加え，私の故国であるアンディジャーン地方を彼に贈与し，ハーンにして送ったのであった。

現在に至るまで，私はあの一族の誰であれ私の許に来れば，私自身の血を分けた者たちと同様に見なしてきた。例えば，チーン・ティムール・スルターン Chīn Tīmūr Sulṭān, イセン・ティムール・スルターン Isän Tīmūr Sulṭān, トフタ (201a)・スルターン Tokhta Sulṭān, バーバー・スルターン Bābā Sulṭān
201a が現在私の許にいる。私はその全員を，私自身の血を分けた者たちよりもよく面倒を見て，種々の恩恵を与え優遇している。

このような事を私が書き記すのは，非難しようとするためではない。私が書いている事が事実なのである。このような事を記述するのは，自分をえらく見せようとするためではない。私が記した事が真実なのである。私は，この史書 (tārīkh) の中では，真の事実を記述し，全ての事柄をそのありのままに書き記す事を必須としている。その結果，必然的に，私は自分の一族の人びとについても，はっきりしている全ての善と悪を説明し，また同胞や異国人についても，ありのままの欠点と長所とを記述した。読者がそれを了とされ，また読者が異を立てずにすまされん事を。

私はここを発って，ミールザー・ハーンが滞留していたチャール・バーグに行き，諸地方・諸部族・諸軍団に向け捷報 (fatḥ-nāma) を送った。その後，乗馬して内城(アルク)におもむいた。ムハンマド・フサイン・ミールザーは，怖れのために，ハーヌムの寝室 (töshäk-khāna) に逃げ込み，マットレスの覆いにくるまっていた。私は城内にいた者たちの内からミーリーム・ディーワーンとその他若干の者たちを，これらの家々を支配下に置き，ムハンマド・フサイン・ミールザーを発見して連行して来るために任命した。ミーリームはハーヌムの
201b 邸の門の所に着くとかなり荒々しく，かなり無礼な事を (201b) 口にした。結局，とにかく彼らはムハンマド・フサイン・ミールザーをハーヌムの寝室で見つけて，内城の私の前へと連行して来た。

私は，以前と同様に，敬意を表すために立ち上った。私はあまり厳しい顔付もしなかった。ムハンマド・フサイン・ミールザーはあのような無作法な恥ずべき行動に足を踏み入れ，あのような煽動と反乱の挑唆に力を尽くしたのである。たとえ私が八つ裂きにしたとて，彼はそれに十分に値する行動をとったのである。彼は種々責めさいなんだ末に殺すに値した。しかし私たちの間にはある種の親族関係があり，また彼には，私の血を分けたおばであるフブ・ニガール・ハーヌムから生まれた息子や娘たちがいた〔11a 参照〕。そのため私は，この当然の権利を心にしまいこみ，ムハンマド・フサイン・ミールザーを釈放した。私は彼にホラーサーン方面への退去を許した。この人間性に欠け正義を知らぬ男は，その命を助け与えたという私の親切を完全に忘れ，シャイバク・ハーンの許で私の陰口をたたき，私について文句を云っていた。しかしほどなくして，シャイバク・ハーンは彼を殺し，彼にその報いを受けさせたのである。

おお汝！汝の悪行を時の流れに寄託せよ。

時の流れは汝にあだを報ずる召使なるが故に〔160a 参照〕。

私はアフマド・カースィム・コフブルとその他の若干の若党たちにミールザー・ハーンの後を追わせていたが，彼らはカルガ・ブラク Qargha Bulaq の丘の所でミールザー・ハーンに追いついた。彼は逃げる事すらもできず，また
202a 抵抗するだけの力も勇気も持っていなかった。捕えて連行して来た。(202a) 私は古い会議場（dīwān-khāna）の東北側のイーワーン〔前室〕にいた。私は「来なさい。挨拶を交そう」と云った。動揺のあまり，彼は膝まづいて私の所に来るまでに2度もころんだ。挨拶を交した後，私は彼を私の傍らに坐らせてはげました。シャーベットが運ばれて来た。ミールザー・ハーンの心配を取除くために，シャーベットをまず私が飲んでから彼に与えた。

ミールザー・ハーンに従った兵士や農民やモグール人やチャガタイ人たちは疑心暗鬼でいた。数日間，私はミールザー・ハーンを看視下におきつつ，その姉の邸にいるようにと命じた。前述の諸部民については，なお何をしでかすか知れないという心配や怖れがあった。ミールザー・ハーンがカーブルにいる事はよくないと考えて，私は数日後，彼にホラーサーン方面への退去を許した。

彼らに退去の許可を与えた後，私たちはバーラーン，チャーシュトゥーバ Chāshtūba，グリ・バハール Gul-i Bahār 山麓の方面へと出かけた。春には，

バーラーンの野やチャーシュトゥーバ平原，それにグリ・バハール山麓はきわめてすばらしい。その地の木や草は，カーブル地方の他の諸地域に比べるとまことに見事であった。種々のチャーリップが花開く。1度，私はチャーリップの種類を数えさせた。34種類もあった。この地を讃えて私は次のような1句をうたった。

春，カーブルは草木と花とによって天国となる。

特にこの季節にはバーラーンの野とグリ・バハー。

この小旅行の際，私は次のガザルを完成した。

202b わが心は薔薇のつぼみの如く（202b）層なす鮮血，

いくたびか春来たりなば，開かざるべけんや。

カーブル及びガズニー地方に関する説明・記述の中ですでに少しふれたように，たしかに春に，旅行したり，鷹を放ったり，鳥を射たりするために，これほどすばらしい土地は他には少い。

この年，ムハンマド・コルチ，ムバーラク・シャー，ズバイル，ジャハーンギールといったバダフシャーンのベグたち〔154b—155a 参照〕はナースィル・ミールザーと彼がひきたてた者たちのやり方に腹をたてた——というより彼らに敵対した。バダフシャーンのベグたちは全員一致して兵を率いコクチャ川 Kokcha-suyı のヤフタル Yaftal 及びラーグ方面へ，平地を通って騎兵・歩兵を集め，隊伍を整え，諸丘を経てハムチャーン Khamchān 近郊に到着した。ナースィル・ミールザーと彼の所にいた経験不足のベグたちは，深くも考えずまたよく注意もせずに彼らと戦うために諸丘の所へ来て戦った。

そこは急峻な所であった。〔バダフシャーンの側の〕歩兵は多数であった。〔ミールザーの側の騎兵が〕1～2度馬で攻めこんだが，彼らは持ちこたえ，攻撃して退却させた。〔ミールザーの側は〕留まりえず，急に逃走し始めた。バダフシャーン人たちはナースィル・ミールザーに襲いかかり，その配下の者たちを略奪・劫奪した。ナースィル・ミールザーは近くにいた者たちと共に攻撃され，略奪され，イシュケミシュとナーリーン Nārīn を経てキーラーガーヒー Kīlāgāhī に至り，クズル・スーを上流へと進み，アーブ・ダッラ道に入り，シバルトゥー峠を越えて〔130b 参照〕，略奪され，飢え，甲冑も身につけぬ70～80名の従者・従士たちと共にカーブルに到着した。

まことに驚くべき神のお力である。わずか2～3年前〔155a 参照〕，ナースィル・ミールザーは全ての部民・部族を移動させ追いたてて，カーブルから敵
203a 対するかのように出奔して，(203a) バダフシャーンに到達して谷や城を固めたのである。彼はどんな考えで行動していたのであろうか。彼は以前の行動を恥じていた。あのように別れて行った事を恥じていた。私も〔私の気持を〕全く顔に出さなかった。やさしく気嫌を問うて，その恥ずる気持を無くさせた。

〔913年/1507年5月13日—1508年5月1日/の出来事〕

私はギルジー Ghiljī 族を攻撃する目的でカーブルを出発した。〔ガズニー地方の〕サリ・デフに下馬した時，そこから1ユガチほど離れたマシュト Masht とセガーナ Segāna に多数のマフマンド Mahmand 族が私たちに気づかずにいるという情報がもたらされた。そこにいたベグたちや若党たちは「マフマンド族を討たねばならぬ」という点で意見が一致していた。しかし私は「それで正しいだろうか？私たちはこの人々をめざして出馬したのであったか？めざした者たちの所に到達しないで，自分たちの支配下に属する農民を攻撃して帰るというのか？そんな事はできぬ」と云った。

私たちはサリ・デフを発ち，カッタワーズ平原を，夜，暗闇の中を進んだ。真暗な夜で，しかも真たいらな土地であった。山も丘も見えず，道も足跡も分らなかった。誰も先導する事ができなかった。結局，私自身が先導した。私はかつて1～2度，この近くに来た事があった。その経験から推測して，私は北極星が私の右肩甲骨の所に来る方向をとって進んだ。神が正義をもたらされた。私たちは，まっすぐカヤクトゥー Qayaqtū 及びウラバトゥー Ulabatū 川（ルード）に到着した。この川の所から，ギルジー族のいるホージャ・イスマーイール・サリーヤティ Khwāja Isma'īl Sarīyatı に向かう道が出ていた。

203b 私たちはこの川の所で下馬し，私たち自身と (203b) 私たちの馬をいっ時ねむらせ，休息をとり，あけぼのと共にそこを出発した。私たちがこれらの丘や谷底から平地に出るまでに太陽が昇った。<p. 257 この地からギルジー族のいる所までは正確に1ユガチの道のりがあった。>平地に出ると，ギルジーの集団か，あるいはその煙が見えた。利己心によるものか，あるいは若さの故か，兵士たちはいっせいに先方へと殺倒した。私は1～2キョルフ〔キョルフは4,000歩の距離〕も馬を走らせ，人や馬に矢を射かけ，やっとちりぢりになった皆を集めた。このように馬なりに馬を走らせて，前方へと殺倒している5～6,000人の兵士たちを集める事はまことに大変な事であった。しかし神が正義をもたらされた。兵士らは鎮静された。さらに1シャルイーほど進むとアフガーン人の集団が見えた。私は攻撃をかけた。この攻撃の際，多数の羊が手に入

った。他の攻撃では，これほど多数の羊が手に入った事は無かった。

私たちが戦利品を〔カーブルに向け〕引返させ，下馬すると，あらゆる方面から次々と〔アフガーン人の〕1隊が来て，平原に下馬し，戦をしかけてきた。その内の1隊を，若干のベグたちと近習たちが行って全員を捕え，全員を殺した。さらに別の1隊を，ナースィル・ミールザーが行って，その全員を殺した。死んだアフガーン人らの首で首の塔を建てた。前述した〔198b—199a参照〕ドースト・ピヤーダ・コトワールの足に矢が命中した。彼はカーブルに帰った時に死んだ。

私たちはホージャ・イスマーイールを発ち，ウラバトゥーに到着して下馬した。この地で，若干のベグと近習たちに，監督におもむき，これらの戦利品の内から$\frac{1}{5}$を取って来るようにと命じた。私たちはカースィム・ベグとその他の
204a 若干の者たちからは，特に恩恵を与えて，$\frac{1}{5}$を取らなかった。(204a) 記録された$\frac{1}{5}$税は，羊16,000頭にものぼった。つまり80,000頭の羊の$\frac{1}{5}$という事になる。失なわれた羊や，特に恩恵を与え徴発しなかった羊を合算すると，その数が10万に達した事は疑問の余地が無い。

翌日，私はその宿営地を発ち，カッタワーズの野で巻き狩の陣を<p. 248はった。この草原には，常に，鹿や野生のろばが肥え，しかも多数いた。陣の>中に野生ろばや鹿が多数入った。多くの野生ろばや鹿が殺された。狩の最中に，私は1頭の野生ろばの後を追って馬を走らせた。近づくと私は1本の矢を射た。さらにもう1本をも射た。しかしこれらの傷もそれを倒すには十分でなかった。ただしこの2つの傷の痛手のため前よりはスピードが落ちた。私はその後を追った。間近に迫って，その両耳のうしろの頭蓋骨のてっぺんに向け刀を打ちおろした。刀がその喉にまで達し，野生ろばは立止まり，転倒して死んだ。そのうしろ足がほとんど私の馬のあぶみに達するほどであった。私の刀はまことによく切れたものである。それは驚くほどに肥えた野生ろばであった。その腹のあぶら身の厚さは人の1カルシュ qarısh〔カルシュは「親指と小指を張った長さ」〕よりはやや薄かった。シーリーム・タガーイーと幾人かのモグーリスターン鹿を見た事のある者たちは驚嘆して，モグーリスターンでもこのように肥えた鹿を見た事が無いと云った。この日また私はもう1頭の野生ろばを射た。この狩猟で獲得した野生ろばや鹿はほとんど皆肥えていた。しかしそのどれも私が殺した野生ろばほどには肥えていなかった。私たちはこの略奪

からもどってカーブルに下馬した。

昨年の末，シャイバク・ハーンはサマルカンドからホラーサーンをめざし
204b て（204b）出兵した。アンドゥホードにいた裏切者のおかまシャー・マンスール・バフシ Shāh Manṣūr Bakhshı がシャイバク・ハーンの許に何度も人を遣わし，シャイバク・ハーンの出兵を早めさせたのであった。シャイバク・ハーンがアンドゥホード近郊に到着すると，このおかまは，「私がウズベクの所に人を遣わしたのです」と云って，ウズベクを頼りにして，身づくろいして頭に羽根かぎりをさし，贈り物を持って出かけると，おさえる者のいないウズベクが諸方面から殺倒して，このくさった男と贈り物，それにその部下たちをさんざんに略奪した。

バディーゥッ・ザマーン・ミールザー，ムザッファル・ミールザー，ムハンマド・ブルンドゥク・バルラース，ズーン・ヌーン・アルグンは全て〔ヘラートの東方12ユガチの〕バーバー・ハーキーに軍隊と共に滞留していた。彼らは戦う決意もしておらず，また城を固める事にも心を決めていなかった。何をするかを決めておらず，またどうすべきかも知らぬままに，ただ茫然として滞留していた。

ムハンマド・ブルンドゥク・ベグは物のわかった人物であった。彼は，「ムザッファル・ミールザーと私がヘラートの城を固める事にしよう。バディーゥッ・ザマーン・ミールザーとズーン・ヌーン・ベグはヘラート周辺の山々におもむき，シースターンからスルターン・アリー・アルグン Sulṭān ʻAlī Arghun を，カンダハールとザミーン・ダーワルからシャー・ベグとムキームを，その軍勢と共に，自分たちの所に加えられよ。また誰であれそこにいるハザーラ族やニクダリー族の軍勢を集め，戦の準備万端をととのえた後，進まれよ。敵が山地にわけ入る事は困難です。彼らはまた，城外の軍勢を怖れて，城内にたてこもっている者たちの所へも進撃する事ができないでしょう」と云っていた。
205a 彼はよい事を云ったものである。成算のもてる（205a）考えを思いついたものである。

ズーン・ヌーン・アルグンは勇ましい男ではあったが，低俗な，財貨を好む，思慮分別からはほど遠い，ややにぶい，やや愚かな男であった。前述した如く〔183a 参照〕，当時のヘラートでは兄弟が王権を共有し，バディーゥッ・ザマ

ーン・ミールザーの許ではこの男が宮廷長の位にあった。彼は財貨を愛したが故に，ムハンマド・ブルンドゥクが城内にとどまる事をよろこばなかった。彼は自分自身が城内にとどまる事にした。しかし彼がそれを〔ブルンドゥクと〕同じようにする事は不可能であった。次の話ほど彼の愚かしさ，馬鹿さかげんをよりよく示す話は他にはないのではなかろうか。彼は猫かぶりの強欲な人々の嘘や嬉しがらせを本気にして，自分自身を不名誉と恥辱にまみれさせる結果となった。その詳細は以下の如くであった。彼がヘラートでかくも有力となり，このように大きな権力を所有するようになると，若干のシャイフたちやムッラーたちが彼の許に来て「天極が私どもと交わっております。貴方様は“アッラーの獅子”と呼ばれています。貴方は必ずウズベクを征服されるでありましょう」と述べた。彼はこの言葉を信じて，その首に〔ライオンのたてがみのように〕ナプキンをつけて，何度も礼を云った。

まさにこういった理由のため，彼はムハンマド・ブルンドゥクの理にかなった意見に従って行動せず，城内の諸事をその掌中に握った。しかし彼は戦のための甲冑を身につける事もせず，また敵の接近を知らせる物見や後衛を配備する事もせず，さらに敵が到来した時に戦闘の心の準備ができているように軍隊に陣形をとらせる事もしなかった。

シャイバク・ハーンが，**ムハッラム月**〔1507年5/6月〕，ムルガーブを渡り，
205b スィールカーイ Sīrkāy 近辺に (205b) 接近した時，ミールザーたちはそれを知った。彼らは驚愕して，何もする事ができなかった。人々を集める事も，軍陣をしく事もできなかった。夢を見ている者たちは夢に従って突然歩き出したりするものである。ズーン・ヌーン・アルグンはあの嬉しがらせにだまされて，4～5万のウズベクの前面へと，100～150人ほどの兵士らと共に，カラ・ラバートに出陣した。多数の敵が襲いかかり，またたく内に制圧した。彼らはズーン・ヌーン・アルグンを捕えて殺し，その首を切った。

ミールザーたちの母や姉妹，妻たち，それに財宝は，全て，アラ・クルガン Ala-qurghan〔「まだらの城」〕の名で知られている〔ヘラート城内の〕イフティヤールッ・ディーン城に置かれていた。ミールザーたちは，夜，ヘラートに到達した。彼らは真夜中まで馬を休ませて眠った。彼らはあけぼのと共に再び出発した。彼らは内城を固める事を考える事ができなかった。このような時に，彼らは母や姉妹，妻や子や幼児らを連れて行かず，彼らをウズベクの捕囚

となるにまかせたまま逃走したのである。パーヤンダ・スルターン・ベギム，ハディージャ・ベギムをはじめとするスルターン・フサイン・ミールザーの后妃たち，それにバディーゥッ・ザマーン・ミールザーとムザッファル・ミールザーの后妃たち，子供たちや幼児たち，とにかくそこに居たミールザーたちの全ての家族らはその財宝ともどもアラ・クルガンの中にいた。ミールザーたちは，この内城を戦に備えて固める事をしないままであった。内城の援軍たるべき若党たちも到着していなかった。マズィード・ベグの弟のアーシク・ムハンマド・アルグン ʻĀshiq Muḥammad Arghun は徒歩で軍の所から逃げて来て
206a 内城に（206a）入った。さらにアミール・ウマルの息子のアリー・ハーン ʻAlī Khān が〔内城の中に〕いた。またシャイフ・ムハンマド・アブドゥッラー・ブカーウル Shaykh Muḥammad ʻAbd Allāh bukāwul がいた。またミールザー・ベグ・カイホスラヴィー Mīrzā Beg Kay-Khusrawī がいた。またミーラキー・グール・ディーワーン Mīrakī Gūr dīwān がいた。

シャイバク・ハーンの到着後2～3日して，シャイフル・イスラームと有力者たちが，〔ウズベクと〕約定を結んで，外城の鍵を持って出城した。内城をこのアーシク・ムハンマドが16～17日間持ちこたえた。敵は外側の馬市場の方面から坑道を掘り，火を放って，1本の塔を壊滅させた。内城にいる人びとは動揺して，内城を守る事ができず，征服された。

シャイバク・ハーンは，ヘラートを征服すると，この君主らの妻子らに対して悪しき行動に出た。単にこれらの人びとに対してのみならず，あらゆる人びとに対して悪行を行なった。物識らずの田舎者は，この5日で過ぎゆく現世のために，このような悪名を得たのである。シャイバク・ハーンがヘラートで行なった行なうべからざる行為の第1は，このうすぎたない現世のために，ハディージャ・ベギムをおかまのシャー・マンスール・バフシに取らせ，種々の苦しみをさせた事である。さらに彼はシャイフ・プーラン Shaykh Pūrān の如く気高く高貴な人物をモグールのアフドゥル・ワッハーブ ʻAbd al-Wahhād に取らせ，その子供たちをさらに別の人物に取らせた。さらに彼は全ての詩人たちをムッラー・ビナーイーに取らせた。この事柄については，ホラーサーンの賢者の作である次の断片詩が，よく知られるようになった。

馬鹿者の（kīr-i khar）のアブドゥッラー以外，今日
いかなる詩人も黄金の顔を見る事が無い。

金銭亡者のビナーイーは詩人たちから奪い取るであろう——
しかし，彼が得るのはろばのペニス（kīr-i khar）。

206b (206b) さらに彼はムザッファル・ミールザーのハーンザーダ・ハーヌム Khānzāda Khānım という名の妃を，ヘラート征服直後に，再婚禁止期間がおわるのを待たずにめとった。また彼は，ヘラートの高名な才能に富んだムッラーであるカーズィー・イフティヤールとムハンマド・ミール・ユースフに対して，自分は文盲であるにもかかわらず，コーラン解釈学（tafsīr）について講義した。彼はまた，〔書家の〕ムッラー・スルターン・アリー・マシュハディーと画家ビフザードの書画に筆を加えて直した。彼はまた数日間に1度，彼が詩を作ると，そのつまらぬ詩をミンバル〔minbar,「説教檀」〕の所で読誦させ，チャール・スーにそれをかかげてヘラートの町の人びとから奉げ物を受け取っていた。彼は早起きで，5度の礼拝をおこたらず，コーランの読誦に関する学問（qirā'at）をよく知っていた。それにもかかわらず，彼はこのような馬鹿馬鹿しい，厚かましい，邪教徒的な言動におよんだのであった。

ヘラート征服の10〜15日後，シャイバク・ハーンはカフディスターンからプリ・サーラール Pul-i Sālār に行き，そこにいた兵をティムール・スルターンとウバイド・スルターンに率いさせ，マシュハドに警戒せずに滞留しているアブル・ムフスィン・ミールザーとケペク・ミールザーに向け派遣した。ミールザーたちは，1度は山城（kalāt）を固める考えでいた。さらに1度は，この敵の軍勢の到来を聞くと，別の道をとってシャイバク・ハーンを急襲する考えにもなっていた。これは驚くほどすばらしい考えであったと思われる。しかし，彼らがどちらにするかなお決定できずに滞留していた時，ティムール・スルターンとウバイド・スルターンが軍勢と共に強行軍で到着した。ミールザーたち
207a も戦列を整えて出撃した。ウズベク軍はアブル・ムフスィン・(207a) ミールザーをあっという間に捕えて粉砕した。ケペク・ミールザーは，かなり少数の兵と共に，兄の敵に向って打ちかかった。ウズベクは彼をも連れ去った。ウズベクが2人の兄弟を下馬させ，ひとつ所に坐らせていた時，兄弟は相いだいて接吻し永遠の別れの挨拶を交した。アブル・ムフスィン・ミールザーは臆病な態度をとった。しかしそれもケペク・ミールザーには格別の変化をもたらさなかった。2人のミールザーの首はプリ・サーラールにいるシャイバク・ハーンの許に送られた。

当時，シャー・ベグとその弟のムハンマド・ムキームはシャイバク・ハーンに対する怖れの故に，くりかえし使者や上奏者たちを〔私に向け〕派遣して来て，私の友であり味方である事を宣言していた。ムキーム自身，1通の上奏文の中で，明瞭に私を招請した。ウズベクがこの国をこのように強奪している時に，私たちがただ傍観しているのは適当な事とは思われなかった。ただし，ムキームらはこのように使者や上奏者を遣して来て私たちを招いてはいたが，彼らが来て私に臣従するという点については，いささか不安が残っていた。私は全てのベグたちや意見を持つ者たちと相談した。その結果，次の如く決定された：私たちは出兵する。そしてこのアルグン家のベグたちに合流した後，ホラーサーンに向かうか否かは，その好機が訪れた時，彼らの同意と承認をえて決定する事にすると。

この目的で，私たちはカンダハールに向け進んだ。前述した如く〔191b—192a 参照〕，私がおばさんと呼んでいたハビーバ・スルターン・ベギムが，先にヘラートで取り決めた様に，その娘のマースーマ・スルターン・ベギムを連
207b れて来た。(207b) 私たちはガズニーで会った。ホスロー・キュケルダシュとスルターン・クリー・チュナクとガダーイー・ビラール Gadāī Bilāl はヘラートから逃げて，イブン・フサイン・ミールザーの所へ行き，そこからアブル・ムフスィン・ミールザーの許へ行った。しかしそこにも留まりえず，私たちの方へと向っていた。

これらの人々と一緒に，私たちがカラート Qalāt に到達すると，カラートに商売のために来ていたと思われる多数のヒンドゥースターンの商人たちが逃げられないでいた。兵士らが彼らの所にさしかかった。ほとんどの者たちは，このように敵対しあっている時期に敵の国に来た者たちは略奪すべきだという意見であった。しかし私は同意しなかった。私は「商人らにどんな罪があるというのだ？もし私達が，神がおよろこびになる事を願って，こんなごく小さな利益は，すてておくならば，至高の神はその見返りにきわめて大きな利益を必らずお恵み下さるはずである。まさにこの数日前，私たちがギルジー族を攻撃に出かけた時，マフマンド・アフガーン族が羊・財産・女・子供たちと共に私たちの軍勢から1ユガチしか離れていない所にいるという事であった。その時，お前たちの内のほとんどの者はそれを攻撃する事に意見が一致していた。しかしこれを見て私は同意しなかった。ところがその翌日，至高の神は敵のア

フガーン人，つまりギルジー族の財産の内から，他の攻撃ではとても得られなかったほどの羊を私たちの兵士らにお恵み下さった。それと同じである」と述べた。私はカラートを過ぎて下馬し，この商人たちから，献上の慣例に従って，何物かを取った。

私がカーブルを制圧した後に，ホラーサーン方面へ退去の許しを与えていた
208a ミールザー・ハーンと，私がホラーサーンから（208a）出国した際にホラーサーンに残っていたアブドゥッ・ラッザーク・ミールザーの両ミールザーが，私がカラートを通り過ぎた時，カンダハールから逃げて来た。バハール・ミールザー Bahār Mīrzā の孫で，ジャハーンギール・ミールザーの息子のピール・ムハンマド・ミールザー Pīr Muḥammad Mīrzā とその母が，先のミールザーたちと共に来て，私に仕えた。

私はシャー・ベグとムキームに向け，「私たちは貴方たちの言葉に従ってやって来た。ウズベクの如き外敵がホラーサーンを奪った。来られよ。何であれ我々の国に役立つ事があれば貴方たちの同意と承認をえて実行する事に決めよう」と人や手紙を送った。ところが彼らは先に手紙を書いた事や私たちを招請した事を無視して，武骨な不作法な返事を送って来た。その礼儀知らずな事柄の1つは次の如くであった：シャー・ベグは私にあてた手紙の裏に，ベグたちに，というより高い位にあるベグたちが低い位にあるベグたちにあてた手紙で印章を押す場所，つまり紙の裏に印章を押して送って来たのである。もし彼がこのように礼儀知らずの行動にでず，またあのような不作法な返事を送ってこなかったら，あのような事にはならなかったであろう。

言葉は憎しみにひき起こし，
古き家系をとりつぶす。

と云われている如くである。まさにこの憎しみと不作法の結果，彼らはその家や家族，さらにその30～40年の蓄積をいっきょに失なったのであった。

私たちがシャフリ・サファー Shahr-i Ṣafā' 近郊に居た時，ある日，宿営（オルドウ）地の内部で，誤って「来襲だ！」という叫び声がおこった。全ての兵士らが武装
208b して出馬した。私は浄めの沐浴の際中で（208b）あった。ベグたちは非常にあわてふためいた。私は沐浴をやめて乗馬した。しかし叫びが間違いであったために，騒ぎはいっ時の後にはおさまった。その土地の事を知っている味方の者たちが，「カンダハールに流れて来ている川の水源はバーバー・フサイン・ア

ブダール Bābā Ḥusayn Abdāl とハリーシャク Khalīshak 側にあります。その方面へ行って，カンダハールに流れて来ている川を全て破壊すべきです」と上奏してきた。そうする事に決めて，翌朝，私は甲冑を身にまとい，右翼・左翼の隊列を整えて，ハリーシャク方面へと進んだ。

シャー・ベグとムキームは，カンダハールの山の，〔現在〕私が石造りの建物を造らせた山鼻の前に天蓋を立てて坐っていた。ムキームの部下は，急いで，木々の間を通って，私たちのかなり近くまで来た。シャフリ・サファー近郊にいる時に逃げて来たトゥーファーン・アルグン Ṭūfān Arghun は唯ひとりでアルグンらの戦列の方へと近づいて行った。イシュクッラー 'Ishq Allāh という者が7～8人と共に，〔本隊と〕離れて私たちのかなり近くまで来た。イシュクッラーは，7～8人の者たちから離れて，より前方に来た。トゥーファーン・アルグンはひとりで進み，一騎打ちとなり，刀で切り合って，〔トゥーファーンを〕落馬させ，その首を斬って，私がサンギ・ラフシャク Sang-i Lakhshak の前を通過している時に持って来た。私たちはそれを吉兆ととった。しかしこの地は居住区と木々の間にあったため，私たちはここで戦う事を適当と考えず，山の麓をよぎってハリーシャクの前，川のカンダハール側にある (209a) 牧地を宿営地に選んで下馬している際中に，物見のシール・クリーが急いでやって来て「敵が隊伍を整えてやって来ます」といった。

209a

カラートを過ぎて以来，兵士らはすさまじい飢えと欠乏に悩まされていた。ハリーシャク近郊に到着すると，兵士らの大半は，羊・牛・穀物・諸物品を求めて，上下各方面へと散り散りに散っていた。私は兵を集める事は考えずに，ただちに撃って出た。私たちの兵は全部で2,000人近くであったと思われる。しかしここに下馬した時には，今述べた如く，兵の内の多くの者たちが上下各方面に出かけていた。戦闘に際し，彼らは私たちに加わる事ができなかった。私たちの側で戦の際にいた者たちは1,000人程度であったであろう。私たちの軍勢は少数ではあったが，まことに見事に，整然と隊伍を整えていた。私はかつてあれ程に整然と隊伍を整えた事は無かった。

私は，よい働きをした若党たち全員を抜擢して特別親衛隊 (khāṣṣa tābīn) にしていた。また全ての10人隊，50人隊を登録し，それぞれの10人隊長 (on ulughı)，50人隊長 (ellik ulughı) を任命していた。彼らは各10人隊，各50人隊が右翼，左翼内でしめるべき位置を知っており，戦時に為すべき事が何であ

るかを皆に知らせ，自らも参加して指揮をとった。バラーンガル barānghar, ジュワーンガル juwānghar, オン・コル ong qol, ソル・コル sol qol, オン・ヤン ong yan, ソル・ヤン sol yan, オン ong, ソル sol が撃って出る際，隊列を組むのに何の混乱も起こらず，トゥワチ tuwachı をも必要としなかった。
209b 兵士らは定められた位置について前進 (209b) した。

バラーンガル，オン・コル，オン・ヤン，オンには同じ意味〔それぞれ右翼，右手，右側，右の意〕がある。しかし私は，用語を変える事によってその内容をも区別しようとする目的で，これらの用語を別々の意味内容のものに適用したのである。すなわち，〔アラビア語の〕アイマナ maymana とマイサラ maysara は，〔トルコ・モンゴル語で〕バラーンガル，ジュワーンガルと呼ばれるが，戦列では，〔アラビア語の〕カルブ qalb，つまり〔トルコ・モンゴル語の〕グル ghul〔中軍〕の内には含まれない。ここでは私は，このような〔中軍には含まれぬ〕隊列の事を，まさにその点に留意して，バラーンガル，ジュワーンガルと云った。さらに，これらとは別の隊列であるグルの，その内部での右側と左側を区別するために，私はオン・コル，ソル・コルと記した。さらに，グルの内には，特別親衛隊(ハース・ターピーン)がいるが，これの右側と左側を私はオン・ヤン，ソル・ヤンと述べた。さらに特別親衛隊の内には，ボイ・テギニ boy tegini がいるが，私はこれの右側と左側をオン，ソルと呼んだ。トルコ語では「本隊から離れたもの」の事をボイ boy と云う。しかしここでは，そのボイの意味でなく，「近くにいるもの」の意味である。

右翼 (barānghar) は，ミールザー・ハーン，シーリーム・タガーイー，ヤーラク・タガーイーがその兄弟らと共に，チャルマ・モグール Chalma Moghūl，アイユーブ・ベグ，ムハンマド・ベグ，イブラーヒーム・ベグ，アリー・サイイド・モグールがモグールらと共に，スルターン・クリー・チュフラ，ホダー・バフシュ Khudā-bakhsh，アブル・ハサンがその兄弟らと共にいた。

左翼 (juwānghar) は，アブドゥッ・ラッザーク・ミールザー，カースィム・ベグ，テングリ・ベルディ，カンバル・アリー，アフマド・イルチ・ブガ，グーリー・バルラース，サイイド・フサイン・アクバル，ミール・シャー・カウチンであった。

先鋒 (irāwul) は，ナースィル・ミールザー，サイイド・カースィム・イシク・アーガー，ムヒッブ・アリー・コルチ，バーバー・オグル Bābā Oghlı,

アッラー・ヴィーラン・トゥルクメン Allāh Wīran Türkmän, シール・クリー・カラーウル・モグールがその兄弟らと共に，そしてムハンマド・アリーがいた。

中軍 (ghūl) には，私の右手に，カースィム・キュケルダシュ，ホスロー・キュケルダシュ，スルターン・ムハンマド・ドウラダイ，シャー・アフムード
210a ・パルワーナチ，クル・バーヤズィード・ブカーウル，(210a) カマール・シャルバトチがおり，左手には，ホージャ・ムハンマド・アリー Khwāja Muḥammad ʻAlī, ドースト・ナースィル，ミーリーム・ナースィル，バーバー・シールザード，ハーン・クリー，ワリー・ハザーナチ，クトゥルク・カダム・カラーウル，マクスード・スーチ，バーバー・シャイフがいた。中軍にいたのは，全て近習たち (ichkilär) であった。大ベグ (ulugh beg) はひとりもいなかった。ここに列挙した者たちは，誰ひとりとして，なおベグの位 (beglik martabası) に達している者はいなかった。

中軍のボイ〔209b 参照〕に任ぜられたのは，シール・ベグ，ハーティム・コル・ベギ，ケペク，クル・バーバー，アブル・ハサン・コルチ，モグールらの内からはウルース・アリー・サイイド，ダルヴィシュ・アリー・サイイド，ホシュ・ケルディ・チャルマ Khūsh-keldi Chalma, ドースト・ケルディ・チャルマ・タグチ Dūst-keldi Chalma taghchı, アマチ・ミンディ Amachı Mindi, トゥルクメンらの内からは，マンスール，ルスタム・アリーがその兄弟らと共に，それに，シャー・ナザル Shāh Naẓar とセヴュンドゥクであった。

敵の兵は2隊に分れていた。1隊はシャー・シュジャー・アルグル——以後はシャー・ベグと書く事にする——に率いられ，別の1隊はその弟のムキームに率いられていた。このアルグンらの軍勢は6～7,000人と推定された。〔その内の〕4～5,000人が甲冑を身につけていた事については疑問の余地が無かった。

シャー・シュジャーは中軍・右翼軍と共にわが軍の対面に布陣した。ムキームは左翼軍と共にわが軍に対陣した。ムキームの兵は，兄の兵よりもやや数が少ないようであった。彼は，カースィム・ベグの率いるわが方の左翼軍に強烈な攻撃をしかけて来た。カースィム・ベグの許からは，戦の始まる前に，2～3の者たちが来て軍の増強を求めて来ていた。しかし私たちの前面でも，敵が

強力であったため，私たちは兵を割く事ができなかった。私たちは敵に向ってただちに進撃した。

210b 矢が飛来し始めた頃，(210b) 敵はわが先鋒軍に一撃を加えて後退させ，中軍に突き進んで来た。私たちが矢を放ちながら進んでいた時，敵はしばし矢を放ちながら陣をはる姿勢を示した。私の正面で，1人の男が，部下に向って大声をあげながら馬から下り，矢を放とうとした。私たちが間髪をいれずに進みそこに到達すると，彼はとどまりえず，乗馬して，急ぎ去った。この，馬から下りて徒歩になっていた男はシャー・ベグその人であったらしい。

戦の間に，ピーリー・ベグ・トゥルクメン Pīrī Beg Türkmän が4～5人の兄弟らと共にターバンを手にして，敵方から顔をそむけて，私たちに投降して来た。このピーリー・ベグは，シャー・イスマーイールが〔白羊朝〕バユンドゥル部のスルターンたちを制圧してイラーク諸国を支配下に収めた時，〔ティムールの血をひく〕アブドゥル・バーキー・ミールザー 'Abd al-Bāqī Mīrzā とムラード・ベグ・バユンドゥル Murād Beg Bayındır をはじめとするトゥルクメン族のベグたちと共に〔ヘラートに〕来たトゥルクメン族の一員であった。

わが方の右翼がより早く敵を破って壊滅させた。わが右翼の先端は，私が〔その後に〕整備した庭園の所まで突き進んで行った。わが左翼は，バーバー・ハサン・アブダール Bābā Ḥasan Abdāl よりずっと下方の，大きな，名のわからぬ数本の灌漑水路の所まで進んで行った。わが左翼の正面に，その属下の者たちと共にムキームがいた。わが左翼の兵は，敵のムキームに比べると，きわめて少数であった。しかし神が正義をもたらされた。カンダハールと諸村に流れこむ3～4本の大きな，名の知れぬ灌漑水路が，わが左翼軍と敵との間にあった。渡しの所をおさえて，敵を渡らせなかった。左翼の兵士らは，少数
211a であったにもかかわらず，よくもちこたえて足場を (211a) 固めた。アルグンの側のハルワチ・タルハン Ḥalwachı Tarkhan が水中でカンバル・アリー，テングリ・ベルディと戦った。カンバル・アリーは負傷した。カースィム・ベグの額に矢が命中した。グーリー・バルラースのまゆの下にも矢が当たり，椎骨の下に出た。

これと同じ頃，私たちは敵を敗走させ，この水路の所からムルガーン山 Murghān Taghı の突出部の方面へと移動した。私たちが水路の所を通り過ぎ

ている時，ひとりの，灰色の俊馬（topchaq）に乗った人物が山の麓であちらへ行こうかこちらへ行こうかと迷った末に，ある方向へと移動して行った。私はシャー・ベグに似ていると思った。おそらくシャー・ベグであったであろう。

敵を打ち破ると，わが兵士らは全員，敵を落馬させ，捕虜にするために出かけた。私と一緒には11名の者が残っていた。その内の１人がアブドゥッラー・キターブダール ʻAbd Allāh kitābdār であった。ムキームはなおふみとどまって戦っていた。私たちは，自分たちが少人数である事には眼もくれず，神を信じ，太鼓を打ちならして敵めざして進撃した。

多勢無勢は神の与え下されし事，
この神の宮廷にて人の力の及ぶ事無し。
〔アラビア語で〕アッラーのおぼしめしにより，いかにしばしば少勢が多勢に勝利した事か！

ムキームは，太鼓の音を聞いて私たちが前進して来るのを知ると，決めてあったやり方を忘れて逃走の道をえらんだ。神が正義をもたらされ，私たちは敵を敗走させ，カンダハールに向って進み，現在はその跡形すら残っていないファッルフザード・ベグのチャハール・バーグ（Farrukhzād Beg-nıng chahār-
211b bāghı）に（211b）到着して下馬した。逃亡したシャー・ベグとムキームはカンダハール城に入る事ができず，シャー・ベグはシャール Shāl とマストゥーング Mastūng 方面におもむき，ムキームはザミーン・ダーワル方面へ行った。

彼らは城を固めるに十分な軍勢を残してゆかなかった。城内には，クリー・ベグ・アルグンの兄弟の１人であるアフマド・アリー・タルハン Aḥmad ʻAlī Tarkhān と若干の者たちがいた。彼らが私に対して好意と親近感をいだいている事が知られていた。彼らは相談した結果，自分たちの兄弟らの命を許してくれるようにと要求した。私はこれらの者たちを丁重に受け入れる事とし，彼らの出した要求を承認する事にした。

彼らは城のマーシュール門（Māshūr darwāzası）を開いた。私は〔カンダハールの〕人びとが指揮する者無く狼藉を働いているのを見てとって，それ以外の城門は開かせなかった。私はこの開いた城門の所にシーリーム・ベグとヤーリーム・ベグを任命した。私自身は若干の近習らと共に入城して，狼藉を働いている者たちに次々と矢を射かけ，規律を正すため，その内の１～２名を殺

すよう命じた。

私はまず外城 (tash-qurghan) にあったムキームの財宝庫に到達した。<p. 269 アブドゥッ・ラッザーク・ミールザーが私より先に到着して下馬していたようであった。>私はアブドゥッ・ラッザーク・ミールザーに財宝庫からいくばくかの物を与え，この財宝庫の管理のためにドースト・ナースィル・ベグ，クル・バーヤズィード・ブカーウル，それにバフシ bakhshı〔「書記」〕の内からムハンマド・バフシを任命した。<p. 269 私はここを過ぎて，内城(アルク)におもむいた。シャー・ベグの財宝庫の管理のためにホージャ・ムハンマド・アリー，シャー・マフムード，それにバフシの内からタガーイー・シャー・バフシ Taghā'ī Shāh bakhshı を任命した。>私は，ミール・ハーン Mīr Khān〔<p. 269 Mīr Jān>〕という名のズーン・ヌーンのディーワーン (dīwān)〔ディーワーン・ベグ〕の屋敷にミーリーム・ナースィルとマクスード・スーチを派遣し，そこをナースィル・ミールザーのために確保させた。ミールザー・ハーンのためにはシャイフ・アブー・サーイード・タルハン Shaykh Abū Sa'īd Tarkhān の屋敷を確保させ，アブドゥッ・ラッザークのためには……〔テキ
212a ストに約13字分の空白がある〕を (212a) 確保させた。

これらの諸地方で，私自身これ程に大量の「白い銭」(aq yarmaq,「銀貨?」) をかつて見た事が無かった。というより，これ程の銭を見た事のある人の事を私は聞いた事すらも無かった。

その夜，私は内城にいた。シャー・ベグの奴隷のスンブル Sunbul が捕えられて連行されて来た。彼ははじめの内はシャー・ベグに可愛がられていたが，その頃はさほどでもなかった。私は彼をある人物に委ねた。しかしよく注意を払っていなかったため，彼は逃亡した。翌日，私は宿営(オルドウ)のあるファッルフザードのチャハール・バーグにもどった。

私はカンダハール地方をナースィル・ミールザーに与えた。私たちが諸財宝を整理し駄獣にのせて出城した時，ナースィル・ミールザーは内城の財宝の内から，らくだ1列の荷として積まれたタンガ銀貨 (aq-tanga) を略取して残っていた。私は返すようにと云わず，それをナースィル・ミールザーに恵んだ。

私はカンダハールを発って，クシュ・ハーナ牧地 (Qush-khāna ulangı) に下馬した。私自身は，オルドゥを先発させた後，見物しながら進んだ。そのため私はややおくれてオルドゥに到着した。それはもはや以前のオルドゥではな

かった。私のオルドゥとは分らない程のオルドゥに変っていた。すばらしい俊馬たち。幾列にも連なる雌雄のらくだとらば。絹の衣類を鞍に積んだめすろば。毛織物やヴェルヴェットのテントや天蓋。各テントには何ハルワールもの重さのある大箱。これら2人の兄弟の所有物であった諸物は，いくつかに分けて管理されていた。それぞれの管理場所には，いくつもの大箱や種々の衣類，多くの古着やいくつもの大袋につまったタンガ銀貨があった。各人の諸テントには（otāghıda wä chādırıda）あらゆる種類の戦利品があふれていた。羊も
212b 多かった。しかし人びとはもはや羊にはさほど注意を（212b）向けなかった。

私はカラートの中にいる者たち——ムキームの臣下で，クチュ・アルグン Quch Arghun，タージュッ・ディーン・マフムード Tāj al-Dīn Maḥmūd に率いられた者たち——を財貨・諸物資共々，カースィム・ベグに恵与した。カースィム・ベグは先の見える人物であったので，カンダハール近郊に私たちが長く留まる事を適切とみなさず，何度も何度もそう云って，集めた諸物ともどもに私たちを出発させた。私は，前述の如く，カンダハールをナースィル・ミールザーに恵与し，ナースィル・ミールザーにカンダハールへの出発の許可を与え，カーブルに向った。

私たちがカンダハール近郊に滞在中には，財貨を分配するのに十分な時間が無かった。私はカラ・バーグに4～5日留まって財貨を分配した。貨幣を計る難しさがあった。私ははかりで計って分配した。大小のベグたちや家臣や頭（かしら）たちは（beg wä begāt nökär wä bash），何ハルワールもの重さのある，いくつもの大袋につめられたタンガ銀貨を俸給・俸禄のために駄獣に積んで運んでいった。私は多くの戦利品・財貨と共にはなばなしい栄誉につつまれてカーブルに帰着した。

私はカーブルに帰ると，私が求婚してホラーサーンから連れて来てもらっていたスルターン・アフマド・ミールザーの娘マースーマ・スルターン・ベギムと婚姻のちぎりを結んだ。

6～7日後，ナースィル・ミールザーの臣下の1人が，シャイバク・ハーンが来攻してカンダハールを囲んだという情報をもたらした。前述した〔211b参照〕如く，ムキームはザミーン・ダーワル方面へと逃亡した。彼は行って，シャイバク・ハーンに会った。シャー・ベグの許からも次々に人がシャイバク

213a の許におもむいた。これらの者たちにそそのかされて，(213a) シャイバク・ハーンは，私がカンダハールに居るものと考えて，ヘラートから山道をとってカンダハールへと急行して来たのであった。まさにこの事が起こるであろうと予測して，経験に富むカースィム・ベグは諸物資共々私たちをカンダハールから出発させたのであった。

若者が鏡の中に見るものは何であれ，

老人は焼きれんがの中にすらそれを見る。

シャイバク・ハーンは来攻して，ナースィル・ミールザーをカンダハールに包囲した。この情報がとどくと，私はただちにベグたちを呼んで相談した。以下のような事が議論された。ウズベクとシャイバク・ハーンの如き，異国の，古くからの敵が，ティムール・ベグの子孫らの手中にあった全ての諸地方を領有している。諸地方の一角やひと隅になお残っていたトルコ人やチャガタイ人 (Türk wä Chaghatay) も，いまやその内の若干の者たちは自ら希望して，また若干の者たちはいやいやながら，ウズベクに合流してしまった。ただひとり私のみがカーブルに残っていた。敵はきわめて強力であり，私たちはまことに弱体であった。和議を結ぶだけの力も無く，また抵抗するだけの力も無かった。あのような強大・強力な敵であった。私たちは，私たち自身のために，どこか1つの土地を考えねばならなかった。このような逆境において，強力な敵から私たちは少しでも遠くへ離れる必要があった。バダフシャーン方面か，あるいはヒンドゥースターン方面へ向かう必要があった。この2つの方面の内，1方面に進む事を決める必要があった。

カースィム・ベグ，シーリーム・ベグは，その配下の者たちと共に，バダフシャーンに向かう事に同意した。当時，バダフシャーンで有力であったのは，バダフシャーン人の内ではムバーラク・シャーとズバイルであった。さらにジャハーンギール・トゥルクメンとムハンマド・コルチがいた。彼らは先にナースィル・ミールザーを〔バダフシャーンから〕追い出していた。しかし彼ら
213b はウズベクにも (213b) 投降しないでいた。私と若干の近習ベグたち (ichki beglär) はヒンドゥースターン方面に行く方がよいと考え，ラムガーンに向かう事にした。

カンダハールの征服後，私はカラートとタルヌーク Tarnūk 地方をアブドゥッ・ラッザーク・ミールザーに賜与し，アブドゥッ・ラッザーク・ミールザ

ーをカラートに置いていた。ウズベクが来攻してカンダハールを囲むと，アブドゥッ・ラッザーク・ミールザーはカラートに留まりえず，カラートを捨てて出城した。彼は，私たちがカーブルを出発した際に到着した。私はアブドゥッ・ラッザークをカーブルに置いた。

バダフシャーンには君主も君主の血をひく者も誰ひとりとしていなかったために，ミールザー・ハーンは，〔バダフシャーン王家の出身で，バーブルの義母に当る〕シャー・ベギムの関係によるものか，あるいはその同意を得たものか，バダフシャーンの方へ行く事を望んだ。私はミールザー・ハーンにバダフシャーン方面への出発の許可を与えた。シャー・ベギムもミールザー・ハーンと共に出発された。私の母方のおばのミフル・ニガール・ハーヌムもバダフシャーンに行かれる事になった。血縁関係からすれば，彼女は私と一緒におられるのがより自然であった。私と彼女は同じ血をひく同族であった。私がいかにやめさせようとしても，彼女はやめようとされなかった。彼女も出発された。

ジュマーダーゥル・アッヴァル月〔1507年9/10月〕，私はヒンドゥースターンに向けカーブルを出発した。フルド・カーブルを経て進み，スルフ・リバート Surkh Ribāṭ を通ってクルク・サーイに下りた。カーブルとラムガーンの間に住むアフガーン人たちは平穏な時でも盗人であり盗みの煽動者であった。このような事は彼らにとって願っても無い事であった。私がカーブルを捨ててヒンドゥースターンに向っている事を彼らが知ると，その1つの悪は10となり，
214a その善もまた悪にかわった。(214a) 事態は，私たちがジャグダリクを発った朝，途中にいる＜p. 272 ヒズル・ハイル Khiḍr Khayl，ヒリルジー，フーギーヤーンといった＞アフガーン人らがジャグダリク峠を封鎖する考えで，北側の山に隊伍を整えてやって来て，太鼓を打ちならし刀をふりかざしながら跳ね廻り始めるに至った。

私は兵士らを乗馬させると共に，彼らに，種々の方向から山に向って進むように命じた。兵士らは，全ての山の背 (qol) や山梁 (qangshar) を通って，全速力で前進した。アフガーン人らはしばらくとどまっていたが，1矢をすら放つ事ができず，急ぎ逃走した。私はアフガーン人らを追って山上に出た。1人のアフガーン人が私の下方を通って逃げてゆく所であった。私はその腕を射た。

矢が命中したこのアフガーン人と，さらに若干のアフガーン人が捕えられて連行されて来た。みせしめのために，私はその内の数人をくし刺しの刑に処させた。私はニングナハール地区のアーディーナプール城の前に下馬した。

私はそれまで，先を見通して，どこに宿営すべきかを考えていなかった。どこへ行くかも決めておらず，またどの宿営地にとどまるかも定めていなかった。上に下にと，私は新しい情報を待ちながら，宿営地を発っては移動していた。もはや**晩秋**であった。平地では稲の刈り取りをほとんどおわっていた。その土地の事をよく知っている者たちが，「アリーシャング地区の〔アリーシャング〕川の上流のミール側で多くの米を植えております。兵士らのための冬用の穀物をそこで調達できる可能性があります」と云って来た。

私はニングナハール平原を発って，強行軍で進み，サイカル Saykal で渡河
214b し，プラーミーンの谷 (Pur-āmīn darrası) (214b) へとおもむいた。兵士らは大量の米を手に入れた。米の田は山裾にあった。そこの住民たちは逃げ出した。若干のカーフィルたちが殺された。

私はプラーミーンの谷の山鼻の所で若干の若党たちを偵察に出していた。彼らがもどって来る際に，カーフィルらが山上に急行して矢をあびせてきた。敵がカースィム・ベグの女婿のプーラーン Pūrān の所に到達して，斧で打ちかかって捕えた時，若党らがひきかえして攻撃し，敵を逃走させ，プーラーンを取りかえした。私はカーフィルらの米の田の所に数日間とどまり，大量の穀物を獲得して宿営地に帰った。

まさにこの頃，私はマンドラーワル地区の近郊で，ムキームの娘のマーフ・チュチュク Māh-chüchük をカースィム・キュケルダシュにめあわせた。彼女は現在はシャー・ハサン Shāh Ḥasan の妻となっている。

ヒンドゥースターン方面に進む事は得策と考えられなかったので，私はムッラー・バーバーイ・パシャーガリーを若干の若党たちと共にカーブルに向け派遣した。私たちはマンドラーワル附近を発って，アタルとスィーヴァ Sīwa に進み，数日間その近辺に滞在した。私はアタルからクナルとヌール・ガルにおもむいてその地を見てまわった。クナルからは，いかだ (jāla)〔皮袋を組んだいかだ〕に乗って宿営地に帰った。私はそれまでいかだに乗った経験が無かった。まことに快適であった。以後，私はいつもいかだを利用した。

まさにこの頃，ムッラー・ミーラク・ファラカティー Mullā Mīrak Farakatī

がナースィル・ミールザーの許から到着した。彼は，シャイバク・ハーンがカンダハールの外城（タシュ・クルガン）を取ったが，内城（アルク）を取れずに引き返した事，そしてシャイバク・ハーンの撤退後，若干の理由によってナースィル・ミールザーがカンダ
215a ハールを捨てて（215a）ガズニーに来た事についての情報を詳しく説明した。〔その説明によると，私たちの出発した〕数日後，シャイバク・ハーンは不意にカンダハールに姿を現した。人々は外城を固める事ができず明け渡した。シャイバク・ハーンは内城の周囲の数カ所に坑道を設けた。彼らは何度も攻撃をしかけた。このような不安な情況の中で，ホージャ・ムハンマド・アミーン Khwāja Muḥammad Amīn，ホージャ・ドースト・ハーワンド Khwāja Dūst Khāwand，歩兵のムハンマド・アリー Muḥammad ‘Alī，シャーミー Shāmī が城壁をくだって外に出た。内城の中にいる人びとは絶望的になって降伏しようとしていた時，シャイバク・ハーンが和議を提案して，カンダハールから撤退した。彼の撤退の理由は，彼がカンダハールに来攻した際，彼はその妻や子供たち（ḥaramları）をニーラトゥー Nīratū に送っていたらしい。ところがニーラトゥーで，ある人物が反乱を起こし，その城を支配下に収めた。このため，彼は和議の如きものを結んで撤退したのであった。

冬のさ中ではあったが，私たちはバーディ・ピーチュ峠越えの道〔133a 参照〕をとってカーブルに帰った。私はバーディ・ピーチュ峠の頂上の石にこの通過の日付を刻むように命じた。ハーフィズ・ミーラク Ḥāfiẓ Mīrak が文字を書き，ウスタード・シャー・ムハンマド Ustād Shāh Muḥammad が刻した。時間が無かったために，うまくは彫れなかった。

私はガズニーをナースィル・ミールザーに恵与した。アブドゥッ・ラッザーク・ミールザーにはニングナハール地区，マンドラーワル，ダッライ・ヌール，クナル，ヌール・ガルを与えた。

この時まで，人びとはティムール・ベグの子孫らを，彼らがたとえ君主（スルターン）であっても（bāwujūd-i salṭanat），ミールザーと呼んでいた。この機会に，私は私をパーディシャー（pādishāh）と呼ぶように命じた。

215b この年の末，**ズィール・カーダ月4日火曜日**〔1508年3月6日〕，（215b）太陽が魚座にあった時に，カーブルの内城でフマーユーン Humāyūn が生まれた。その誕生の紀年銘として詩人のマウラーナー・サイイディー Mawlānā Sayyidī shā‘ir は「スルターン・フマーユーン・ハーン（Sulṭān Humāyūn

Khān)」の1句を案出した。カーブルの小詩人の1人は「シャーヒ・フィールーズ・カドル (Shāh-i Fīrūz-qadr)」〔「勝利の力もてる君主」〕の1句を考えついた。3～4日後，この子はフマーユーンと名付けられた。フマーユーンが誕生して5～6日後に，チャール・バーグに出むいて，フマーユーンの誕生の祝宴を催した。大小のベグたちや高位の者や低位の者たちが祝いの品を持参した。大量のタンガ銀貨が山積された。それまで私はあれほど大量の銀貨を1カ所で見た事がなかった。すばらしい祝宴であった。

〔914年/1508年5月2日—1509年4月20日/の出来事〕

この年の**春**，私はムクル Muqur 近辺でマフマンド・アフガーン族の1隊を**襲撃**した。

その**襲撃**から帰って下馬した数日後，クチュ・ベグ，ファキール・アリー Faqīr 'Alī，カリームダード，バーバー・チュフラ Bābā chuhra が逃亡する考えをいだいていた。しかしその情報を得ると，私は人を派遣した。彼らはイスタルガチュの麓から彼らを捕えて帰って来た。ジャハーンギール・ミールザーの在世中にも，これらの者たちが若干のよからぬ事を述べているという報告を受けていた。私はこの全員をバーザールの所で処刑するように命じた。門の所へ連行して，なわをかけてつるした時，カースィム・ベグがハリーファを遣してきて，懸命に彼らの罪をゆるされるようにと求めた。カースィム・ベグの気持を尊重して，私は彼らの命をゆるし，彼らを投獄しておくようにと命じた。

216a ホスロー・シャーのヒサール人・クンドゥズ人の（216a）家臣やモグール人の有力者の内，チャルマ，アリー・サイイド・シャムカ 'Alī Sayyid Shamka，シール・クリー，エギュ・サーリム Egü Sālim，さらにホスロー・シャーが寵愛したチャガタイ人の家臣らの内，スルターン・アリー・チュフラ，ホダー・バフシュをはじめとする者たち，またトゥルクメン人の内，セヴュンドゥク，シャー・ナザルをはじめとする2～3,000人のすぐれた若党たちが，この間に相談し合って，意見一致して，私に対する反乱を起こした。

上記の者たちは，ホージャ・リーヴァージュの前面，ソング・クルガン牧地からチャーラーク牧地に至る地域に滞留していた。アブドゥッ・ラッザーク・ミールザーはニングナハールから来て，デヒ・アフガーン Deh-i Afghān に滞留していた。

1～2度，これらの者たちがこのように反乱を計画している事をムヒッブ・アリー・コルチがハリーファとムッラー・バーバーに告げ，彼らは私にもそれをほのめかしていた。しかしそれらの言葉はとても信じられず，私は意に介さないでいた。

ある夜，私はチャール・バーグの会議室（ディーワーン・ハーナ）にいた。夜半，就寝時の礼拝の時刻に，ある方向からムーサー・ホージャがもう1人の男と一緒に急いでやって来て，私の耳に「モグールらが本当に反乱を起こしました。アブドゥッ・ラッザーク・ミールザーを彼らの側にひき入れたかどうかははっきりわかりません」と告げた。敵がその夜に反乱を起こすかどうかは決められなかった。

私は気付かぬふりをして，少時の後，妻や子（ḥaram）の方に向った。当時，私の妻や子はバーギ・ヒルワト Bāgh-i khilwat とバーギ・ユルンチュカ Bagh-i Yurunchqa にいた。私が妻や子のいる所の近くまで到達した時，小姓
216b や侍女や寝室係の者たちはひき返した。彼らがひき返した（216b）後，私と奴隷頭（sarwar-i qul）が市街地の方へ進んだ。私が堀にそって鉄門の所に到達した時，向うからバーザール経由の道を通ってホージャ・ムハンマド・アリーが来た。一緒に行って，私が公共浴場（ハンマーム）のポーチの……〔以下空白〕

〔現存するテキストでは，914年のこの部分と，それに続くべき915年から924年に至る10年間の記事を全く欠く。この間のバーブルの行動を，*Ta'rīkh-i Rashīdī* などの諸史料によってあとづける事も可能ではあるが，ここでは，空白部は空白部のままに残し，あえて諸史料によってそれをうめる事をしない。なお，再び記事の始まる925年以降，バーブルの記述のスタイルは，日を追っての「日記体」にかわっている〕。

〔925年/1519年1月3日—12月22日/の出来事〕

ムハッラム月1日月曜日〔1509年1月3日〕，チャンダーワルの谷（Chandāwal jurgāsı）の入口の所で大きな地震があった。半恒星時〔半時間弱〕近くも続いた。

翌朝〔1月4日〕，私はこの宿営地を発って，バジャウル城を攻撃する考えで，バジャウル城の近くに下馬し，ディラザーク・アフガーン族の1人の信用のおける人物をバジャウルに派遣した。それは，バジャウルのスルターンと住民たちに，臣従して城を明け渡すよう忠告するためであった。しかし不幸の星のもとに生まれたこの者たちは，その忠告を受け入れず，不愉快な答えをおくってよこした。兵士らに大きな楯，梯子，それに城攻めの諸用具を準備するようにとの命令が出された。この目的のため，私は1日，その宿営地に留まった。

ムハッラム月4日木曜日〔1月6日〕，次のような命令が出された：兵士らは甲冑に身を固め武装して出馬せよ。左翼は前進して，バジャウル城の上方の，
217a 川の入りこむ所で川を渡り，城の北側に下馬せよ。中軍の兵士らは（217a）城の西北に，川を渡る事なく，凹凸と高低のある所に下馬せよ。右翼は，下（しも）の城門の西に下馬せよと。ドースト・ベグに率いられた左翼のベグたちが川を渡って下馬した時，城内から100～150名ほどの歩兵が出て矢をあびせた。このベグたちも前進して猛烈に矢を射かけ，歩兵たちを城の所まで押しこみ，城壁の下の所にまで到達した。ムッラー・アブドゥル・マリク・ハースティー Mullā ʻAbd al-Malik Khwāstī はまるで狂人のように馬で城壁の下に突入した。もし梯子や大きな楯を準備しており，またもし日もそれほど晩くなっていなかったならば，私はその時に城を征服できていたであろう。

ムッラー・トゥルク・アリー Mullā Türk ʻAlī とさらにテングリ・ベルディの1家臣は敵と猛烈に切り合い，敵を制して，その首を切って持って来た。2人共，恩賞を与える約束がなされた。バジャウルの住民たちは，＜p. 277 火縄銃（tufang）を見た事が無かったので＞火縄銃の音を全く恐れなかった。むしろ火縄銃の音を聞くと馬鹿にして，こちらに向って不愉快な動作をしてみせ

た。まさにこの日，ウスタード・アリー・クリー Ustād ʻAlī Qulī は5人を火縄銃で撃ち倒した。ワリー・ハーズィン Walī khāzin〔ハーズィンは「財宝庫の管理者」〕も2人を火縄銃で倒した。他の銃手たちもまことに積極果敢に射撃を行ない，見事に撃った。楯や甲冑や皮製の防禦衣を次々に貫き，次々に倒した。夜になるまでに，おそらく7～8名ないし10名のバジャウル人が火縄銃
217b に撃たれて (217b) 倒れたと思われる。それ以後，敵は火縄銃による攻撃の故に頭を出す事ができなくなった。次の如き命令が出された：夜になった。兵は諸用具を準備して，明早朝，城にとりかかれと。

ムハッラム月5日金曜日〔1月7日〕，曙光が見え始めると，陣太鼓を打ち鳴らし，各々はその位置から前進して城にとりかかるようにという命令が出された。左翼と中軍はそれぞれの隊列から全て大きな楯を運び梯子をかけ城にとりついた。ハリーファ，シャー・ハサン・アルグン，アフマド・ユースフに率いられた全ての中軍の中の左翼 (sol qol) の者たちに対して，左翼軍を助けるようにとの命令が出された。

ドースト・ベグの部下の者たちは，城の東北の塔の基部に突入して，堀って塔を倒す事に没頭していた。ウスタード・アリー・クリーもそこにいた。彼はその日も見事に火縄銃を撃った。彼は2度，フランク銃 (farangī) を撃った。ワリー・ハーズィンも1人の男を火縄銃で倒した。中軍の左翼からはマリク・アリー・クトニー Malik ʻAlī Quṭnī がまっ先に梯子に登り，しばし攻撃に没頭した。中軍の隊列では，ムハンマド・アリー・ジャングジャング Muḥammad ʻAlī Jang-jang とその弟のナウルーズ Naw-rūz は，それぞれ別の梯子に登って槍や刀をふるった。さらに別の梯子にはバーバー・ヤサーウル Bābā yasāwul が登り，斧で城壁を倒壊させる事に没頭した。ほとんどの若党たちも
218a そこでよく進み，無数の矢を (218a) あびせかけて，敵が頭を出すのを許さなかった。さらに若干の若党たちは敵の攻撃を全く意に介せず，敵の矢や石には毫も眼をくれず，城を倒壊させる事に没頭した。

朝食時，ドースト・ベグの部下たちが堀りすすめていた東北の塔が壊され，ドースト・ベグの部下たちが敵を逃亡させて塔の上に出た。まさにその時，中軍の者たちも梯子から城壁の上に出た。彼らは中軍を離れて最初に城内に入った。至高の神の恩愛と恩寵により，このような堅固鉄壁の城が，2～3恒星時〔2～3時間弱〕の内に征服された。若党・兵士らはその力の限りをつくした

のであった。明々白々たる働きであった。彼らは勇者としての名声と高名を獲得した。

バジャウルの住民は，我々の敵であり，<p. 278 またイスラーム教徒の敵であった>。彼らの反乱・敵対は別にしても，邪教徒の風習がこの者たちの間にはあまねく広まり，イスラームの名はその諸部族の間で失なわれてしまっていた。このため，私は彼らを皆殺しにし，女や子供たちを全員捕虜にした。〔城の〕東側には戦闘が及ばなかったため，かなり少数の者たちは東側から脱出した。おおむね3,000人以上の者が処刑された。

城の征服後，私は入城して城内を見廻った。城壁の所や，家や街路や小路の所に無数の死体がころがっていた。行ったり来たりする者たちは死体を踏みつつ行き来していた。見廻りからもどると，私たちは〔バジャウルの〕スルター
218b ンらの (218b) 宮殿に滞留し，バジャウル地方をホージャ・カラーンに恵与した。私は援兵として，すぐれた若党たちの内から，多くの者を任命して，夕べの礼拝時，宿営に帰った。

翌朝〔1月8日〕，私は出発して，バジャウルの谷のバーバー・カラ Bābā Qara の泉の所に下馬した。残っていた捕虜たちは，ホージャ・カラーンのとりなしによって，その罪を許し，彼らにその妻や子供たちを返してやり，退去するのを許した。捕虜となっていた若干のスルターンたちや首長たちは処刑された。私はスルターンたちの首と若干の首を，この勝利の知らせと共にカーブルに送った。バダフシャーン，クンドゥズ，バルフにも，捷報と共にいくつかの首を送った。

ユースフ・ザイ族の所から〔使者として〕来ていたシャー・マンスール・ユースフ・ザイ Shāh Manṣūr Yūsuf-zay はこの勝利と皆殺しを目撃した。私は彼に誉れの長衣を身につけさせ，ユースフ・ザイ族に対する警告を含む命令書を書いて渡し，その出発を許した。

9日火曜日〔1月11日〕，私はバジャウル城の諸重要事に満足すると，出発して，このバジャウルの谷の1キョルフ下流の所に下馬し，1つの高みに首の塔を建てるよう命じた。

10日水曜日〔1月12日〕，私は見廻りのために出発して，バジャウル城におもむき，ホージャ・カラーンの邸宅で酒宴となった。バジャウル周辺のカーフィルたちがいくつかの革袋に入れたワインを運んで来た。バジャウルのワイン

や果物は全て周辺のカーフィリスターンから来ている。

219a (219a) 私はその夜そこにとどまり，**翌朝**〔1月13日〕，城の塔や塁壁を視察し，出発して，宿営地に帰った。

翌朝〔1月14日〕，私は出発して，ホージャ・ヒズル川 (Khwāja Khiḍr rūdı) の河畔に下馬した。

そこを発って，チャンダワル川の河畔に下馬した。〔任命されていた者たちに〕バジャウル城に向かうようにとの命令が出された。ホージャ・カラーンに纛 (ṭugh) を恵与し，バジャウル城へ出発させた。

ホージャ・カラーンを出発させた1～2日後，次の小さな詩の断片が私の心に浮かんだ。私は書きとめてホージャ・カラーンの所に送った。

私が友とかわした約束や約定はこんなものではなかったはずなのに。
別離の悲しみが私を噛む——約束などとこしえになかったのだ。
時の流れという抱擁により人はどのように心をいやされるのであろうか。
時はついに力ずくで友を友からひきはなしてしまったのだ。

ムハッラム月17日水曜日〔1月19日〕，スルターン・ヴァイス・サワーディー Sulṭān Ways Sawādī のライヴァルであるスルターン・アラーウッ・ディーン・サワーディーが来て私の前に伺候した。

18日木曜日〔1月20日〕，私たちはバジャウルとチャンダワルの間にある山を狩りした。この山の鹿 (bughu maral) は真黒な色をしている。その尾はまた別の色をしている。おおむね，ここより下のヒンドゥースターンの鹿は全身が真黒である。この日，さらに一羽のみみずく (?) (sarıq qush)〔「黄色い鳥」の意〕が捕らえられた。それも黒かった。その眼も黒かった。この日，鷲が鹿 (keyik) を捕えた。兵士たちの間で穀物がやや不足していた。私たちは

219b カフラージュ Kahrāj の谷に (219b) おもむき，穀物を手に入れた。

金曜日〔1月21日〕，私たちはサワード〔現在のスワット Swat〕のユースフ・ザイ・アフガーン族の所に向かう目的で出発し，チャンダワル川とバジャウル川の合流点とパンジュ・クーラ川 (Panj-kūra suyı) の間の地点に下馬した。シャー・マンスール・ユースフ・ザイが若干の珍味と人を酔い心地にさせる1つのすばらしい物 (kamālī) を持って来た。その1つのすばらしい物を私は3つに分け，1つを私が食べ，1つをガダーイー・タガーイー Gadā'ī Taghā'ī，もう1つをアブドゥッラー・キターブダールが食べた。それは驚くほどの酔い

心地をもたらした。夕べの礼拝時にベグたちが集まった時，私は会議に出られないほどであった。まことに不思議な品であった。現在それと同じ種類の品の1つをまるまる食べつくしても，あの品の半分ほどの酔い心地しか味う事ができないのである。

そこを発って，カフラージュの谷とピーシュグラームの谷 (Pīshgrām darrasi) の入口に近いパンジュ・クーラの前面に下馬した。この宿営地に滞留中に雪が足首を越えるほど降った。このあたりでは，雪は時々しか降らないようであった。土地の者たちは驚いていた。私はスルターン・ヴァイス・サワーディーの同意を得て，カフラージュの住民に兵士らが利用する4,000ハルワールの穀物を課した。その徴収のためにスルターン・ヴァイスを派遣した。農民や山地の住民たちはかつてこれほどの額を課された事が無かった。彼らは穀物を納める事ができず，壊滅させられた。

23日火曜日〔1月25日〕，私はヒンドゥー・ベグに兵を率いさせ，パンジュ
220a ・クーラを攻撃させた。(220a) パンジュ・クーラは山の中腹より上の方にあった。1キョルフほど坂を登らねばならなかった。パンジュ・クーラの村々に到達するまでに，住民たちは脱出していた。味方の者たちは若干の家畜類と，その家々から大量の穀物を取って来た。

翌朝，クチュ・ベグに兵を率いさせ，攻撃におくり出した。

25日木曜日〔1月27日〕，私は兵士らの食糧を獲得する目的でカフラージュの谷の内部にあるマーンディーシュの村々 (Māndīsh kentläri) に下馬した。

フマーユーンの誕生後，フマーユーンと同腹の何人かの子供ができたがいずれも死亡した。ヒンダル Hindal は〔ディルダール・ベギム Dildār Begim から〕まだ生まれていなかった。この近辺に滞在中に〔フマーユーンの生母である〕マーヒム Māhim から手紙が来た。彼女は「男の子であれ，女の子であれ，それは私にとって幸運・幸福そのものです。どうか私にお与え下さい。私は自分の子供として育てるつもりです。」と書いていた。

26日金曜日〔1月28日〕，この宿営地に滞在中に，私はヒンダルをマーヒムに与える事にして，手紙を書き，ユースフ・アリー・リカーブダール Yūsuf 'Alī rikāb-dār〔リカーブダールは「あぶみ持ち」〕をカーブルへ派遣した。もっともヒンダルは実際にはまだ生まれていなかった。

＜pp. 281-282　事情を説明すると以下の如くである。ユマーユーンと同腹の

者としては，当時までに，フマーユーンより年下で，他の皆よりも年上の1人の男の子が生まれていた。またその他に3人の女の子が生まれていた。その1人がミフルジャーン Mihr-jān であるが，皆夭逝した。フマーユーンは同腹の兄弟を非常に欲しがっていた。当時，ディルダール・アーガーチャ Dildār Āghācha が身ごもっていた。私は「どんなだろうね？もしフマーユーンに同腹の子がいたら」と云っていた。お方さま (ḥaḍrat-i wālida)〔マーヒム〕は，「もしディルダール・アーガーチャが男の子を生んだら，私がもらって育てたらどうでしょう」とおっしゃった。私は「まことに結構だ」と答えた。

しばしば婦人たちの間で，男の子だろうか女の子だろうかといって，次のようなまじないの習慣が行なわれていた。2枚の紙の1枚に〔男の名である〕アリーないしハサンと書き，もう1枚に〔女の名である〕ファーティマと書き，それらを泥の中にうめ込み，それを1つの器に入った水の中に置く。どちらであれ先に紙が姿を現わしたら，それによって生まれて来るのは男だとか女だとか云う。つまり男の名を書いた紙が出てくれば男だろうと云い，女の名を書いた紙が出てくれば女だろうと云うのである。皆がまじないをした所，男の名が出て来た。よい前兆であったので，まさにそのために私たちは先の手紙を書いて送ったのであった。その数日後，神は男児をお恵み下さったのである。

誕生の知らせがとどくより3日前，皆は，誕生の直後に，その子を生母の所から有無を云わせず取りあげて，私たちの屋敷に連れて来て育てていた。誕生の知らせが各地に送られたのであるが，私たちが誕生の知らせを受け取ったのは，ちょうどビフラ Bihra〔現在の Bhera〕征服の時点であったので，それを神に祝福された吉兆として，この子はヒンダル〔Hind-al「ヒンド征服」〕と名付けられた。この関係からすれば，彼は私にとって弟でもあり息子でもある事になる＞。

この同じ宿営地に滞在中に，私はマーンディーシュ地方の，谷の中央にある1つの高みの上に，1つの大きな基壇を石で造営した。その基壇いっぱいに白い旅行用のテント (aq öy pīsh-khānası) がはられた。この基壇の石は全て近習らと兵士らが運んだ。

ユースフ・ザイ・アウガーン族からマリク・スライマーン・シャー Malik Sulaymān Shāh の子のマリク・シャー・マンスール Malik Shāh Manṣūr が
220b 来ていた。彼は私に味方する (220b) 立場をとっていた。私はユースフ・ザイ

部族（Yūsuf-zay ulusı）を懐柔するために，彼の娘を妻として求めていた。この宿営地に滞在中に，シャー・マンスールの娘とユースフ・ザイの租税とがこちらへ向っているという情報が入った。夕べの礼拝時，酒宴が開かれ，それにはスルターン・アラーゥッ・ディーンを招いて列席させ，特別の栄誉の長衣（ḫāṣṣa khil'at）を恵与した。

28日日曜日〔1月30日〕，私たちは出発して，カフラージュの谷を出た所で下馬した。シャー・マンスールの弟ターウース・ハーン・ユースフ・ザイ Ṭā'ūs Khān Yūsuf-zay が，前述した兄の娘をこの宿営地に連れて来た。ビースート Bīsūt の住民たちがバジャウル城と諸関係をもっていたために，私はこの宿営地からユースフ・アリー・ブカーウルを派遣して，ビースートの人々を出発させてバジャウル城へ連れて行かせる事にした。私はカーブルに残っている兵士らにも来るようにという諸命令を書いておくった。

サファル月3日金曜日〔2月4日〕，私はパンジュ・クーラ川とバジャウル川の合流点に下馬した。

5日日曜日〔2月6日〕，この宿営地からバジャウルにおもむき，ホージャ・カラーンの館で酒宴が開かれた。

7日火曜日〔2月8日〕，ベグたちとディラザーク・アフガーン族の首長たちを呼んで相談し，次のように定めた：収穫期もおわろうとしている。太陽が魚座にあるのはあと1～2日間のみである。各平地の穀物はすでに全て運び去られてしまっている。こういう時期に，もし私たちがサワードにおもむけば，
221a 兵士らは穀物を見つける事ができず，必ず食糧不足に悩む事になろう。(221a) 私たちにとって必要な事はアンバーハル Anbāhar とパーニー・ヤーリー Pānī Yālī〔<p. 282 Pānī-Māl>〕の道をとって進み，ハシュナガルの上流の側でサワード川を渡り，ユースフ・ザイ族のサンガル〔147b 参照〕であるマーフーラー Māhūrā に対面する平地に滞留しているアフガーン族――ユースフ・ザイとムハンマド・ザイ族――を急襲する事である。また明年，今年よりも早い時期，収穫の季節に来て，このアフガーン族の事をまず第一に念頭にのぼらせる事が必要であると。

以上の如くに決定して，**翌水曜日**〔2月9日〕，私はスルターン・ヴァイスとスルターン・アラーゥッ・ディーンに馬と誉れの長衣を恵与し，種々慰めの言葉と共に退去の許可を与えた。私は出発して，バジャウルに面する地点に下

馬した。私はシャー・マンスールの娘を，遠征から帰るまで城内に置いた。

翌朝〔2月10日〕，私は出発してホージャ・ヒズル川を渡り下馬した。私はホージャ・カラーンにこの宿営地から出発する許可を与えた。私は疲れはてた馬と共に余分の軍用品と重い輜重をクマル道を通ってラムガーンへ送った。

翌朝〔2月11日〕，私は出発して，重い輜重とらくだをホージャ・ミーリ・ミーラーンに率いさせジュルガトゥー Jūrghātū とダルワーザ Darwāza 経由の道とカラ・クーパ Qara Kūpa 峠を通って進ませた。私たち自身は身を軽くして馬で急行し，アンバーハル峠を越え，<p. 283 さらにもう1つの大きな峠を越えて>午後の礼拝時より前にパーニー・ヤーリーに下馬した。私はウガン・ベルディ Ughan-berdi を数名の者たちと共に情報蒐集のために先行させた。

アフガーン族が私たちの所から近い所にいたので，私たちは〔翌日〕早朝に出発する事をしなかった。朝食時にウガン・ベルディがもどって来た。彼は1
221b 人のアフガーン人を捕らえその首を取った。(221b) しかし途中でその首を道に落とした。彼は望まれるような正確な情報をもたらさなかった。昼になって，私は出発し，サワード川を渡り，午後の礼拝時より以前に下馬した。就寝時の礼拝の時刻に出発して，馬を急ぎ走らせた。

〔翌日〕太陽が槍の高さにまで登った時，物見のために派遣していたルスタム・トゥルクメニーが，「アフガーン族は気づいて騒ぎになっている。1団のアフガーン族が山道を通って進んでいる」という情報をもたらした。私たちはこれを聞くとより急いで進み，攻撃隊を先に分遣した。彼らは進んで，若干のアフガーン族を殺し，その首を取り，1団の捕虜と牛と家畜を取って来た。ディラザク・アフガーン族も若干の首を切って持って来た。私たちは引返してカートラーング Kātlāng の近郊に下馬した。ホージャ・ミーリ・ミーラーンが率いて進んで来ていた家族たちに向け道案内人を送り，マカーム Maqām に来て私たちに合流させる事にした。

翌朝〔2月14日〕，私は出発して，カートラーングとマカームの間の地点に下馬した。シャー・マンスールの配下の者が来た。私はホスロー・シャー・キュケルダシュとアフマディー・パルワーナチを1団の者たちと共に家族の方に向け派遣した。

14日火曜日〔2月15日〕，マカームに下馬した時，家族が到着して合流した。

この30～40年の間にシャフバーズ・カランダル Shahbāz qalandar という1人の異端がいたと云う。ユースフ・ザイの1群の人々とディラザークの1群の人々を異端にしたのはまさにこの人物であったと云われる。マカームの山の山鼻
222a の所に1つのやや低い岡が（222a）ある。全面，平野を見おろし，まことにすばらしく，広々と眺望のひらけた岡である。シャフバーズ・カランダルの墓がそこにあった。私はそこを訪れてよく眺めた。私はふと，このようなすばらしい環境の場所に異端のカランダル教徒の墓があるというのは何ともすすめられた事ではないと考えた。そこで私は墓を破壊して平らにするように命じた。まことに快適な気持のよい場所であったので，私たちはマージューン（ma'jūn）〔ある種の酩酊作用を起こす練薬。麻薬の1種〕を口にしていっ時そこに滞在した。

私がバジャウルから引返した時にはビフラに向かうつもりで引返したのであった。私たちはカーブルに来て以来，常にヒンドゥースターン遠征を考えていた。しかしいくつかの障害のために実現できないでいた。私たちがバジャウル遠征に出てすでに**3～4カ月**が経過していたが，兵士らには考えていたほどの戦利品がなお得られないままであった。ヒンドゥースターンの国境（sar ḥadd）のビフラが近かったため，ふと私は，ただちに軽装備で侵入すれば兵士らに何かが得られるのではなかろうかと考えたのである。

この考えによって引返し，アフガーン族を撃った後，マカームに下馬した時，若干の私の為を思ってくれる者たちが次のように上奏した：「ヒンドゥースターンに侵入するならば，しっかりと足元を固めて侵入しなければなりません。若干の兵士らはカーブルに残っております。1群のすぐれた若党たちをバジャウルに駐留させておられます。さらに馬が疲労したため多くの兵がラムガーンに帰っております。ここに来ている者たちの馬も疲れきっており，とても1日駆け続けるだけの力が残っておりません」と。彼らの云う事はもっともであったが，すでに私はビフラに向っていたために，彼らの考えを無視して，**翌朝**
222b 〔2月16日〕（222b）出発して，スィンド川〔インダス川〕の渡しに向った。私はいかだ係のミール・ムハンマド Mīr Muḥammad jālā-bān をその兄弟と共に，さらに彼らに若干の若党らを加えて，スィンド川の上流下流の渡河地点を調べるために派遣した。

キャンプ（ordu）を川の方向へ向わせた後，私はサワーティー Sawātī ——

カルグ・ハーナ Karg-khāna〔「犀のすみか」の意〕とも呼ばれる――方面へ犀狩りに出かけた。数頭の犀が現れた。しかし森が深く，犀は森から出なかった。1頭の仔を連れた犀が平原に出て急いで逃げた。多数の矢をあびせた。森が近かった。犀は森に逃げこんだ。森に火が放たれた。しかしその犀は見つからなかった。もう1頭の仔犀が火に焼かれ手足をばたつかせて横たわっていた。喉をかき切って，皆それぞれ小量ずつの分前を得た。私たちはサワーティーから引返し，ずいぶんとさまよった末に，就寝時の礼拝の時刻に宿営地に到達した。渡河地点を調べるために出かけていた者たちも調べて帰って来た。

翌<p. 285 **16日**>**木曜日**〔2月17日〕，私は馬，らくだ，輜重と共に渡河地点で渡河した。オルドゥ商人 (ordu bāzārī) と歩兵とろばをいかだで渡らせた。この日，私たちが渡河地点の所にいた時，ニーラーブの人々 (Nīl-ābīlär) が来て，1頭の甲冑をつけた馬と300シャールヒー (shāhrukhī) 銀貨を献上して私に会った。全員が渡河すると，その日の正午の礼拝時，私たちは出発して，夜の初更の時刻になるまで進み，カチャコト Kachakot 川の近くに下馬した。

翌朝〔2月18日〕そこを発ち，カチャコト川を渡り，正午がめぐって来ると
223a サングダキ Sangdaki 峠を越えて (223a) 下馬した。サイイド・カースィム・イシク・アーガーは殿をつとめていた。彼はあとをつけて来たグジュール人 (Gujūrlar) を捕え，何人かの首を取って持って来た。

翌早朝〔2月19日〕サングダキを発ち，おそく正午の礼拝時にスーハーン川 (Sūhān suyı) を渡って下馬した。オルドゥの後方の者たちは夜半に至るまで到着し続けた。まことに長い行程であった。馬が弱まり疲れ切っていた時なので大変な苦労であった。多くの馬が落伍した。

ビフラの7キョルフ北方に1つの山〔現在のソールト山系〕がある。この山の事を〔シャラフッ・ディーン・ヤズディーの著した〕『勝利の書』*Ẓafar-nāma* とか若干の書物にはジュード山 Kūh-i Jūd と記している。はじめはどうしてそう呼ばれるのかわからなかった。しかし後に判明した。すなわち，この山には父方の先祖を同じくする2つの部族民が住んでいた。人々はその1つをジュードと呼び，もう1つをジャンジューハ Janjūha と呼んでいた。これらの者たちは古くからこの山とニーラーブ・ビラフ間にいる諸部族諸部民の支配者・統治者 (ḥākim wä farmān-rawā) であり続けていた。しかしその支配

は友人的な兄弟的な支配であった。彼らが望むだけ何でも徴収できるわけではなかった。ある種の税（kesim）のように，古くからあらゆるものについて取り決められていた。この人々の取り分と，かの人々の供出分は，この取り決めを越える事も，またそれに欠ける事も無かった。その取り決めは以下の如くであった：１組の牛につき１シャールヒーを納める。家長は７シャールヒーを納める。軍役にも従う。

ジュードもジャンジューハもそれぞれいくつかの分族（shu'ba）に分かれている。ビフラから７キョルフの所にあるこの山はカシュミールの山々——ヒン
223b ドゥー・クシュ山脈はこの（223b）山々に連なる山脈である——から分岐して西南の方角に延び，ディーンコトの麓の所でスィンド川でおわっている。この山の半分の部分にジュードがおり，他の半分にジャンジューハがいる。人々はこの山を，ジュードとの関係から，ジュード山と呼んでいるのである。

これらの者たちの内，１人の皆に尊敬された有力者がラーイ（rāy）と呼ばれている。その他の彼の弟や息子たちはマリク（malik）と呼ばれる。このジャンジューハ〔の長〕はランガル・ハーン Langar Khān の母方のおじに当たる。スーハーン川の近辺にいる諸部族諸部民の支配者の名はマリク・ハスト Malik Hast であった。彼の本来の名はアサド Asad である。ヒンドゥスターン人たちはこのような短母音〔"a"〕を時々はぶいて発音する。例えばハバル（khabar）をハブル（khabr）と云うように，アサド（Asad）をアスド（Asd）と云っている。それがやがてハスト（Hast）となったのである。

私たちはジャンジューハに下馬するとただちにランガル・ハーンをマリク・ハストに向け派遣した。彼は急いで行って，マリク・ハストに私たちの与える恩恵・優遇に対する期待をいだかせ，就寝時の礼拝の時刻に彼を連れて来た。彼は１頭の甲冑つきの馬を献上品として持参し私の前に伺候した。彼は22～23歳であったであろう。

これらの者たちのいろいろの家畜が私たちの宿営地の周囲や近くに多数いた。私は常にヒンドゥスターン征服の事を考えていた。このいくつかの諸地方，すなわちビフラ，フーシャーブ Khūsh-āb，チャーナーブ Chānāb，チニーオト Chinīot はかつてしばしトルコ人の支配下にあった。そのため私たちはこれらの諸地方をあたかも私たちの支配下にある国であるかの如くに思い描いていた。私たちは力ずくであれ話合いによってであれ，これらの諸地方を私たち

の支配下に置く事を確信していた。このためこの山の住民たちと友好的な関係
224a を結んでおく事が必要不可欠であった。(224a) そこで「何人(なんぴと)といえどもこれらの者たちの家畜はもとよりの事，なわの端，折れた針にすら損傷を与えてはならぬ」という命令が出された。

翌朝〔2月20日〕，私たちはそこを発って，正午の礼拝時にカルダ・カハール Kalda-kahār に着いて下馬した。その周囲や近辺には多くの穀物畑があった。このカルダ・カハールはすばらしい土地である。ビフラから10キョルフの所，ジュード山の山中に平地があり，この平地の中央に1つの大きな湖がある。その周囲の山々からの雨水が集められてこの湖を形成している。周囲は3キョルフに近い。その北にはよい牧地があり，西の山麓に泉がある。この泉の水源は，この泉を見おろす高地にある。適当な土地であったので，私は庭園を造った。それは「清浄園」Bāgh-i ṣafā' と呼ばれている。後に説明するように，きわめて快適な気持のよい場所である。

翌早朝〔2月21日〕，私はカルダ・カハールを出発した。ハムタートゥー Hamtātū 峠の頂上で，若干のその土地の住民たちが粗末な献上品を持って来て私の前に伺候した。私はこの人々をアブドゥッ・ラヒーム・シガーウル 'Abd al-Raḥīm shighāwul〔シガーウルは「客の随伴役」〕に加えビフラ方面へ派遣した。それはビフラの住民を懐柔して「この方面の諸地方は古くからトルコ人に所有されてきた。心配・不安にかられて人々を破滅させぬよう気をつけよ。私たちはこの地方と住民に親近感をいだいている。絶対に略奪・劫奪したりする事は無い」と伝えさせるためであった。

224b 朝食時，私は峠の麓に下馬して，(224b) クルバーン・チャルヒー Qurbān Charkhī，アブドゥル・ムルーク・ハスティー 'Abd al-Mulūk Hastī に率いられた7～8人を前方へ情報を得るために派遣した。前方へ行っていた者たちの内，マフディー・ホージャの子ミール・ムハンマド Mīr Muḥammad-i Mahdī Khwāja が1人の男を連れて来た。この間，アフガーン族の首長たちの内，何人かが献上品をたずさえて到着し私の前に伺候した。私は彼らをランガル・ハーンにつけてビフラの人々を懐柔する目的でビフラの住民に向け派遣した。

峠を越え森を出ると，私たちは右翼・左翼・中軍の隊列を整えてビフラ方面へと進軍した。私たちがビフラの近くに到達した時，ダウラト・ハーン・ユー

スフ・ハイル Dawlat Khān Yūsuf-khayl の子アリー・ハーン 'Alī Khān の家臣の1人である，スィクトゥー Siktū の息子のディーワ・ヒンドゥー Dīwa Hindū が，ビフラの貴人ら (arbāblar) と共に来て，1頭の馬を献上して私の前に伺候した。正午の礼拝時になって，私たちはビフラの住民に損害・損傷を与える事無く，ビフラ東方のバハト Bahat 川〔現在の Jhelum 川〕の河畔にある1つの畑に下馬した。

ティムール・ベグがヒンドゥスターンに侵入し帰国して以来，この地の若干の諸地方，すなわちビフラ，フーシャーブ，チャーナーブ，チニーオトはティムール・ベグの子孫たちや家臣・従臣たちの支配下にあった。シャー・ルフ・ミールザーの孫ソユルガトミシュ・ミールザー Soyurghatmısh Mīrzā の子のスルターン・マスウード・ミールザー Sulṭān Mas'ūd Mīrzā ——当時カーブルとザーブルの支配権 (iyālat wä ḥukūmat) を掌握していたためにスルターン・マスウード・カーブリーと呼ばれていた——が取りたてて昇進させた者たちの内の1人であるミール・アリー・ベグ Mīr 'Alī Beg の息子たち，すなわ
225a ちバーバーイ・カーブリー，ダルヤー・ハーン Daryā Khān，(225a) アパーク・ハーン Apāq Khān ——後にはガーズィー・ハーン Ghāzī Khān と呼ばれていた——が，スルターン・マスウード・ミールザーとその子アリー・アスガル・ミールザー 'Alī Aṣghar Mīrzā の歿後，その権力で以って，カーブル，ザーブル，それに前述のヒンドゥスターンの諸地方・諸地区 (wilāyat wä pergene) を支配していた。

スルターン・アブー・サーイード・ミールザーの時代に，カーブルとガズニーはこれらの者たちの支配下から離れた。しかしヒンドゥースターンの諸地方は彼らの支配下にあった。**910年**，私がカーブルにはじめて来た年，私たちがヒンドゥスターンに侵入する目的でハイバル峠を越えてプルシャーウール Purshāwūr〔プルシャーワル；ペシャワル〕に到着した時，バーキー・チャガーニーヤーニーが強弁したために，私たちは下のバンガシュの方面，つまりコハトに進み，多くのアフガーン人の住地 (Afghānistān) を攻略し，バヌーとダシュトを攻撃・略奪して，ドゥキーを経て帰還した。

その時，ビフラ，フーシャーブ，チャーナーブの支配権はミール・アリーの孫ガーズィー・ハーンの子のサイイド・アリー・ハーン Sayyid 'Alī-Khān が握っていた。彼は〔ローディー朝の〕イスカンダル・バフルール Iskandar

Bahlūl の名でフトゥバを読み，イスカンダルに臣従していた。彼は私が軍を率いて来た事に不安を感じ，ビフラを捨ててバハト川を渡り，ビフラの村々の1つであるシールコト Shīrkot に駐屯してその地を固めていた。1～2年後，私たちが原因で，サイイド・アリー・ハーンとアフガーン族は不和となった。彼はこのため心配・不安に駆られて，これらの諸地方をタータール・ハーン・ユースフ・ハイル Tātār Khān Yūsuf-khayl の子ダウラト・ハーンに引渡した。このダウラト・ハーンは，その時代のラーホール Lāhūr の支配者であった。(225b) ダウラト・ハーンはビフラを長男のアリー・ハーンに与えた。その結果，この当時，ビフラはアリー・ハーンの支配下にあった。

225b

ダウラト・ハーンの父タータール・ハーンは，ヒンドゥースターンに出撃して支配者となり，バフルールを君主 (pādishāh) にいただいた6～7人の首長 (sardār) たちの1人であった。スィフリンド Sihrind とサトルジュ川 (Satluj Daryāsı)〔現在のSutlej 川〕の北にある諸地方は全てこのタータール・ハーンの支配下にあった。これらの諸地方の総収入は3クロール (krōr)〔英領インドでは crore〕以上であった。タータール・ハーンの死後，〔ローディー朝の〕スルターン・スカンダルはその君臨した諸地方をタータール・ハーンの子孫たちから奪った。私がカーブル地方に来た年の1～2年前，スカンダルはただラーホール1カ所のみをダウラト・ハーンに与えていた。

翌朝〔2月22日〕，私は若干の適当な地域に向け攻撃隊を派遣した。この日，私はビフラを見てまわった。この日，サングル・ハーン・ジャンジューハ Sangur Khān Janjūha が到着し，馬を献上して私の前に伺候した。

＜p. 289 **22日**＞**水曜日**〔2月23日〕，私はビフラの有力者たちと有力商人たちを呼んで，40万シャールヒーを生命財産保証金 (māl-i amān) として定め，徴収人たちを任命した。再び出かけて見物してまわり，舟に乗ってマージューンを味わった。ビフラとフーシャーブにいるバルーチ Balūch 族に向け，私はハイダル・アラムダール Ḥaydar ʻalamdār〔アラムダールは「旗手」〕を派遣していた。

木曜日〔2月24日〕朝，バルーチ族は1頭のアーモンドの花の色をした俊馬を献上して私の前に伺候した。兵士らがビフラの住民に対して乱暴狼藉を働いているという報告がなされた。(226a) 私は人を派遣し，乱暴を働いた者たちの若干の者を処刑し，若干の者の鼻をそいでオルドゥをまわらせた。

226a

金曜日〔2月25日〕，フーシャーブから上奏文が到着した。私はシャー・シュジャー・アルグンの子のシャー・ハサンをフーシャーブにおもむくために任命した。

＜p. 289 **25日**＞**土曜日**〔2月26日〕，私はシャー・ハサンをフーシャーブに派遣した。

日曜日〔2月27日〕，一面水びたしとなるほどの大雨が降った。ビフラとオルドゥが滞留している諸庭園の間にはかなり小さな塩気のある川が流れていた。正午の礼拝時までにそこはまるで大河のようになった。ビフラの近くでは，1カ所の，ティールゲズ矢のとぶ距離ほどの幅のある場所しか渡れる所が無かった。皆は馬を泳がせて渡った。2つの礼拝の間の時刻〔午後〕に私は流れ込んで来る水流を見るために出かけた。猛烈な雨や風のため，再びもどってオルドゥに帰りつく事ができるか心配になるほどであった。2つの礼拝の間の時刻に，私はその流れ込んで来る水流を馬を泳がせて渡った。兵士らも大いに不安になった。ほとんどの者はテントや重い荷物を置いたまま，人馬の甲冑や武器を肩にかついで，馬を裸馬にして泳がせて渡った。平地は＜p. 290 ほとんど全て水におおわれていた。

翌朝〔2月28日〕，川から舟を＞運んで来て，ほとんどの兵士らのテントや荷物を舟で渡した。正午近くにクチュ・ベグの部下が1シャルイーほど流れの下手の方に行って渡れる場所を見つけた。残っていた者たちはそこで渡った。私たちはジャハーン・ヌマー Jahān-numā と呼ばれているビフラ城の城内に
226b (226b) 1日留まった。

火曜日〔3月1日〕の朝，私は出発して，雨と洪水を警戒してビフラの北方にある高地の上に下馬した。合意されていた現金の支払いが遅延していた。4地区（sar-kār）に分け，ベグたちに対し，努力して事に結着をつけるようにと命じた。1つの地区にハリーファを任命し，もう1つの地区にクチュを，別の1地区にドースト・ナースィルを，さらにもう1つの地区にサイイド・カースィムとムヒッブ・アリーを任命した。かつてトルコ人が君臨していた諸地方を私たちは私たち自身のものと思い描いていたため，私たちは略奪・劫奪をしていなかった。常に人びとは「もし和平交渉のために使者がおもむいても，トルコ人に支配されていた諸地方に行く場合は問題を起こされるような心配は絶対に無い」と云っていた。

ラビーゥル・アッヴァル月1日木曜日〔1519年3月3日〕，このため私たちはムッラー・ムルシド Mullā Murshid をスルターン・イブラーヒーム Sulṭān Ibrāhīm ——その父のスルターン・イスカンダルがその5～6カ月前に死亡し，ヒンドの王権はこの人物の手中に移っていた——に向けての使者に任命し，1羽の大鷹を送って，かつてトルコ人に従属していた諸地方を要求した。私はムッラー・ムルシドにダウラト・ハーンとスルターン・イブラーヒームあての書状を託し，口づたえにすべき事柄も話して，彼を出発させた。

これらのヒンドゥスターンの人びと，特にアフガーン族らは驚くほど理知・理性からほど遠く，また正しい判断や意見からかけ離れた人びとであったらしい。彼らは，敵となって進軍したり陣を固めたりする事もできず，我々の味方
227a となって，それにふさわしく（227a）身を処する事も知らなかった。ダウラト・ハーンは，おもむいた私たちの側の者を数日間手元に留め，自ら会う事もせず，またイブラーヒームの所に向わせる事もしなかった。数カ月後に，おもむいた私たちの側の者は全く返答を得られぬままにカーブルへと帰着した。

2日金曜日〔3月4日〕，歩兵のシャイバク Shaybaq piyāda と歩兵のダルヴィシュ・アリー Darwish ʻAlī piyāda ——彼は，現在，火縄銃の射手である——がカーブルからいくつかの報告をもたらして来て，ヒンダルの誕生を伝えた。ヒンドを征服している時にこの知らせがとどいたので，私は吉兆と考えて，ヒンダル〔「ヒンド征服」〕と名付けた。カンバル・ベグもバルフから〔バディーゥッ・ザマーン・ミールザーの子〕ムハンマド・ザマーン・ミールザーの上奏をもたらした。

翌朝〔3月5日〕，会議（ディーワーン）の散会後，私は見物に出かけ，舟に乗ってアラクʻaraq〔蒸溜酒の1種〕を飲んだ。酒宴の参加者はホージャ・ドースト・ハーワンド，ホスロー，ミーリーム，ミールザー・クリー，ムハンマディー，アフマディー，ガダーイー，ヌーマーン Nuʻmān，ランガル・ハーン，ルーフ・ダムRūḥ-dam，カースィム・アリー・タリヤーキー Qāsim ʻAlī tariyākī〔タリヤーキーは「亜片常用者」〕，ユースフ・アリー Yūsuf ʻAlī，テングリ・クリー Tengri Qulī であった。船首の方に船室（talar）があり，その上が平らであった。私は数人の者たちと共にここに坐っていた。また別の数人は船室の底部の所に坐っていた。船尾の方にも坐れる場所があった。ムハンマディー，ガダーイー，ヌーマーンがそこに坐っていた。私は午後の礼拝時に至るまでアラ

クを飲んでいた。アラクのまずさに嫌気がさして，私たちは舟のこちら側にいる者たちと意見一致してマージューン〔麻薬の1種〕を服する事にした。舟の
227b 向う端にいる者たちは，私たちがマージューンを服用している事に (227b) 気づかず，アラクを飲んでいた。

就寝の礼拝の時刻に私たちは舟の所を発って，おそく宿営地に帰った。ムハンマディーとガダーイーは私がアラクを飲んでいたと考えて，「ちゃんとお仕えしよう」といって，アラクのつぼを馬上で交代で持ち上げながら，すこぶる御気嫌で入って来た。彼らは「こんな真暗な夜に，私たちはつぼを交代で持ち上げながら来たのです」と云っていた。やがて彼らは，別の宴も始まっていて酔い心地も別である事，ある人びとはマージューンに酔い，ある人びとは酒に酔っていた事を知った。マージューン・パーティーと酒宴とは，同時にはうまくゆかぬのが常であったので，彼らは非常に困惑した。私は「宴をぶちこわすな。アラクを飲みたい者にはアラクを飲ませよ。マージューンをやりたい者にはマージューンをやらせよ。誰もお互いに嫌な事を云いあわぬようにさせよ」と云った。若干の者たちはアラクを飲み，若干の者たちはマージューンを服した。いっ時，礼儀正しい宴が続いた。

コブーズ (qobūz)〔弦楽器の1種〕奏者のバーバー・ジャーン Bābā Jān が宴に参加していなかった。私たちは白いテントに着いた時に彼を呼んだ。彼はアラクを所望した。私たちはタルディ・ムハンマド・キプチャク Tardı Muḥammad Qipchaq をも招き，酒に酔った者たちと共に談笑した。マージューンの宴会とアラクやワインの宴会とは決して同時にはうまくゆかぬものであったので，酒に酔った者たちがあちらこちらから云うべきでない事を云い始めた。彼らが悪し様に口にしている事は，ほとんどマージューンやマージューンをやっている者たちに対するものであった。バーバー・ジャーンも酒に酔っていろいろとひどい事を口にした。酔った者たちはタルディ・ムハンマドにも，なみなみと注いだ大盃を次々に与え，わずかの間に酔いつぶれさせた。私たち
228a がどんなに何とかしようとしても，(228a) もはや収拾がつかなかった。座は非常にしつこくなった。会は味気ないものとなり，皆それぞれの方向へと散って行った。

5日月曜日〔3月7日〕，私はビフラ地方 (Bihra wilāyatı) をヒンドゥー・ベグに与えた。

火曜日〔3月8日〕，チャーナーブ地方 (Chānāb wilāyatı) をフサイン・イグレク Ḥusayn Igräk に恵与し，フサイン・イグレクとチャーナーブの人びとを出発させた。この時，〔ガーズィー・ハーンの子〕サイイド・アリー・ハーン〔225a 参照〕のマヌーチフル・ハーン Manūchihr Khān という名の息子が到着して私の前に伺候した。彼は，以前に私達を支持しようと，上(かみ)の道を通って来る途中でタータール・カカル Tātār Kakar に出くわした。タータールは彼を行かせず手元に置き，その娘を与えて婿にした。彼はしばしそこに居たのであった。

ニーラーブとビフラの山々の間には，ジュードとジャンジューハの人びとの他に，カシュミールの山々に隣接してジャト Jat，グジュール Gujūr それにその諸部族に属する多くの人びとがおり，山のスロープの各突起部や各丘に村々を形成して住んでいた。これらの者たちの支配者・有力者がカカル部族 (Kakar qabīlası) であった。これらの者たちの支配の仕方もジュードやジャンジューハのやり方〔223a 参照〕と同様であった。当時，この山麓地帯に住む人びとの支配権は同じ父系に属するタータール・カカルとハーティー・カカル Hātī Kakar の手中に握られていた。彼らは父系のいとこ同志であった。この者たちの要害の地は水流にえぐられた谷 (ābkand) や渓谷にあった。タータールのいる場所の名はパラーラ Parāla であった。そこは雪をいただく山
228b々よりずっと下方であった。ハーティーの地方は山に接していた。(228b) 彼はバーブー・ハーン・ビースート Bābū Khān Bīsūt に属したカーランジャル Kālanjar をも自分の宗主権下に入らせていた。

タータール・カカルはダウラト・ハーンを重んじ，ほとんど全面的に服従していた。彼はハーティーを重んじていなかった。敵対・抗敵の立場をとっていた。タータールはヒンドゥースターンのベグたちとの約束・合意にもとづいてやって来て，やや遠まきにハーティーを包囲した形で駐屯していた。私たちがビフラにいた丁度この時期，ハーティーは<p. 293 狩りに出かけるという>口実で気づかれぬままにタータール・ハーンのもとにおもむき，タータール・ハーンを殺してその領地・家族・財産を奪った。

正午の礼拝時，私は散策に出かけ，舟に乗ってアラクを飲んだ。酒宴に出席したのはドースト・ベグ，ミールザー・クリー，アフマディー，ガダーイー，ムハンマド・アリー・ジャング・ジャング，アサス ʻAsas，ウガン・ベルデ

ィ・モグールであった。楽師はルーフ・ダム，バーバー・ジャーン，カースィム・アリー，ユースフ・アリー，テングリ・クリー，アブル・カースィム，ラマザーン・ルーリー Ramaḍān Lūlī がいた。私は就寝の礼拝の時刻まで飲み続け，その時刻に，酩酊の状態で船をおりて上馬し，たいまつを手に，河畔を通って宿営地まで，馬のあちらこちらと傾きながら馬をとばして来た。私は驚くほど酔っていたのであろう。翌朝，皆が，私がこのようにたいまつを手に宿営地まで馬をとばして来た事を説明してくれたが，私はそれを全く記憶していなかった。宿舎に到着すると私は大いに吐いた。

金曜日〔3月11日〕，私は散策に出かけ，舟で川を渡った。向う岸の庭園や花や砂糖畑を楽しみ，つるべや水車を見物し，水をくみ出すやり方を質問した。
229a (229a) というより私たちは何度も何度も水をくみ出した。散策中に私はマージューンを服用した。そこからもどって舟に乗りこんだ。私はマヌーチフル・ハーンにもマージューンを与えていた。彼はすっかり出来あがってしまい，2人の男が腕で支えて立たせていたほどであった。私はしばらく川の中央に錨をおろして留まっていた。それからずっと川下へ進んだ。しばらくして，再び舟を川上にもどした。私たちはその夜は舟上で眠り，あけぼの近くに宿営地に帰った。

ラビーゥル・アッヴァル月10日土曜日〔3月12日〕，太陽は白羊宮に移った。この日，正午の礼拝時，私たちは散策のために馬で出発し，舟に乗ってアラクを飲んだ。宴に出席したのはホージャ・ドースト・ハーワンド，ドースト・ベグ，ミーリーム，ミールザー・クリー，ムハンマディー，アフマディー，ユーヌス・アリー，ムハンマド・アリー・ジャング・ジャング，ガダーイー・タガーイー，ミール・ホルド Mīr Khurd，アサスであった。楽師はルーフ・ダム，バーバー・ジャーン，カースィム，ユースフ・アリー，テングリ・クリー，ラマザーンであった。私たちは支流に入り，しばらく下流へと進み，おそく宿営地に帰った。

この日，シャー・ハサンがフーシャーブから到着した〔226a 参照〕。私は使者〔シャー・ハサン〕を派遣し，古よりトルコ人に服属していた諸地方を要求し，和平の提案をしていた。課した現金も私たちの手に入った。

春がかなり近づいていた。私は〔ビフラ地方を与えていた〕ヒンドゥー・ベグの補強のためにシャー・ムハンマド・ムフルダール Shāh Muḥammad

muhrdār とその弟ドースト・ムフルダール Dōst muhrdār, さらに若干の適
229b 当な若党たちを任命し，各人にその地位にふさわしい（229b）俸禄（wajh-i istiqāmat）を定めた。私はこの遠征の主張者・教唆者であったランガル・ハーンにフーシャーブを恵与し，纛（ṭugh）を与え，彼をもヒンドゥー・ベグの補強に任命した。さらにビフラにいるトルコ人やその土地の兵士らの俸禄・俸給を増額し，ヒンドゥー・ベグの補強に任命した。その内の１人は，先にその名をあげたマヌーチフル・ハーンであった。別の１人は，マヌーチフル・ハーンの一族であるナザル・アリー・トゥルク Naẓar ʻAlī Türk であった。またサンガル・ハーン・ジャンジューハとマリク・ハスト・ジャンジューハであった。

ラビーゥル・アッヴァル月11日日曜日〔３月13日〕，その地方の諸事を，平和の期待をいただきつつ何とか落着させて，私たちはビフラを発ってカーブルへの帰還の途についた。カルダ・カハールに到着して下馬した。その日も大雨が降った。雨合羽をつけていてもつけていなくても効果は同じであった。宿営地には人びとがおそく就寝の礼拝の時刻まで到着し続けた。

この地方や国のすばらしさを知っている者たち，特にカカルの古くからの仇敵であったジャンジューハの者たちが「ハーティー・カカルはこの間ずっと悪者でした。彼は道をふさぎ，人びとを破滅させています。このあたりから去らせるか，あるいはしかるべき懲罰を加える必要があります」と云ってきた。

翌朝〔３月14日〕，私はこれに同意して，ホージャ・ミーリ・ミーラーンとミーリム・ナースィルをオルドゥの責任者に任命し，大朝食（ulugh chāsht）〔午前10時以降にとられる朝食〕の時刻に宿営地を離れ，ハーティー・カカル——彼はその数日前，タータールを殺し，その領地であったパラーラを占領し，
230a パラーラにいた。すでに述べた〔228b 参照〕如くである——に向け（230a）急行した。私たちは，午後の礼拝時に下馬して，馬に飼料を与え，就寝の礼拝の時刻にそこを発った。道案内人はマリク・ハストの家臣でサロパー Sar-u-pā という名のグジュール族の者であった。夜，道を見失い，私たちは曙近くになって下馬した。私はベグ・ムハンマド・モグール Beg Muḥammad Moghūl を宿営地に引返させた。私は曙と共に出発した。朝食の時刻に，私たちは甲冑をつけ，スピードをあげて進んだ。１シャルイー手前の所で，パラーラの＜p. 295 軍勢が見えた。私は突撃を許可した。右翼はパラーラの＞東方へと進

んだ。私は右翼のクチュ・ベグを，右翼の後方に援軍としておくった。左翼と中軍の兵はパラーラめがけてまっすぐに進んだ。私はドースト・ベグを，パラーラに向った左翼の者たちの後方に援軍としておくった。

パラーラは峡谷の間にあった。２つの道があった。１道は，私たちが利用した道であるが，東南の峡谷の頂上を通っていた。その両側は水流が切りこんでできた峡谷であった。パラーラより半キョルフ手前から，道はその出口(darwāza) に到達するまでに４～５カ所で両側が谷をなす人ひとりしか通れぬ狭い道になっていて，ティールゲズ矢の１射程距離ほどの間，１列になって進まねばならなかった。別の１道は西北から来て，１つの狭い谷の内部を通ってパラーラに出る。この道も人ひとりしか通れぬ狭い道である。他にはどの方向からも来る道は無い。パラーラには城壁も胸壁も無いが，攻略できる所もま
230b た無い。その周囲は7・8～10カルの高さの (230b) 切りたった谷である。

私の側の前進した左翼の兵士らは隘路を抜けて出口へと押し進んだ。ハーティーは30～40人ほどの騎馬の甲冑・馬甲をつけた者たちと多数の歩兵と共に攻撃隊をあっという間に退却させた。補強軍として攻撃隊の後方にいたドースト・ベグは，敵の所につくとよく奪戦し，多くの者を落馬させ，敵に打ちかかった。その近辺で勇猛さを以って聞こえていたハーティー・カカルはしばし戦ったが，どうする事もできず逃走した。彼は，この隘路の所では支える事ができず城に入ったが，城を固める事もできなかった。攻撃隊がそのすぐ後から城内に進入した。彼らはこのパラーラ城の隘路や谷を通って西北の方面から殺到した。ハーティーは軽装で脱出した。ドースト・ベグはここでもよい働きをした。褒賞 (jüldü) はドースト・ベグの名に対して行なわれた。

その間，私はパラーラ城に入り，タータールの居館に下馬した。私が攻撃の許可を与えた際，私と共に留まるようにと決められていた者たちの内の若干の者が〔勝手に〕攻撃に参加していた。この行為の罰として，それらの者たちの内のアミーン・ムハンマド・タルハン・アルグン Amīn Muḥammad Tarkhān Arghun とカラチャ Qaracha をオルドゥに向け，あてもない砂漠・荒野を通っておもむかせた。彼らにはサロパーという名のグジュール人を道案内人としてつけた。

翌朝〔３月16日〕，私は西北の谷を通って行って畑の所に下馬した。ワリー・ハザーナチに若干の若党たちを加えオルドゥに向け派遣した。

15日木曜日〔3月17日〕，私はスーハーン河畔にあるアンダラーバ Andarāba
231a に下馬した。(231a) このアンダラーバ城は古くからマリク・ハストの父親に所属していたという。ハーティー・カカルがハストの父親を殺した後荒廃した。当時も荒廃したままであった。この日の就寝の礼拝の時刻に，先にカルダ・カハールで別れてきたオルドゥの人びとが到着して合流した。ハーティーは先にタータールを制した時，パルバト Parbat という名のその親族を甲冑をつけた馬と献上品と共に私に向け派遣していた。彼は私に会えず，後方におくれていたオルドゥの人びとの所におもむき，私の親族の者たちと共に到着して献上品を差し出して私の前に伺候した。ランガル・ハーンも若干の重要事のために，ビフラから，後方におくれていた私の親族と共に到着した。彼がそれらの重要事を片付けると，私は彼を若干のその土地の者たちと共にビフラに帰らせた。

私は再び出発して，スーハーン川を渡り，1つの岡の上に下馬した。私はハーティーの親族のパルバトに誉れの長衣を持たせ，ハーティーに対して心のこもった諸命令を書き記し，ムハンマド・アリー・ジャング・ジャングの家臣を派遣した。バーバー・ドースト Bābā Dūst とハラーヒル Halāhil をはじめとするフマーユーンの若干の家臣たちが，私が先にフマーユーンに与えていたニーラーブとカルルク・ハザーラ Qarluq Hazāra〔232a 参照〕のダルガ職のために来ていた。彼らはサンガル・カルルク Sangar Qarluq とミールザー・マルヴィー・カルルク Mīrzā Malwī Qarluq をはじめとする30～40人ほどのカルルクの有力者たちを連れて来た。彼らは1頭の甲冑をつけた馬を献上して私の前に伺候した。ディラザーク・アフガーン族の軍勢も到着した。

翌朝〔3月19日〕，私はそこを発って2シャルイー進んで下馬した。ある高
231b みに登ってオルドゥを査閲し，(231b)「オルドゥのらくだの数を数えよ」と命じた。570頭いた。

私はそれまでに甘松 (sunbul) の木の事は耳にしていた。私たちはこの宿営地でそれを見かけた。この山の麓には甘松の木はやや少い。ちらほらと見かけるのみである。より先のヒンドゥースターンの山麓には甘松の木が多く，また大きい。これについてはヒンドゥースターンの動植物について述べる際に記述するつもりである。

太鼓を鳴らす時刻にこの宿営地を発ち，朝食時にサングダキ峠の麓に下馬し，

正午の礼拝時にそこを発ち，峠と流れを渡り，１つの高みに下馬した。夜半，そこを発ち，私たちが先にビフラにおもむいた際に渡った渡し場を見に出かけた。そこに１艘の大量の穀物を積んだいかだが泥の中にはまっていた。持主がどんなにしても動かせなかった。私はこの穀物を奪って，私たちと一緒にいた者たちに分配した。まことにタイミングのよい穀物であった。

正午近く，私たちはカーブル川とスィンド川の合流点より下流，古ニーラーブ Kuhna Nīlāb より上流の，２つの川の間の地点に下馬した。ニーラーブから６艘の舟を持ってこさせ，右翼・左翼・中軍に分配した。皆，懸命に渡河に従事した。私たちが到着した月曜日から月曜日の夜，火曜日，水曜日に至るまで渡河が続いた。木曜日も少数の者たちが渡河した。私は先にパルバトという名のハーティーの家臣を，アンダラーバ近郊から，ムハンマド・アリー・
232a (232a) ジャング・ジャングの家臣をつけて，ハーティーのもとへと派遣していた。彼が河畔に到着して，ハーティーからの１頭の甲冑つきの馬を献上して私の前に伺候した。

ムハンマド・アリー・ジャング・ジャングはビフラに留まりたいという希望を持っていた。しかしビフラはすでにヒンドゥー・ベグに恵与されていた。そのため，ビフラとスィンド川の間にあるカルルク・ハザーラ，ハーティー，ギヤース・ワール Ghiyāth-wāl，キーブ Kīb といった諸地方がアリー・ジャング・ジャングに恵与された。臣従するために首をたれた者たちは臣従させるがよい。しかしどこであれある地方が首をたれないのであるならば，

誰であれ首をたれぬ者があれば，その者を拒み，

打ち，奪い，服従させるべし。

この諸地方を恵与した後，私はムハンマド・アリー・ジャング・ジャングに，私個人の持物であった黒のヴェルヴェットの帽子とカルマク式の鉄を打ちつけた甲冑を与えた。〔この部分とその数行下の部分，ハイダラーバード本には混乱が見られるが，イルミンスキーの活字本を参考にして，テキストを修正して訳出した〕。纛も恵与された。私はハーティーの親族にも出発の許可を与え，ハーティーに，刀，衣服一式，心のこもった手紙をおくった。

木曜日〔３月24日〕，太陽が登ると，私は河畔から出発した。私はこの日マージューンを口にした。マージューンによって夢心地でいる時に，私はすばらしい花園の景色を楽しんだ。黄と赤の花が咲きみだれ，また所々では赤い花の

みが一面に花開いていた。またある所には，まるでまき散らしたかのように黄と赤の花がいりみだれて咲いていた。私たちは宿営地に近い１つの高みの上に
232b 座って花園の眺めを（232b）楽しんだ。まるで設計して造ったかのように，この丘の下には，ある所では黄色の，ある所では赤色の花が整然と六角形を為して咲いていた。両側には花がやや少なかった。眼の及ぶ限り，このような花園であった。プルシャーワル近郊では，春，すばらしい花園ができる。

翌早朝〔３月25日〕，私たちはその宿営地を発った。途中で，河畔から１頭のライオンがほえながら出現した。我々の馬は，そのひと声を聞くと，もうどうにもならなくなって，あらゆる方向へ人を乗せたまま走り，谷や窪地に脱出した。ライオンはもどって，また森に入った。私は「水牛を連れて来て森に置き，ライオンをおびき出そう」と命じた。ライオンが再びほえながら出てきた。あらゆる方角から矢が放たれた。私も矢を射た。歩兵のハールヴィー Khālwī が短槍で突き抜くと，ライオンは槍の頭部を噛みくだいた。ライオンは１度に多数の矢を受け，茂みに身をかくして立っていた。バーバー・ヤサーウルが刀を抜いて近づいた。ライオンが攻撃して来るとその頭部を切った。ついでアリー・シースターニー ʻAlī Sīstānī が腰の所を切った。ライオンは川に身を投じた。皆が水中で殺した。水からひき上げてその皮をはぐよう命じた。

翌朝〔３月26日〕，私たちは出発してベグラームに到着し，クーラ・カトリー〔145b-146a 参照〕を見物した。庵（いおり）のような，かなり狭く暗い小さな堂屋である。門を入って２～３歩下におりると，伏して進まねばならない。ろうそく無しでは入れない。この堂屋のまわりや近くには，人びとが切ったり剃ったり
233a した髪の毛やひげが無限にひろがっている。このクーラ・（233a）カトリーの周辺には，イスラム学院とか寺院の僧房のような沢山の庵がある。私は，カーブルに最初に来た年，コハト，バヌー，ダシュトを攻撃した際，ベグラームで巨木を見物したが，クーラ・カトリーを見られなかった事を嘆いていた。しかしさほど嘆くに値するほどの場所でもなかったように思われる。

この日，私の最高の鷹（shahbaz）が＜p. 299 いなくなった＞。その鷹はシャイヒム・ミーリ・シカール Shaykhım mīr-i shikār〔ミーリ・シカールは「狩猟頭」〕がめんどうを見ていた。１～２度，その羽毛が抜けかわっていた。この鷹はまことにうまく鳥を捕らえたので，私のようなあまりその気の無い者をすら，鳥をとるのが上手な人間にと仕立てあげていた。

私はマリク・ブー・ハーン Malik Bū Khān，マリク・ムーサー Malik Mūsā をはじめとするディラザーク・アフガーン族の首長たち6名に，それぞれ銀100ミスカール，衣服1着，雄牛3頭，水牛1頭ずつを，ヒンドゥスターンで獲得した献上品の中から与え，その他の者たちにも応分の現金，布片，牝牛，水牛を恵与した。

私たちがアリー・マスジド 'Alī Masjid に下馬した時，マールーフ Ma'rūf という名のディラザークのヤークーブ・ハイルに属する者が<p. 299 若干の穀物と>10頭の羊，2ハルワールの米，7つの大きなチーズを持って来て献上した。

私はアリー・マスジドからヤダ・ビル Yada Bir に下馬した。ヤダ・ビルから正午の礼拝時にジューイ・シャーヒー Jū-yi Shāhī に着いて下馬した。この日，ドースト・ベグは燃えるような高熱に襲われた。

翌早朝〔3月29日〕，ジューイ・シャーヒーを発って，バーギ・ワファー Bāgh-i Wafā' で昼食をとり，正午の礼拝時にバーギ・ワファーから出立した。ガンダマク Gandamak のスィヤーハーブ Siyāh-āb を渡り，おそく夕べの礼拝時に畑の所で馬に食(は)ませ，1～2ガリー〔1 garī は「24分」〕後に出発した。
233b スルハーブ Surkh-āb を渡り，(233b) カルク Kark に下馬して，そこで眠った。

曙光の現われるより前にカルクを発ち，クラトゥー〔132a 参照〕に行く道が分岐している所から，私は5～6人と共に，クラトゥーに造った庭園を見物するために出かけた。ハリーファとシャー・ハサン・ベグ，それにその他の者たちはそのまま進んで，クルク・サーイで私の到着を待たせる事にした。私がクラトゥーに到着すると，シャー・ベグ・アルグンのクズル Qızıl という名のトゥワチが，シャー・ベグがカーハーン Kāhān を奪取し，略奪して引返したという情報をもたらした。誰も前方へと私たちの到着の事を知らせてはならぬという命令が出された。

正午の礼拝時，私たちはカーブルに到着した。私たちがクトゥルク・カダムの橋の所に着くまで誰もその事に気づかなかった。その後，フマーユーンとカームラーン Kāmrān がそれを知ったが，乗馬するだけの時間が無く，小姓たちにかつがれて，町の城門 (shahr darwāza) と内城の城門 (ark darwāzası) の中間地点まで来て私の前に伺候した。午後の礼拝時，カースィム・ベグと

カーブルのカーズィー，それにカーブルに残っていた従臣や貴人たちが来て私の前に伺候した。

ラビーゥル・アーヒル月1日金曜日〔1519年4月2日〕，午後の礼拝時に，ワイン・パーティーが開かれた。私はシャー・ハサンに私個人の衣服一式を恵与した。

土曜日〔4月3日〕早朝，私たちは舟に乗って，朝酒（ṣabūhī）を飲んだ。この席でヌール・ベグ Nūr Beg がウード（'ūd）を演奏した。当時彼はまだ回心していなかった。正午の礼拝時，私は舟をおりて，ギュルギネ〔128a-128b参照〕と山の間にある庭園を見物し，午後の礼拝時，「すみれの園」Bāgh-i binafsha に着いてまた飲んだ。夕べの礼拝時，ギュルギネ側から城壁を出て，内城に入った。

5日火曜日〔4月6日〕前夜，道中で高熱に犯されていたドースト・ベグが
234a （234a）神の御許にめされた。私たちは深い悲しみと苦しみを味わった。ドースト・ベグの棺はガズニーに運ばれ，スルターンの園の門の前に置かれた。

ドースト・ベグはまことにすばらしい若党（イギト）であった。ベグとなってもなお昇進を続けていた。ベグの位につく以前は，近習（イチュキ）時代に何度もすばらしい働きをした。その内の1度は，アンディジャーンから1ユガチのラバーティ・ザウラクでスルターン・アフマド・タンバルが夜襲をかけて来た時〔106b-107b 参照〕，私は10～15名の者たちと共に進んで敵を破って退却させ，その中軍の所に到達した。その時タンバルは100人ほどの者たちと立っていた。私の側は3人が残っていた。私をいれると4名であった。その3人の内の1人がドースティ・ナースィル〔「ナースィルの子ドースト」〕であった。別の1人はミールザー・クリー・キュケルダシュ，もう1人はカリームダードであった。

私は鎖かたびらのみを身に着けていた。タンバルはもう1人の男と，隊列の前に，まるで門のように立っていた。私はタンバルと相対した。私は1本の矢をタンバルの冑（かぶと）に命中させた。さらにもう1本の矢で，その楯を留め物を貫いて射抜いた。敵は1本の矢を私の脚に貫通させた。タンバルは私の頭を切りつけた。私は頭に冑の下につける帽子をつけていた。不思議な事に，私の帽子の糸1本も切断されなかったのに，私は頭に大傷を負った。その上，誰も助けに来なかった。私と共に誰ひとり残っていなかった。やむなく私はたずなをめぐらした。私の後方にドースト・ベグがいた。タンバルは，私の所を過ぎると彼

を攻撃した。

234b さらに私たちがアフスィー（234b）で脱出した際〔112b 参照〕，ドースト・ベグは稚児バーキー Bāqī ḥīz と刀を交えた。バーキーは稚児（ḥīz）と呼ばれてはいたが，強力な刀の使い手であった。私がアフスィーをあとにした際，私が全員で8人になってしまった時には〔114a 参照〕，ドースト・ベグは私と共にいた。敵は2人を落馬させた後，ドースト・ベグを落馬させた。

ベグの位にあった時代，ドースト・ベグは，〔1512年〕セヴュンチェク・ハーン Sewünchäk Khān が諸スルターンたちと共に来て，タシュケンドにアフマド・カースィムを包囲した時，敵の囲みを打ち破ってタシュケンドに入城した。籠城中にも，よく死力を尽くした。アフマド・カースィムはこの勇士に何も告げず城を捨てて出城した。その際も，彼はハーンたちやスルターンたちを打ち破って，タシュケンドから見事に脱出した。

また後に〔1515年〕，シーリーム・タガーイーとマズィードおよびその仲間の者たちが反乱を起こした時，ドースト・ベグは200～300名と共にガズニーから急行して来た。その時，この反乱者のモグールらは300～400名のすぐれた若党たちをドースト・ベグの前へと向かわせた。シルーカーン Shirūkān 近郊で，ドースト・ベグはその前へ進んできた敵をよく打ち破り，多くの者を落馬させ，多数の首を切って持って来た。

〔1519年〕バジャウル城でも，ドースト・ベグの部下たちが他の者たちより先に到達して城壁の上に出た〔218a 参照〕。パラーラでも〔230a-230b 参照〕，ドースト・ベグは進んでハーティーを攻撃して逃亡させ，パラーラが征服された。

ドースト・ベグの死後，私は彼の領地をその弟のミーリーム・ナースィルに恵与した。

ラビーゥル・アーヒル月8日金曜日〔4月9日〕，私はカーブル城からチャール・バーグに出かけた。

12日火曜日〔4月13日〕，スルターン・フサイン・ミールザーの長女で，ムハンマド・スルターン・ミールザーの母であるスルターヌム・ベギム Sulṭānım Begim がカーブルに来られた。この間，スルターヌムはホーラズムにおられ
235a たが，ユル・パルス（235a）・スルターン Yılı Pars Sulṭān の弟のイセン・クリー・スルターン Isän Qulī Sulṭān がスルターヌムの娘をめとっていた。そ

の〔カーブルでの〕滞在地としてバーギ・ヒルワト Bāgh-i Khilwat が割当てられた。彼女がその庭園に下馬された後，私は出かけてお会いした。彼女は私より年上であられたので，尊敬と敬意を表わすために私は膝まづいた。あのお方も膝まづかれた。共に進んで，中間の所で挨拶を交した。以後もあのお方は常にこのやり方を守っておられた。

17日日曜日〔4月18日〕，私は，長期間にわたって獄に投じてあった恩知らずのバーバー・シャイフの罪をゆるし，獄から釈放して，誉れの長衣をさずけた。

19日火曜日〔4月20日〕，正午になると私たちはホージャ・セヤーラーン方面〔136b-137a 参照〕へ馬で出かけた。この日，私は断食をしていた。ユーヌス・アリーと他の者たちは驚いて「火曜日と散策と断食。これは驚いた事だ」と云った。私はビフザーディー Bihzādī に着くと，そこのカーズィーの館に下馬した。その夜，宴会をしようという事になった。カーズィーが「私の館ではかつてそのような事をした事がありません。しかしお命じになるのは王様です」と私に云った。宴会のための諸物は調えられていたが，カーズィーの心を満足させるため，飲む事はやめにした。

水曜日〔4月21日〕，私はホージャ・セヤーラーンへ出かけた。

21日木曜日〔4月22日〕，私たちは，庭園を造営した山の山鼻の所に大きな円型の台座を置いた。

金曜日〔4月23日〕，私たちは橋からいかだに乗った。私たちが狩人たちの家々の向かいに着くと，狩人たちは1羽のダング（dang）と呼ばれる鳥を捕えていたらしく，それを持って来た。私はそれ以前にダングを見た事が
235b (735b) 無かった。不思議な格好をした鳥である。その詳細についてはヒンドゥスターンの動物について述べる箇所で記述する予定である〔280a 参照〕。

23日土曜日〔4月24日〕，私は先の円型の台座の上にすずかけ（チナール）の若木としゅろ（タール）の若木をまぜこぜに植えた。正午の礼拝時，酒宴となった。

翌早朝〔4月25日〕，私たちはこの新しい台座の上で朝酒を飲んだ。正午すぎに出発して，カーブルに向った。ホージャ・ハサン Khwāja Ḥasan に，すっかり酔っぱらって到着し，少しの間眠った。ホージャ・ハサンを発って，夜半，チャール・バーグに到着した。ホージャ・ハサンでは，アブドゥッラーが酔っぱらって長衣を付けたまま川にとび込んだ。私たちが出発した時，夜がふ

けると，彼は寒さで氷りついて進む事ができず，その夜はクトゥルク・ホージャの領地（tiyūl）にいて，翌朝，昨夜のでたらめぶりを想い出し，後悔しながらやって来た。私は「いますぐ，もう飲まぬというような後悔ができるのならそのようにせよ。もしできぬのなら，いますぐ，私の宴席以外では決して飲まぬ決心をせよ」と云った。彼はそうしますと答えた。彼は数カ月間はこのいましめを守っていた。しかしそれ以上は守る事ができなかった。

25日月曜日〔4月26日〕，私がビフラとその諸地方に平和を期待して大して何の備えもなく置いていたヒンドゥー・ベグが到着した。アフガーン族やヒンドゥースターン人たちは和平・和睦の話には耳をかさず，私たちには眼もくれず，また私たちの云う事を聴き入れようとはせず，私たちがカーブルへの帰還の途につくとただちにその大勢が集まって，ビフラのヒンドゥー・ベグに向け進軍して来たのであった。その土地の人びともアフガーンの側へついた。ヒンドゥー・ベグはビフラに留まり得ず，フーシャーブに来て，ディーンコト地方
236a を経てニーラーブに至り，（236a）カーブルに到着したのである。スィクトゥーの息子のディーワ・ヒンドゥーともう1人のヒンドゥー人がビフラから捕えられて連れて来られていた。彼らはそれぞれかなりの物品を身代金として納めて自由の身となった。私はこのヒンドゥー人たちに馬と衣服一式を恵与して出発させた。

29日金曜日〔4月30日〕，私の身体に熱が出た。私は放血を行なった。1日おきに，また時には2日3日を過ぎると熱が出た。いつも発熱すると，汗をかくまで熱がさがらなかった。10日ないし12日後に，ムッラー・ホージャカ Mullā Khwājaka が水仙と混ぜたワインをくれた。私は1～2度それを飲んだ。しかし効果は無かった。

ジュマーダーゥル・アッヴァル月15日日曜日〔5月15日〕，ホージャ・ムハンマド・アリーがハースト Khwāst から到着した。彼は1頭の鞍付きの馬を献上し，喜捨（taṣadduq）のために現金をも持参した。ムハンマド・シャリーフ・ムナッジム Muḥammad Sharīf munajjim〔ムナッジムは「占星術師，天文学者」〕とハーストのミールザーダ（mīrzāda）たちもホージャ・ムハンマド・アリーと共に私の前に伺候した。

翌月曜日〔5月16日〕，ムッラー・カビール Mullā Kabīr がカーシュガルから到着した。彼はアンディジャーン地方からカーシュガルを通ってカーブル

へ到着したのである。

23日月曜日〔5月23日〕，マリク・シャー・マンスール・ユースフ・ザイが6～7人のユースフ・ザイ族の有力者たちと共にサワードから到着し，私の前に伺候した。

ジュマーダーゥル・アーヒル月1日月曜日〔5月31日〕，私はシャー・マンスールをはじめとするユースフ・ザイ・アフガーン族の有力者たちに誉れの長衣を身につけさせた。シャー・マンスールには，下着・ボタンつきの絹の長衣を，さらに1人にはチョッキつきの絹の長衣を，さらに6人には絹の長衣をつけさせ，出発の許可を与えた。次の如くとり決められた：アブーハ Abūha より上(かみ)はサワード領に含めない。全ての農民たちを（236b）その領内から出させる。さらにバジャウルとサワードにいるアフガーン人たちは6,000ハルワールの穀物を国庫（dīwān）に納める事。

236b

3日水曜日〔6月2日〕，私はジャッラーブ（jallāb）〔「バラ水」〕を飲んだ。さらに2日間，私はジャッラーブを飲んだ。

6日土曜日〔6月5日〕，私は下剤（dārū-yi kār）を飲んだ。

8日月曜日〔6月7日〕，ハリーファの長女に対して，カースィム・ベグの下の息子ハムザの結納金（sachıgh）が納められた。1,000シャールヒー銀貨であった。1頭の鞍つきの馬も納められた。

火曜日〔6月8日〕，シャー・ベグの子シャー・ハサン Shāh Ḥasan-i Shāh Beg がワインの会に出席するため出かける許可を求めた。彼はホージャ・ムハンマド・アリーをはじめとする若干のベグたちと近習たちをその家に連れて行った。ユーヌス・アリーとガダーイー・タガーイーが私の前にいた。私は〔病後のため〕なおワインについては禁欲していた。私は「私ひとりが正気で座っていて，他の皆がワインを楽しんでいるとか，私がまったくしらふで立っていて，一部の者のみがワインに酔いしれているというような事にはならぬだろう。来なさい。私の前で飲みなさい。私もしばらく楽しむつもりだ。正気の者と酔った者とが一緒にいるとどんなになるかを私は知りたいのだ」と云った。

チャール・バーグの門の所に建てた絵画館（ṣūrat-khāna）の東南の方角に当る所に1つのやや小さな白いテントが建てられていた。私は時々そこに滞在していた。そこで宴会となった。おくれて道化のギヤース Ghiyāth maskhara

も来た。私は冗談に何度も彼を集まりの外に出すように命じた。彼は何度もしつこくやって来て，結局その道化ぶりによって集まりの中に加わる事ができた。私たちはタルディ・ムハンマド・キプチャク Tardı Muḥammad Qipchaq とムッラー・キターブダール Mullā kitābdār をも呼んだ。私はシャー・ハサン
237a と（237a）彼の屋敷で宴会をしている人びとに対し次の四行詩を即興で作って送った。

宴（うたげ）なる友々はあたかも花園の華，
否！その程度のものに非ず，宴なるかの人びとはわれらのひな形。
その集いに正気なる人びともしあらば，
有難きかな！この集い神を忘れたるものに非ず。

私はこの詩を小姓のイブラーヒーム Ibrāhīm chuhra を通じて送った。〔正午と夕べの〕2つの礼拝の間の時刻〔午後〕に近く，宴に出席した人びとは酩酊して散っていった。

この病気の間，私は輿にかつがれて移動していた。数日前に，私は混合ワイン（mamzūj chaghır）を飲んでいた。しかしそれが効果をあらわさなかったので，2度と飲まないでいた。回復期の末期には，私はターラール園（Tālār chamanı）の西南のりんごの木の下で宴会を開き，混合ワインを飲んだ。

12日金曜日〔6月11日〕，私がバジャウルに補強軍として置いていたアフマド・ベグとムハンマド・ドラウダイが到着した。

17日水曜日〔6月16日〕，ハイダル・タクの庭園で，テングリ・ベルディが若干のベグたちや若党たちのために宴席を設けた。私はそれに出席して飲んだ。私はおそく就寝時の礼拝の時刻にそこを発ち，私の大きな白いテントに移ってまた飲んだ。

25日木曜日〔6月24日〕，ムッラー・マフムード Mullā Maḥmūd の所でコーランの抜粋が読誦される事に決まった。

月末火曜日〔6月28日〕，シャー・シュジャー・アルグンのもとからアブー・ムスリム・キュケルダシュ Abū Muslim Kökäldash が使者として到着し，1頭の俊馬（トブチヤク）を献上した。同じ日，ユースフ・アリー・リカーブダールがすずかけの園にある池を泳いでまわり，100回まわった。彼に衣服一式，鞍つきの馬，現金が賜与された。

237b **ラジャブ月8日水曜日**〔7月6日〕，私はシャー・ハサンの家に（237b）お

もむいて飲んだ。ほとんどのベグたちや近習たちがいた。

11日土曜日〔7月9日〕，宴会があった。午後と夕べの礼拝の間の時間に，私は大きな鳩小屋の屋根の上に出て飲んだ。かなりおそい時間に，私は数人の騎馬の者がデヒ・アフガーンの方面からカーブル市内の方面へと道を進んで行くのを認めた。それはミールザー・ハーンのもとから使者として来たダルヴィシュ・ムハンマド・サールバーン Darwish Muḥammad sārbān〔サールバーンは「らくだ使い」〕であったらしい。私は屋根の上から叫んで，「慣習・儀式(törä wä toqa) にとらわれて使者らしくふるまうのをやめろ！しかめつらしい事はやめにして，来い来い！」と云った。ダルヴィシュ・ムハンマドは来て宴席に座をしめた。当時彼は身を持していたので，飲まなかった。私は夜が明けるまでここで飲んだ。翌朝，私が宮廷(デイーワーン)に坐した時，彼は慣例・規約にのっとってやって来て，ミールザー・ハーンが送ってよこした献上品を差出した。

先年，私たちは苦労に苦労して，約束を与える事は何とか回避して，かの方面〔ヒンドゥークシュの北の地域〕のアイマク諸部族を移動させてカーブルへと連れて来ていた。しかしカーブルは狭い土地であった。アイマク諸部やトルコ諸部の家畜のために余裕をもって冬営地や夏営地を与える事ができなかった。遊牧民たちをその望むようにさせるとすれば，彼らは決してカーブルを望まなかった。彼らはカースィム・ベグに仕え，かの方面へと移動するために彼を仲介者にしたてた。カースィム・ベグは大いに力説した。そして結局，アイマク諸部に，クンドゥズ，バグラーン方面に移動する許可が与えられた。

ハーフィズ・ハバルカーティブ Ḥāfiẓ khabar-kātib〔ハバルカーティブは「情報記録係」〕の兄がサマルカンドから来ていた。この時，私は彼にサマルカンドへの退去の許可を与え，〔ウズベクの〕プラド・スルターン Pulad Sulṭān に私の詩集(デイーワーン)をおくった。詩集の裏に，私は次の断片詩を書きこんだ。

238a (238a)おお東風よ！もしそなたがかの糸杉の如き乙女の秘室に入ったならばかの人の心にこの私の別離の痛みをどうか想い出させておくれ。

かの人は，バーブルを憐れんだり，バーブルの事を想ったりしてはくれなかった。

しかし私は望む，

神がかの鋼鉄の如き心に憐愍の情をおこされたまわん事を。

17日金曜日〔7月15日〕，ムハンマド・ザマーン・ミールザーのもとからシ

ャー・マズィード・キュケルタシュが救貧税 (taṣadduq)・献上品の馬を持参して私の前に伺候した。

この日，私はシャー・ベグの使者のアブー・ムスリム・キュケルダシュに栄誉の長衣を身につけさせて出発させた。同日，ホージャ・ムハンマド・アリーとテングリ・ベルディにも，それぞれの領地であるハーストとアンダラーブに帰る許可を与えた。

23日木曜日〔7月21日〕，私がカチャコトとカルルクの近郊に置いてその地方に対する責任を持たせていたムハンマド・アリー・ジャング・ジャング，ミールザーイ・マルヴィー・カルルク Mīrzā-yi Malwī Qarluq の子シャー・ハサン Shāh Ḥasan，それにハーティーの部下が一緒に到着した。同じ日，サマルカンドへ家族を連れに行っていたムッラー・アリー・ハーン Mullā ʻAlī Khān が到着して私の前に伺候した。

アブドゥッ・ラフマーニー・アフガーン族(ʻAbd al-Raḥmānī Afghān) はギャルディーズの辺境地帯に居住していた。彼らは租税 (māl) をスムーズに納入せず，その行動も満足できるものではなかった。彼らは往来する隊商の人びとにも危害を加えていた。

ラジャブ月29日水曜日〔7月27日〕，私はこのアフガーン人らを討つために出発した。私たちはタンギ・ヴァグチャーン Tang-i Waghchān 近郊で下馬して食事をとり，おそく正午の礼拝時にそこを発った。私たちは，その夜，道に迷い，パーンジャーブ・シャフナ Pānjāb Shaḥna の東南の岡や平原で，まことに多く難渋 (238b) した。しばらくして私たちは道に<p. 306 たどりついた。私はチェシュメイ・トゥーラ Cheshmä-yi Tūra〔又は Chesmä-yi Parra〕の峠を越え，ギャルディーズ方面に面する山鼻から，〔7月28日〕最初の礼拝の時刻 (farḍ waqtı) に，平地に出て攻撃隊を派遣した。

238b

1隊の兵士らは，ギャルディーズの東南にあるカルマーシュ山 (Karmāsh taghı) 方面へ攻撃におもむいた。その後方に，私はホスロー，ミールザー・クリー，サイイド・アリーに率いられた中軍の左翼(オング・コル)の者たちを派遣した。それより多数の兵士らはギャルディーズの東方の谷の上流の方へと攻撃におもむいた。その後方に，私はサイイド・カースィム・イシク・アーガー，ミール・シャー・カウチン，カイヤーム Qayyām，ヒンドゥー・ベグ，クトゥルク・カダム，フサインに率いられた者たちを派遣した。兵士らの大半が谷の上流の方へ

攻撃におもむいていたために，私も，その者たちを見送った後，サイイド・カースィムらの後方を進んだ。

この谷の上流の住民の所までは距離があったようである。谷の上流に向った兵士らの馬が動かなくなった。たいした物も，兵士らの手中に入らなかった。40～50人の徒歩のアフガーン人が平原に姿を現わした。軍の後方に進んでいた者たちがこのアフガーン人の方向へと進み，私の所へ人を急派してきた。私も急いで進んだ。私がそこに着く前に，フサイン・ハサン Ḥusayn Ḥasan は無謀・無分別にもひとりで馬をしかけた。彼がアフガーン人らのただ中に突入して，刀をふるっていた時，敵は彼の馬を射て転倒させた。彼が立上がると敵はすぐにその足を切って倒した。四方八方から短刀を差しこみ，さんざんに切りきざんだ。この情況を〔味方の〕若党たちは立ったままで見ており，助けようとしなかった。

この知らせが届くと，私はただちにダガーイー・タガーイー，パーヤンダ・
239a ムハンマド・(239a)・カプラン Pāyanda Muḥammad qaplan〔カプランは「虎」〕，アブル・ハサン・コルチ，ムーミン・アテケ Mu'min atäkä をはじめとする近習・若党たちを全速力で急行させ，私自身も急いで進んだ。まっ先に，ムーミン・アテケが1人のアフガーン人を槍で倒し，その首を取って持って来た。アブル・ハサン・コルチも甲冑をつけずによく進み，アフガーン人らの前に立ちふさがり，馬をしかけて1人のアフガーン人をさんざんに切って倒し，その首を取って持参した。彼自身，3カ所に傷を負った。その馬も1カ所に傷を負った。パーヤンダ・ムハンマド・カプランもよく進み，1人のアフガーン人をさんざんに切って捕らえ，その首を取って来た。アブル・ハサンとパーヤンダ・ムハンマド・カプランの若党ぶりはこれ以前にもよく知られてはいたが，この進軍の際，その働きぶりをさらに一層，皆に印象づけた。この40～50人のアフガーン人たちは全員，矢か刀で倒されて粉砕された。これらのアフガーン人をほふった後，私はとある畑に下馬して，これらのアフガーン人らの首で首の塔をつくるように命じた。

道を進んでいた時，フサインと共にいたベグたちが到着した。私は厳しく怒りをこめて「これだけの数の者たちがただ傍観して，わずかの徒歩のアフガーン人らに，まっ平(たいら)な土地で，あれほどにすぐれた若党を討たせてしまったのだ。お前たちから地位・身分を剝奪し，領地（pergene wä wilāyat）を取りあげ，

お前たちのひげをそりおとしてお前たちを市内にさらし者にさせねばならぬ。誰であれあのような若党をあの程度の敵に殺させるならば，また誰であれあの
239b ようにまっ平(たいら)な土地で手をこまねいて傍観しているならば，(239b) その報いを受けるのは当然である事を周知させるためである」と述べた。

カルマーシュ方面へおもむいていた兵士らが羊や戦利品を取って持って来た。バーバー・カシュカ・モグール Bābā Qashqa Moghūl もカルマーシュ方面におもむいていた兵士らと共に行った。バーバー・カシュカに1人のアフガーン人が刀で打ちかかると，彼はよくもちこたえて，矢をつがえて射て倒した。

翌朝〔7月29日〕，私たちは出発して，カーブル方面に向った。私はムハンマド・バフシー，アブドゥル・アズィーズ・ミーラーフール 'Abd al-'Azīz mīr-ākhūr〔ミーラーフールは「主馬頭」〕，ミール・フルド・ブカーウル Mīr Khurd bukāwul に「チェシメイ・トゥーラ〔峠〕に留まって，その地の住民から雉子(きじ)を徴収せよ」と命じた。

私自身は数名と共に，私がこれまでにまだ見た事の無いメイダーニ・ルスタム Maydān-i Rustam〔メイダーンは「平原」〕経由の道をとって進んだ。メイダーニ・ルスタムは山々の間に位置していた。山の端にかなり近く，さほど魅力的な土地ではなかった。2つの山の間にかなり広い谷があり，その南側の丘の麓にはやや小さな泉がある。そこにまことに巨大なポプラの木々が成育している。

このメイダーニ・ルスタムからギャルディーズ方面へ出ている道の傍らにもいくつかの泉がある。そこには木々も沢山はえている。しかしそれらはかなり小さな木々である。谷はやや狭いが，これらのやや小さな木々の下は，真緑の (köp-kök) すばらしい小牧地である。小さいが魅力的な谷である。

私はメイダーニ・ルスタムの南側にある山に登った。カルマーシュの山々とバンガシュの山々が足下に見渡たされた。カルマーシュの山々の向う側には，
240a 雨季の雨雲が幾層にも連なっているのが見られた。(240a) 雨季でない諸地方の方面には全く雲は見えなかった。正午の礼拝時に，私はフーニーHūnī に到着して下馬した。

翌日〔7月30日〕，私はムハンマド・アーガー村 (Muḥammad Āghā kenti) の近郊に下馬して，マージューンをこころみた。魚を取るための毒を水中に流し，かなりの魚を取った。

シャーバーン月3日日曜日〔7月31日〕，私はカーブルに帰着した。

5日火曜日〔8月2日〕，私たちはダルヴィシュ・ムハンマド・ファズリー Darwish Muḥammad Faḍlī とホスローの家臣を呼んで，フサインが殺された際〔238b 参照〕における彼らの行動の過ちについて詳しく査問し，その地位・身分を剝奪した。正午の礼拝時，すずかけの木蔭で酒宴が開かれた。バーバー・カシュカ・モグールに栄誉の長衣が恵与された。

8日金曜日〔8月5日〕，ミールザー・ハーンの所へ行っていたケペが到着した。

木曜日〔8月11日〕，午後の礼拝時，私はホージャ・セヤーラーン，バーラーン，ダーマニ・クーフの見物に出発した。就寝時の礼拝の時刻に，バーバー・ハトゥン Bābā Khatun に下馬した。

翌朝〔8月12日〕，私たちはイスターリーフに着いて下馬した。その日，私はマージューンを飲んだ。

土曜日〔8月13日〕，イスターリーフで酒宴が開かれた。

翌早朝〔8月14日〕，私たちがイスターリーフを出発して，スィンジドの谷の間を通ってホージャ・セヤーラーンの近くに到達した時，私は1匹の大きな蛇を殺した。その太さは手首ほどもあり，長さは1尋（ひろ）(bir qulach) ほどもあった。この大きな蛇の内部から1匹のより細い蛇が出てきた。おそらくそのほんの少し前にのみこんだものであろう。その肢体は全て完全であった。細い蛇
240b はその大きな蛇よりも少しばかり短い (240b) ようであった。この細い蛇の中から1匹の大きなねずみが出てきた。それも完全な形をしていた。1カ所も溶けくずれている所は無かった。

ホージャ・セヤーラーンに到着して酒宴となった。この日，私はキチュキネ・トゥンカタール Kichkinä tun-qaṭār〔トゥンカタールは「夜廻り」〕を通じて，かの方面〔ヒンドゥークシュの北側〕のベグたちに対し集合地点 (buljār) をも記した次の如き命令を書き送った:「私は出陣する。定められた集合地点に注意して到着されよ！」と。

翌早朝〔8月15日〕，私は出発して，マージューンを飲み，パルワーン川の合流点で，ここの住民のやり方に従って，パルワーン川に魚を取るための毒薬を投じ，多数の魚を取った。ミール・シャー・ベグが料理 (āsh wä āb) を供した。私はここを発って，グル・バハールにおもむいた。夕べの礼拝時の後，

酒宴が開かれた。これらの宴席にはダルヴィシュ・ムハンマド・サールバーンが出席していた。彼は若者で，兵士であったが，ワインは飲もうとしなかった。酒類をいっさいひかえていた。一方，クトゥルク・ホージャ・キュケルダシュは，ずい分前に軍事活動から身をひいてダルヴィシュになっていた。その上，高齢で，そのひげも真白になっていた。それにもかかわらず，彼はいつもこれらの宴席で飲酒の仲間に加わっていた。私はダルヴィシュ・ムハンマドに「クトゥルク・ホージャのひげに対して恥ずかしくないのか！彼はダルヴィシュで，老人で，ひげも白くなっているのにいつもワインを飲んでいる。お前は軍人で若く真黒なひげをしているのに決して飲もうとしない。いったいどういうわけだ？」と云った。飲まぬ者に無理やり飲ませるというのは私の流儀でなかったので，これだけ云って冗談ですませ，酒を無理強いはしなかった。

翌早朝〔8月16日〕，私たちは朝酒を飲んだ。

241a **水曜日**〔8月17日〕，(241a) 私はグル・バハールを発ち，アブーン Abūn の村で下馬して食事をとり，また出発してバーガーティ・フンム Bāghāt-i Ḥumm におもむいて下馬した。正午の礼拝時の後，酒宴となった。

翌朝〔8月18日〕，私たちはそこを発ってホージャ・ハーンド・サーイード Khwāja Khwānd Sa'īd の墓に参拝し，進んで，チーナ城 (Chīna qurghanı) からいかだに乗り込んだ。パンジュヒール川の合流点で，いかだが山の出端(でっぱな)に激突して沈み始めた。いかだをあやつっていたルーフ・ダム，テングリ・クリー Tengri Qulī，ミール・ムハンマド Mīr Muḥammad は山に激突した際に水中に落ちた。ルーフ・ダムとテングリ・クリーは苦労していかだの上にひき上げられた。陶磁製のカップ，スプーン，タンバリンが水中に沈んだ。

ここを過ぎて，サンギ・バリーダ Sang-i Barīda の正面に至った時，いかだが，川の真中にある木の枝にであったか，あるいはダムをつくるために打ち込んであった杭(くい)にであったか，そのどちらかに衝突した。シャー・ベグの子シャー・ハサン Shāh Ḥasan-i Shāh Beg が背中の方へとばされた。彼はミールザー・クリー・キュケルダシュをつかんだまま落ちた。ダルヴィシュ・ムハンマド・サールバーンも水中に落ちた。ミールザー・クリーはうまくとばされた。彼は落ちる時，メロンを手に持って切っていた。彼はその小刀をいかだの上のあし製のマットにつき刺して落ちた。彼はいかだの方に来ずに，長衣のままで泳いで水から出た。私たちはいかだをおりて，その夜はいかだ使いたちの

家でやすんだ。ダルヴィシュ・ムハンマドが，水中に落ちたのと同じ7色のカップを私に献上してくれた。

金曜日〔8月19日〕，私は河畔を発ち，インチュケ Inchkä より下(しも)の，クー
241b ヒ・バッチャ Kūh-i Bachcha の麓で下馬し，私たち自らの手で (241b) 多くの歯ぶらし用の木片 (miswāk) を集めた。私はそこを過ぎて，ホージャ・ヒズリーの人びとの家で食事をすませて出発した。正午の礼拝時，私たちはクトゥルク・ホージャの領地 (tiyūl) のラムガーン村 (Lamghān kenti) に下馬した。クトゥルク・ホージャは急いで整えた品々を供した。私はそれらの相伴にあずかった後，出発して，カーブルに帰着した。

25日月曜日〔8月22日〕，私はダルヴィシュ・ムハンマド・サールバーンに私個人の特別の長衣と鞍つきの馬を恵与し，従士の列に加わらせた (nökärlikkä yükündürüldi)。

27日水曜日〔8月24日〕，私は4～5カ月間も髪を剃っていなかったので，この日，髪を剃った。この日，酒宴が開かれた。

29日金曜日〔8月26日〕，ミール・フルドをヒンダルの後見人(アテケ)に任命した。彼は私に1,000シャールヒー銀貨を祝いの品として納めた。

ラマザーン月5日水曜日〔8月31日〕，テュレク・キュケルダシュ Tüläk Kökäldash のもとからバルラース・ジョキ Barlas Jöki という名の家臣が上奏文を持参して来た。ウズベクの攻撃隊がその近郊に到来したという。テュレクは出陣して戦い勝利した。使者は1人の生きたウズベク人と1つの首を持って来た。

8日土曜日〔9月3日〕の前夜，私はカースィム・ベグの家に出かけて痛飲した。彼は1頭の鞍つきの馬を私のために引いて来た。

日曜日〔9月4日〕の前夜，私はハリーファの家で痛飲した。彼は1頭の鞍つきの馬を私に献上した。

翌朝〔9月4日〕，軍事行動のために呼んでいた〔240b 参照〕ホージャ・ムハンマド・アリーとジャーン・ナスィールがそれぞれの領地から到着した。

242a **12日水曜日**〔9月7日〕，(242a) カームラーンの母方のおじのスルターン・アリー・ミールザー Sulṭān ʻAlī Mīrzā が到着した。彼は，前述の如く，私がハーストからカーブルにおもむいた年に，カーシュガルへ行っていたのであった。

13日木曜日〔9月8日〕，私はユースフ・ザイを討伐する決意を固め，カーブルを発って，デヒ・ヤークーブ川のカーブル側にある牧地に下馬した。出発の際，馬管理係（アフタチ）のバーバー・ジャーン Bābā Jān akhtachı があまり良くない馬を〔私のために〕引いて来た。私は腹をたててその顔面をげんこつでなぐった。私の薬指がつけ根の所で脱臼した。その時はそれほど痛まなかった。宿営地に到着して下馬すると痛みが激しくなった。そのため私はしばらく大変苦しい思いをした。字も書けなかった。しかし結局最後には治った〔245a 参照〕。

旅行中のこの宿営地に，私の母方のおばのダウラト・スルターン・ハーヌムの乳兄弟のクトゥルク・ムハンマド Qutluq Muḥammad という者がカーシュガルのハーヌムのもとから手紙と贈物を持参して来た。

この日，ディラザーク族の首長であるブー・ハーン Bū Khān とムーサー Mūsā が到着し，献上品を持って私の前に伺候した。

16日日曜日〔9月11日〕，クチュ・ベグが来た。

19日水曜日〔9月14日〕，私は出発してブトハーク川 (Butkhāk rūdı) を渡り，いつも下馬する場所に下馬した。その地はこのブトハーク川の河畔にあった。クチュ・ベグの領地であるバーミーヤーン，カーフマルド，グーリーはウズベクに近かったため，私は彼のこの遠征への参加を免除し，私自身が巻いていたターバンと衣服一式を彼に恵与して，ここからその領地に帰る許可を与えた。

21日金曜日〔9月16日〕，私たちはバーダーム・チェシュメ〔132a 参照〕に下馬した。

242b (242b) **翌朝**〔9月17日〕，私たちはバリク・アーブ Barik Āb に下馬した。私自身はクラトゥーを見てから到着した。この宿営地で私は木から蜜を見つけた。私たちは移動を重ねた。

26日水曜日〔9月21日〕，私たちはバーゲ・ワファー〔132a 参照〕に下馬した。

木曜日〔9月22日〕，私はバーグにいた。

金曜日〔9月23日〕，出発して，スルターン・プールを過ぎて下馬した。この日，シャー・ミール・フサインがその領地から到着した。ブー・ハーンとムーサーをはじめとするディラザークの首長たちも，この日，到着した。私はユースフ・ザイを討つためサワードに向かうつもりであった。ディラザークのマ

リクたちは「ハシュナガルには多くの住民がいる。そこには穀物も多い」といって，ハシュナガルに向かう事を主張した。相談の結果，次の如く決定された：ハシュナガルには穀物が豊富であるという話である。それゆえその地のアフガーン人を討って，ハシュナガル城ないしプルシャーワル城を整備し，この穀物の若干を糧食としてそこに置き，シャー・ミール・フサインを1団の若党たちと共にそこに置く事にすると。

この計画を実行するために，私はシャー・ミール・フサインに15日間という期限を定めてその領地に帰らせた。装備を調えて来るためであった。

翌朝〔9月24日〕，私たちは出発して，ジューイ・シャーヒーに到着して下馬した。テングリ・ベルディとスルターン・ムハンマド・ドウラダイが後方からこの宿営地に到着した。ハムザも，この日，クンドゥズから到着した。

月末日曜日〔9月25日〕，私はジューイ・シャーヒーを発って，クルク・アリク Qırq Arıq に（243a）下馬した。私は数人の側近の者たち（makhṣūṣ）と一緒にいかだに乗って来た。私はこの宿営地で祝日の新月〔断食月（サマザーン）明けのシャッワール月の新月〕を見た。ダッライ・ヌールから若干の質のおちるワインがとどけられた。夕べの礼拝の後，酒宴となった。出席したのはムヒッブ・アリー・コルチ，ホージャ・ムハンマド・アリー・キターブダール，シャー・ベグの子シャー・ハサン，スルターン・ムハンマド・サールバーンであった。ダルヴィシュ・ムハンマドは禁酒していた。私は若い頃から酒を飲まぬ者に無理に飲ませる事はしない事にしていた。ダルヴィシュ・ムハンマドはどの宴席にも出ていたが，彼に無理に飲ませる事はなかった。ところがホージャ・ムハンマド・アリーは彼に自由にさせずに，何度も何度も無理強いして飲ませた。

243a

月曜日祝日〔9月26日〕の早朝，私たちは出発した。私は二日酔いを追い払うために，道中，マージューンを服用した。マージューンが効いている時に1つのコロシントが持って来られた。ダルヴィシュ・ムハンマドは，それを見たのは初めてであった。私は「ヒンドゥースターンのかぼちゃ（hinduwāna）だ」と云ってひと切れ切って与えた。彼はよろこんで噛みついた。夜まで，にがさがその口から消えなかった。私がギャルム・チェシュメの岡に下馬して氷を供されていた時，しばらく自分の国にいたランガル・ハーンが到着し，馬と若干の品を献上して私の前に伺候した。私はヤダ・ビルに到着して下馬した。午後の礼拝時，私は数人の側近と共にいかだに乗り，1キョルフほど下流へと

進んでいかだから下りた。

243b **翌朝**〔9月27日〕，私はそこを発ち，ハイバル峠の麓に（243b）下馬した。この日，スルターン・バーヤズィードがニーラーブからバーラ道をとって進んでいた時，私たちの事を知って，私たちの後を追って来て到着し，私に，「アフリーディー・アフガーン族（Afrīdī Afghān）が家族・財産と共にバーラにおります。彼らは沢山の米をうえております。米はみのって，全て獲得できる状態にあります」と上奏した。しかし私たちはハシュナガルにいるユースフ・ザイ・アフガーン族をめざしていたので，それには注意を向けなかった。正午の礼拝時に，ホージャ・ムハンマド・アリーのテントで酒宴が開かれた。この宴会の際，スルターン・バラーヒー Sulṭān Barāhī〔又は<p. 313 Tarāhī>〕を通じて，バジャウルのホージャ・カラーンあてに，手紙を書きおくった。私は手紙（ファルマーン）の欄外に次の詩を書きこんだ。

東風よ！どうかあの麗しき羚羊（かもしか）にやさしく伝えておくれ，

わたしたちが山や荒野をめざしたのは，ひとえにそなたの故であると。

翌早朝〔9月28日〕，私たちはそこを発って，峠をくだり，ハイバルの隘路を通過して，アリー・マスジドに下馬した。正午の礼拝時にそこを発ち，輜重を後に残して，2更時（iki pās）にカーブル川の岸に達し，しばらく眠った。

あけぼの時〔9月29日〕，渡河地点が見つけられて，私は渡河した。物見の者から，「アフガーン人らは気づいて逃げている」という知らせが入った。私たちは進んで，サワード川を渡り，アフガーン人の畑の間に下馬した。そこには云われていた量の半分，否$\frac{1}{4}$程度の穀物しかなかった。ここで穀物が得られ
244a るという期待のもとに立てられたハシュナガル（244a）攻撃の計画は変更された。この進軍を主張したディラザークのマリクたちはこのため恥をかいた。午後の礼拝時，私たちはサワード川のカーブル側に渡って下馬した。

翌朝〔9月30日〕，私はサワード河畔を発ち，カーブル川を渡って下馬した。私は会議に出席するベグたちを召集して相談した結果，スルターン・バーヤズィードが述べたアフリーディー・アフガーン族を討ち，彼らの財物と穀物でプールシャーワル城を強化してそこに人を配置する事に決定された。後方から，ヒンドゥー・ベグ・カウチンとハーストのミールザーダたちがこの滞留地に到着した。

この日，私はマージューンを服用した。ダルヴィシュ・ムハンマド・サール

バーン，ムハンマディー・キュケルダシュ，ガダーイー・タガーイー，アサスが同席した。後に，私たちはシャー・ハサンをも呼んだ。食事が供された後，午後の礼拝時，私たちはいかだに乗りこんだ。ランガル・ハーン・ニヤーズィーをもいかだに呼びよせた。夕べの礼拝時，いかだをおり，宿営（オルドウ）に帰った。

翌早朝〔10月1日〕，私たちは先の決定に従って河畔を発ち，ジャーム Jām を経て，アリー・マスジド川が平原に出る場所に下馬した。

私たちの後を追って来たアブル・ハーシム・スルターン・アリー Abū al-Hāshim Sulṭān ʻAlī が「アラファの日〔ズール・ヒッジャ月9日〕の夜，私はジューイ・シャーヒーから，バダフシャーンから来た男と一緒にジャム・ルード Jam-rūd を通っておりました。その男は，〔カーシュガルの〕スルターン・サーイード・ハーンがバダフシャーンをめざして来たと云っておりました。私は王様にその事をお知らせにまいりました」と述べた。私はベグたちを呼んで相談した結果，こういう情報があるにもかかわらず〔プルシャーワル〕城に
244b (244b) 糧食等を補給する事は適当でないと考え，バダフシャーンに向かう事にした。私はランガル・ハーンに栄誉の長衣を与え，彼をムハンマド・アリー・ジャング・ジャングの補強に任命して出発させた。その夜，ホージャ・ムハンマド・アリーのテントで酒宴が開かれた。

翌朝〔10月2日〕，私はこの地を発って，ハイバル峠を越え，峠の麓に下馬した。

ヒズル・ハイル族 (Khiḍr-khayl) によって多くの不適当な行為が為されていた。われわれの軍隊の出動の際，彼らは，後におくれた兵士らや傍らに下馬している兵士らに矢をあびせ，馬を奪っていた。彼らをこらしめ罰する事が必要に思われた。

翌早朝〔10月3日〕，この考えで私たちは峠の麓を発ち，デヒ・グラーマーン Deh-i Ghulāmān に下馬した。正午の礼拝時，馬に飼料を与えて出発した。私はムハンマド・フサイン・コルチをカーブルに急行させ，「カーブルにいるヒズル・ハイル族の者たちを逮捕し，その所有物を別置して私の所に報告せよ。さらにバダフシャーンから情報が入れば全てその詳細をしたためて，それを持たせて1人の男を大急ぎで私のもとへと派遣せよ」という命令を伝えさせた。

その夜私たちは2更に至るまで進み続け，スルターン・プールの少し先まで

進んで下馬し，ほんの少し眠った後，また出発した。ヒズル・ハイルはバハール Bahār，ミフグラーム Mikhgrām からカラ・スー Qara-su に至る一帯にいるようであった。

あけぼの時より前〔10月4日〕私はそこに到着し攻撃を許可した。彼らのほとんどの財産・子供たちが兵士らの手に落ちた。敵の少数の者たちは，山が近かったので，山にしりぞいてのがれた。

245a **翌日**〔10月5日〕，(245a) 私はクラグ Qılaghu に下馬した。私はここで雉子を捕らえた。おくれていた家族たちも，この日，ここに到着して合流した。ワズィーリー・アフガーン族 (Wazīrī Afghān) はこれまでいつもあまりスムーズに税(マール)を納めないでいた。この懲罰のための進軍の結果，彼らは100頭の羊を献上してきた。

14日日曜日〔10月9日〕，私の手が脱臼して以来〔242a 参照〕，私は何も書けないでいた。しかしこの宿営地に滞在中に少しだけ書いた。

翌日〔10月10日〕，ヒリルジー，サムー・ハイル Samū-khayl をはじめとするアフガーン諸族の首長たちが到着した。ディラザーク族の首長たちが懸命にこれらの者たちの罪を赦してくれるようにと懇願した。私たちは彼らの罪を赦し，捕虜たちを釈放した。彼らの税(マール)を4,000頭の羊と定め，首長たちに長衣を身につけさせ，徴税人 (taḥṣīldār) たちを任命して派遣した。

18日木曜日〔10月13日〕，これらの事柄を片づけた後，私はそこを発って，バハールとミフグラームに下馬した。

翌日〔10月14日〕，私はバーギ・ワファーに到着した。バーギ・ワファーのすばらしい季節であった。庭一面に三つ葉のクローバーが密生し，ざくろの木々はあざやかに黄ばんで美しい黄葉を見せ，その実も真紅であった。オレンジの木々は緑でみずみずしく，無数の実をつけていた。ただその実は望ましいほどにはなお黄ばんではいなかった。そのざくろは良質であったが，諸地方のすぐれたざくろほどではなかった。私たちがバーギ・ワファーを1度よく楽し
245b んだのがこの時であった。私たちがそこに滞在した3～4日の間，(245b) オルドゥの者たちは大量にざくろを食べた。

月曜日〔10月17日〕，私たちはバーグを出発した。私は初更 (bir pahr) の時刻に至るまで進んで，若干のオレンジを取らせた。シャー・ハサンに2本のオレンジが与えられた。若干のベグたちには1本のオレンジが，また若干の者

たちには2人につき1本のオレンジが与えられた。私は冬にラムガーンに旅行する考えを持っていたので，貯水地のまわりに20本ほどのオレンジの木を大事にとっておくように命じた。この日はガンダマク Gandamak に下馬した。

翌日〔10月18日〕，ジャグダリクに下馬した。夕べの礼拝の時刻に近づいた頃，酒宴となった。ほとんどの近習(イチユキ)たちが出席した。宴のおわり頃，カースィム・ベグのおい〔姉妹の子〕のガダーイー・バフジャト Gadā'ī Bahjat がまことにしつこくなった。彼は酔って，私の傍らにあったクッションにもたれかかった。ガダーイー・タガーイーが彼をかついで宴席から連れ出した。

翌日〔10月19日〕，私はそこを発ち，クルク・サーイの傍らにあるバーリーク・アーブ Bārīk-āb の谷の上流を見物に出かけた。若干の箱柳の木 (turaq derakhtı) がまことに見事に黄ばんでいた。そこに下馬し，ユルクラン (yılqı-ran ?) の食事が供された。黄葉の見事さの故に，私はワインを飲んだ。道中から羊を連れてこさせ，それをケバーブ〔焼肉〕にするように命じた。私たちはかしの木の枝に火をつけて楽しんだ〔141b 参照〕。ムッラー・アブドゥル・マリク・ディーワーナ Mullā 'Abd al-Malik dīwāna が私の到着の知らせをカーブルに伝えに行きたいと願い出た。私は彼をカーブルに派遣した。ハサン・ナビーラがミールザー・ハーンの許から私に会いたいと来ていたようである。
246a 彼はこの地に来て (246a) 私の前に伺候した。

私は出発の時までここで飲み，その後に出発した。酒宴に出席していた者たちは極度に酔っていた。サイイド・カースィムは泥酔し，彼の2人の家来が苦労して馬に乗せ，宿営地にたどりつかせたほどであった。ドースト・ムハンマド・バーキルもすっかり出来上り，アミーン・ムハンマド・タルハン Amīn Muḥammad Tarkhān とマスティー・チュフラ Mastī chuhra をはじめとする者たちがあらゆる努力をしても馬に乗せられなかった。皆が頭に水をあびせかけてもどうにもならなかった。この時，1団のアフガーン族が姿を現わした。アミーン・ムハンマド・タルハンは酔った頭で「この男をこんな風にしておけば，アフガーン族に捕らえられてしまうだろう。そうなる前に，むしろ首を切って持って行こうか」などと考えた。結局，皆であらゆる苦労をして彼を馬に乗せ連れて帰った。私たちは夜半にカーブルに帰着した。

翌朝〔10月20日〕，カーシュガルのスルターン・サーイード・ハーンのもとへ使者としておもむいていたクリー・ベグが宮廷(ディーワーン)に到着し，私の前に伺候した。

ハーンはイテルチ部のビシュケ・ミールザー Bishkä Mīrzā-yi Itärchi をクリー・ベグに加えて使者として派遣して来た。彼はかの地方の産物の内からいくつかの珍品を持参した。

ズィール・カーダ月1日水曜日〔10月25日〕，私はカービル Qābil の墓地の傍らにひとりで出かけ朝酒を飲んだ。その後，宴に加わる者たちがひとり2人とやって来た。太陽の光がひろがると，すみれの園（バーギ・ビナフシャ）に移り，貯水池の傍らで飲んだ。正午になると眠り，昼の礼拝時にまた飲んだ。この礼拝時の宴席で私は，私がこれ以前には宴席で酒を与えた事のなかったテングリ・クリー・ベグ
246b とミハンディー Mihandī に (246b) 酒を与えた。就寝時の礼拝の時刻に私は公共浴場（ハンマーム）に出かけ，その夜はそこにいた。

木曜日〔10月26日〕，私はヤフヤー・ヌーハーニー Yaḥyā Nūhānī をはじめとするヒンドゥースターンの商人たちに栄誉の長衣を与えて出発させた。

4日土曜日〔10月28日〕，私はカーシュガルから来ていたビシュケ・ミールザーに栄誉の長衣を身につけさせ，贈物を与えて帰国させた。

日曜日〔10月29日〕，門の上にある小さな画廊で宴会が開かれた。狭い部屋であったが16人が出席した。

月曜日〔10月30日〕，私は紅葉を見物するためにイスターリーフにおもむいた。私はこの日，マージューンを口にした。この日の夜，大雪が降った。私と一緒に来たベグや近習たちは，ほとんど全員，バーギ・カラーン〔136b 参照〕の庭園内に建てられた私のテントに入った。

翌日〔10月31日〕，この庭園で酒宴が開かれた。夕刻まで飲んだ。

翌早朝〔11月1日〕，私たちは朝酒を飲んだ。酔って眠り，正午の礼拝時にイスターリーフを発ち，道中でマージューンを飲んだ。午後の礼拝時にビフザーディーに到着した。紅葉が実に見事になっていた。紅葉見物をしているとワイン好きの飲み仲間たちが酒を飲もうと云いだした。マージューンを飲んでいたにもかかわらず，あまりに紅葉が見事になっていたので，私は紅や黄色になった木々の下に座を占めて酒を飲んだ。就寝時の礼拝の時刻までその同じ場所で宴会を続けた。ハリーファの子のムッラー・マフムードが来た。私たちは彼をも呼んで宴会に加わらせた。アブドゥッラーは大いに酔って，ハリーファに
247a ついてひと言いった。(247a) 彼はムッラー・マフムードの事を忘れて，次の詩の1行を口にした。

お前が誰に眼を向けようとも，彼もまたこの同じ傷で苦しんでいるのに気づくであろう。

ムッラー・マフムードは酔っていなかった。彼はアブドゥッラーに対し，どうして冗談めかしてこの1行を読誦したのかと問責した。アブドゥッラーは酔いもさめて，大いにあわてて，いろいろとうまい事を云った。

木曜日〔11月2日〕，紅葉見物をおわり，おそく夕べの礼拝時にチャール・バーグに帰って下馬した。

16日金曜日〔11月9日〕，私はすみれの園（バーギ・ビナフシャ）でマージューンを飲み，若干の側近たちと舟に乗った。フマーユーンとカームラーンも後から来た。フマーユーンは1羽の鴨をうまく射落とした。

18日，土曜日の真夜中〔11月11日の真夜中〕，私はチャール・バーグを発ち，夜警の者と馬係の者をひきかえさせ，ムッラー・バーバーの橋を通り，ディーヴリーン隘路を抜け，クシュ・ナードゥル Qush Nādur と諸バーザールのカーリーズ kārīz〔地下式灌漑水路〕の所を通り，熊小屋（Khirs-khāna）の後ろをまわって，朝の礼拝の時刻〔11月12日〕に，タルディ・ベグ・ハークサール Tardı Beg khāksār〔ハークサールは「土にまみれた」の意〕のカーリーズに到着した。

それを知ると，タルディ・ベグが急いで走り出て来た。タルディ・ベグは大酒飲みとしてよく知られていた。私は100シャールヒー銀貨を持って来ていた。私はそれをタルディ・ベグに与え，「お前と差し向かいで，とことん飲むつもりだ。酒とさかなを用意せよ」と云った。タルディ・ベグは酒を手に入れるためにビフザーディーの方へ行った。私の馬もタルディ・ベグの下僕に谷の方へと連れてゆかせた。私自身はカーリーズの後ろの岡に座を占めた。

247b 初更時（bir pas）に（247b）タルディ・ベグが酒ひと壺を持って来た。私たちはお互いに酒をくみかわして大いに飲んだ。タルディ・ベグが酒を持って来る途中，ムハンマド・カースィム・バルラースとシャーフザーダが気づいた。彼らは私がいるとは全く知らずに，タルディ・ベグの後を徒歩で追った。私たちは彼らをも宴に加わらせた。タルディ・ベグが「フルフル・イニケ Hulhul Inikä があなたと一緒に飲みたがっています」と云った。私は「私も御婦人が飲むのをまだ見た事がない。呼べ」と答えた。私たちはシャーヒー Shāhī という名のカランダル（qalandar）とさらにもう1人のカーリーズ職人のルバー

ブ奏者（rubābī）〔ルバーブは弦楽器の1種〕をも宴に呼んで来させた。私は夕べの礼拝時までカーリーズの後ろの岡の上に座って飲み続けた。

その後，タルディ・ベグの家へ行き，ろうそくの光のもとでおそく就寝時の礼拝の時刻まで飲んだ。まことになごやかな，とげとげした所の無い集いであった。私は横になった。皆は別の家へ移り，夜警の太鼓が鳴らされる時刻まで飲み続けた。フルフルが来て，私にいろいろとしつこく云いよった。私は酔ったふりをしてやっと彼女から解放された。私は皆に知られぬ内に，ひとりで出発してイスタルガチュへ行こうと考えていた。しかし皆が気づいた。実行不可能になった。結局，私は夜警の太鼓の時刻に出発する事になった。私はベルディ・ベグとシャーフザーダに出発を知らせて，この3人で出発し，イスタルガチュ方面に向った。

〔11月13日〕日の出の礼拝の時刻に，私たちはイスターリーフの麓のホージャ・ハサンに到達した。私たちはいっ時下馬して，マージューンを飲み，紅葉
248a を見物した。太陽が登ると，私たちはイスターリーフの（248a）庭園に下馬してぶどうを食べた後出発し，イスタルガチュの属地のホージャ・シハーブ Khwāja Shihāb に下馬して眠った。主馬頭（ミーラーフール）アタ Ata の家がそのあたりにあったらしい。私たちがめざめるまでに，彼は食事を調え，ワインひと壺を用意していた。まことによく熟成していた。私たちは数杯飲んでから出発した。正午の礼拝時に，イルタルガチュのとあるすばらしく紅葉した庭園に下馬して宴会を開いた。しばらくするとホージャ・ムハンマド・アミーンが到着した。私は就寝時の礼拝の時刻まで飲んだ。その日ないしその日の夜，カーブルからアブドゥッラー，アサス，ヌール・ベグ，ユースフ・アリーが到着した。

翌朝〔11月14日〕，食事をすませた後，出発して，イスタルガチュの麓にあるパードシャーヒー庭園（Pādshāhī Bāghı）を見物した。1本の若いりんごの木が見事に紅葉していた。どの枝にもまるで計ったように5～6枚の葉が残っていた。たとえ画家が懸命に描いたとしても，とてもあれほどには描けないと思われたほどであった。私はイスタルガチュを発ち，ホージャ・ハサンで食事をとり，夕べの礼拝時にビフザーディーに達し，ホージャ・ムハンマド・アミーンのイマーム・ムハンマド Imām Muḥammad という名の家臣の家でワインを飲んだ。

翌火曜日〔11月15日〕，私はカーブルのチャール・バーグに到着した。

23日木曜日〔11月17日〕，私はそこを発って城内に入った。

金曜日〔11月18日〕，ムハンマド・アリー・ハイダル・リカーブダール Muḥammad ʻAlī Haydar rikāb-dār が1羽の鷹を捕えて持って来て献上した。

25日土曜日〔11月19日〕，すずかけの園（バーギ・チナール）で酒宴が開かれた。私は就寝時の礼拝の時刻にそこを発った。サイイド・カースィムは先の出来事〔246a参照〕に恥じいっていた。私は途中で彼の家にたちより，数杯飲んだ。

248b **ズィール・ヒッジャ月1日木曜日**〔11月24日〕(248b)，カンダハールからタージュッ・ディーン・マフムード Tāj al-Dīn Maḥmūd が到着して私の前に伺候した。

19日月曜日〔12月12日〕，ムハンマド・アリー・ジャング・ジャングがニーラーブから到着した。

火曜日〔12月13日〕，サンガル・ハーン・ジャンジューハがビフラから到着して私の前に伺候した。

23日金曜日〔12月16日〕，アリー・シール・ベグの4部の詩集（ディーワーン）の内から韻律の同じガザルやバイトを選ぶ作業が完了した。

27日火曜日〔12月20日〕，内城（アルク）で酒宴が開かれた。この席で「誰かが酔って宴席から退出したら，またその者を宴席にもどらせてはならぬ」という命令を出した。

ズィール・ヒッジャ月末日金曜日〔12月23日〕，私はラムガーンを見物する目的で出発した。

〔926年/1519年12月23日—1520年12月11日/の出来事〕

ムハッラム月1日土曜日〔1519年12月23日〕，私はホージャ・セヤーラーンに到着した。丘の上の，私が水を通じさせた水路〔137a 参照〕の傍らで酒宴(sharab majlisi) が開かれた。

＜pp. 320-321 **翌朝**〔12月24日〕，私はそこを発ち，動く砂 (rīg-i rawān) を見物し，サイイド・カースィム・ブルブリー Sayyid Qāsim Bulbulī の家に下馬して宴会を開いた。＞

翌朝〔12月25日〕，私たちはそこを発ち，マージューンを飲みつつ進み，ビルカル Bilkar に下馬した。

翌朝〔12月26日〕，私たちは，夜飲むつもりであったが，朝酒を飲んだ。進んで，正午の礼拝時，ドゥル・ナーマ Dur-nāma に下馬した。酒宴が開かれた。

翌朝〔12月27日〕，私たちは朝酒を飲んだ。ドゥル・ナーマの首長のハックダード Ḥaqq-dād がその庭園を私に献上した。

木曜日〔12月28日〕，私はそこを発ち，ニジュラーウのタージーク人の村に下馬した。

金曜日〔12月29日〕，私たちはチヒル・クルバ Chihil Qulba とバーラーン川の間にある山で狩りをした。多数の鹿を得た。私は手にけがをして以来
249a 〔242a 参照〕，(249a) 矢を射ないでいた。私はあまり強くない弓で1頭の鹿のわきの下を射た。矢の羽根の部分の半分ほどの所までめりこんだ。午後の礼拝時，私たちは狩りからもどってニジュラーウに着いた。

翌日〔12月30日〕，私はニジュラーウの住民の献上品を60枚の金貨と定めた。

月曜日〔1520年1月1日〕，私はラムガーンの見物を目的に出発した。この見物にはフマーユーンも私たちと一緒に行くものと思っていたが，彼が行きたくないと云うので，クーラ峠からひきかえさせた。私たちはバドラーウにおもむいて下馬した。〔1月2日〕そこを発ち，ウグブ Ughbu ＜又は p. 321 ウルグブ Ulughbu＞〔ウルグ・ヌールが？〕に下馬した。〔1月3日〕バーラーン川で漁師たちが相当の数の魚を捕らえた。午後の礼拝時，私たちはいかだで

飲んだ。夕べの礼拝時よりもおそく，いかだをおり，テントでまた飲んだ。

私はハイダル・アラムダール Ḥaydar ʻalamdār〔アラムダールは「旗手」〕をダーワルティーン・カーフィル人たち (Dāwartīn Kāfirläri) の所へ派遣していた。バーディ・ピーチュ峠の麓で，カーフィルの首長たちがいくつかの皮袋に入ったワインを持参して私の前に伺候した。私は峠をくだっている時，驚くほどのいなごの大群を見た。

翌日〔1月4日〕，私たちはいかだに乗ってマージューンを飲み，ブーラーンより下流でいかだをおりてオルドゥに帰った。いかだは2台であった。

金曜日〔1月5日〕，私はそこを発ち，マンドラーワルより下流の山麓に下馬した。夜，酒宴が開かれた。

土曜日〔1月6日〕，私たちはいかだに乗り，ダルータ峡 (Darūta tangı) を過ぎ，ジャハーン・ヌマーイ Jahān-numāy より上流でいかだをおり，アーディーナプールの前にあるバーギ・ワファーにおもむいた。私たちがいかだからおりた際，ニングナハール地区のハーキムであるカイヤーム・オルドゥ・シャー Qayyām Ordu Shāh が来て私の前に伺候した。ランガル・ハーン・
249b (249b) ニヤーズィーはしばらくニーラーブに居住していたが，途中で来て私の前に伺候した。私たちはバーギ・ワファーに下馬した。オレンジは見事に黄ばみ，木々は美しい緑色をしていた。まことに快適であった。私たちは5～6日間，バーギ・ワファーに留まった。

私は40歳で断酒したいと考えていた。しかし40歳までにはもう1年も残っていなかった。そのため私は度を過ごして飲んでいた。

16日日曜日〔1月7日〕，私は朝酒を飲み，酔いがさめるとマージューンを飲んだ。その時，ムッラー・ヤーラク Mullā Yārak が彼が作曲したパンジュガーフ調で，5度転調する歌曲(ナクシュ)を歌った。すばらしい歌曲であった。私はもう長い間このような作品を作曲する事をしないでいた。私も1曲作りたいという意欲がわいてきた。そこで私はチャールガーフ調のサウトを作曲した。それについてはしかるべき所で記述するつもりである〔現存テキストには，該当箇所が無い〕。

水曜日〔1月10日〕，朝酒を飲んでいる時に，私は冗談に「サルト語(Sartcha)〔ペルシア語〕を話す者は皆1杯飲め」と云った。このため多くの者が1杯飲んだ。夜明けの礼拝の時刻に私は牧場の中央のやなぎの木の下に座を占めた。

私は「トルコ語を話す者は皆1杯飲め」と云った。ここでも多くの者が1杯飲んだ。太陽が昇ると，私はオレンジの木の下の貯水池の傍らにおもむいて飲んだ。

翌日〔1月11日〕，私たちはドゥータ Dūta からいかだに乗り，ジューイ・シャーヒーでいかだをおりてアタルにおもむいた。

私はアタルを発ち，ダッライ・ヌールの見物に出かけ，スーサーン村 (Sūsān kenti) まで行き，そこからひきかえしてアームラ Āmla に下馬した。

250a ホージャ・カラーンは (250a) バジャウルをよく治めていた。彼は私の友人であったので，私は彼を呼びよせ，バジャウルをシャー<p. 322 ミール・>フサインの責任のもとに置いた。

22日土曜日〔1月13日〕，シャー・ミール・フサインを出発させた。私はこの日もアームラで飲んだ。

翌日〔1月14日〕，雨が降り，私はマリク・クリー Malik Qulī の家のあるクナルのクラ・グラーム Kula-grām に行き，オレンジ畑を見おろす彼の真中の息子の家に下馬した。雨のため，オレンジ畑へは行かず，そこで飲んだ。雨は非常に激しくなった。私は1つのまじないの文句を知っていた。私はそれを4枚の紙に書き，四方につるした。そうすると雨がやんで，空が明るくなり始めた。

翌早朝〔1月15日〕，私たちはいかだに乗った。もう1台のいかだに幾人かの若党たちが乗った。バジャウル，サワード，クナルおよびその近郊では，ビール (būza) がつくられていた。ある1つのキーム (kīm) と呼ばれる物がある。これは草の根とか若干の薬草から作られる。パン (nān) のように丸くして乾燥して保存している。このビールを醗酵させたものがこのキームとなる。若干のビールは驚くほどよく効く。しかし非常ににがくてまずい。

私たちはこのビールを飲もうと考えた。しかし，私はにがくて飲めず，マージューンを飲んだ。私は，もう1つのいかだに乗っていたアサス，ハサン・イグレク Ḥasan Igräk，マスティー にこのビールを飲むように命じた。彼らは飲んで酔い，ハサン・イグレクは不愉快なしつこさを示しはじめた。(250b)

250b アサスはすっかり酔いしれて，私たちが閉口するような不愉快な行動をくりかえした。私は，彼らをいかだからおろし，川の向う岸に行かせようと考えたが，何人かがそうしないでくれと懇願した。

その頃，私たちはバジャウルをシャー・ミール・フサインに与え，ホージャ・カラーンを呼びよせていた。そうしたのは，ホージャ・カラーンは私の友人であり，彼がバジャウルにもうかなり長い間滞在しており，また私がバジャウルの諸事をかなり簡単に考えていたためであった。シャー・ミール・フサインがバジャウルに向かう際，彼がクナル川の渡しに到達した時，私に出会った。私は彼を呼んで，いくつか注意を与え，私個人の腰帯を与えて出発させた。

私たちがヌール・ガルの正面に到着した時，1人の老人が来て物乞いをした。いかだに乗っていた者たちはそれぞれ長衣やターバンや縫っていない〔浴場などで身にまとう〕布片（fūṭa）などを与えた。老人は沢山の物をもらった。

途中，川の嶮所でいかだが固い物にあたった。非常に心配した。いかだは沈まなかったが，いかだをあやつっていたミール・ムハンマド Mīr Muḥammad が川に落ちた。夜，私たちはアタルの近くに滞在した。

火曜日〔1月16日〕，私はマンドラーワルに着いた。クトゥルク・カダムとその父ダウラト・カダムが城内に酒宴の用意をしていた。快適な土地ではなかったが，私は彼らの心づかいにむくいるため数杯飲んで，午後の礼拝時に宿営地に帰った。

水曜日〔1月17日〕，私たちは＜p. 323 カンドガル Kandgar の＞泉の所へ行って見物した。カンドガルはマンドラーワル地区に属する村である。ラムガーナート全域でこの村にのみなつめやしの木が成育している。この村は山のすそ野よりも上に（251a）位置している。しゅろの成育地が東側にあり，この泉はしゅろの成育地の傍らにある。はずれた場所にある。泉の所から6～7カル下方に，石を積んで，沐浴をするため人目を避けられるようにした場所が作られている。沐浴をする人の頭に水がそそぐほどの高さにまで水を高くしている。この泉の水はまことになめらかである。冬には，この水は最初は少し冷く感じられるが，やがて立っている内に心地よく感じられるようになる。

251a

木曜日〔1月18日〕，シール・ハーニー・タルカラーニー Shīr Khānī Tarkalānī が私たちをその家に下馬させて私たちを接待した。私たちは正午の礼拝時にそこを発った。皆は設置してあった養魚所（マーヒーハーナ）の所で魚をとった。この養魚所がどんなものであるかについてはすでに述べた〔143b 参照〕。

金曜日〔1月19日〕，私たちはホージャ・ミーリ・ミーラーンの村の近くに

下馬した。夕べの礼拝時，酒宴となった。

土曜日〔1月20日〕，アリーシャングとアリンガル<p. 324 の間の山を私たちは狩った。一方からアリンガル>の住民が，別の一方からアリーシャングの住民が狩りの円陣をつくり，山から鹿を低い方へと追い出した。まことに多数の鹿が殺された。狩りから帰るとアリンガルのマリクたちの庭園に下馬して酒宴を開いた。私の前歯の内，半分は欠け半分が残っていた。この日，食事をした際，残りの半分も欠けた。

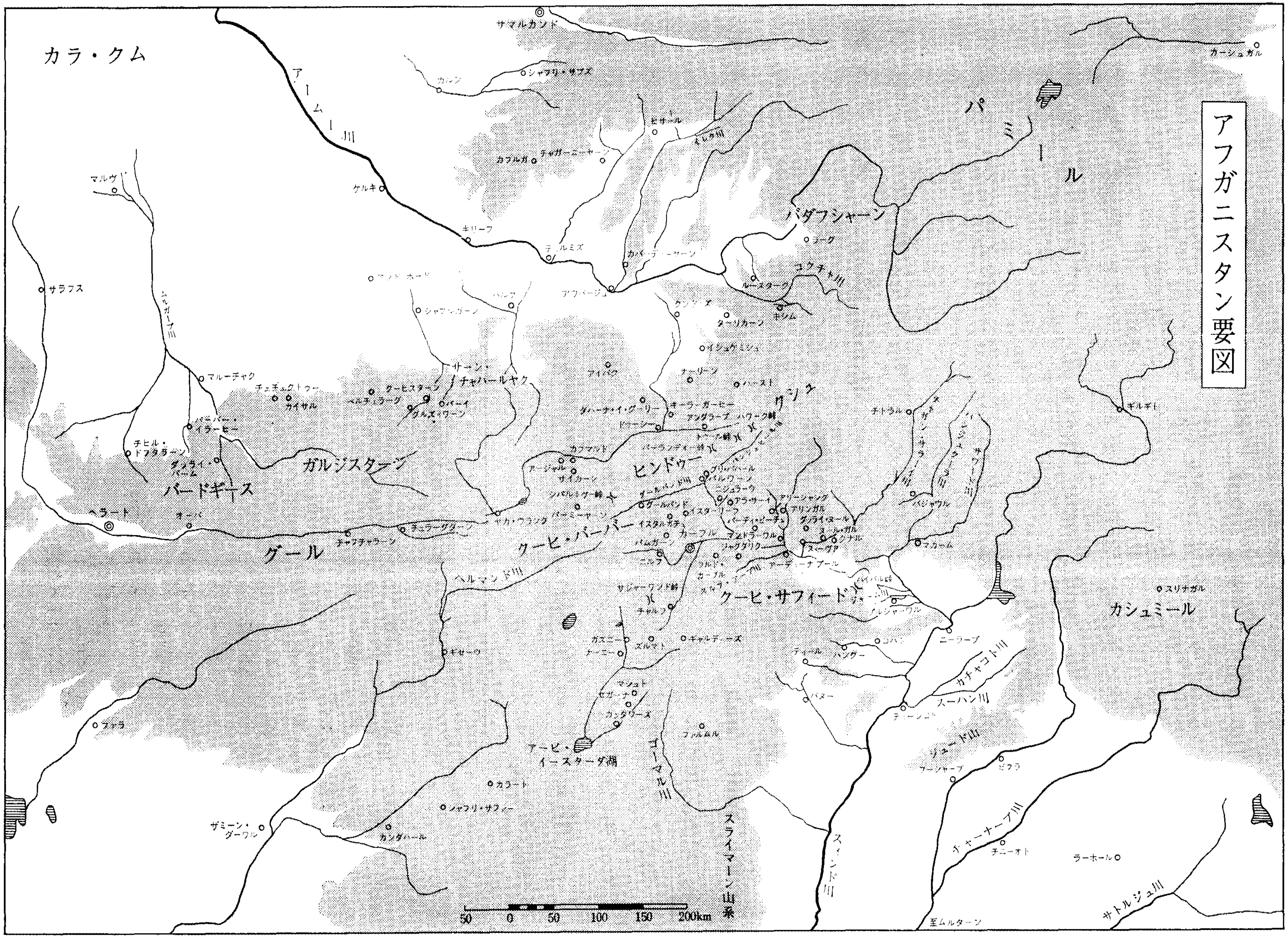
翌早朝〔1月21日〕，私たちは出発して，魚を取るために投網をした。正午にアリーシャングに行き庭園内で飲んだ。

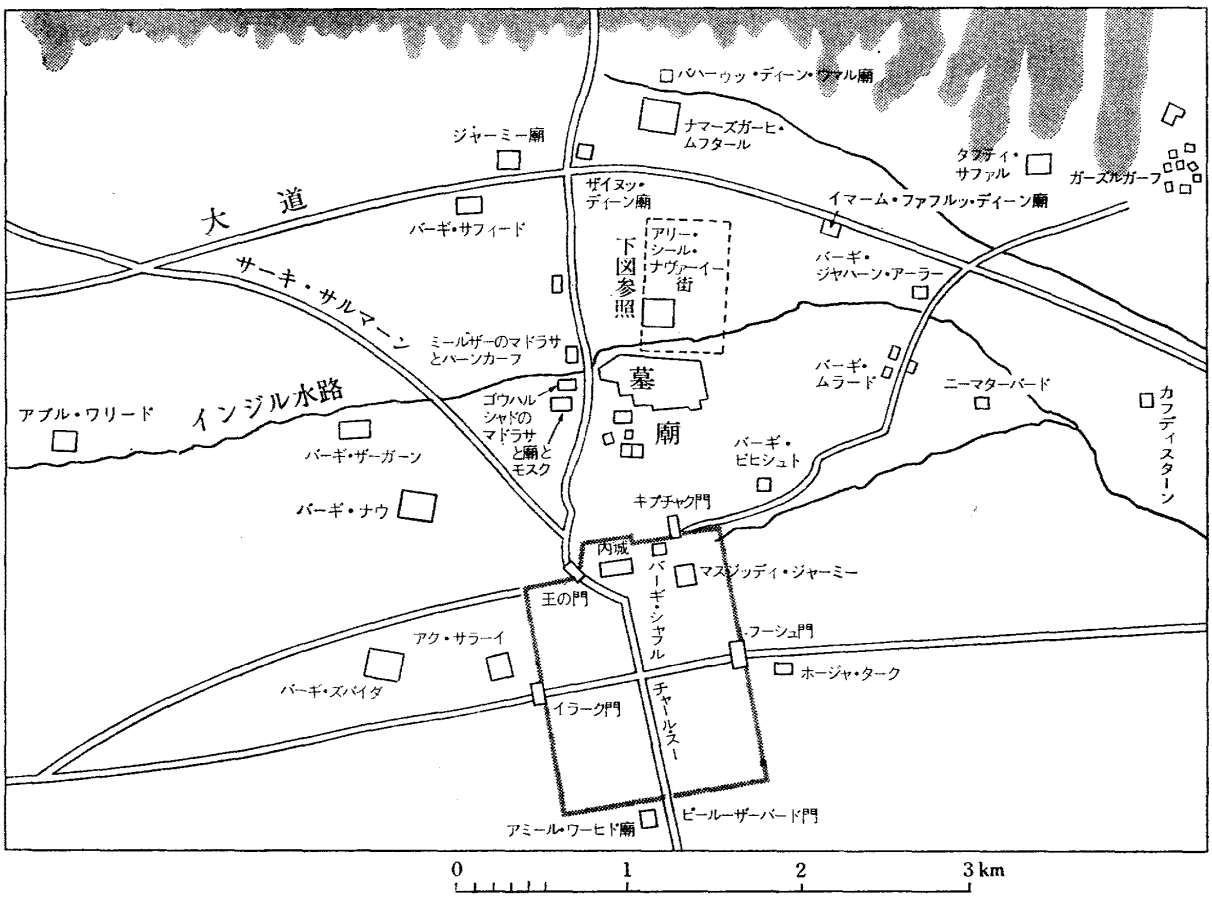
翌日〔1月22日〕，私は，悪行を重ね，不正にも多くの者の血を流させていたアリーシャングのマリクのハムザ・ハーン Ḥamza Khān を，彼によって殺された者たちの関係者らに引渡した。復讐がなされた。

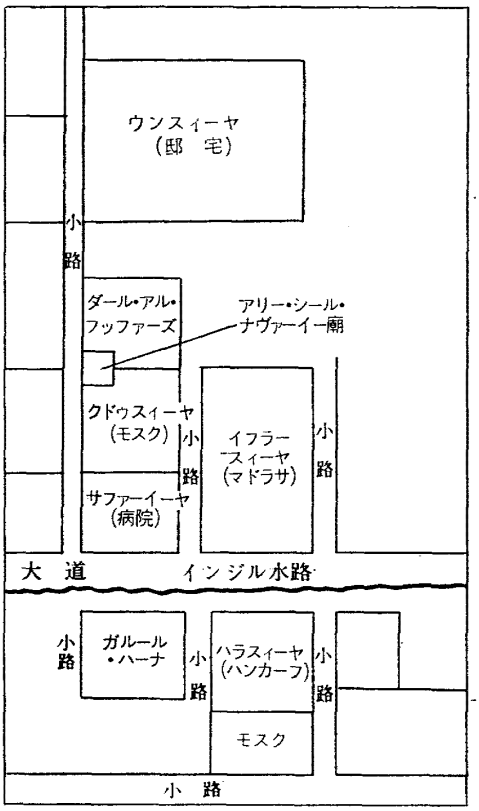
251b **火曜日**〔1月23日〕，(251b) コーランの1節を読誦した後，私たちはヤン・ブラク Yan-bulagh 道をとってカーブルへの帰還の途についた。午後の礼拝時，私たちはウルグ・ヌー Ulughnū で川を渡り，夕べの礼拝時，クラトゥーに到着し馬に飼料を与え，急ぎ用意された食事をとり，馬が大麦を食べつくすとただちに出発した。〔以下，現存テキストには，約5年10カ月間の記事を欠く。記事は932年サファル月1日金曜日の「ヒンドゥースターン章」の記述から再開される。〕

本稿(I)〔京都大学文学部研究紀要22〕正誤表

頁	行	誤	正
194	6	bulūk	bölük
214；311	5；1	勃頭	没頭
215	8	洗錬	洗練
228	20	vā	wā
236	11	Muhsin	Muḥsin
242	8	バナーイー	ビナーイー
327	28	ラバーティ・ルーザク Rabāṭ-i Rūzaq	ラバーティ・ザウラク Rabāṭ-i Zawraq
〃	31	ラバーティ・ルーザク	ラバーティ・ザウラク
328	10	1射程追程って	1射程ほど追って
〃	17	アリー	クリー
〃	30	帽子のような冑	冑の下につける帽子
335	25	Khīz	ḥīz


アフガニスタン要図
カラ・クム
サマルカンド
アーム川
パミール
バダフシャーン
コクチャ川
ヒサール
カーシュガル
ケルキ
マルヴ
キリーフ
テルミズ
アクバージュ
サラフス
ムルガーブ川
マルーチャク
チュチュクトゥー
クーヒスターン
ガルジスターン
サーン・チャハールヤク
ヒンドゥークシュ
チトラル
ギルギト
バードギース
ヘラート
オーバ
チャフチャラーン
グール
クーヒ・バーバー
カーブル
ヘルマンド川
クーヒ・サフィード
カシュミール
スリナガル
ガズニー
カチャコト川
スーハン川
ジュード山
ラーホール
チャナーブ川
サトルジュ川
インダス川
至ムルターン
スライマーン山系
ゴーマル川
アービ・イースターダ湖
カラート
カンダハール
ザミーン・ダーワル
ファラ
50 0 50 100 150 200km





ティムール朝時代のヘラート（上図）とアリー・シール・ナヴァーイー街（左図）
〔Z. V. Togan, "Herat," *İslâm Ansiklopedisi*, 44 cüz, 3 Baskı, İstanbul, 1977 による〕